

地 域 に つ な が る

—富山県射水市の調査記録—

地域社会の文化人類学的調査28



2019

富山大学人文学部文化人類学研究室

目 次

はじめに	3
第1章 地域概要	5
第2章 新湊・内川の空き家問題と景観保存（中井理恵子）	17
第3章 放生津曳山祭りにおける人手確保対策と女性参加（佐藤杏未）	39
第4章 六渡寺における獅子舞の伝承（安田優美香）	55
第5章 新湊におけるオンゾハンとそれを守る人々（原七泉）	83
第6章 射水市に伝わる盆踊り——のじた踊りを絶やさないために（稲ヶ部美央）	101
第7章 新湊における地域おこし協力隊の活動——うちかわホリデイマーケットを中心に（重吉桜）	119
第8章 三ヶ・戸破地区における旧北陸道沿いの商店街とまちづくり活動（平島小夢）	137
第9章 「鰻絵のまち小杉」ができるまで（山口昂良）	159
第10章 大島絵本館で読み聞かせをする人々（鹿住笑那）	181

は じ め に

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979 年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。この報告書は、その第 28 巻になります。

今回は射水市をとりあげました。本研究室では、合併による射水市発足以前に旧下村で 1 度、旧新湊市で 2 度の調査を行ったことがあり、それらは『下村の変貌』（1995 年）、『新湊曳山まつり』（1997 年）、『新湊市調査記録——漁業と祭りをとおして』（2004 年）にまとめられています。他方で、小杉地区と大島地区は今回初めて取り上げることができました。

富山県内の数か所を下見したのち、学生たちが射水市を調査地に決めたのは 2017 年 11 月半ばのことです。当初念頭にあったのは新湊と下村でしたが、その後に訪れた小杉（とりわけ旧北陸道沿い）に関心をもつ学生も数人出てきて、さらに 1 名が大島でも調査することになりました。（結果的に下村で調査する学生がいなくなったのはやや心残りでした。いずれ再訪したいものです。）実質的に調査が始まったのは 2018 年 4 月からで、この頃から学生たちは現地でテーマ探しを始めて、8 月には新湊の内川地区で 1 週間の調査合宿を行い、その後は補足的な調査をしながらこの報告書を書き上げました。

取り上げられたテーマは様々ですが、学生たちはそれぞれの調査で出会った地域の方々のエネルギーに圧倒されたようでした。そうした、現地に行かなければなかなか伝わらない「何か」にじかに触れることこそがフィールドワークの醍醐味であり、学生たちにとってはかけがえのない経験になったはずです。調査と執筆を終えつつあった私たちの印象に深く刻まれていたのも、それぞれの地域や場所に固有の文化に根差した活動に向かう地元住民の方々の熱心さでした。学生たちがこの報告書を『地域につながる』というタイトルにしたのは、地域や場所に対する愛着を共通項に、地元の人々が力を合わせている状況を表現するためだったようです。そして、学生たちもそれらについて調べることで、多少なりとも「地域につながる」ことができたのではないかと思います。（ちなみに、新湊で行われる放生津曳山祭でも、曳山を押し曳きして動かすことを「つながる」と表現します。）

最後になりますが、今回の調査も数多くの地元の方々のご助力があっはじめて可能になりました。すべての方のお名前をあげることはとてもできませんが、ここでは、調査の過程でとりわけお世話になった「水辺のまち新湊」の二口紀代人さんと、竹内源造記念館館長の前田不二夫さんに感謝の意を記します。どうもありがとうございました。

2019 年 2 月

富山大学人文学部 野澤豊一（主担当）
藤本 武（副担当）

追伸

紙媒体の報告書は発行部数・頒布先とにもごく限られていますが、ここ 10 年ほどの実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

第1章 地域概要

この章では、次章以降の個別の事例報告に先立って、調査地である射水市（旧市町村含む）の概要について記す。「地理と地形」に始まり「歴史」、「産業」、「人口」、「射水市の年中行事」の順に記述する。

1-1. 地理と地形

射水市は、平成17（2005）年に新湊市、射水郡小杉町、大門町、大島町、下村が合併してできた富山県の北西部の市であり、富山県の二大都市である富山市と高岡市に接している。半径約7kmの地域であり、土地面積は109.43km²で、県土面積の約2.6%を占めている。

北は富山湾に面し、市内を庄川、和田川、下条川、内川などが流れており、富山湾へ注いでいる。市域は、庄川、神通川の土砂の堆積によって形成された三角州状の低平な地形からなる平野部と丘陵地で形成されていて、四季折々の豊かな自然を楽しむことができる。同市の北西部、庄川の河口砂州上に新湊市街がある。新湊の放生津潟周辺は、かつて低湿地であったが、国営事業により乾田化され米作や畑作が行われている。また、中央部東寄りの太閤山の周辺に小杉市街が広がっており、太閤山ニュータウンや県立大学、県環境科学センターなどがある。



図1-1 射水市の位置（「地理院地図 電子国土 Web」より作成）



図 1 - 2 合併前の射水市

(『富山市八尾町の生活文化』2017、富山大学人文学部文化人類学研究室
を参照して鹿住が作成)

1 - 2. 射水市の歴史

新湊地区

天平 18 (746) 年、越中国司として伏木の国庁に赴任した大伴家持は新湊で多くの和歌を詠んだ。そこには、「東風^{あゆのかぜ} いたく吹くらし 奈呉の海人の^{あま} 釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ」の歌のように奈呉の浦（放生津付近）で漁をする海人たちの姿の他に、海や潟などの美しい景色が詠まれており、この地域では古くから漁業で生計を立てていた人々が住み、漁港としての形ができていたとされる。その後、漁業や製塩、魚の加工、海運を生業とする集落ができ始め、鎌倉時代には交易港としてすでに機能していた。

鎌倉時代中ごろには、港を有する放生津に越中守護所が置かれ、以後、永正 17 (1520) 年までの約 300 年間、放生津は越中の政治、経済、文化の中心として発展してきた。

江戸時代になると、放生津は漁業と海運業の盛んな浦方となり、城下町富山、商業の町高岡、漁業の町氷見に次いで人口が多かった。とりわけ舟方の活躍が特徴的で、能登通い船や漁船が内川の両岸に係留されて港としての役割を果たしていた。慶安 2 (1649) 年には内川の南側に放生津新町が町立てし、江戸時代後期には周辺の村々まで町並みが拡大した。また、当時は北前船による交易で、日本海側だけでなく、太平洋側との交易も盛んになり、東北・北海道からは木材や鰯肥^{れん び}を買入れ、大坂・瀬戸内で米などを売買した。海からやってきた荷物は、小さな船に積み替えられ、内川を通して様々な地域に運ばれたのであり、今でも、内川沿いでは古くからの倉庫郡や貯木場を見ることができる。

その後、明治 4 (1872) 年に放生津周辺と近くの町々を含めた地域が合併し、新湊町が生まれ、昭和 26 (1951) 年には市制を施行し、新湊市が発足した。この地域の近代を特徴付けるのは、明治後期からの庄川の改修、伏木築港、日本鋼管の進出である。太平洋戦争後の現

代では昭和40年代の富山新港の開港、後背地の工業地帯の形成、射水平野の乾田化が行われ、新湊はこれまでの漁業と海運の町から、重工業が発展して産業の近代化が進み、港湾都市へと大きく変貌していったのである。

小杉地区

加賀藩では、慶安2（1649）年から万治3（1660）年の間に新町が盛んに建設された。小杉では、三ヶ村の三郎右衛門と戸破村の九郎兵衛、近在の百姓階層の二男三男合わせて53軒の家が村から出て行くことになったのがきっかけで、万治元（1658）年9月に小杉新町が建設された。新町建設により、市場に不便な場所に位置していた村々には地理的に大きな利便がもたらされ、複数の市場を選択できる機会が与えられることとなった。小杉新町、下村、東岩瀬が新たに宿駅に指定されると、寛文年間（1661～1672）に立野から高岡～小杉新町～下村～東岩瀬の道筋が北陸道となった。この北陸道が加賀藩主の参勤交代に利用され、藩と江戸を結ぶ越中の最も重要な街道であった。

明治21（1888）年、市制・町村制が公布（施行は翌年）され、現在の小杉町を作っている地域に小杉町・大江村・橋下条村・黒河村・金山村・池多村（一部の村が後に分村合併して小杉町に入る）の6町村が誕生した。このうちの小杉町は小杉三ヶ村・戸破村・大手崎村から成り立っていた。明治25（1892）年、鉄道敷設法が公布され、その結果、明治26（1893）年から32（1899）年までの事業として北陸鉄道の敦賀～富山間の建設が決定された。小杉町を通る高岡～富山間は明治32（1899）年の3月に開通し、小杉駅は小杉町の三ヶ地区に設置された。鉄道の駅の設置によって、小杉町の運送業は大きく発展し、地元の経済にも多大な影響を与えた。

終戦後、日本政府は国政の民主化の一環として、地方自治民主化のために地方自治制度に根本的な改革を加えることが急務となった。昭和28（1953）年9月1日から31（1956）年9月30日までの時限立法として、町村合併促進法が制定された。小杉においては、戦時中の橋下条村の小杉町への編入合併に加え、昭和28（1953）年11月15日に金山村、同年12月1日に大江村、翌29（1954）年3月27日に黒河村が小杉町と合併した。こうして昭和29（1954）年4月10日に人口1万人を超える新しい小杉町が発足し、祝賀会が盛大に挙行された。その後、昭和34（1959）年に池多村が呉羽町と小杉町へ分村合併された。

昭和35（1960）年、商工会法が制定され小杉町商工会が新発足した。翌年に決算額が過去最高を記録し、青年部・婦人部も結成され新風が吹き込まれた小杉町商業界は、岩戸景気に乗って大繁盛した。しかし、昭和52（1977）年、太閤山にショッピングセンター「パスコ」が開店し、昭和54（1979）年に小杉駅と太閤山を結ぶ都市計画街路駅南線が完成すると、買い物客は駅を中心に駅前通りと駅南線の新店舗へと移っていった。

昭和36（1961）年、富山新港の建設により予想される人口増加の対策として太閤山ニュータウンの建設が開始され、昭和39（1964）年に第1住区の用地造成工事に着工した。昭和40年代後半は小学校、幼稚園、スーパーマーケットなど生活環境が整備されてきたことで、太

閣山団地への入居者はピークに達した。昭和58（1983）年には、県民公園として太閤山ランドが開園し、富山県の置県100周年を記念し開かれた「にっぽん新世紀博覧会」の主要会場となった。

表 1－1 小杉の略年表

年代	できごと
万治元（1658）年	小杉新町が建設される
寛文年間（1661～1672）	高岡～小杉新町～下村～東岩瀬の道筋が北陸道となる
明治 22（1889）年	市制・町村制の施行により小杉町・大江村・橋下条村・黒河村・金山村・池多村が誕生
明治 32（1899）年	小杉町を通る北陸鉄道の高岡～富山間が開通
昭和 17（1942）年	小杉町が橋下条村を編入合併
昭和 28（1953）年	町村合併促進法により、金山村・大江村が小杉町と合併
昭和 29（1954）年	黒河村が小杉町と合併
昭和 34（1959）年	池多村が呉羽町と小杉町に分村合併される
昭和 35（1960）年	商工会法が制定され、小杉町商工会が新発足する
昭和 36（1961）年	太閤山ニュータウンの建設が開始
平成 17（2005）年	新湊市と射水郡の小杉町・大門町・下村・大島町が合併し、射水市が誕生

大門地区

「大門」という地名は水戸田山中に鎮座する熊野社に通じる熊野街道に、熊野社大門があったところからついたと言われ、古くから大門村という村が存在していた。

承応元（1652）年、大門川（庄川の前身）に洪水があり、左岸の二塚村は流失し、右岸の広上村は東西に分かれ、大門村周辺の被害も大きかった。加賀藩は被災農民の救済と、次第に増加する人口対策を考慮し、翌 2（1653）年に、大門村領を割いて大門新町町立てを許した。当時藩は北陸街道の整備を進めていた。その建設計画路線にあたる大門村が注目されていたところに洪水があったため、藩の交通対策が早々に実現されたのである。翌 3（1654）年に高岡～大門～小杉間に北陸道の新道が開設され、大門新町の町中を東西に通るようになった。繁栄する新興都市高岡に近く、庄川に臨む交通の要地でもあった大門新町は東西の文物が流入し、街道を行き交う旅人で賑わった。

明治 22（1889）年、市制・町村制の公布にあたり、大門新・大門・枇杷首・犬内・百米木と二口島の一部によって（旧）大門町となり、その他、水戸田・櫛田・浅井・二口の各村が発足した。明治 32（1899）年、北陸線の敦賀～富山間が全通し、その後、大正 12（1923）年に越中大門駅が開設され、地方経済、文化の発展に大きく貢献した。

昭和 28（1953）年に政府が制定した町村合併促進法によって、昭和 29（1954）年、旧大

門・櫛田・水戸田・浅井・二口の1町4か村が合併して新大門町が発足した。昭和37(1962)年、町の経済発展を支える永久橋として大門大橋が完成した。

大島地区

自治体としての大島村は、明治22(1889)年、市制・町村制の公布により誕生した。合併したのは、北野・中野・若杉・赤井・新開発・鳥取・南高木・北高木・小林・小島・八塚・今開発・本開発の計13か村であった。

昭和28(1953)年の町村合併促進法、昭和31(1956)年の新市町村建設促進法によって、この時期の大島村は合併問題に揺れた。しかし、村内の産業構造の変化や生活文化の向上に伴い、次第に町に改める要望が各自治会から多く出るようになった。そして昭和44(1969)年4月1日に町制施行し、大島町が誕生した。

下地区

この地域は射水郡の北東部に位置し、北は旧新湊市、東から南は富山市、南から西は旧小杉町と隣接している。かつては古放生津潟の一部であったが、潟の縮小とともに陸地化して湿田地帯となった。

「下村」の地名は天文元(1532)年に書かれた『極性寺歴代略記』にて初めて登場する。下村には自然発生的に成立した小規模な地縁共同体として、加茂・三箇・山屋・白石・摺出寺・八講・小杉の7集落がある。なかでも、加茂は藩政時代には石高約3000石で越中最大の村であり、村内を北陸道が通り、宿駅に指定されていた。また、村内にある加茂神社は射水郡倉垣荘の総社といわれ、この地域の中心であった。

その後、明治22(1889)年に市制・町村制が施行されて下村が発足した。村の中心に位置する加茂地区には、村としての公共建物が多く建設、整備され、現在も役場、小学校、保育園、郵便局、警察官駐在所、農協など主要な施設が集まっている。また、加茂神社周辺の地域には村が観光および村おこしのための各種施設を整備し、昭和61(1986)年には加茂神社横に下村馬事公園を竣工、平成11(1999)年からは水郷の里整備事業が始まり、とねりこふれあい館やパークゴルフ場が整備され、平成17(2005)年には放牧場が完成した。

平成の大合併による射水市の誕生

平成17(2005)年から平成18(2006)年にかけて、「平成の大合併」と呼ばれる大規模な市町村合併の動きが全国で見られ、この地域でも新湊市と、射水郡の小杉町、大門町、大島町、下村が合併・改称して、平成17(2005)年11月1日に射水市が誕生した。

平成19(2007)年4月1日には、コミュニティバスの本格運行が開始された。これは、射水市の一部となっている旧新湊市や射水郡小杉町などで、それぞれ独自に運行されていたコミュニティバスを前身とし、合併後は、射水市全体へと運行エリアを拡大させている。

平成28(2016)年10月11日には、射水市の新庁舎が開庁し、これに伴い、射水市の庁

舎は、3つ（新庁舎、大島分庁舎及び布目分庁舎）になった。また、新湊・小杉・大門・下の4地区に地区センターが設置された。

1－3. 産業

『新湊市史』によると、新湊地域における農業は、湿田・半湿田が多いため、典型的な米の単作農業で、副業として蕪の加工品を生産していた。放生津潟周辺はきわめて低湿な土地であり、排水の悪い湿田が広がっていたため、水路の岸崩れ防止のために、水路や川岸にトネリコ並木が植えられた。商業においては、北前船を利用した廻船業が盛んであった。越中の各港や能登、加賀などの近隣との交易や、北海道との交易を通して財をなす家もあった。しかし、汽船と汽車による輸送体系が次第に確立されると、廻船業は衰退していった。汽船が就航するようになると、各港が持っていた機能が伏木港に集中するようになった。昭和37（1962）年には新産業都市建設法の指定を受け、放生津潟に新しく港を作り、その港周辺に工場用地を造成し、小杉町の太閤山に住宅団地を開発することを中心にするようになった。工業に関しては造船業、アルミ産業、製材業が盛んに行われている。富山湾では漁業も行われている。魚の種類、数量共に豊富であり、定置網が発達した。日本三大漁場の一つにも数えられている。

『小杉町史』によると、小杉地域の農業は黒河村における茶、桃、金山谷五官野、黒河村、池多地区における養蚕、大江村における大正餅、小杉町全体におけるイグサの生産が盛んであった。商業に関しては、近代町村制度以前は醸造業と売薬業が盛んで、開発屋や戸破の白石屋（結城）・片口屋、三ヶの赤壁屋・中田屋などが醸造業を営んでいた。明治18（1885）年には三ヶの青江兵作らによって厚生師天堂が設立され、製薬業・売薬業が発展した。三ヶから戸破の市街地には、料理屋や遊郭、芝居小屋などのサービス業が繁栄した。明治後期の主な商店は酒、ビール、出版販売取次、台湾官塩取次、醤油味噌醸造、ろうそくなどの専門店が並び、社団法人小杉商工会も設立された。工業においては明治23（1890）年、戸破の木村清太郎が製糸業を開業、明治28（1895）年、黒河村の福田七平、藤岡五郎兵衛が製糸所を開業したことにより、工場制手工業が始まった。近代的な工場は、昭和9（1934）年、資金確保のため工場誘致助成会が設立され、小杉町戸破の壽製作所小杉絹布工場、三和絹織社小杉工場の建築が始まりである。明治25（1890）年には鉄道敷設法が公布され、その結果、26（1891）年から32（1897）年までの事業として北陸鉄道の敦賀～富山間の建設が決定した。小杉駅は三ヶ地区に設置され、開通後は商業・運送業が発展した。また、鰻絵という産業がある。小杉町三ヶの上新町一帯に左官業いわゆる壁屋が多く存在していた。仕事が少ない冬の際に、さまざまな工夫を重ねて技を磨き、鰻絵と呼ばれる漆喰彫刻を生み出した。

1－4. 人口

平成27（2015）年の国勢調査によると、射水市全体の世帯数は32,115世帯、人口は92,308人である。このうち新湊地区の世帯数は11,645世帯、人口は33,251人で、射水市全体に占

める割合は、世帯数が 36.2%、人口が 36.0%である。小杉地区の世帯数は 12,369 世帯、人口は 33,625 人で、射水市全体に占める割合は、世帯数が 38.5%、人口が 36.4%である。

射水市全体の人口・世帯数の平成 20（2008）年から平成 29（2017）年までの推移を図 1－3 に示した。人口は徐々に減少しており、世帯数は 9 年間で約 1,500 世帯増加している。

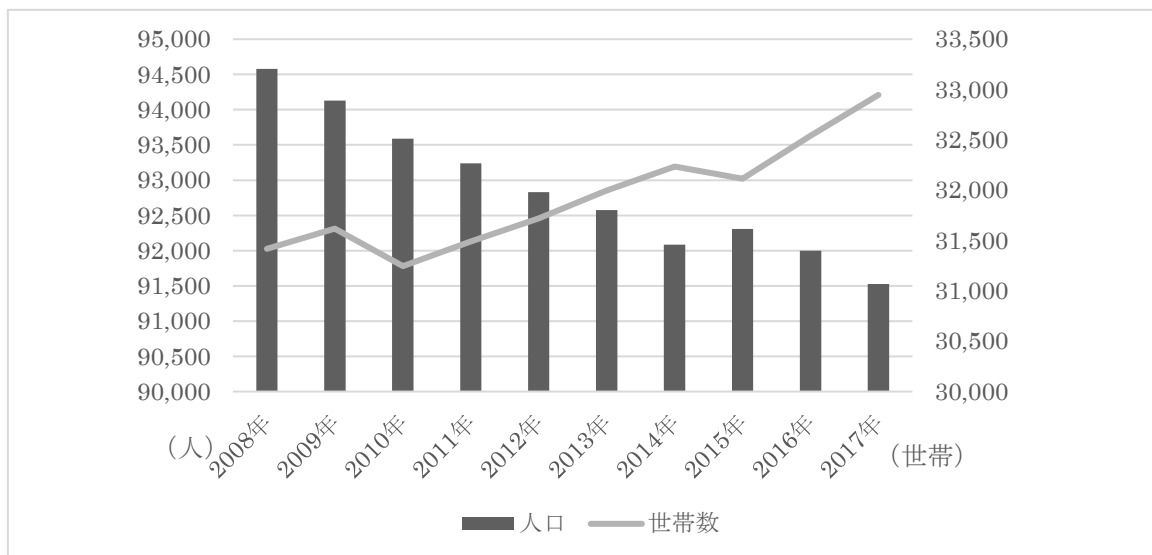


図 1－3 射水市の人口・世帯数の推移（国勢調査及び人口移動調査をもとに作成）

次に、主な調査対象地域である新湊地区・小杉地区の平成 17（2005）年から平成 27（2015）年までの人口の推移を示した（図 1－4）。

この期間中、新湊地区は著しく人口の減少がみられ、小杉地区はゆるやかに人口が増加している。具体的には、新湊地区では 10 年間で人口が 3,296 人減少し、小杉地区では 10 年間で人口が 677 人増加した。射水市全体の人口は、この 10 年間で 1,901 人減少している。このことから、新湊地区の人口減少は射水市の中でも特に深刻であることが分かる。また、小杉地区の人口が増加していることから、新湊地区から小杉地区に人口が流出していることが考えられる。

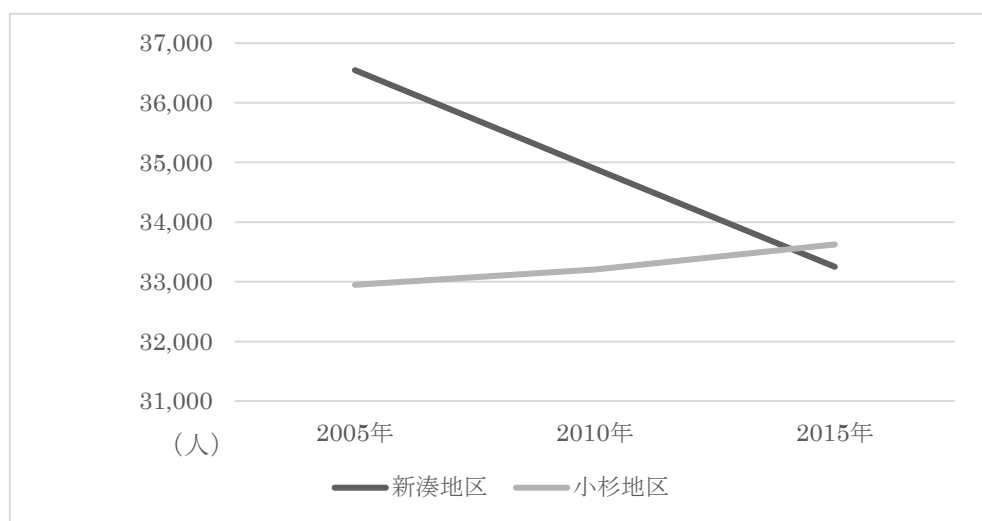


図 1－4 新湊地区・小杉地区の人口推移（国勢調査をもとに作成）

人口が減少傾向にある新湊地区と増加傾向にある小杉地区の世代別の構成を見てみる（図 1－5）。平成 30（2018）年の 0 歳～49 歳の人口は、20 歳～24 歳の人口を除いて、小杉地区の方が新湊地区より多い。一方、50 歳以上の人口は、新湊地区の方が小杉地区より多い。このことから、新湊地区では人口減少に伴い少子高齢化であることが分かる。

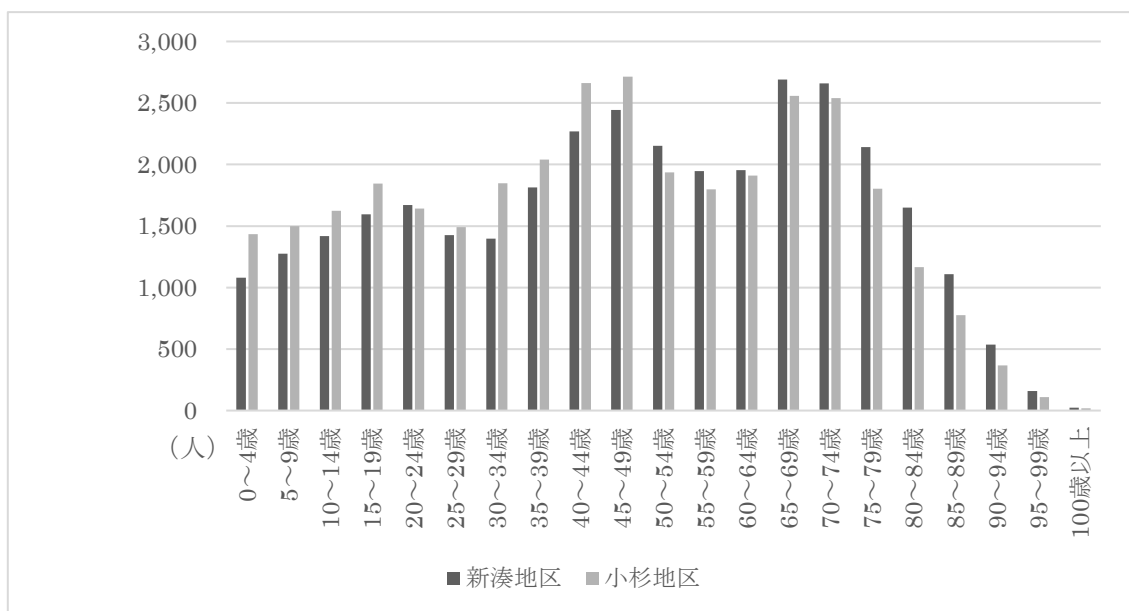


図 1－5 新湊地区・小杉地区の世代別人口構成
（平成 30 年住民基本台帳をもとに作成）

1-5. 射水市の年中行事およびイベント

表1-2 射水市の主な年中行事

時期	行事・イベント
1月1日	鰯分け神事（下村・加茂社）
4月	海王丸の総帆展帆（期間中10回；10月まで）（新湊）
4月上旬	鰻絵と下條川千本桜まつり（小杉） 赤井の親子獅子舞（大島）
4月上旬～5月下旬	春の獅子舞まつり（射水市の各地）
5月4日	やんさんま（下村・加茂社）
5月下旬	越中だいもん凧まつり（大門）
6月初卯の日	御田植祭（下村・加茂社）
6月下旬から	あじさい祭り in 太閤山ランド（小杉）
7月下旬	富山新港花火大会（新湊）
7月最終週	内川十楽の市（新湊）
8月中旬	下條川みこし祭り（小杉）
8月下旬	黒河夜高祭り（小杉）
9月4日	稚児舞（下村・加茂社）
9月上旬～11月上旬	秋の獅子舞まつり（射水市の各地）
9月23日	海老江曳山まつり（新湊）
9月最終土日	旧北陸道アート in 小杉
10月1日	新湊曳山まつり
10月7日	大門曳山まつり
11月下旬～2月上旬	ツウィングルナイト in 射水（小杉）

今回の調査では取り上げなかったが、古い歴史を持つ旧下村の加茂神社では、多くの特徴的な年中行事が執り行われる。まず、元旦には鰯分け神事が行われる。鰯を献納した地区を読み上げて神前に報告し、それが終わると、氏子全戸に鰯の切り身と鏡餅が配られる。氏子らはそれを食べて、その年の無病息災を祈願する。鰯を使った「魚の読みあげ」は全国でも大変珍しい神事である。やんさんまは、下村の加茂神社で行われる春の大祭で、県指定無形民俗文化財である。約3時間の間に牛乗式など様々な神事が行われる。最後には参道を走る馬上からの的を狙って矢を放つ流鏑馬が行われる。6月の初卯の日には、下村の加茂神社で豊穰を祈る御田植祭を行う。社頭の所定地を仮神座とし、その前に砂で作った2間四方の御田を整え、祭神玉依姫命たまよりひめのみことを招く出御・渡御式を行う。続いて真菰まこもで作った神様を御神幣の下

に置き、神の分霊を戴いた後、宮司御田植神事を行う。田の神信仰の原型的なものとして民俗学上でも貴重とされており、県指定無形民俗文化財となっている。稚児舞は加茂神社の秋の大祭で奉納される。年穀豊穰を感謝して奉納される舞で、京都の賀茂御祖神社から伝承されたものと言われている。稚児4人が太鼓、笛の囃子で9つの舞を踊り、衣装や振り付けに中世の雅を感じさせる。国指定無形民俗文化財に指定されており、地元では「カットンド」と呼び親しまれている。

射水市内では、春は4月上旬から5月下旬、秋は9月上旬から11月上旬にかけて各地区で獅子舞まつりが行われる。射水市指定無形民俗文化財に指定されている赤井（大島）の親子獅子舞は神楽岡神社の春祭りにて奉納される。親子獅子舞とは、親獅子から子獅子が生まれる場面を盛り込んでいるという、珍しいもので、演目では安産や子孫繁栄の願いが込められている。また、新湊では5月の中旬に旧市街地のあちこちで獅子舞が舞われている。新湊の西隣にある六渡寺の獅子舞も有名で、これについては第4章で安田が詳述している。

射水市は、曳山祭の盛んな富山県のなかでも特にこの種の祭りが多い地域で、市内には計20本の曳山がある。からくり人形が有名な海老江曳山祭り（3本）は、9月23日に海老江加茂神社の秋季祭礼として行われる。10月1日の新湊曳山祭り（13本）は放生津八幡宮の秋季例大祭のひとつにあたり、県内最多13本の曳山が昼は「花山」、夜は「提灯山」と装いを変えて一日かけて曳き回される（第3章で佐藤が詳述する）。10月7日の大門曳山祭り（4本）は大門神社・枇杷首神社の秋祭りとして行われる。

その他にも、射水市には近年になって始まったり装いを新たにしたりした行事が多い。いくつか例をあげると、まず、新湊の内川地区で行われる「内川十楽の市」では、内川をイルミネーションで飾りつけし、縁日や輪踊り、盆踊りなどが行われている。浴衣に着替えて散歩することもでき、マーケットも開かれる。また、富山新港のシンボルである海王丸パークでは、総帆展帆（そうはんでんぱん）といって、海王丸のすべての帆を4月から10月の間、年間約10回広げている。また、日没から22時までは毎日ライトアップとイルミネーションされる。

小杉地区では、まず4月上旬に、下条川沿いの桜の見ごろに合わせて下条川千本桜まつりが開催される。夜桜のライトアップやコンサート、獅子舞なども行われる。太閤山ランドでは、6月下旬からの一定期間、県内最多の70種20000株のあじさいを見ることができる。期間中には琴演奏会やお茶会などのイベントも開催される。8月中旬には、小杉で下条川みこし祭りが開催される。平成30（2018）年で2回目の開催となるこの祭りは、各町内の神輿に加え参加団体が手作りする「創作みこし」が特徴である。地元出身の歌手や大道芸人のステージイベントや肝試し、射水市の飲食店も出店する屋台を楽しみに多くの人が集まる。詳しくは第8章で平島が報告する。毎年8月23日に近い土曜日に開催される黒河夜高祭りは、子どもたちが手に行灯をもって、豊作と平和、無病息災を祈願する祭りである。江戸時代から戦前まで五穀豊穰を祈願して行われていた小型の行灯による夜高が、1975年に子ども祭りとして復活した。子どもたちによる6基の手作り夜高行灯が地区内を練り歩き、提灯

で飾られた山車も曳き回される。住民からは「ヨータカ」と呼ばれ親しまれている。

小杉では街全体を会場とするアートイベント、旧北陸道アート in 小杉が、9月の最終土曜日・日曜日に開催される。商店街の店舗や住居を開放して住民や作家の作品展示や販売が行われるほか、いくつものコンサートが町の至る所で楽しめる。詳しくは第8章で平島が報告する。ツウィンクルナイト in 射水は小杉駅・下条川周辺や商店街が約53000個の電飾で彩られるイベントである。小杉駅前広場には、射水市のキャラクター「イミズムズムズ」のイルミネーションが飾られる。

大門地区では、5月に越中だいもん凧まつりが行われる。毎年全国から凧愛好家が集まり、射水の空にたくさんの凧を浮かべている。

また、表1-2にはあげなかったが、大島絵本館では1年を通して絵本原画展や劇団の講演会、ひなまつり、クリスマスなどの季節行事に関連したコンサートなどが行われている。

参考文献

射水商工会議所 魅力発信プロジェクト『富山新港開港50周年 新湊渦&港さんぽ』射水商工会議所 魅力発信プロジェクト、2018年。

大島町『大島町史』大島町、1989年。

楠瀬勝編『小杉町史 通史編』小杉町、1997年。

新湊市史編纂委員会『新湊市史』新湊市、1964年。

新湊の歴史編さん委員会『しんみなとの歴史』新湊市、1997年。

青青編集『続下村史』下村役場、2005年。

大門町教育委員会『大門町史』大門町、1981年。

富山大学文化人類学研究室『新湊市調査記録—漁業と祭りを通して—地域社会の文化人類学調査』、2004年。

参考にしたウェブサイト

射水市「射水市の概要 市の位置及び面積」

〈<http://www.city.imizu.toyama.jp/contents/city/outline/index.html>〉(2019/01/28 閲覧)

射水市「射水市10周年記念 射水市10年のあゆみ」

〈<http://www.city.imizu.toyama.jp/appupload/EDIT/046/046539.pdf>〉
(2019/01/08 閲覧)

きららか射水観光NAVI「イベント情報」〈<https://www.imizu-kanko.jp/event/>〉
(2019/01/29 閲覧)

富山県観光公式サイト 富山観光ナビ「イベント」

〈<https://www.info-toyama.com/event/>〉(2019/01/29 閲覧)

富山のイベントまとめブログ「内川十楽の市 夏の夜の彩り 2018 新湊内川がイルミネーシ

ヨンで彩られる」〈<https://toyamatome.com/event/uchikawajyuraku/>〉(2019/01/29 閲覧)

第2章 新湊・内川の空き家問題と景観保存

中井 理恵子

はじめに

2年次の調査ではじめて新湊・内川を訪れた際、内川の川べりに家屋が建ち並びいくつもの橋が架かる、「日本のベニス」とも称される町並みに心を惹かれた。また、周辺には空き家を活用したカフェや店があることを知り、空き家の活用に興味を持った。調査を進めるうちに、内川周辺では人口減少と空き家の増加が進んでいることが分かり、その現状と地域の方々の取り組みについて調査を行うことに決めた。

調査では、初めに内川に住む地元の方々の空き家に対する問題意識を知るべく、聞き取り調査を行った。次に、内川で空き家問題に取り組む方々に、内川周辺の空き家情報や具体的な取り組みや問題点について聞き取り調査を行った。さらに、内川の町並みの歴史や人口変動について資料や文献を使った調査を行った。

本章では、第1節で新湊・内川の町並みについて記述し、地元の方と移住者の内川での暮らしぶりをまとめる。第2節では、内川周辺の人口変動と空き家情報をまとめ、地元の方々の空き家に対する問題意識についての語りを記述する。第3節では、行政やNPO法人、地元の方々の空き家問題に対する取り組みを紹介する。

1. 新湊・内川の町並み

1-1. 内川の町並みと歴史

新湊旧市街地を南北に割いて流れる内川は、江戸時代には射水川とも呼ばれた。放生津潟（富山新港）と庄川河口を結ぶ、流路約6キロメートルの2級河川である。中世末まで内川には橋がなく、湊口に舟渡が置かれた。現在は、東側から順に放生津橋、東橋、山王橋、神楽橋、中新橋、中の橋、新西橋、湊橋（おたすけ橋）の計8つの橋が架けられている。これらの橋は、昭和60年代から、本来の機能だけではなく、文化性の高い斬新なデザインの芸術作品として、内川の美しい景観の一部となっている。例えば、平成4（1992）年4月に完成した東橋は、スペイン建築家セザール・ボルテラの設計による切妻屋根付きの橋であり、憩いの場として地元の方々に親しまれている。



写真 2－1 内川沿いの景観（東橋）

内川周辺地域の町並みは、人々の営みの歴史が反映され、形成されてきた。近世から明治にかけて廻船業により新湊（放生津）が栄えた時代には、北前船や能登通いをする大小の船が運び込む荷物を積み下ろすために、内川沿いに内蔵^{うちぐら}を持つ家が多く建てられた。内川に面する町は、表通りから内川までの細長い大きな家屋が並び、新湊独特の家並みを形づくっている。一方、湊橋から放生津八幡宮までの海側へ一步入った通りは、地場産業を支えた船子や漁師達の家屋が立ち並び、間口の狭い家屋が密集する下町的な通りが形成された。現在では、再開発が進められているが、一部地域では、今でも家屋が寄り添うような景観を見ることができる。内川の南側は、商工業を生業とする家が多く集まっていた。なかでも、西新町、東新町の商店街通りは、老舗の名店が今でも営業を続けていて、昔ながらの雰囲気が漂う通りである。

密集した地域にとって、火事による災害は一番の大敵であり、その度に、町を開発・整備し、家屋の焼失による苦難を乗り越えてきた。昭和 5（1930）年に東町、昭和 16（1941）年に長徳寺一帯が大火により焼失し、都市計画により道路が拡幅された。このように、新湊・内川の町並みは、町の歴史と人々の営みと共に形成されてきたことが分かる。



図2-1 内川周辺の地図（富山県射水市住宅地図を元に作成）

1-2. 内川での暮らし

地元の方の声（ボランティアガイドの安田さん）

安田さんは、川の駅新湊でボランティアガイドをしている。川の駅新湊では、射水市の特産品の販売や、毎年10月に開催される曳山祭の曳山の常設展示を行っている。安田さんはここに来る観光客に向けて、内川周辺の観光ガイドを行っている。

内川には魅力的なスポットが多くあるが、安田さんは特に内川の町屋造の町並みが好きだという。特徴は、間口が狭く細長い家が連なっていることで、これは、昔は間口の大きさと固定資産税が決まったためだという。安田さんの自宅は築70年の古い家で、部屋の傷みに合わせて増改築を繰り返しており、新しい部屋でも築50年になる。昔は蔵を持っていたが、現在は取り壊して新たに台所と庭をつくった。家は、傷み具合や家族の生活スタイルの変化に合わせて増改築を行うことで、愛着を持って長く大切に使うことができる。内川には昔ながらの古い家を嫌がる人もいるが、安田さんは古い家を大切に使うことが好きだという。家は定期的に空気を入れてあげることにより長持ちする。人の住んでいない家は、同じ築年数でもすぐに傷んでしまう。例えば、近所の空き家になった家は、50代の息子さんが週に1度空気を入れて来ている。彼は内川に住んでいるわけではないが、家も心もここにあるという思いで、地域の人との繋がりを大切にしている。

実際に、築70年になる安田さんの自宅を見せていただいた。1階には、さまのこ（別名「狭間虫籠（さまむすこ）」）と呼ばれる、プライバシーを守りながら光を採る構造を持つ千鳥格子がある。2階は銅版の板壁で覆われている。これは、造るのに手間のかかる素材

のため、今では少なくなっている。家の中に入ると、趣味であるステンドグラスで作った絵画やランプ、衝立などのインテリアが飾ってあり素敵な部屋になっていた。欄間や天井は古くからのもので、廊下や畳、障子は新しくなっており、古き良きものが残る現代的な家であった。また、昔使っていたものが形を変えて今も大切に使われていることが印象的であった。例えば、火鉢が机になっていたり、七輪が椅子になっていたりした。これらは、近所の金物屋さんに頼んで作ってもらったそうだ。



写真 2-2 安田さん宅の外観

移住してきた方の声（スティーブン・ナイトさん）

スティーブンさんは米国ハワイ出身の 58 歳で、翻訳業を営みながら新湊・内川で暮らしている。平成 30（2018）年に八幡町にバーをオープンした。大学生の頃、京都の大学に 2 年間留学し、その後ハワイに戻ったが、平成 12（2000）年から東京に移住し 20 年間翻訳などの仕事をしていた。その時に、空き倉庫をリノベーションした住居の事例で記述する明石さん（後述）と知り合い、平成 29（2017）年 11 月に内川に移住してきた。スティーブンさんは、明石さんに誘われて内川に旅行に来た際、内川の町並みや様々な橋の架かる水辺の景観に感動したことから射水市への移住を考えるようになったという。その後、東京で開かれている移住フェアなどにも参加し、新湊・内川に移り住むことになった。また、長年の夢であったバーを開きたいという思いから、古民家再生を手がける明石さんと話し合いを進め、町家を改築したバーをオープンする。店名は「ブリッジバー」で、中年男性や主婦、若者など様々な人がターゲットである。店内にカウンターやテーブル、ソファを置くことで様々な人が楽しめる空間にする。地方は人口が少ないため、ターゲットを絞らない店にした。

スティーブンさんは、1 階でバーを営み 2 階で暮らす生活スタイルにもこだわった。これは、内川の商店街の特徴でもある。店と家が同じ建物にあることで仕事と日常生活が近くなり、店主と客の距離感も近くなる。これは、人が気持ちよく暮らすために大切だとい

う。今までも翻訳家として自宅で仕事をしていたため、仕事と日常生活の区別がない暮らしを15年間続けてきた。

スティーブンさんは、内川に移住してきてこの町に様々な問題を感じたという。まず、内川には空き家が多くあるが、借りられる物件は少ない。これは、空き家の地主と連絡がとれない、建物が劣化している、家主の私物が置いたままになっているなどの理由があると考えられる。次に、内川には空き家を活用した店や住居はあるが、様々なところに点在しており、通りや地域としてのまとまりがない。空き家の活用を点から線（通り）に、線から面（地域）に、と広がっていくことが理想的である。次に、大型ショッピングセンターができて商店街に人が来なくなったため、ほとんどの店が閉まっており寂しい印象がある。町の見目が良くないと移住者が増えないため、負のスパイラルとなる。さらに、この地域の大きな祭である曳山祭の担い手が減少している。担い手が減少すると祭の規模も縮小し、観光客の減少につながる。そして、特に問題だと感じたことが町の人が内川の魅力に気づいていないことである。東京から来た外国人としては、水路や自然が日常生活の中にあり、規模が小さいからこそ人のネットワークがある生活がとても魅力的に感じるという。

2. 新湊・内川の空き家の現状と問題点

2-1. 新湊の人口変動

射水市は合併前の市町村の区域ごとに、新湊、小杉、大門、大島、下村の5つの地区からなる。平成30（2018）年の人口は93,084人、世帯数は35,114世帯¹⁾である。そのうち新湊地区は、平成27（2015）年時点で、人口33,251人、世帯数11,645世帯²⁾である。

新湊地区の人口は、40年の間に47,882人から37,287人と減少している。そのうち、内川周辺の地域である放生津・新湊・庄西地区の人口は、40年で30,097人から15,878人に減少している。一方、海老江地区、七美地区、片口地区などその他の地区は、すべて人口が増加している。このことから、新湊地区の中でも内川周辺の地域で特に大幅な人口減少が起っていることが分かる。言い換えると、旧新湊市における人口減少の大部分を内川周辺地域が占めていると考えられる。

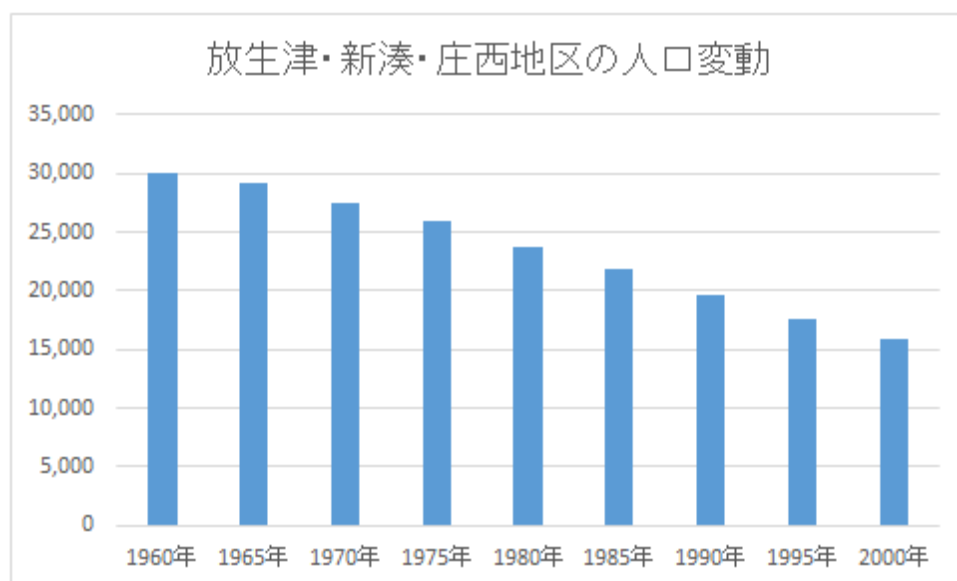


図 2 - 2 内川周辺地域の人口変動（新湊市統計書を元に作成）

2 - 2. 新湊地区の空き家の実態

新湊地区における空き家数は864戸で、新湊地区の世帯数の6.8%に当たる。これは、射水市全体の空き家数の63.9%を占める。このことから、新湊地区は、射水市の中でも空き家問題が比較的深刻であることがわかる。

表 2 - 1 射水市の地区別の空き家実態
(NPO法人水辺のまち新湊の資料³⁾を元に筆者が作成)

地区	新湊	小杉	大門	大島	下村
空き家数	864	287	124	71	6
空き家率	6.80%	2.40%	3.00%	2.00%	1.00%
地区比率	63.90%	21.20%	9.20%	5.30%	0.40%

* 地区比率・・・射水市全体の空き家数に対する割合

次に、新湊地区の中で、内川周辺に位置する新湊地域と放生津地域の空き家の実態をみる。ここでいう「新湊地域」とは新湊市街地の西側で新湊地区センターがある地域であり、「放生津地域」とは新湊市街地の東側で海王丸パークや新湊大橋と隣接する地域を指す。

新湊地区と放生津地区それぞれの町内毎の空き家情報を示した（表 2 - 2・2 - 3）。空き家率が25%以上の町は太字（ゴシック体）で示されている。新湊地域では、古新町中部28.3%、古新町西部33.3%、北長徳寺34.4%の3町である。これらはいずれも、内川より海側の地域である。放生津地域では、荒屋本町35.6%、東町西部30.6%、天神町46.4%、四十物町28.3%、獅子絵田25.7%、西立町25.0%の6町である。このうち、荒屋本町、東

町西部、天神町、四十物町は、新湊地域と同様に内川より海側に位置する地域である。西立町、獅子絵田は、内川より南側の少し離れた地域である。このことから、内川周辺でも特に内川より北側、つまり海側の地域に空き家が多くあることがわかる。ここは、比較的間口の狭い家屋が建ち並ぶ地域でもある。

このうち、同じく海側地域である奈呉町は 14.9%、山王町は 3.2%と空き家率が低い。これは、この2町では再開発が進められているためだと考えられる。奈呉町では全5区画、山王町では全10区画の宅地が分譲中である。この2町は、富山県で唯一、国土交通省により市街地整備のために重点密集市街地⁴⁾に指定された。以前は、富山県の中でも特に家屋が密集する地域であったことが分かる。

NPO法人水辺のまち新湊の二口紀代人さんによると、法律で規定される以前から再開発の声は二度も上がっていたという。昭和35(1960)年代頃は、町家の文化が主流で高層建築に対する反対の声が多く断念した。平成2(1990)年頃は、住環境の悪さや空き家の多さが目立ち始めたため、再び声が上がった。しかし、反対意見も多く断念した。平成12(2000)年過ぎから高齢化が進み、国土交通省により重点密集市街地に指定されたため、ついに再開発が実現された。この指定により、国や県、市から補助金が給付された。平成30(2018)年8月現在は土地の買収が終わり、工事が進められている。

住民からは、特に80代の方々から反対意見が多く上がったという。再開発工事を行う際、一旦別の場所に移り住む負担があったためと考えられる。一方、70代の方々からは賛成意見が多く上がった。古い住宅は台風被害などの心配があったため、再開発により安心して住むことができるからだという。また、若い方々は、補償金をもらって町から引っ越して行く人が多く、二口さんはそのことを残念だと話した。

表 2－2 新湊地域の空き家の実態⁵⁾（射水市調査資料：平成 28 年 6 月を元に作成）

	家屋数	空き家数	空き家率
奈呉町	101	15	14.90%
古新町東部	66	9	13.60%
古新町中部	120	34	28.30%
古新町西部	153	51	33.30%
北長徳寺	160	55	34.40%
庄東区	233	53	22.70%
新富町	288	38	13.20%
南長徳寺	379	29	7.70%
三日曾根	205	10	4.90%
西新町	83	13	15.70%
東新町	87	19	21.80%
四日曾根	169	29	17.20%
善光寺			
桜町			
緑町			
計	2044	355	18.98%

表 2－3 放生津地域の空き家の実態（射水市調査資料を元に作成）

	家屋数	空き家数	空き家率
神保町	156	26	16.70%
荒屋東部	104	19	18.30%
荒屋本町	135	48	35.60%
東町東部	184	19	10.30%
東町西部	49	15	30.60%
天神町	28	13	46.40%
倉屋敷	25	3	12.00%
四十物町	60	17	28.30%
山王町	31	1	3.20%
中町	78		0.00%
獅子絵田	136	35	25.70%
紺屋町	20		0.00%
立町	49	1	2.00%
菊屋町	16	3	18.80%
西立町	36	9	25.00%
南立町	71	13	18.30%
法土寺	57	7	12.30%
二の丸	207	27	13.00%
二の丸本町	69	10	14.50%
江柱1区	65	14	21.50%
江柱2区	82	11	13.40%
江柱3区	111	23	20.70%
越の潟町			
計	1769	314	17.57%

* 空き家数は登録外の町は除く



図2-3 内川周辺の地図（富山県射水市住宅地図を元に作成）

*真ん中の線は、西側の新湊と東側の放生津の境界線を表わしている

2-3. 地元の方々の空き家に対する問題意識

新湊地区は、射水市の中でも比較的空き家問題が深刻な地域であるが、実際に地元の方々は空き家に対して問題意識があるのか聞いてみた。

東新町商店街のあらいストアーの店主は、この商店街は店を閉めている家が多いが空き家は少ないという。一人暮らしの高齢者、特に女性の一人暮らしが多いそうだ。昭和 33 (1958) 年頃は商店街が栄えており、内川周辺で大きな商店街として賑わっていた。この通りは道幅が狭いため、車社会になったことで人口減少が進んだのではないかと。いつも商店街には音楽がかかっているが人通りは少ない。

西新町商店街の野村屋餅店の店員は、最近奈呉町では多くの空き家を取り壊しアパートや更地にしたため、以前より空き家は減った気がするという。空き家は放置しておくで崩れ落ちる危険があり危ないので、なくなって良かったと語った。また、アパートや更地をつくることで住民増加が期待できるのではないかと考えている。この商店街は、今は空き家が少ないが一人暮らしの高齢者が多いので、10 年後はどうなっているか分からないという。

立町通りの中川餅店の店員は、この商店街には空き家は 1 軒しかなく特に問題意識はないという。この通りは道幅が広く、他の商店街に比べ車や人通りが多く見られた。

山王町に住む 80 代の女性は、空き家が多くて困っているという。空き家が多いと、空き巣に入られたり野良犬などが住み着いたり用心が悪いという。しかし、空き地にすると税金の負担が増えるという問題もあるそうだ。この女性によると、近所には、高齢の母親と中年の子どもによる 2 人暮らしの家庭が多い気がするという。現代は、女性の社会進出により女性もお金を持つようになったため、結婚しない選択が増えたのではないかと。また、核家族化により親との別居が当たり前になったため、結婚するとほとんどの人が 8 号線付近や小杉などに移住していくという。そのため、内川周辺には子どもがほとんどいなくなってしまい、この地域にあるかつてのマンモス校も今は 1 クラスの小学校になってしまったと、寂しそうに話された。東新町や西新町の商店街はほとんど店をたたんでしまい寂しくなってしまったという。この方は、魚屋を営んでおられたが、お客さんが少ないため息子に跡を継いでほしいと言えないし、思わなかったそうだ。

東町に住む松原さんは、酒屋を営みながら地域振興会長をしている。平成 30 (2018) 年に放生津地域の高齢化の現状を調査し、統計を取った。特に、東町は他の町と比べて高齢化が進んでおり、46%が 65 歳以上の高齢者である。若者は、庭のある家や広い道路を好み、高岡の田んぼの跡地等に現代的な家を建てて移り住むため、お年寄りだけが取り残される。また、今の時代は子どもが親から独立する傾向があり、昔のように長男が家を継ぐことが少なくなっていることも影響していると考えられる。そして、住民が減ることで、お金を落とす人も減少し、商店が閉まってゆく。松原さんも酒屋を閉じたいが、車を持たないお年寄りの客が多かったり、祭りの時期に店が繁盛したりするため、やめるにやめられないという。空き家は、急激に増えており、放置されている家が多い。高齢者の 1 人暮らし

し世帯が多いため、数年後はより空き家が増えると思う。危機感があり、小さい町を集めて新しい自治区をつくる話は出ているが、実現には至っていない。空き家は改築や取り壊しにお金がかかる。また、空き家の中に荷物や仏壇が残っているため手が付けられないこともある。内川周辺は、『人生の約束』など映画のロケ地となったため、空き家の買い手はいるが、売り手が少ない。バブル時代のように地価が高いわけでもなく、売れる保証がないためと考えられる。昔の景観は残していきたいと思うが、維持することは大変である。

2-4. 昔ながらの家に住む方の事例（汐海さん）

汐海さんの住まいは、東町の放生津八幡宮の前の通りに面する典型的な町家である。敷地面積は 150 m²弱ほどあり、江戸時代末期に大きな廻船問屋に成長した。建物は、木造中2階建てで、正面間口は約9メートルもある。汐海家の歴史や家の造りなどは新湊博物館に展示・保存されている。

汐海さんは78歳の女性で、現在は2人の子どもと3人暮らしである。土蔵造りの建物で、室内には大きな部屋が多く、壁が少ないことが特徴である。網元の家だったため、昔の漁師の祭があった際は、大人数で宴会を行い賑わった。土蔵造りのため、夏は比較的涼しく冬は暖かく過ごすことができる。

しかし、生活する上で不便な点も多い。例えば、家が大きく1部屋が8～10畳と広いいため、足腰が悪い汐海さんにとっては移動が大変であり、掃除も大変で手が回らないところがある。窓掃除をするだけで40分もかかり一苦勞である。また、座敷ばかりでテーブルや椅子を置けるような現代の生活に必要な部屋が少ないことも不便である。家が古いため天窓や壁が壊れているが、それらの修理費用もかかる。そのため、天窓は修理を諦めて閉じることにした。平成30(2018)年の大雪の際は、中庭は雪かきができないため、2階まで雪が積もり、とても大変だった。家の裏側にある書庫の前を通る道には融雪装置が付いておらず、雪かきが大変ある。

このように、古い昔ながらの造りの大きい家は、現代の生活において不便な点が多いことがわかる。そのため、汐海さんはコンパクトで近代的な家に住みたいと強く思っている。理想は、今ある家を取り壊してその土地に新しくコンパクトで近代的な家を建てることである。しかし、そのような家に行くと「家に重みを感じられない」、「長持ちするのか」と不安に思うこともあるし、「今の家は大変立派で取り壊すのはもったいない」と言われることもある。友達からは「家はそのままにして、別の場所に引っ越したら良いのではないか」などと言われるが、汐海さんは、東町はみんな良い人ばかりでここでの人間関係があるから暮らし続けたいという。また、将来認知症など病気になったとき、助け合える人間関係があると安心である。家の取り壊しには多くの費用がかかる上、土蔵造りは頑丈なため取り壊すのが大変だという事情もある。

前の家主であった汐海さんの母親は、10代以上続く歴史ある家系のため、市などに買い取ってもらい家を保存してほしいと考えていたそうだ。しかし、実際に市からそのような

話をもちかけられたことはない。昔は代々続く家系が重んじられていたが、今は子どもに迷惑をかけたくないという人が多く、時代が変わったため家の形態も変わっている。

汐海さんは、家を全て取り壊すのではなく外観をそのままに中だけをリフォームする方法も考えたが、家はボロボロで、平成 19（2007）年 3 月の能登半島地震により床や壁などが傷んだため、リフォームの方が取り壊して新築するよりも費用がかかるのではないかという。さらに、今の状態のまま家を売ろうとしてもリフォームをしないと住み続けることができないため、売ることも難しい。

汐海家の隣の家も同様に古く、250 ㎡ほどある大きな家であるが、持ち主が県内の別の場所に引っ越したため空き家になっている。人が住まなくなると家の傷みも早くなるように感じるという。隣の家は後ろ側が壊れかけていたため、一部解体工事が進んでいる。



写真 2－3 汐海さん宅外観

3. 新湊・内川の空き家対策と今後の課題

3－1. 射水市の行政による取り組み

射水市では、市内の空き家・空き地の有効活用を行うため、空き家情報バンクを開設している。この制度は、市内の空き家・空き地等の賃貸又は売却を希望する所有者・不動産業者からの申し込みにより登録した物件を、利用を希望する方にインターネットを通して情報提供するものである。

平成 30（2018）年 8 月の時点で、新湊・内川周辺の登録物件は 4 戸である。具体的には、①空き倉庫をリノベーションしたスモールオフィス＋1 人暮らし向けの空間、②内川の眺めが味わえる中庭付きの 1 戸建て住宅、③解体更地後に引き渡し、④ 3 階建ての店舗兼住宅である。①の物件については、3－3 で後述する。

射水市役所未来創造課の安念さんによると、この制度は最近になり認知度が高まってきたところで、これまでに内川周辺でこの制度を利用して購入された物件は 2 戸だけである

という。平成 29 (2017) 年から登録が進んでおり、今後は利用が促進されと考えている。しかし、買い手が多い物件に共通する特徴は水周りや駐車場がしっかりと整備されている物件であり、この点で、小杉地区、大島地区、大門地区など生活利便性の高いエリアの方が人気が高いという。

射水市では空き家バンクを通じて空き家を購入した人に対して助成制度を設けている。登録物件を取得した県外からの移住者に住宅取得費の 2 分の 1 (最大 60 万円) を補助する制度や、空き家情報バンクに掲載されて 1 年以上経過した市街化区域の物件は、1 m² 当たり 2,600 円 (最大 60 万円) を助成している。

3-2. NPO 法人水辺のまち新湊の取り組み

二口紀代人さんは、NPO 法人「水辺のまち新湊」で理事を務めている。新湊は他の地区に比べて、歴史や文化、景観はあるが、人口減少が進んでいるという。そのため、二口さんは歴史ある新湊の町並みを残し、街を活性化させたいという強い思いをもっている。調査では二口さんから水辺のまち新湊の活動についてお聞きした。平成 17 (2005) 年に発足した水辺のまち新湊はまちづくりのために様々な活動を行っているが、本節ではその中から 3 つの活動を紹介する。

1 つ目は、内川周辺の 3 つの移住体験施設の運営である。移住体験施設とは、空き家を活用した滞在施設であり、港町での生活を体験してもらうことで移住者の増加を目指している。新湊・内川に「ほうじょうづ」、「さんのう」、「あずま」の 3 軒があり、射水市内では、他にも小杉に 1 軒ある。新湊の施設は平成 19 (2007) 年から始まった。1 人 1 泊あたり 1,000 円という価格では実際には経営が成り立たない (しかも、半分の 500 円は家主に渡る) ため、実際には射水市の援助も受けながら運営されている。平成 29 (2017) 年には年間 577 人、1,336 泊の利用があった。利用客は、移住見学のための家族連れや夫婦が多いという。取り組みの結果、平成 30 (2018) 年時点で 32 人、23 世帯の移住が実現した。

2 つ目は、空き家を「売りたい・貸したい人」と「買いたい・借りたい人」のマッチングである。この活動を始めたきっかけは、空き家を売りたい人や買いたい人などが水辺のまち新湊に相談に来たことがあり、二口さんがそこに需要があると感じたことである。内川周辺の空き家には、相続問題がある、家の境界線が曖昧、500 万円以下の儲からない物件が多いなどの問題がある。結果として、不動産業者は手をつけたがらない。そこで、水辺のまちがその役割を担っているのである。マッチングの現状としては、そのまま住むことができる空き家であれば買い手はいるが、内川周辺にはそのような状態の良い空き家は少なく、高額な費用がかかるリフォームが必要な家が多いため、マッチングはあまり進んでいない。取り壊して新しい家を建てる方が安くつくが、一度壊してしまうと新築時には 60% の建蔽率⁶⁾ に縛られるため、内川独特の建物が密集した古くからの町並みを残していくことはできない。この矛盾があるため空き家問題は大変難しいそうだ。

3 つ目は、番屋カフェである。番屋カフェは、映画『人生の約束』のロケ地として使わ

れた、築 100 年以上の旧廻船問屋である渡辺邸をリノベーションしたカフェ兼ギャラリーである。番屋とは、漁師たちのたまり場を意味する。水辺のまち新湊の事務局長である横田さんは、新湊・内川の景観を活かした歴史と文化のまちづくり事業の一環で、内川の象徴的建築物として、多くの人が集う地域の憩いの場を目指しているという。また、提供するメニューは地元の食材や名店の一品を集め、美味しいと思った人がそのまま歩いて近くのお店に持ち帰り分を買いに行くことができる。番屋カフェは、元々は元新湊市長渡辺氏の自宅であった。平成 25（2013）年頃、空き家になったことから水辺のまちが買い取り、家主であった娘の八重子さんの思いを受け継いで番屋カフェを始めた。八重子さんは、まちづくりに積極的な方で、内川の景観を残していくために自宅を改装して平成 23（2011）年から喫茶店を営んでいた。建物は江戸時代末期に建てられ、内蔵が 3 つもある。その頃は、北前船主として廻船問屋を営んでいた。リノベーションは県と市からの助成金を得て行われ、外側の壁の中に家を一軒建てる改装工事を 3000 万円かけて行った。3 つの内蔵は、現在、トイレ、倉庫、内川周辺の歴史に関する展示スペースとして活用されている。中庭を挟んで反対側は使用していなかったが、1 階でフレンチレストラン、2 階でゲストハウスを開くため、現在工事が進んでいる。

3-3. 地元の方の取り組み

新湊・内川には、街を活性化させるために空き家を活用した様々な取り組みをしている方々がいる。以下に 3 人の方々の取り組みを紹介する。

空き家をリノベーションした店の事例（おきがえ処 KIPPO：川口さん）

おきがえ処 KIPPO は、100 着以上のアンティーク着物の中から好きなものを選び、その場で着付けサービスを提供する貸衣装屋である。KIPPO では、近所の若い人やお年寄りが作った小物やアクセサリーの販売も行っている。店は内川に面しており、中庭があるためあいの風（海からの風）が吹き抜けて夏場でも涼しい造りになっている。

店主の川口さんは元々、射水市善光寺で川口貸衣装を営んでいた。そこで、70 代女性のサークルを対象にドレスを貸して楽しんでもらうイベントを行った。そのとき、おばあちゃん達がとても喜んでくれ、新聞にも掲載され反響があった。以前から内川を活性化させるための活動を行っていた川口さんは、内川でもこのようなイベントを行うと多くの人が興味を持つのではないかと思った。また、出店する前の 2 年間程、内川で行われる十楽の市というイベントで着物を貸し出して街歩きを楽しんでもらうイベントを行っていた。内川には、着物を持って嫁ぐという風習があったため、イベントで貸し出す着物は内川住民の着なくなった着物を集めて活用していたそうだ。

KIPPO は、当初はしっかりとした店舗という形ではなく、ボランティアで行うつもりだったが、なかなか話が進まず 2 年ほど中断していた。その間に、平成 27（2015）年 3 月に北陸新幹線が富山県に開通したことをきっかけに、内川は映画の撮影スポットとして人気に

なった。その時期に、近所で有名なそろばん教室のおばあちゃんに出店の話をしたところ、後押しをしてくれたそうだ。内川で10年間空き家になっていた柳瀬洋裁店を見つけてきてくれたのが、このおばあちゃんであった。この柳瀬洋裁店をリフォームして、ついにKIPPOが開店した。

川口さんによると、このようにスムーズに話が進んだのは、そろばん教室のおばあちゃんという、自分と柳瀬洋裁店の両方を知っている仲介役がいたからだという。内川では、空き家を持ってはいるが知らない人に貸すことを嫌がる人が多い。他方でこの店は、貸衣装屋というコンセプトが明確であり、飲食店とは異なり火事の心配もないため、安心して大事な家を渡すことができるのではないか、と川口さんはいう。

柳瀬洋裁店は、築50年ほどの建物で10年間空き家になっていたため、中をリフォームしたという。現在入口になっている所は元々壁で、その前にはブロック塀があったが、全て壊して大きな玄関をつくった。そのおかげで、あいの風が吹き抜けるようになった。柳瀬洋裁店の元の店主も、そこから見えるようになった川の景色に驚かれたそうだ。細工が綺麗な中庭の木製の戸は、使わなくなったものを砺波市から取り寄せて再利用したという。畳の部屋や台所はそのまま使用し、廊下やトイレ、着替え部屋などをリフォームした。

しかし、リフォームには大変お金がかかった。空き家は安く、内川は素敵な場所だが、リフォーム費用が高額すぎて内川での空き家の活用を断念する人も多いという。川口さんは、費用のことなど後先を考えずに店をつくったため完成してから悩まされたという。その後、店が機能するようになるまで1年ほどかかった。特に、この店の重要性を感じるようになったのは、内川にロケ地巡りに来た観光客の存在だったという。内川には、観光客が休憩する場所が少ないためKIPPOが休憩所・まちの案内所の機能を果たしたという。また、観光客に「地元の方々とおしゃべりが一番楽しかった。ここに来て良かった」といわれ、頑張ろうという気持ちになったそうだ。その後、観光客がSNSで内川の魅力を発信したり、メディアが取り上げたりと、良い循環が生まれて、次第にお客さんが増えていった。しかし、現在はロケ地巡りに来る観光客も減り、地元の方々の熱も冷めつつあるように感じるという。

KIPPOは、本業の川口貸衣装のほんのかたわらにすぎず、実際のところ儲けはほとんどないという。内川で店を開きたいという人の相談を受けるが、客が少ないので儲けることは難しいと思っている。しかし、人の興味を集める店や場所は、どんなに辺鄙な所にあっても人気になるとも考えている。

川口さんは、賑やかな頃の内川を取り戻したいという人々の思い、すなわち「内川への愛着」がKIPPOでの活動の原動力になっているのではないかと感じている。内川周辺は、元々新湊市の中心地だったが、射水市に合併された頃から若者の流出が目立ち始めたように思う。また、新湊地域に注がれる国からの補助金も減少した。20年ほど前から内川周辺の道が舗装され、竹下内閣の政策による予算で内川には様々な橋が架けられた。また、旧新湊市長や合併後の初代射水市長を務められた分家さんは、内川における駐車場不足の間

題に対してコミュニティーバスを設けることで交通網をつくった。街の活性化には行政の力も重要だと感じているようだ。



写真 2-4 KIPPO の外観

空き家をDIY⁷⁾した店の事例（小さなキッチン&雑貨 Lupe：北原さん）

Lupe は、新湊・内川の東橋の近くにある 6 坪ほどの小さな店である。店内では、クロワッサンやワッフルなどのオーガニックのパン類や蜻蛉玉アクセサリーなどを作る地元作家の作品、内川をモチーフにしたマスキングテープなどの雑貨を販売している。ここは元々空き家だったが、クラウドファンディングで資金協力を呼びかけ、何度もワークショップを開催し、多くの人にDIYを手伝ってもらい完成した店である。

元々京都に住んでいた店主の北原さんは、旦那さんの仕事の関係で 4 年ほど前に富山に移住してきた。北原さんの住まいは、内川に面した間口が狭く奥行きがある細長い家である。昔住んでいた京都の町にも、このような町家造りの家が多くあったため心地が良いと、北原さんは言う。中庭があり、窓を開けると気持ちのいい海風が吹き抜ける。そのため、家にはクーラーがなく、ふすまを夏用・冬用とで使い分けて暮らしている。不便に感じることはあまりなく、ふすまの付け替え作業や祭り囃子の音で季節を感じられる。祭には参加してみたいが、店があるので参加できないのが残念だという。

Lupe は、1 年半ほど前に空き家になっていた建物のキッチンと隣接する車庫をDIYしてはじめた。キッチンと車庫以外の部屋には、大家さんの荷物や私物がそのまま置かれている。車庫を店として使い、キッチンとの間の壁の一部をくり抜くことで、店内からキッチンが覗ける造りになっている。北原さんは、街の中に溶け込んでいるものをそのまま活用して残していきたいという思いから、外観をそのままに中だけをリフォームしたお店にしたという。店内の壁には、地元の方々おすすめのスポットが付箋で貼られたオリジナル地図が描かれていたり、クラウドファンディングへの協力者の名前が書かれていたりする。

小さな空間だが、多くの人の思いが感じられる温かみのある空間になっている。北原さんは、これらを見ると頑張ろうという気持ちになり、元気をもらおうという。また、新湊・内川には若者が少ないため、自分たちのように外から来た若者のことを地元の方々は歓迎してくれると、嬉しそうに話された。



写真2-5 D I Yをした Lupe 店内

空き倉庫をリノベーションした住居の事例（ma. ba. lab：明石さん）

明石さんは広島県出身で、東京を拠点に全国各地で地方のまちづくりのアドバイスをする仕事を10年間していた。現在は、新湊・内川を拠点に富山の魅力を伝えるために様々な活動をしている。株式会社地域交流センター企画のトヤマ事務所である ma. ba. lab（まばらぼ）は放生津町にあり、イベントの企画・運営や古民家再生、空き家を活用して自身がつくった café uchikawa 六角堂の運営プロデュースなどを行っている。空き家をリノベーションした店の事例で記述した、内川沿いにあるおきがえ処 KIPPO も明石さんがリノベーションした店である。

明石さんが富山に住もうと思ったきっかけは、富山の魅力を多くの人に気づいてもらい、残していきたいと考えたからである。東京を拠点に全国の地方を回っていた頃は、その先々で地域ならではの素晴らしい景観や食材と出会い感動した。特に印象的だったのは、三重県尾鷲市を訪れた際、地元の方に連れられて真っ暗闇の海の上で観た満天の星空である。こんな景色が当たり前の生活を知り、「なんて贅沢な暮らしなんだ」と思ったそう。東京で暮らしていた頃は、お洒落な建物は多いが高層ビルばかりで殺伐としており、地方の豊かさを感じた。富山県を訪れた際は、立山にさす神々しい光や水深の深い富山湾だからこそ採れる多種多様で美味しい魚に感動したという。さらに、地方で暮らす人々は都会に比べて、人と人とのつながりがあり地に足の着いた生活をしていることに気づいた。そして、

自分もそのような暮らしがしたいと思い、奥さんの実家がある富山県に来た。明石さんによると、近頃は東日本大震災をきっかけに、地域の人達のつながりの大切さを感じて地方に移る若者が増えているようである。

今回の調査では、明石さんのトヤマ事務所である ma.ba.lab でお話を伺った。この建物は、空き家になっていた築 80 年の米屋を買い取り、2 年前に自身でデザイン・プロデュースをしてリノベーションしたものである。この ma.ba.lab は、蔵や土間、中庭などの昔ながらの家の造りはそのままだ、オフィスやキッチンなどが新しくつくられており、明るくモダンな雰囲気が印象的な素敵な空間だった。調査期間中は、内川の町家を改装したバーの経営を目指す米国ハワイ州出身のステーブンさんと、内装やデザインについて話し合いを進めていた。今後は、町家を改装した旅館のデザイン・プロデュースも手がけていきたいそうだ。

この他にも明石さんが手がけた物件を見学させてもらった。放生津街道に面する間口の狭い細長い建物が、それである。ここは元々、空き家になっていた倉庫だった。倉庫の持ち主である岡田さんがおきがえ処 KIPPO の家で、明石さんが KIPPO をリノベーションした際に、眠っていたこの倉庫も使ってほしいと言われたのが改装のきっかけである。リノベーション費用は岡田さんが負担し、30 代の夫婦に貸すことになった。元々 2 階建てだった倉庫は、1 階が駐車スペースに、2 階が住居に生まれ変わった。夫婦は、この建物の 1 階で抹茶カフェを開き、2 階で暮らすという。私は入居前に建物をみせてもらった。2 階を見学させてもらおうと、街道側にある大きな窓が印象的だった。そこから 10 月に行われる曳山を楽しむことができるという。柱や階段はそのまま使われており、トイレやキッチンなど生活に必要なものが小さな空間の中につくられていた。また、明石さんのこだわりが様々なところにみられた。例えば、キッチンのシンクは魚がさばけるように大きめに設計されていたり、階段の照明には岡田さんのお父さんが使っていたという鳥籠を活用していたりする。岡田さんのお父さんは鳥を 100 羽ほど飼っていて、倉庫に 50 個ほど鳥籠が置いてあったのだ。このように、使う人の気持ちや家主の思い出を残した家になっていた。

リノベーションは、家を取り壊して新築するよりも多くの費用がかかる。だが、明石さんはお金をかけでも残していきたい、残しておきたいものだという。一度壊してしまうと建坪率の問題により建物の前後左右に隙間が必要になるため、実質元の建物の半分くらいの家しか建てられなくなる。したがって、空き家を 1 軒分取り壊しただけでは新しく家が建てられなくなり使いようのないただの更地になってしまう。以下の写真は倉庫を改装した物件と近くにあった更地である。これらは似たような空間であるが、更地になった方はこの物件と同じ大きさの建物は建坪率の制約のために建てるできない。



写真2-6 リノベーションした住居の外観



写真2-7 内川の更地

4. まとめと考察

新湊・内川は、細長い家屋が密集した独特の町並みと様々な橋が架けられた水辺の景観が美しい街である。この町並みは、人々の営みの歴史が反映され、形成されてきたものである。また、内川周辺という小さなフィールドには、地域の方々の密な繋がりがあり、多くの人々がそこに魅力を感じている。

一方、若者の流出による人口減少と高齢化、それに伴う空き家の増加など深刻な問題を抱えている。多くの若者は結婚すると、小杉や大門など南側に引っ越していく。内川周辺は家屋が密集しているため、道幅が狭い、駐車場が少ない、庭がないなどが要因と考えられる。また、空き家に住むという選択肢もあるが、内川周辺には状態の良い空き家は少なくリフォームが必要な家が多いため、高額のリフォーム費用がかかる。新しい家を建てる方がコストは安い、一度壊してしまうと新築時には60%の建蔽率に縛られるため、内川独特の家屋が密集した古くからの町並みを残していくことはできない。このような矛盾があるため、内川周辺の空き家問題と景観との兼ね合いは複雑で難しい。

今回は、内川の空き家に焦点を当てて地元の方々の思いを聞いた。歴史ある景観を守るため、古い家を大切に使ったり、空き家をリフォームしたり、空き家のマッチングを行ったりなど、内川での暮らしを愛し、大切にしている方々の取り組みを知ることができた。一方で、昔ながらの家の暮らしや道の狭さなどを不便に感じる方々もいた。2-4で紹介した昔ながらの町家に住む汐海さんは、掃除や移動が大変だったり、修理費がかかったりなど生活する上での不便が多いため、コンパクトで近代的な家に住みたいという。このように、内川周辺の暮らしの中には「美しい景観を守りたい」と「生活に不便を感じる」の相反する思いがあることが分かった。

このような中で、少数ではあるが空き家を活用している方々がいた。彼らの共通点は、

都会や海外など県外から移住してきたことである。彼らは、内川特有の景観の美しさや地域の繋がりに魅力を感じ重要視している。東京から移住してきた米国出身のスティーブンさんは、内川の町並みや様々な橋の架かる水辺の景観に感動したことから射水市への移住を考えるようになった。水路や自然が日常生活の中にあり、規模が小さいからこそ人のネットワークがある生活がとても魅力的に感じるという。同じく東京から移住してきた空き家のリノベーションを手掛ける明石さんは、富山県の魅力を立山や富山湾で採れる魚などの食材や素晴らしい景観だと語る。地方にはそれぞれ魅力がある。内川に移住してきたことで地域の人々との繋がりができ、地に足の着いた暮らしをしているという。このように、地元の方々にとって当たり前の暮らしが彼らにとっては特別なものなのである。便利な暮らしは快適だが無くても生きていくことができる。移住者にとって、内川での暮らしは不便な点はあるが、それ以上に景観や地域の繋がりなどの大きな魅力があるということが、今回の調査を通じて分かった。

おわりに

私は調査を通して、内川周辺は住むより観光にきたい街であると感じた。美しい景観に心惹かれ、このような水辺のまちで暮らすことは素敵だと思った。しかし、家屋が密集し、古い空き家が多いため、新築で庭のある家住みたいという夢は実現しにくいと思った。また、内川周辺は射水市の中でも海側の端に位置するため、大型ショッピングモールから少し遠く、コンビニも徒歩圏内にないため、若者には暮らしにくい環境であると感じた。一方、内川周辺には、水辺の美しい景観に加え、空き家を活用したお洒落なカフェや店があり、地域の方々も気さくで明るく魅力が溢れる街であると感じた。実際、若い観光客の姿も見かけた。しかし、調査で明らかになったように、内川周辺では人口減少と高齢化が進んでおり、深刻な問題となっている。今後、住む人がいなくなれば美しい景観を守ることができず、私たちが観光に来ることもできない。そのため、観光だけではなく、住みやすい環境づくりにも力を入れることが必要であると感じた。

一方、内川周辺にはここでの暮らしを望んで移住してきた方々もいる。内川での暮らしを選んだ彼らと私の違いは、地方での暮らしに対する憧れの違いであると考えられる。彼らは、元々都会で暮らしていたため、地方の自然の豊かさや地域の繋がりに強い魅力を感じるのである。一方、私はずっと富山県で暮らしているため地方の暮らしの中でもより便利で快適な暮らしを求めている。今後、内川周辺の景観を守り、空き家問題を解決するためには移住者が必要不可欠である。そのために、まずは地方での暮らしに憧れる外の人々に内川周辺の魅力を発信し、知ってもらうことが大切であると感じた。

注

- 1) 平成 30 (2018) 年 12 月 31 日の射水市住民基本台帳人口。

- 2) 平成 27 (2015) 年国勢調査男女別人口及び世帯数。
- 3) 射水市空き家実態調査報告 平成 25 (2013) 年 1 月。
- 4) 密集市街地のうち、延焼危険性が特に高く地震時等において大規模な火災の可能性があり、そのままでは今後 10 年以内に最低限の安全性を確保することが見込めないことから重点的な改善が必要な密集市街地を「重点密集市街地」として把握した(国土交通省)。
- 5) 万葉線北側地域限定のため善光寺・桜町・緑町・越の潟町は調べていない。
- 6) 敷地面積に対する建築面積の割合のこと。防火上と住環境配慮の目的がある。
- 7) Do It Yourself の略で「自身でやる」の意。

参考文献・資料

新湊市企画情報課『新湊市統計書 平成 16 年度版』新湊市、2005 年。
新湊の歴史編さん委員会『しんみなとの歴史』新湊市、1997 年。
水辺のまち新湊『ぶりっじーまちとひとがつながるフリーペーパー』2017 年。

参考にしたウェブサイト

射水市「くらしの情報—射水市の人口・世帯数」
〈www.city.imizu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=2291〉(2019/01/21 閲覧)

第3章 放生津曳山祭りにおける人手確保対策と女性参加

佐藤 杏未

はじめに

私の地元（福井県坂井市）には曳山を巡行する三国祭りがある。山車には大きな人形が乗せられて、町の細い路地を通っていく。町内には18基の山車があるが、毎年その一部である6基が巡行し、奉納される。囃子方を担当するのは主に小学生の子どもであり、外から誰が囃子を演奏しているのかを見ることができる。しかし、新湊の曳山祭りで、13本の曳山を朝から晩まで1日かけて練り歩くという数の多さや、そして昼と夜とで曳山の装飾が変えられることを知って驚き、曳山祭りについて詳しく調べたいと思った。

曳山についての話を聞くなかで、曳山町の人々だけでは毎年の祭りを運営することが難しいことや、外からの手助けを得て曳山を動かしている状況を知った。そして、曳山を曳く人や管理に携わる人のなかに女性の姿が少ないことに気が付き、女性が曳山祭りでどのような役割を担っているのかについて興味を持ち調査対象に決めた。

調査では、主に曳山を持つ町の責任者である総代から、紺屋町と南立町の2つの町を中心に聞き取りを行った。また10月1日に行われた曳山巡行を実際に見学した。それにより、曳山祭りがどのようにして行われているのかを知るとともに、曳山町が抱えている問題も見えてきた。本章では、曳山祭り当日の曳山巡行について、人手に関する問題と女性の曳山祭りにおける関わり方を考える。まず第1節で新湊の曳山についての概要を説明する。第2節では人手不足の状況と人手の確保の問題点や、工夫について述べる。第3節では女性と曳山との関係について、現状がどうなっているのかを述べる。第4節では以上を踏まえてまとめと考察を行う。

1. 新湊の曳山について

まずは、放生津八幡宮の曳山祭りについての概略を記す。曳山祭りは、富山県射水市・新湊地区にて毎年9月30日から10月3日に渡って行われる、放生津八幡宮秋季例大祭の一部である。10月1日に八幡宮から神輿が出される神輿渡御と供にする形で行われる、曳山の巡行を指している。朝、放生津にある13本の曳山が八幡宮の前に集まり、お祓いと出発式を経てから、曳山の巡行が始まる。昼と夜とで外観を変えて、一日中曳き回されるのだ。

曳山祭りは360年以上の歴史を持つ。最初の曳山は古新町で、慶安3（1650）年に創建されたのを始めに、享保6（1721）年には半数以上の8本の曳山ができた。その後も曳山の建造は進み、文久2（1863）年、最後に南立町の曳山が創建されて、現在と同じ13本の曳山が揃った。古新町、奈呉町、中町、新町、東町、四十物町、三日曾根、立町、荒屋町、長徳

寺、法土寺町、紺屋町、南立町が曳山を所持している。曳山の所用、維持は各町によって行われている。

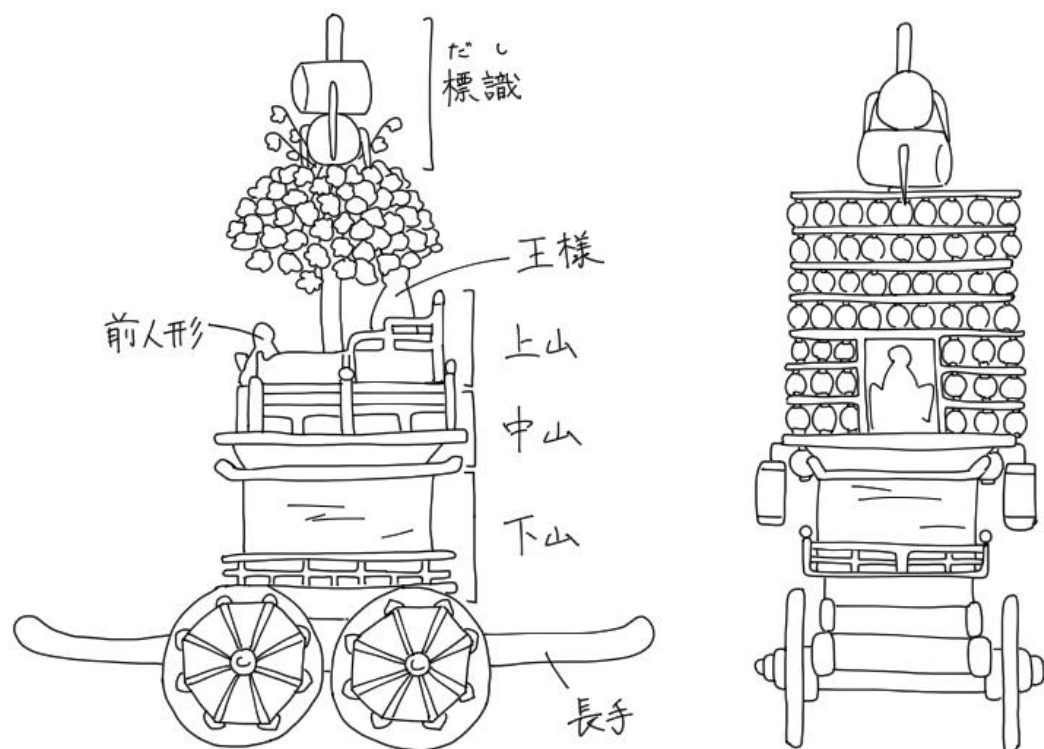


図3-1 花山と提灯山（紺屋町）
（『新湊放生津曳山さんぽ』を参考に筆者が作図）

曳山は高さ約8メートル、長さ約7メートルという大きさである。曳山は大きく3つの部分に分かれており、上から順に上山^{うえやま}、中山^{なかやま}、下山^{したやま}と呼ばれる。上山には、曳山の主神である等身大の人形である「王様」、王様に対する配神となる「前人形」が乗る。中山には大正時代以降、曳山の先端に飾られている「だし 標識」が引っかからないように、電線を持ち上げる竿を持つ人が乗り込んでいる。標識とは、各町のシンボルをあしらったものである。電線が架設されたことで、引っかけないように高さを低くした町もある。町ごとに大きさもまちまちで、なかには標識そのものの高さが、3メートル近くのものもある。下山には囃子方が中に乗り込んでいて、幔幕^{まんまく}という布や暖簾^{のれん}で、外からは見えないように覆い隠されている。

曳山は昼と夜でその見た目を変える。日中は花傘を飾った「花山」、夕刻には花傘を下ろして提灯に組み替える「お色直し」が行われて、上山に提灯台を飾った「提灯山」になる。花傘の造花は、現在はビニール製であるが、かつては和紙で作っていた。また、提灯の灯りにはロウソクが使われていたが、これも電球になり、現在はLED電球を用いる町がほとんどである。提灯の材質も、紙製だったものをビニールやナイロン製に変えている。



写真3-1 花山に用いられる造花



写真3-2 提灯山に用いられる提灯

曳山を動かすのは、曳き子と呼ばれる人達である。曳山を押し引きし、方向転換をするための舵の役割を果たしている長手に繋がる。また、より多くの人を繋がらせるために、補助長手をつけている。1町あたり25～30人必要で、年齢層も若い。

囃子方は、下山に乗り込んで曳山囃子を演奏する。おおむね太鼓 1 人、鉦^{かね} 1 人、笛 2、3 人、町によっては三味線 1 人を加えての 4～6 人で構成されている。曳山の巡行中は絶えず演奏を続けなければならないので、交代要員が控えている。囃子方にのみ、女性に加わるものが広く容認されている。



写真 3－3 太鼓（紺屋町）

2. 人手不足への対策・人手確保

今回、世帯数や若者の人口が減少するなかで、今も曳山を維持している南立町と紺屋町の 2 つの町を中心に聞き取りを行った。曳山を動かすには曳き手に 30 人程度の人手があれば足りる。しかし、世帯数が減少したことに加えて、曳山に繋がることができる若い人が地域に留まらない傾向にあるため、紺屋町でも南立町でもお年寄りのみの世帯が多くなっている。これらの町では、曳山を実際に動かすために町外から人手を集めてくる必要がある。

2－1. 紺屋町

紺屋町総代の塚原和雄さんに人手についての現状を伺った。紺屋町は、元々 45 軒程の小さな町だった。現在は世帯数がさらに減り、19 軒で曳山を維持している。



写真3-4 紺屋町の花山

曳山を動かすために必要となる、曳き子や囃子方、上山、中山に乗る人を含めた数は60, 70人である。これは仮に、紺屋町の19軒全てが4人家族で、かつ全員が満足に関わることができたとしてもやっと足りるくらいの人数である。実際にはお年寄りで曳き子になれない人や、女性や子どももいることから、紺屋町の人々だけで曳山を動かすことは不可能である。そうしたなかで曳山を曳くためには、どうしても町外から手伝いとして人を呼ぶ必要があった。

助っ人は主に新湊で曳山を持たない町の人々を中心に構成されている。手伝いで曳き子となる人の年齢層は、20代半ばから50代後半(60代前半)までである。町外から参加する曳き子のなかには、長い人になると30年以上も携わっている人もいる。

曳き子全体の年齢層が高くなっている状況をふまえて、塚原さんは曳き子の若返りを図りたいと考えていると話す。高校生など、若手に曳き子になってもらい、高齢の曳き子との切り替えを行いたいということだった。けれども、年配の方も自分から曳山に繋がることを止めると言い出せないという。というのも、曳き子が変われば当然曳山の曳き方も変わってしまうからである。長年の間曳き子を同じメンバーに固定にしているのは、慣れた人に曳いてもらうことで、曳山が傷まないようにすることも考えてのことなのだ。紺屋町には曳山を

曳くためのマニュアルがあり、手伝いとして曳き子をする人にはなるべく習得して欲しいのだそうだ。

平成 30（2018）年度の曳山祭りには、紺屋町に予想よりも多くの人々が助っ人に来てくれた。元々紺屋町では 61 枚の、丁度良く計算された数の法被を用意してある。そのうち半数の 30 枚は決まって毎年祭りに曳き子として参加してくれる人に渡して、個人で管理をしてもらっている。紺屋町では「曳き子」、「花（祝儀）貰い」などの役割に応じて色の異なる法被を着ることになっているが、今年は本来紺色の法被を着る花貰いの人が曳き子の数に応じて緑色の法被を着たという。また、曳山の後ろを歩く人は黄緑色の法被を着る。法被を着ることで町の人として数えられ、曳山の傍を歩くことができたりするなど、法被にはユニフォーム的な意味があるのだが、今年はその法被姿でうろうろと歩く人が増えたそうだ。

人が多いことはありがたいが、かえって曳山に繋がることのできるスペースが無くなるといったことも起こる。そういう場合は交代で曳山に繋がることのできるようにするのだが、何とか繋がりたいと曳山の死角に無理に入ってこようとする人もいる。曳山の死角とは大体車輪の周りになるのだが、当然危険な場所であり事故や怪我の元になりかねない。また、町の法被を着たまま、総代の目の届かない場所で酒盛りをしているといったことも、曳き子の人数が多いことで起こるのだという。

2-2. 南立町

南立町は現在 55 世帯で、その曳山は新湊の曳山のなかでは最も新しく、文久 2（1863）年に建造されたものである。自分達の町内にも曳山が欲しいと、町内全体でお金を貯めて作られた曳山であり、他の町がケヤキで作るところを、南立町はケヤキほど材質の良くないマツで建造した。少しずつ修理を重ねて現在の形になっている。

南立町総代の飯田剛さんにも同様に人手についての現状を伺った。南立町など少数世帯の町だけでなく、他の曳山町も町外から人の助けを得ているという。古新町や荒町は世帯数こそ多いものの、住民に占める高齢者の割合が高いことから外部から人を呼んでくるのだという。手伝いに来てくれる人のなかには町に全くの縁がない人もいるが、基本的には町に元々住んでいた人、あるいは出身地だが現在は別の地域に住まいを移している人、長年来てくれている友人が中心だそうだ。南立町では近くの牧野や姫野地区からの人手との繋がりを大切にしている。1 度曳山に繋がると、その時点で自分が曳山のどの部分に繋がるかというポジションを決めてしまう人もいるという。また、新しく曳き子として参加する人が来ても、元から曳き子として来ている人と仲良くなっていくそうだ。



写真3-5 南立町の花山

飯田さんだけでなく、南立町曳山保存会の草克彦さんもおっしゃっていたが、昔は町内の住民が多かったため曳山に繋がりとくとも繋がることできない、という状況だった。南立町では曳山上部にある前人形を操作するのは子どもの担当であるが、子どもの数が多すぎるあまり、数人のみを選んで曳山に乗せることもできず、ある時は一切子どもを乗せなかったそうだ。現在では町内にいる子どもの数も少ないことから全員を曳山に乗せられる。また、町にゆかりのある人が乗せてくれないかと頼んでくることもあるという。

南立町で曳き子ができる年齢は、高校生から40代近くまでである。紺屋町と比べて年齢の幅が狭いのは、体力面を考えてのことであるという。また曳き子のみならず、曳山の管理（飯田さんはこのことを「お世話」と言っていた）も町外の人に携わってもらっている状況だという。お金を出して曳き子を雇っていた時期もあったようだが、今は逆に町外の人から、手当は要らないから曳山に繋がらせてくれと頼まれるそうだ。それは、報酬がもらえるから曳きに来るのではなく、曳山に繋がることの楽しさを身をもって体験して、また次回も繋がりたいと思うからだという。

人員面においては、現在はまだ何とかやれている状況だという。曳き子の数よりも、むしろ囃子方の人数の維持に不安がある。小中学生の頃までは曳山の中に入って囃子方として演奏に回っていても、高校生以上になると友達がいる曳山の外に出たくなるという。そうして囃子方を離れて曳き子を経験してしまうと、もう囃子方には戻って来られなくなるというのだ。

南立町では曳き子の数以前に、曳山自体を町内会費で維持することも難しいという問題がある。南立町曳山委員会には町外の人もあるが、だからといって町外の人から資金を徴収することはない。しかし祭りの際には、厚意として花（祝儀）の形でお金をもらうことはあるということだった。

2-3. 町外在住者の曳き子について

曳き子を集めるに当たってどのような苦労があるのだろうか。先述のとおり、紺屋町総代の塚原さんは、曳き子の年齢層を若返らせるために、高校生の若い曳き子に来て欲しいと考えている。しかしこれは、祭りが行われる日が平日か休日という、暦上の問題に直通する。祭りの日は、小中学校は休みになるけれども、高校では授業が行われている。そのため、曳山巡行日が平日になると、曳き子として欲しい高校生が参加できなくなるのだ。土日でないと学生はどうしても参加しづらい。平成30（2018）年度の曳山祭りは月曜日に行われたが、偶然に高校が休みだったこともあり、紺屋町では男女それぞれ1人ずつの高校生が祭りに参加していた。しかし毎年そうであるとは限らない。

曳山祭りに限らず、全国のどの祭りでも後継者をどのように育てるかは課題になる。塚原さんは、祭り当日に高校生を曳山町ごとと呼ぶのではなく、新湊曳山協議会の形で高校側に曳山巡行当日に生徒を参加させて貰えないか申し入れをするのがよいのではないかという。そうして参加したいと言ってきた高校生を町ごとに必要な人数に分けて、曳き子に入ってもらおうというやり方である。けれども、祭りに参加するということは、飲酒や喫煙と隣り合わせであることも意味する。高校生は未成年で、それらが禁止されている年齢だが、祭りだからと羽目を外してしまうことが起こるかもしれない。そうなった場合に誰が責任を取るのかは難しい問題だが、だからこそ、協議会が先頭に立ち責任を持って、祭りの間高校生を預かるというようにして欲しいということだ。しかし、申し入れをしたとしても、高校側に曳山祭りへの理解がないと実現が難しいという点は、課題として残る。

2-4. 法被

法被を着ていることは、その着ている町のメンバーとして認められているものとされている。部外者ではなく、町の一員だと一目で表すことができる指標となるのである。法被を着用することで、曳き子にならなくてもその町の曳山の後ろについて歩くことができるようになる。たとえば紺屋町では、曳山の後ろを歩くことができる人は、主に曳き子の両親や家族である。法被を着ることで、曳山と一緒に順路を歩いても構わないということになる。

南立町で実際に曳山巡行を見学した際、南立町に限らずほとんどの曳山町でも、曳き子か自身の名前が裾に入った法被を着て祭りに参加していたことに気付いた。南立町総代の飯田さんによると、いわゆる「マイ法被」というもので、南立町では名前入りの法被を作りたいという人に1着1万2千円自己負担してもらい、残りを町内のお金から出している。1着

作るのに2～3万円かかるという。元々は町から貸し出していたが、5年ほど前から今のよう
に個人で名前入りの法被を作るようになったという。

他方紺屋町では、現在も町から法被を貸し出している。法被自体は、大正時代に作られた
ものが最初であるが、紛失や数を充足するために色違いのものを作るなどして、現在の祭り
で曳き子が着ている法被は4代目となる。曳山巡行当日に貸し出し、再び曳山が町に戻って
きた後にラーメンの引換券とカレンダーと交換で町に返却される。貸し出されていた法被
は、祭りの後に紺屋町の各家で1軒あたり10人分の法被を洗ってもらっているという。紺
屋町では各々で法被を作るということは無い。各自で法被を作ると法被のデザインが揃わ
ないなど、町全体としてのまとまりが無くなるというのがその理由である。



写真3-6 紺屋町の法被

3. 曳山祭りへの女性の関わり方について

3-1. 女性も本当はつながりたい？

新湊の曳山祭りでは、曳き子としての女性の参加を認めていない。例外はあるが、ほとん
どの町は曳き子に女性に関与することはない。南立町もそうであり、曳山巡行当日、女性は
曳山の後ろを法被着用について歩くという。平成30(2018)年度の曳山祭りにて、南立町
の曳山の後ろで法被を着て歩いていた20代前半の女性2人に、女性が曳き子として参加で
きないことについて、どのように思っているのかを尋ねた。女性が曳山に繋がれないこと
に関しては、若い世代から見ても、伝統を守っていくべきだという思いがあるそうだ。また、

曳山を実質仕切っているのが年配の世代であると伝統を重視する傾向が強いので仕方ないと思う反面、男女差別にはならないのか、と思わないわけでもないということだった。

祭りの最中に、立町と中町が女性参加に寛容な態度を取っていると聞き、立町で実際に曳き子として参加していた、20代後半ほどの女性の方を見つけて話を聞いた。この女性は、祭りを見学しているなかで唯一曳き子をしている方だった。8年間曳き子をやっているが、元々はお囃子で太鼓を叩いていたという。

また中町で、こちらもお囃子に参加していた女性2人に話を聞いた。彼女らも伝統を重視せねばならないと思う一方で、曳きたいという気持ちはあるが、どうにもならないと考えているということだった。また、夜には長手に繋がっているとのことであった。ただし、危険なので曲がり角では曳いていないという。

3-2. 女性の曳き子参加が認められない理由

東町の松原穂積さんに、女性が曳山に触れられない理由を尋ねた。放生津曳山祭りは、曳山上部に乗せている王様と呼ばれる人形や、操り人形である前人形に神様を乗せている。曳山は、イベントとしての祭りではなく、神事として扱われており、女性が曳山に触ることで穢れてしまうといった考えを持つ人は少なからず存在するのである。暗黙のルールとして女性に曳き子はさせないようになっているのはこのためである。伏木（高岡市）の曳山では既に人手不足を補うために女性を曳き子に参加させてはいる。新湊にもお祭りが好きな女性が昨今増えてきてはいるものの、今のところ放生津で女性を曳き子に加わらせる予定は無いということだった。放生津では、曳山に女性を繋がらせないという原則、伝統を守って行かねばならないということである。また、放生津の曳山は漁師町ということもあり、曳き方が少々荒いため、女性にはそもそも入りづらいという事情もある。

伝統や曳き方の他に、曳山の繋がり方にも女性を入れづらい理由がある。それは曳き子同士がどうしても密着せざるを得ないという点である。持ち手の長さも繋がることのできる場所も限られており、加えて曳き子は男性ばかりである。そのなかに女性が混ざると、どうしてもやりづらいものがあるという。身体同士が密着すれば「セクハラ」だと取られかねない。曳山を真っ直ぐに動かす分にはいいが、角を曲がる時などは力任せという面もある。そのような場合には、女性の存在は下手をすれば邪魔になってしまうかもしれない。

伏木の曳山では既に女性がロープを経由して曳山に繋がっているが、それも真っ直ぐの道を進むときに限られている。もしも将来、放生津でも女性が曳山に繋がることのできるという状況になったとしても、伏木の曳山と同様に、実力的な戦力にならないのではないかとのことだった。今後、正式な祭りで女性を曳き子として迎える可能性はゼロでないという塚原さんは話す。状況を見ての判断になるだろうということだが、けれども本音としてはまだ女性を入れたくないというものだった。これは紺屋町に限らず、南立町でも同じであり、女性ができることなら最後まで入れずに曳山を動かしたいということだった。

南立町の草克彦さんに、女性は曳山に乗りたい、繋がりたいと言ってくることがあるのかと尋ねると、女の子を持つ親も、また当人も、女性が曳山には繋がることをできないのを察しているため、そのように言ってくることは無いという。また、昔と家庭環境が変化したこともある。たとえば、曳山囃子の練習においても、以前こそひとりでも見に来る子どもが居たというのだが、今ではそうした子どもをすっかり見なくなったと言う。男性の曳き子以上に怪我を心配になることから、曳き子には参加させづらいのかもしれない。

裏方における女性の活躍は認めているが、曳き子として実質的な力にはなり得なさそうだ、という感じが窺えた。南立町の鳥取さん(70代)の話では、娘さんが幼少の頃に中山に乗せたところ、曳山の中心を担う人に怒られたことがあったそうだ。その当時は現在よりも更に女性を曳山に乗せることに消極的だったことが分かる。囃子方に参加する女性は別物だということだろうか。

女性を曳山に触らせないということは、祭り以外の場面でも根強い。まだ解体せずに曳山を仕舞えるような山蔵が無かった頃(祭りが終わる度に曳山を解体していた頃)も、女性には曳山に手を触れさせるようなことは無かったという。放生津曳山祭りが神事として扱われるものであり、神様を乗せる乗り物でもあることから女性が触ってしまうことでけがれてしまうといった考えを持つ人々が現在の70代には多いのかもしれない。

曳山の曳き出しや曳き納めにはお祓いが行われるが、そうした場面でも女性の曳き子の参加は認められていない。ただしそこからはみ出した部分、たとえば、曳山を町内に戻す時や祭りの前に行われる町内曳きでは、女性の参加は町ごとの判断によるものと紺屋町の塚原さんは話す。

祭り当日、曳山巡行開始前に放生津八幡宮にて出発式が行われ、夜の曳き別れ時に再び放生津八幡宮に戻りお祓いを受けて各町内に帰っていく。つまり、放生津でお祓いを受けてから町に戻るまでの道中や町内曳きにおいては、放生津曳山祭りの正式な祭という枠の外に当たるため、その場合に女性を入れるかどうかは町ごとの判断に委ねられるということだ。これは中町でも同様のことが聞かれており、正式な祭りの場では曳山に繋がることもなく、町に戻る際は危険のない範囲で繋がっているということだ。

他にも、紺屋町では、伝統的に曳山には乗れない外国人や女性が、「ツアー」という名目で曳山に繋がることのできる工夫をしている。巡行コースの中にある直線道路にて、曳山後部などの安全な場所に限って参加することが可能になるということだ。その入口として、9月半ばまで紺屋町曳山の体験ツアーの申し込みを受け付けている。また、新湊ライオンズクラブ経由で日本に留学してきている外国人も、曳山体験をすることができる。こちらも決められた区間のみを、曳山後部の安全な場所で参加しているということだ。こうして「体験」という枠組みで曳山に繋がることのできるのは、曳山に繋がりたいと思う女性にとってはい間口の広いものとなるだろう。

3-3. 祭りにおける女性の役割

曳き子に限定すれば女性の入る場は無いが、祭り全体を見れば女性達が至るところで祭りを支えていることに気付く。たとえば、祭り当日の食事の手配や、日中の花山に取り付けられている花を作ることも、女性の役割となっている。けれども食事の準備と言っても、昔のように婦人部による料理が振る舞われるわけではなく、現在では外部に弁当などを事前に注文しておいて、祭り当日の休憩時に届いたものを食べるということになっている。飲み物も同様で、インスタントで飲む汁物のためにお湯を用意するといったことをする程度だという。

東町でも、今でも汁物は作るというが、材料を事前に切って煮るだけの状態にしておくのだという。また食事の際には器も発泡スチロール製のものを使用して、なるべく手間暇がかからないように工夫をしているそうだ。食事を外に注文するようになった理由としては、町に高齢者が増えて、食事を用意できる人が昔のようにいないことや、また祭りだからと言って、町の全員が休みになるわけでないことも関係している。

また、囃子方では笛などでお囃子に携わる人の半数ほどが、女性の担当となっている。女性が囃子方に加わるようになったのは、20、30年ほど前からである。女性が曳山に繋がることは違和感があるということだが、逆に囃子方に入るのは、特に違和感が無いという。囃子方に女性が居ることにはすでに馴染みがあり、むしろ女性の手が無ければ囃子が成り立たないという町もある。これは話を伺った東町のみならず、他町も見た感じで似たものだった。

また囃子方であれば、他町同様に、曳山上部にある舞人形（チンチコという）の操作に女性であっても関わるができる。チンチコは、他町だと大人の男性が操作するものだが、紺屋町では小学生男女の担当になる。

ところで、南立町の草さんに聞いた話では、曳山は囃子が無いと動かないのだという。実際は曳き子が動かすので物理的に動かすことはできるのだが、囃子方は自分達が曳山を動かしているという自負を持っている。曳山囃子には大きく本囃子と雑曲の2種類があるのだが、たとえば提灯山の時には、本囃子は静かな曲であるため好まれず、賑やかな雑曲が中心になって演奏される。これは賑やかな曲目でないと曳山を動かすにくいということであり、曳山の進行には囃子が深く関わっていることが、そうしたことから分かる。曳山の進行に欠かせないもうひとつの役割に、誘導責任者という曳山の出発、停止、方向転換などをかけ声と笛で行う人がいる。曳山の経験豊富な人が就くことが通常であり、ベテランほど曳山を傷ませずに回すことができるという。囃子方と誘導責任者、どちらが曳山を動かしているのかと、お互いが自身の役割の重要さを競っているということだった。いずれにせよ、曳山巡行には欠かすことのできない囃子方に女性の参加が認められているのだから、女性は曳山祭りにおいて十分な戦力になっているものとも考えることもできる。

4. まとめと考察

今回の調査では、世帯数の少ない曳山町を中心に、曳き子を含めた助っ人の確保、女性の曳山祭りでの関わり方について聞き取りを行った。

第2節では、手伝いで曳き子になる人々は、主に曳山を持たない町の住民や、元は曳山町の出身であるが現在は町を出ている人、友人や会社の同僚などの繋がりによって構成されていると述べた。ただし、世帯数が多い町であっても、住民の高齢化が進んでいるため、外部から曳き子の手伝いを呼んでいるところが多い。住民が多いといっても全員が現役で曳き子になれるわけではない。世帯数が多い町では、町の中で曳山の管理や、実際に祭りでの人員などをまかなえているものかと思ったが、町の規模に関係なく、手伝いを必要としていることが分かった。

第3節では、女性と曳山祭りが、現在どのような関係にあるのか、女性の参加はどこまで可能であるのかについて述べてきた。例外はあるが、女性が曳き子で参加することは認められていない。曳山保存委員会の長老や、若者でも伝統を守っていかなければという思いがある。女性を曳き子に参加させられない理由として、曳山祭りが神事として扱われるものであること、新湊の曳山ならではの理由として曳き方の荒さや、曳き子同士の密着度の高さも、女性を入れるには難しい点として考えられる。しかし、女性に求められる役割も当然にある。曳山巡行時での食事の手配や、日中に曳かれる花山の造花を作ることの担当にもなっている。そして囃子方として曳山の中に乗って、曳山囃子を演奏することもできる。

「曳き子」としてでなければ、女性は曳山祭りに多くの関わりを持っていることが分かる。それは曳山巡行に携わる曳き子を、裏から支える食事の用意であり、曳山飾りの造花をより綺麗なものに作り替える作業である。そうした手間があつてこそ、美しい曳山を曳くことができる。となると、曳山を実際に動かしている曳き子に無理に女性が参加せずとも、囃子方として曳山の動きのサポートができていれば、もうすでに十分曳山祭りでの女性の活躍の場はあるといえるかもしれない。

では、それでも女性が曳きたいと思うのは何故なのだろう。ここからは想像するほかないが、曳山町で生まれ育ったとすると、幼少の頃から曳山には触れられずとも、見ることはできる。しかし、男性のように曳山には繋がれないとなると、生殺しのような気分になるのではないか。囃子方には入れるし、食事の準備など裏方からでも巡行を支えている。確かにそれらも必要なことで、後ろでの手助けがあつてこそ、祭りの当日にしっかり曳くことができる。けれども女性であるという理由や、伝統で繋がることができないという理由で、曳き子になれないというのは、納得しがたいと感じることもあるのであろう。確かに男性のように曳き子として満身に活躍できるかどうかと言われると難しいものがある。私自身におきかえてみても、たいした力にはなれないかもしれない。それでも折角の祭りに、曳き子という肝心なところで関わるができるのなら嬉しいものだろう。

筆者の地元の祭り、三国祭りでは女性も法被を着て、曳山に繋がることできる。見せ場である曳山の回転を除けば、女性も男性に混じって曳くことができる。神事という点においては放生津の曳山祭りと同様であるのに、一方では女性も曳き子になることができ、また他方ではなれないのかが気になった。

ふたつの曳山祭りの間には、大きく2つの違いがある。1つ目は、曳山の構造上だ。放生津の曳山は長手と呼ばれる持ち手があり、曳き子は主にその部分を掴んで繋がる。また、より多くの曳き子を繋がらせるために、補助長手までも取り付け。他方、三国祭りの曳山は、持ち手がかなり短く、そこに掴まれない人は曳山下部からつないだロープを持って曳山を巡行させる。曳山の周囲には男性の曳き子がつき、進路などを調節するが、ロープ自体も長いことから女性も安全に繋がっている。

2つ目は、巡行ルート密集度の高さだ。どちらの曳山も狭い道を進んでいくことに変わりはないが、観光客の数が放生津の曳山祭りではそれほど多くないと感じた。一方で、三国祭りは北陸三大祭りのひとつで、単純に比べることは難しいが、とにかく観光客が多い。屋台も狭い道のさらに両脇を固めるようにして並ぶため、曳山が通る際は屋台の屋根を上げないと通過もできない。加えて人が多く、それほど速くも曳くことができない。放生津の曳山のように、威勢よく曳きたくとも人混みのなかを巡行するので、ゆっくりと、穏やかにしか曳くことができないのである。

しかし、新湊の人々が女性を曳山祭りに参加させるか否かを考える際、上のような第三者的視点はあまり見られない。このたびの調査で、主に話を伺った紺屋町と南立町、東町で同様の答えが得られた。いずれも、本音のところでもまだ女性を曳き子には入れたくないということだった。現在の曳き子の状況を見ても、女性を入れなければ曳けないというほど深刻なものでもない。まだ女性の手を借りなくてもやっていけるというならば、今後曳き子としての女性参加は望めないだろう。世間でも、祭りの好きな女性は増えてきているが、やれるところまでは女性を入れずに頑張りたいという気持ちが伺える。女性を曳き子の中に入れないことは、現在からすると男女差別だといわれかねない。しかしそれでも、積み上げてきた伝統に変化をさせずに次へと受け継がせることに、誇りがあるなら、女性を外すという選択もまた受け入れるべきなのかと、今回の調査を通じて考えさせられた。

謝辞

最後に本調査を行うにあたり、お世話になった全ての皆様に御礼申し上げます。聞き取りにご協力頂いた、新湊曳山協議会の宮島伊佐夫さん、放生津八幡宮の相伴泰史さん、相伴泰貴さん、紺屋町総代の塚原和雄さん、南立町曳山保存会会長の草克彦さん、総代の飯田剛さん、飯田栄作さん、伊東さん、鳥取さん、東町の松原穂積さんから貴重なお話をたくさん伺わせていただきました。突然の訪問や度重なる訪問にも快く応じていただき、本当に感謝しております。

参考文献

射水市教育委員会『富山県射水市 放生津八幡宮築山行事・曳山行事調査報告書』2013年
「新湊の文化財 改訂版」編さん委員会『新湊の文化財 改訂版』新湊教育委員会、1995年
射水商工会議所 魅力発信プロジェクト『新湊放生津曳山さんぽ』2016年
島添貴美子「放生津（新湊）曳山祭 ー曳山囃子を楽しむ」阿南透・藤本武編『富山の祭り
町・人・季節輝く』桂書房、2018年

参考にしたウェブサイト

福井県観光情報ホームページ ふくいドットコム
〈https://www.fuku-e.com/070_event/?i=226〉(2019/01/29 閲覧)
三国祭ー三國神社
〈<http://www.mikunijinja.jp/maturi00.html>〉(2019/01/29 閲覧)

第4章 六渡寺における獅子舞の伝承

安田 優美香

はじめに

私が六渡寺の獅子舞に興味を持つようになったのは、本調査の前、平成 30（2018）年 5 月 14 日に行われた春季例大祭を見学したことがきっかけである。私は元々、新湊地区に隣接した牧野地区に住んでおり、子どもの頃から新湊で行われる祭の日になると友達同士で獅子舞を見に行っていた。しかし、庄川を挟んで新湊のすぐ隣にある六渡寺の獅子舞はこれまで見たことがなかったため、私は初めて目にした六渡寺の獅子舞が、それまで見てきた新湊の獅子舞とは舞い方や囃子が異なっていることに驚き、その点に魅力を感じた。そこで、この特色ある獅子舞を調査の題材とすることに決め、六渡寺では、どのようにして獅子舞の伝統が受け継がれているのかについて調査を行うことにした。

調査では、六渡寺獅子方保存会や地元住民からの聞き取り、及び獅子舞の練習から祭当日までの様子を見学させていただいた。また、複数の文献や資料より、六渡寺の歴史や獅子舞に関する調査を行った。

以上の調査を踏まえ、第 1 節では獅子舞が盛んである富山県の獅子舞についての概要を記し、第 2 節では古い歴史を持つ六渡寺の地域についての紹介をして、第 3 節では六渡寺の獅子舞の歴史や演目の種類、道具などについて記述する。さらに、第 4 節、第 5 節では獅子舞の練習から祭当日の様子について主に直接観察に基づいて記述し、第 6 節では、六渡寺獅子方保存会の方々の語りを、インタビュー調査を基に記述する。

1. 富山県の獅子舞

この節ではまず、富山県の獅子舞の形態や特徴について『富山県の獅子舞 富山県内獅子緊急調査報告書』（富山県教育委員会、1979 年）、『新湊市調査記録－漁業と祭りを通して－』（富山大学人文学部文化人類学研究室、2004 年）を参考に記述していく。

1－1. 獅子舞の形態

富山県は獅子舞の盛んなところで、昭和 53（1978）年時点で 1154 ヶ所、休止中のものも含めるとおよそ 1300 もの獅子舞があると推定されている。県内の獅子舞を大きく分けると、県西部では胴幕の中に多くの踊り手が入る全国的にも珍しい「百足獅子」、県東部では 2 人で行われる日本の伝統的な獅子舞の形態である「二人立ち獅子」が多く見られるのが特徴である。さらに、これらを演目の名称や獅子をあやす相手役など、それぞれの特徴によって形態の異なるものに分類すると、氷見獅子、砺波獅子、射水獅子、金蔵獅子、下新川獅子の 5

つに分けられる（図4－1）。この他に、中世からの流れを汲む「行道獅子」という古い形態の獅子があり、県内では高岡市伏木氣多神社の祭礼、魚津小川寺地区の祭礼、下村加茂神社の祭礼、立山地区などで見られる¹⁾。

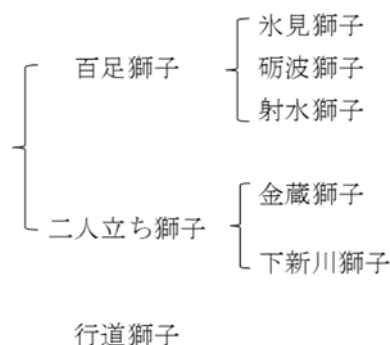


図4－1 富山県の獅子舞の分類

（『富山県の獅子舞 富山県内獅子緊急調査報告書』富山県教育委員会（1979年）より作成）

今回調査した六渡寺の獅子舞はこのうち、主に氷見獅子と射水獅子の影響を受けているものとなっている。これらの獅子舞の特徴について次項で簡単に紹介する。

1－2. 氷見獅子

氷見獅子は、氷見市とその周辺の地域に伝承される、胴幕の中に5, 6人の獅子方が入り、幕を素手で持って支える百足獅子である。能登地方や高岡、小矢部市の小矢部川沿い、さらに五箇山や南砺の城端、福光町近辺にも伝播している。獅子の相手役の天狗は、エボシやカブトと呼ばれる鳥かぶとを被り、1メートルあまりの鉾の形をした獅子舞棒や天狗の棒と呼ばれる竹の棒を用いて激しく舞うのが特徴である。演目によっては、御幣のような紙の房や刀、薙刀、六尺棒²⁾などを使用するところもある。曲のテンポは早く活発であり、囃子には笛と太鼓の他に「チャンチクリン」と呼ばれる鉦を使用する。「太鼓台」と呼ばれる太鼓を乗せて曳きまわる山車が立派であることも特徴のひとつで、太鼓台の中心にご神木の松を飾り、その前には鳥居と行灯が立てられて、その間に太鼓を置く（写真4－1）。



写真4－1 太鼓台
（ひみ獅子舞ミュージアムより）

1-3. 射水獅子

射水獅子は、射水平野から神通川左岸の周辺に伝承されている、胴幕の中に5, 6人が入り、幕を素手で持って支える百足獅子である。獅子の相手役は「シャグマ（毛冠）」と呼ばれる長い毛を垂らした被り物をつけた天狗のほかに、花笠を被った「キリコ」と呼ばれる子どもたちが2人1組から5, 6人くらいまで集まって獅子あやしを行うのが特徴である。採り物には、キリコやバイと呼ばれる太鼓のバチ状のものや御幣、扇子、薙刀、刀、玉のついた鎌などを使用する。囃子方には笛と太鼓があり、六渡寺など一部の地域では鉦が用いられる。射水獅子は他の獅子舞と比べてストーリー性があると言われており、演目一つ一つに筋の通ったストーリーが存在している。港町、漁師町である旧新湊地区など海に面した地域では、漁師が海の神である恵比寿を信仰している影響から、大漁を祈願して漁師の氏子のみで行う天狗が釣りの所作をする「オベッサン」という演目があるのも特徴的である（写真4-2）。



写真4-2 オベッサンを舞う様子（法土寺町獅子舞保存会）

2. 調査地概要

六渡寺は現在の射水市庄西町1丁目にあたる地域で、庄川と小矢部川の河口に挟まれたところに位置している（図4-2）。平成30（2018）年11月の時点で人口は612人で、世帯数は260である³⁾。六渡寺の名は、旧新湊市での住居表示法⁴⁾によって庄西町へと町名が変更されたが、現在も万葉線の駅名に使われるなどして、昔の名残をとどめている。



図4-2 六渡寺の位置（「国土地理院」より作成）

この節では六渡寺の地名の由来、歴史などを『亙理』^{わたり}（新湊市立庄西公民館郷土史編集委員会、2000年）、『新湊市史』（新湊市史編纂委員会、1964年）、『新湊市史：近現代』（新湊市史編さん委員会、1992年）を参考に記述していく。

六渡寺の町の名のいわれ

六渡寺は中世の史料にも登場する歴史のある地域である。古文書には、元正天皇の御代養老元（717）年に、僧行基が越中の二上村、射水郡六動寺に滞在し六動寺の神社の境内に養老寺を建立したとの記述があり、このことから1,300年以上前から存在している地名であると思われる。源氏と平氏の戦いについて述べられた『源平盛衰記』⁵⁾では、義仲軍が六渡寺に入る様子を、「木曾は六動寺の国府につく。兵具くらべ勢ぞろへして着到あり。その勢は五万余騎とぞ注しける」と記されており、この当時は六動寺とよばれていたことが注目される。

この地名の由来については江戸末期、加賀藩士の森田柿園によって書かれた『越中志徴』巻四にて「六渡寺村。此村に、いにしへ六動寺という大寺あり。故に邑名とす。古名は鹿子^{かこ}と云」とあり、この村名は人間が善悪の業によって六つの世界で生死を繰り返す、さまようという仏教の教え、六道輪廻の思想から名付けられたのではないかと考えられている。その他にも、六動寺は六道寺、勸道寺、六同寺などと当てて書かれたものもあるが、いずれも現在の六渡寺を指していると思われる。

また六渡寺の別名として、『越中志徴』巻四に出てくる「鹿子」という名は昔から六渡寺の色々なものの呼び名によくつけられ、六渡寺の浜は「鹿子の浜」、渡船場は「鹿子の渡し」と呼ばれるなどしていた。さらに、古文書には六渡寺と思われる地名に「亙理^{わたり}（亙理）」の記述がなされているものもある。

明治前期までの六渡寺

六渡寺は庄川の河口港として古くからの渡船場で、江戸時代には北前船の寄港地として栄えていた。

村御印（江戸時代に加賀藩で行われた年貢の取り決め書）には、六渡寺の^{こものなり}小物成として、^{もんめ}13 匁の野役、175 匁の網役、10 匁の川役、640 匁 5 分の外海船^{がいの}權役、12 匁 5 分の獵船權役が記されており、六渡寺が農村としてよりも、海と川に臨み、外海船運漕業と漁業に生計を託す村であったことが示されている。明治 2（1869）年の記録によると、六渡寺村が納入すべき役銀として、川役・耕作通船役・磯領通船役・地^{みとうが}払御^み冥加銀が記されており、漁業と運漕業が同村の重要な生業であったことが分かる。明治 28（1895）年に作られた「新湊町絵図」（新湊市所蔵）の射水川河口付近の六渡寺側の河岸には、石積の 5 本もの突堤が描かれている。ここへは六渡寺の船主所有の船以外の多くの外海船も出入りしていたと推測される。明治 11（1878）年頃に書かれた『諸営業留根帳』によると、船荷関係や北洋物関係の営業に従事する業主や洗湯屋、宿屋、料理屋など 51 種、156 軒の店が軒を連ねたとあり、六渡寺は殷賑な町並みを形成していた。

庄川の水害と河川の改修

かつて庄川と小矢部川とは下流において合流し、富山湾に注いでおり、新湊地区と六渡寺も陸続きであった。この合流点から富山湾までの間は「射水川」とも呼ばれ、射水平野西部の人々の生活には無くてはならないものであった。一方で、暴れ川として雪どけ、梅雨、台風襲来などでしばしば氾濫が起こり、田畑や道路、人家に大きな被害を与え、住民は長い間苦しんだ。また、庄川上流からの洪水のたびに莫大な量の土砂が流下して伏木港を浅くし、船舶の出入りを困難にしていた。こうしたことから、明治 30（1897）年に庄川沿岸住民の代表らは、政府に根本的な庄川の大改修を願い出るために「庄川河身改修期成同盟会」を結成し、同年結成された「伏木築港期成同盟会」と一体となって政府に対して陳情、請願を繰り返して行った。その結果、明治 33（1900）年から大正元（1912）年にかけて庄川改修工事とその付帯工事である伏木港の築港工事が行われ、庄川流域では氾濫発生件数が激減し、伏木港は庄川からの流砂の害を免れるようになった。しかし、六渡寺と三ヶ新⁶⁾では新庄川の河川敷として広大な耕地を失い、110 戸の民家が移転を余儀なくされた。また、この新庄川の開通により六渡寺、三ヶ新、中伏木が新湊町の中心部と完全に分離される形となった。

六渡寺日枝神社について

六渡寺日枝神社は、近江国坂本の日吉神社の末社であるとされる。初めて建立された年月は不明であるが、元正天皇の御代養老元（717）年に全国行脚で知られる僧行基が二上山と六渡寺村に滞在し、社の境内に養老寺を建立したと古文書にあることから、それ以前の創建による古社であると言える。現在の社殿は文久元（1861）年の建立である（写真 4-3）。また、明治維新前までは山王宮と呼ばれており、その後、日枝神社と改称された。

日枝神社の祭神は薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来の三体仏である。釈迦如来像はスギの一本造りで平安時代末期の作、薬師・阿弥陀如来像はヒノキの寄木造りで室町中期の作で、これらは昭和 45（1970）年 9 月、市指定の有形文化財となった。

正面の特徴的な形をしている鳥居⁷⁾は瀬戸内産の御影石造りで、天保 10（1839）年、当時の海商湊屋清右衛門・北野与八の寄進によるものである。また、神社の周囲にめぐらされた玉垣には全国の海商・弁財天（北前船）の名が刻まれており、当時の六渡寺湊の繁栄ぶりと船乗りたちの信仰心の篤さを物語っている。



写真 4－3 日枝神社

3. 六渡寺の獅子舞

この節では、六渡寺の獅子舞について、六渡寺獅子方保存会の人々や地元の住民からの聞き取り、『亙理』^{わたり}（新湊市立庄西公民館郷土史編集委員会、2000 年）、保存会からいただいた資料等を参考に記述していく。

3－1. 概要

六渡寺の獅子舞は六渡寺日吉神社の獅子神楽で、5 月 14 日と 10 月 6 日の年 2 回、春と秋の祭礼にて五穀豊穡への祈願と感謝、さらに住民の心の中の悪を祓い人々の幸せを願って行われるものである。祭の日付は毎年この日と決まっており、土日に日程を合わせるなどはない。獅子舞は、六渡寺で生まれ育った男性やその関係者が参加する六渡寺獅子方保存会によって行われる。かつては、祭礼当日に神社境内と氏子各家々で舞われていたが、

現在は自治会各班と、夜に新築や婚礼などの御目出度^{おめでた}で花⁸⁾を打つ家などで披露されている。古くから湊町として栄え、他の地域との交流が盛んであったこの地では、氷見獅子と射水獅子が融合した特徴的な獅子舞の形態となっている。松明を用いた「夜更^{よるふ}振り舞」も六渡寺が発祥であり、次第に各地域に広まったと言われている。

3-2. 獅子舞の歴史

六渡寺の獅子舞がいつ頃から舞われていたのかについては詳細な記録が残っていない。しかし、幕末の安政3(1856)年6月、加賀藩主前田斉泰の中納言昇任祝いに六渡寺の住民にスルメと昆布が配られ、そのお礼に獅子舞を披露したという記録が古文書に残っていることから、それ以前から獅子舞が存在していたと考えられる。一説には、港町六渡寺に数軒の酒屋があり、この酒屋に奉公していた高岡守山の職人が伝えた、氷見十二町から六渡寺に婿入りした人が十二町の獅子舞を教えた、北前船の船員が能登獅子を移入したなどとも言い伝えられている。

明治初期には六渡寺の西と東の地域にそれぞれ獅子舞が存在し、西には氷見型の獅子舞、東には射水型の獅子舞が伝承されていた。しかし、明治35(1902)年からの庄川改修工事や昭和3(1928)年の伏木港の拡張工事による住居の移転に伴い、昭和の初め頃に東西の獅子舞は統合され、現在の形になったと言われている。他に、東西どちらかの獅子頭が割れてしまい、祭ができなくなったため、統一されたという説もある。明治初期に西の地域で使われていたとされる毛皮張りの、通称「クマジシ」は現在も残っており、他の獅子頭や道具とともに庄西コミュニティセンターにて大切に保管されている。

戦時中は、若者が次々と陸軍や海軍に入隊していき、六渡寺で獅子舞に参加する青年団の人数も年々不足していった。そして、昭和12(1937)年にはついに獅子舞も中止のやむなきに至った。その後、昭和16(1941)年の終戦までの間の祭礼は灯火管制下の淋しいものであった。しかし、昭和22(1947)年の春季例祭では久しぶりに獅子舞がくりだし、戦争で久しく獅子舞を見ることがなかった町の人々を大いに湧かせたという。

3-3. 六渡寺獅子方保存会について

六渡寺の獅子舞を担っているのは、六渡寺獅子方保存会という組織である。参加者は昔も今も男性のみで、女性は参加しない。六渡寺に昔から住む人や元々六渡寺に住んでいて他の地域に移り住んだ人、保存会の知り合いから誘われて参加し始めた地元以外の人など、六渡寺にゆかりのある人々が、下は6歳から上は80歳近くまで幅広い年代の方々約70名が在籍している。学生は勉強や部活があったり、大人も仕事があったりと色々な事情があるため、保存会の全員がすべての練習や毎年祭本番に参加しているわけではないが、毎回多くの方が獅子舞をするために集まる。基本的に小学6年生までがキリコ役として獅子舞に参加し、中学生からはその人に適した役割を体格やセンスなどから決め、天狗、胴幕、囃子方などのいずれかに参加するようになる。しかし、特に決まりはないが、親が天狗役であれば、

その子どもも天狗になるといったように、それぞれの役を親子ですることが多いそうだ。なかには小学生から囃子方として参加し、大人の囃子方に混ざって太鼓を立派に叩いている子もいる。獅子舞の運営や指導などの牽引役は 30 代から 50 代の方々が中心となっており、それ以上の年代の方々は、役職を降りた後も獅子方や囃子方として参加している。

当初は保存会ではなく青年団として活動しており、15 歳から 25 歳ぐらいまでの人々で運営されていた。70 代男性からの話では、昔は今とは違い、氏子の家を一軒一軒回っており、花が 10 軒ほど打たれた年もあったという。そのため、1 日では回りきれず、2 日かけて行った経験もあると聞いた。昭和 50 年代頃には、10 名程度で祭を行っており、その過酷さから一時は存続するか否かのところまで追い込まれた時期もあったそうだ。しかし、伝統ある獅子舞を存続していくために、はっきりした年代は不明であるが、その後、六渡寺獅子方保存会へと形を変えることで参加者の年代の幅が広げられた。他にも、囃子のテンポも早くするなどして若者も参加しやすいように工夫を重ねることで、参加人数も次第に増え、現在に至っている。昭和 54 (1979) 年からは子どもたちにも獅子舞の素晴らしさを知ってもらい、次世代に継承していくために地域で「庄西こども獅子舞」が行われるようになり、保存会のメンバーが子どもたちに獅子舞の指導をするようにもなった (3-5 に後述)。

六渡寺の獅子舞は昔から名の知れた獅子舞のひとつであり、現在 60 代から 70 代の方々が 20 代、30 代の頃は、北海道や名古屋など全国各地から招待が来て、皆で道具を持って汽車に乗り、舞を披露しに行ったこともあったという。また、NHK の「ふるさとの歌まつり」⁹⁾ にも出演したことがあるそうだ。県内各地でも競演会に多数参加し、賞を取るなどして、昔から多彩な活動を続けている。

3-4. 獅子舞の特徴

六渡寺の獅子舞は氷見獅子と射水獅子が融合したものであると前述した。しかし、この地域以外の獅子舞の影響を受けたと思われる部分も複数見られ、六渡寺の獅子舞は各地域のいいところ取りをした獅子舞であると言える。ここでは、こうした特色ある六渡寺の獅子舞について記述していく。

演目の種類と舞の所作

六渡寺の獅子舞は百足獅子に属し、演舞中に獅子頭が地面から数センチほどしか離れていないような低い姿勢で、地を這う動きが見られる。

六渡寺獅子方保存会によって作成された資料によると、現在、六渡寺で舞われている演目は約 20 種類あり、近年舞われていない演目も含めると、それ以上のものが伝承されている (表 4-1)。このうち、「一足舞」^{ひとあし}、「二足舞」^{ふたあし}、「バイガエシ」^{やっばし}、「八節舞」などは氷見獅子、「鈴ガラ舞」、「ドンドコ舞」、「餅つき舞」などは射水獅子の型に分類される演目となっており¹⁰⁾、両方の系統が舞われていると分かる。他にも、天狗が傘を持って獅子をあやす「唐傘舞」など砺波獅子の影響を受けたと思われる演目もある。また、氷見獅子などで祭の最後に

演じられるもののひとつに「シシコロシ（獅子殺し）」と呼ばれるものがある。これは、獅子を倒すのが目的ではなく、獅子に宿った災厄を祓い除くための舞で、天狗が刀で獅子の胴を切りつけたり、頭に刀を突き刺したりする所作がリアルに演じられるものである。射水獅子においても同じ名称の演目があり、新湊では獅子に捕らわれたキリコを天狗が助けるために、獅子に酒樽を与えて飲ませ、寝入っているところに刀を刺すといった所作がされる。しかし、六渡寺ではこの演目はなく、全体を通して獅子を痛めつけたり、倒したりしないようになっているのが特徴である。

表4-1 六渡寺において伝承されている演目（空欄は不明）

（六渡寺獅子方保存会資料及び『富山県の獅子舞 富山県内獅子緊急調査報告書』富山県教育委員会（1979年）より作成）

演目の名称	獅子あやし	舞の所作
現在舞われている演目		
道中囃子	なし	移動中に囃す（舞の意味合いとは若干異なる）
蓬莱（ホーラホラ）舞	天狗	剣を顔前で回しながら獅子を一周
棒の蓬莱舞		
トウロロ舞		
鈴がら舞	キリコ	鈴がらを持ち、片足で廻る
肩車舞	キリコ	獅子の上にキリコが乗って舞う
餅つき舞（回る、回らない、トグロ巻きの3種類がある）	天狗、キリコ	臼と杵で餅つきの仕草をし、餅を観衆に振舞う
八ツ節舞	キリコ	キリコを叩き、左右交互に遊ぶ
バイガエシ	天狗	薙刀を用いて舞う
一足舞	天狗	地を一回蹴って足を上げる
二足舞	天狗	地を二回蹴って足を上げる
キョウロロ舞	天狗	薙刀を用いて舞う
ドンドコ舞	天狗	棒を振り回して獅子と戦う
マッタマタ舞	天狗	薙刀を用いて舞う
唐傘舞	天狗	傘を用いて獅子と戯れる
宮参り	天狗	神楽で拍手、薙刀を用いて舞う
剣取り舞	天狗	獅子に取られた剣を取り返す立ち回り
呼出し舞	天狗	手招きで獅子を呼び出して剣で戯れる
大クズシ舞	天狗	薙刀を用いて舞う

夜叟振り舞	天狗（大）	松明を持って獅子の相手をする立ち回り
現在舞われていない演目		
味噌摺り舞	天狗	剣をすりこぎのようにして回す仕草
三クズシ舞	天狗	一足舞など3つの舞を組み合わせたもの
一三バイガエシ舞	天狗	
他、曲名すら不明が数種類		

すべての演目のなかで、六渡寺で最高の舞とされているのが「夜叟^{よそぶ}振り舞」である。これは、天狗が暗い竹林で松明を灯し、獅子を探し出すというストーリー性のある演目で、天狗は獅子を見つけると、獅子が恐れる火で威嚇しながら対峙する（写真4－4）。この天狗と獅子の駆け引きが見所であり、天狗は松明の他に御幣や薙刀などの採り物を用いて15分以上舞い続ける。この演目において、松明を使用する点も六渡寺の獅子舞の特徴であり、富山県内の獅子舞に松明を初めて取り入れたのは六渡寺だと言われている。現在、六渡寺獅子方保存会会長をされている窪誠司さんの話によると窪さんの祖父にあたる窪賢一さんがこの松明を初めて用いたそうだ。窪賢一さんはまるで天狗が乗り移ったかのように舞が上手な方であったそうで、保存会や地元の住民の間で今も語り継がれる有名な天狗役である。今では当時のことを知る人は少なく、松明が使用されるようになった経緯などについてはっきりとしたことは分らない。しかし、この夜叟振り舞で松明を使うという伝統は今も受け継がれており、保存会の方々もただ松明を振り回している訳ではなく、松明の火は神と通じる神聖なものであるという意識を持って行っている。また、今では祭の祝花では必ず舞われるものであるが、40年ほど前はとっておきの舞であったため、保存会が認めた限られた家でしか舞われず、年2回の祭で一度も披露されないこともあったという。夜叟振り舞は、舞い手にとっても自慢の舞のひとつであり、誇りをかけて舞われるものなのである。



写真4－4 夜叟振り舞の様子

しかし、こうして先人たちから受け継がれている演目がある一方で、近年舞われなくなった演目も複数ある。これは、演目の内容が単調で面白くなかったり、舞の所作が他の舞と似ていたりするといった理由からであり、次第に祭のなかで舞われなくなり、自然消滅していったようだ。例えば、「味噌^{みそ}摺^{すり}り舞」は20年ほど前までは舞われていたもので、現在40代、50代以上の人々はこれを知っており、舞おうと思えばできるが、それより下の若い世代の人々は、名前は聞いたことがあるが実際どんな舞であるのか見たことがないといった状況である。

このように失われていく演目に対して、その舞を知る世代の人々は、舞を後世に伝えていったとしても、これまでのように実際に祭で披露されることはないと思うので舞を継承していかなくても構わないといった感じである。

囃子方

六渡寺の獅子舞の囃子方には、太鼓と笛の他に、新湊地区など射水獅子の系統の獅子舞では見られない鉦があるのが特徴である。他の地域に比べるとテンポが速いのも特徴のひとつで、舞い手がリズムに乗りやすいように時代とともに囃子が変化を遂げたという。かつては他の地域と同じような、テンポがゆったりとしたものであったが、昭和50年代頃に獅子舞に参加していた人たちの代から徐々にテンポを速めていき、今に至る。

囃子の仕方について、太鼓は特に速いテンポのところでは1人で叩き、それ以外の時は2、3人で賑やかな叩き方をする。この際、普通の太鼓の叩き方ではなく、太鼓の音が「ドーン」と響かないように、「ドン」と音を切った叩き方をする。鉦の叩き方も太鼓と同様に、鉦の縁をバチで擦り鳴らし、音をあまり響かせないようにしている。笛は篠笛を使って奏でており、時代の流れとともに、多少の変化はしているが、昔から伝承されているものに近いものとなっている。

囃子に楽譜は存在せず、耳から耳へと音によって伝承されている。囃子方をされている50代の男性からの話では、楽譜を作ることも考えてはいるが、例えば笛の場合、指の動きが複雑なため楽譜にすることが難しいのだという。そのため、練習では囃子の上手い人の右後に立ち、奏者の指の動きを見て、耳で音を確認しながら覚えていく。太鼓も自分の気に入った叩き方をする人の姿を見て、リズムを感じながら、それを真似して習得していく。このような覚え方は一見大変そうに見えるが、昔から地元で生まれ育ってきた人は自然と音が身体に染みついているため、飲み込みも早いそうだ。

太鼓は、祭当日になると紅白幕と保存会の名前、日吉神社の神紋が入った幕が張られた屋台蔵に乗せる。さらに、夜になると新湊の曳山のように提灯が取り付けられ、華やかなものとなる（写真4-5, 4-6）。



写真 4-5 (左) 囃子方の屋台蔵



写真 4-6 (右) 提灯が付けられた屋台蔵

20 年ほど前からは囃子のなかでも太鼓を中心とした活動も始まった。保存会のメンバー内で結成された「ひょっとこ愛好会」による「ひょっとこ太鼓」がそれである。これは現在、毎年町内で開催されている「六渡寺七夕まつり納涼祭」にて披露されており、しばらくの間行われていない時期もあったが、去年から復活した。私は、平成 30 (2018) 年 8 月 4 日に開催された七夕まつりを見学した。ひょっとこのお面をした男性 4 人と笛と鉦各 1 人が「道中囃子」や「蓬萊舞」などの獅子舞の演目の囃子をするといったもので、太鼓の叩き方も 4 人の太鼓役が太鼓の周りをグルグルと回りながら叩くという面白い叩き方をする。地元の人々には人気があるようで、会場の席からは囃子に合わせて「イヤサー」などと掛け声が上がり、盛り上がっていた (写真 4-7)。



写真 4-7 ひょっとこ太鼓の様子

3-5. 獅子舞道具

六渡寺の獅子舞で使われている道具には、他の町とは違ったこだわりのある道具がたくさんある。ここではそのなかの道具について、いくつか記述していく。

獅子頭

六渡寺には獅子頭が5つあり（写真4-8）、一番古いものは明治頃に使用されていた毛皮張りのクマジシである。これは現在使用されておらず、庄西コミュニティセンターにて大切に保管されている。一番新しいものは、平成15（2003）年に井波の彫刻家、南部白雲によって作られた桐製の黒漆塗りの獅子頭で、他の町では見られないような遊び心が入ったものである。例えば、獅子の目のまわり（眉）には「福」や「幸」といった縁起のよい漢字一文字がたくさん刻まれている。また、獅子の耳には白い蝶々が彫られている。その耳の下には、忌み言葉が刻まれており、使い続けるうちにその文字が消えていくように工夫がされている。六渡寺では、天狗と獅子は人間の心の中の善と悪を表していると言われている。この獅子頭においても、この善と悪という対になる意味が表現されているのである。

また、獅子頭には芯棒がなく、獅子頭の中に舞い手の頭が入る構造となっている。そのため、その分補強がされており、重さが4、5キロと重量のある獅子頭となっている。クマジシを除く獅子頭は、練習と祭本番でそれぞれ使い分けており、使用する際は、歯の噛み合わせで音を鳴らす時の衝撃で割れないように顎にさらしを巻く。



写真4-8 獅子頭他、六渡寺で使用されている道具

三番叟とズッカブリ

氷見獅子では、ほとんどの町が三番叟を被った（写真4-9、4-10）天狗であるのに対して、射水獅子では三番叟よりもズッカブリを被る天狗が多く見られる。六渡寺には両方の被り物があり、演目によって登場する天狗が変わる。特に、三番叟は漆塗りのもので、今の

技術では同じものが作ることができないという貴重なものである。三番叟は、夜叟振り舞で大天狗が被る。



写真 4－9 三番叟



写真 4－10 ズッカブリ

薙刀

薙刀の刃の部分、他の町では木製であったりするが、ここでは鉄で作られたものを使用する。柄部は井波で作られたもので、持ち手の部分には2匹のクワガタが彫られている。話によると、これは鍬形の兜にかけており、力強さを表現しているそうだ。また、鏝の中にはパチンコ玉が入っており、揺らすと音が鳴るようになっている。舞の最中にカタカタと音を鳴らすことによって、演技にもメリハリがつくのだという。

胴幕

現在使用している胴幕は、獅子頭を新調した時と同じ頃に新しくしたものである。それまでの胴幕には高波が描かれており、現在のものには、紺地に大黒様と日吉神社の神紋である山桜をあしらった模様が描かれている（写真 4－11）。この大黒様は、ヒンドゥー教の破壊と再生の神であるシヴァが日本に伝わった際の姿と言われている。保存会会長の窪誠司さんによると、六渡寺では、昔から高潮や庄川の氾濫による洪水などの災害が度々起きており、その度に町の人々は力を合わせ、苦難を乗り越えてきた。こうした六渡寺の姿を、破壊と再生の神であるシヴァを表す大黒様を描き、表現したのだという。



写真4-11 大黒様と山桜が描かれた胴幕

3-6. 庄西こども獅子について

六渡寺では、昭和54(1979)年から郷土芸能である獅子舞を次世代に伝承するため、「青少年地域活動」の一環として「庄西こども獅子舞」を行っている。これは、庄西町の地域全体で行っているもので、六渡寺だけでなく隣町の中伏木などを含めた小学生の男女が参加し、男子が天狗、キリコ、胴幕役を行い、女子が囃子方として笛、太鼓、鉦をする構成となっている。演目は「八ツ節きりこ舞」、「ほうらい舞」、「すずがら舞」、「ばいがえし舞」、「もちつき舞」の5つ¹¹⁾があり、全て子どもだけで演じられる。当初は、毎年11月の文化の日あたりに地元で開催される公民館まつりと小学校の学習発表会での披露のみであった。しかし、その後、市の成人式や新湊まつりなど市内各地の様々なイベントに出演し、舞を披露するようになった。庄西コミュニティセンターには、こども獅子が誕生した昭和54年から現在に至るまでの指導にあたった保存会のメンバーと、それに参加した子どもたちとその役割についての詳細が記されたアルバムが大切に保管されており、当時の様子がよく分かるようになっている(写真4-12, 4-13)。現在は外部で披露することも減ったが、獅子舞の伝承は続けられている。

指導は六渡寺獅子方保存会の方々が役ごとに行っており、獅子舞の道具や衣装は保存会や婦人会、老人クラブ等の人々の全面的な奉仕協力で整えられ、維持管理には公民館(現在は庄西コミュニティセンター)があたっている。中伏木小学校¹²⁾では平成5(1993)年頃から総合的な学習の時間に4年生から6年生が郷土芸能の一環として獅子舞を学び、発表に向けて練習をしていた。しかし、平成22(2010)年の統廃合以来、子どもたちは新湊小学校に通い、学校で練習もできなくなってしまったため、学外での練習となっている。また、獅子舞を子どもたちにより根付かせるために、地元の保育園に保存会の方が教えに行くようになった。このようにして、六渡寺では幼い頃から獅子舞に触れる機会が設けられている。



写真 4-12, 4-13 庄西こども獅子のアルバム

4. 獅子舞の練習

4-1. 練習期間

六渡寺では、祭当日の2週間ほど前から練習が始まる。練習場所は、庄西コミュニティセンターにある屋外の広場で、雨天時は公民館の中で行われる。日中は仕事などで忙しく、地元から離れて暮らしている人もいるため、基本的に夜の練習となっており、19時30分から21時頃まで行う。日によって参加人数も異なるが、毎日大体15人から20人が集まっている。小学生から中学生までの子どもと30代から40代の大人がほとんどで、それ以上のベテランの方が練習に参加する時もある。

私が今回調査した秋季例大祭では、9月24日から10月3日まで（10月1日を除く）毎日練習があり、4日に祭の準備、5日に前夜祭が行われた。私はそのうち、練習初日の9月24日と26日、10月2日の練習を見学した。その時の様子を次項に記述する。

4-2. 練習の様子

開始時刻10分前から徐々に人が集まってきて、ある程度の人数が揃うと練習が始まる。屋外で行う場合は、公民館から太鼓や道具、照明器具、椅子などを運び出し準備をしておく。練習開始前は、大人同士で集まって談笑したり、子どもたちも広場でかけっこしたりと和気あいあいとした様子である。しかし、一度練習が始まると場の空気が一変し、皆が真剣に練習に励み、緊張感の漂う雰囲気となる。

六渡寺では、最初に30分程度キリコの練習をした後、大人たちの練習するのが昔からの流れである。練習には指導者的な立場の方が数名おり、その指導者が決めた演目数種類を時間内に行う。練習初日は雨の天候で公民館での練習となったが、20人から30人ほどの参加者がいた。しかし、この日は初日とあって、体慣らしのためにキリコ、カシラ（獅子頭）、天狗がそれぞれの動きの確認を軽くする程度で、一時間弱で練習は終了した。

キリコの練習では、小学6年生までの子ども7人ぐらいが大人に指導してもらいながら

行われる。キリコで使用する道具をそれぞれ手に持ち、4, 5人が前後2列に並び、獅子頭を持った大人1人と向かい合う形で舞の練習をする(写真4-14)。囃子が止まると、数人と交代し、人数が多い場合は2つのグループに分かれて交互に練習を行う。カシラ役の大人も同じで、順番に役を回していく。初日は、振りを曖昧にしか覚えていない子には囃子を止めて個別に指導したり、振りを覚えている子と一緒に踊らせて動きを確認させたりする様子が見られたが、日を迫うごとに上達していき、動きに関して細かく指導することは徐々になくなっていった。基本的に子どもたちは幼い頃から獅子舞を見てきており、地元の保育園などで舞を教わることもあるため、練習中に一から舞を覚えさせることはあまりない。親子で獅子舞に参加している大人の話によると、子どもは獅子舞が大好きで自宅でも舞の練習をすることがあるという。また、六渡寺には囃子数十種類を収録した「六渡寺獅子舞囃子」のCDがあり、それを車内で聴かせているうちに子どもが自然と音を覚えてしまったという子もいる。練習中、子どもは自分の出番のない時は他のキリコの動きを見たり、端のほうで動きの確認をしたりと、真剣な表情で練習に取り組んでおり、祭への参加に積極的な印象を受けた。練習開始から30分ほど経つと、指導者から号令がかかり、子どもたちが一列に並び、「整列。番号1, 2, 3……礼。ありがとうございました」と端から順番に番号を言って礼をする(写真4-15)。この終わりの挨拶は昔からの伝統であり、挨拶がしっかりできていないとやり直しになる場合もある。

この挨拶について、練習に参加していた大人数名にお聞きした。現在30代から40代の方々の話によると、彼らが子どもの頃はまだ小学生は祭の練習に参加することができなかったそうだ。しかし、時代とともに小学生も加わるようになり、大人に対して「練習させてくれてありがとう」といった感謝の気持ちからこの挨拶ができたのではないかと語っていた。また、現在もこの習慣は続いているが、大人になり指導する側になった今は、子どもたちに礼儀を教えるという意味も込めて、これを行っているそうだ。こうしてキリコの練習が終わると、子どもたちは保護者と一緒に自宅に帰って行く。



写真4-14 (左) キリコの練習の様子



写真4-15 (右) キリコの練習終了時の挨拶の様子

子どもたちが帰った後で大人のみで天狗とカシラ、囃子の練習が行われる。大人の参加者は、ほとんどが長年獅子舞を舞い続けている人ばかりである。そのため、新しい振りを覚えるということはあまりなく、皆で振りのおさらいをする感じで、ある演目の一部分の動きを、役を交代しながら繰り返し行うこともあれば、一つの演目を通して一度だけ行う場合もある。囃子方には6, 7人が練習に参加しており、その練習内容に合わせて太鼓と笛を打ち囃す。特定の振りの動きを確認する場合は、1人目が終わると囃子も止まり、次の役と交代して準備ができると囃子を再開する。また、六渡寺の獅子舞で使用される鉦は練習では使用せず、本番当日に叩ける人が叩く形となっている。

キリコの練習と同様、天狗役とカシラ役が道具を持ち、向かい合って舞の一つ一つの動きを確認し、囃子が止まるとそれぞれの役の別の人が1人ずつ前に出て、交代しながら行われる。役が回ってこない時は、他人の練習を見守ったり、「イヤサー」などの掛け声をかけたりして練習に関する話以外の会話はあまり見られない。カシラ役では「八の字を描いて、引いて出す」のが基本の形となっており、練習では初めにこれを行うという。動きの激しい舞や長めの演目の練習の後では、休憩を挟みながら行うこともあり、周りから「休憩お願いします」と声が上がると休みをとる場合もあった。また、今回は胴幕役でカシラの振りを新しく覚えている男性の方がおり、周りから動きを教えてもらいながら練習をしている様子も見られた。他の人よりは練習時間も少し長めで、個別に練習したり、全体の練習に混ざって別のカシラ役の後に続いて練習したりしていた。動きの一つ一つを丁寧に教えてもらうというよりは他人の動きを見て覚え、舞を一通り終えた後で周りから動きに関しての細かい指導やアドバイスを受けるという感じであった。練習期間も終わりに近づいた10月2日には、今まで獅子頭のみであったものに胴幕が付けられ、実際に松明を用いた夜叟振り舞の練習もあり、本番さながらの練習が行われた（写真4-16）。



写真4-16 大人の練習（夜叟振り舞）の様子

5. 当日の様子

平成30(2018)年度の秋季例大祭は10月6日(土)に行われた。ここでは、その1日の様子を直接観察や聞き取りを基に記述する。

5-1. 当日の衣装について

祭当日は、獅子方やキリコはそれぞれの衣装に着替える。獅子方の祭り前掛けには、日吉神社の神紋である山桜が刺繍されており(写真4-17)、これは天狗の胸当にも付けられている。また、一部演目では道化役のヒョットコが登場し、法衣をまとい、首から大きな数珠を提げた装いをしている(写真4-18)。

囃子方と保存会の家族などの関係者は、六渡寺獅子方保存会が製作した特製のTシャツを着ている。このTシャツは保存会で一体感を出すために作られたもので、当初は保存会のメンバーのみが着用していたが、後からその他の関係者も着られるように、いくつかの種類が作られたという。何度かデザインも変わっているようであるが、現在、主に囃子方が着ているものには、保存会のメンバーである岩坪日佐夫さんが書いた「弥栄」の文字が背中にプリントされている(写真4-19)。他に、キリコの保護者や祭に参加していない小さな子どもなどは唐獅子と山桜が描かれたものを着ている。このように女性や小さな子どもが直接獅子舞に関わることはないが、祭当日は保存会の人々と同じものを着て、共に行動するのである。



写真4-17(左) 獅子方の衣装

写真4-18(中央) 六渡寺のヒョットコ

写真4-19(右) 「弥栄」と書かれたTシャツ

5-2. 当日の流れ

六渡寺では、朝から夜まで1日かけて獅子舞が行われる（表4-2、図4-3）。朝は公民館を出発した後、日吉神社へ向かい、そこで宮司によるお祓いを受ける。その後、午後まで途中休憩を挟みながら各家を回り、獅子舞を披露する。この際、町内巡りの順序は春と秋で回る順序を変えているという。夜になると、結婚や新築などお祝いがあった家を回り、花を打つ。最後には庄西コミュニティセンターにて演舞をし、公民館に戻って獅子舞は終了する。

表4-2 2018年10月6日に行われた獅子舞の流れ

6:30頃～	公民館集合。準備をする。
7:00頃～	午前の部。公民館出発。
7:30～7:50	日吉神社
7:50頃～11:15頃	休憩を挟みながら、各家を回る。
13:00頃～15:45頃	午後の部
18:50～22:00	夜の部

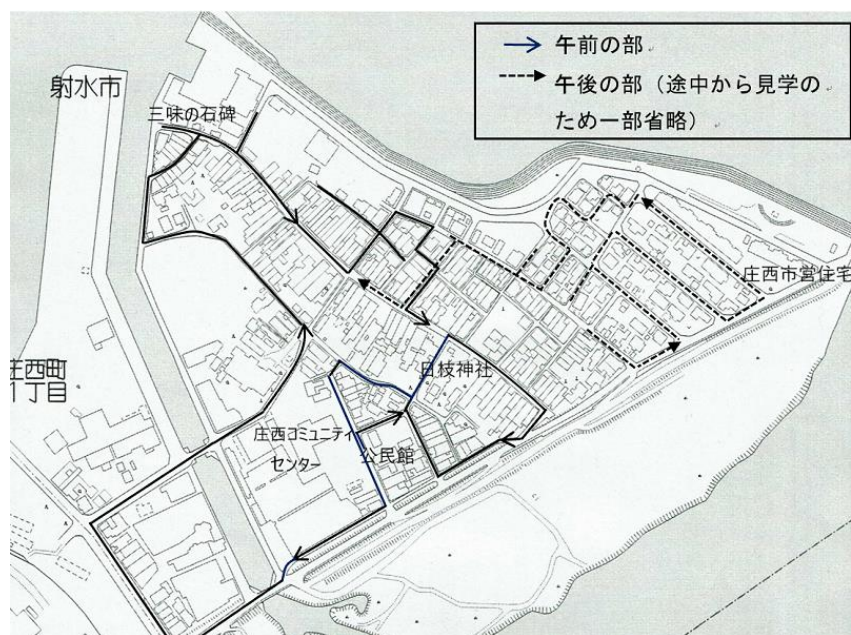


図4-3 町内巡りの経過

（ゼンリン電子住宅地図デジタウンを基に筆者作成）

午前の部

早朝、公民館に集まった保存会のメンバーは獅子舞の準備をした後、7時頃に公民館を出発し、日吉神社へ向かう。祭では、太鼓やその他の道具を乗せた屋台蔵を出し、その後に

獅子舞がついていくような形で移動する。また、移動中も囃子方はずっと演奏をしている。日吉神社への移動までの段階で、保存会のメンバーが30人ほどと、キリコの保護者数名が集まっている状態であった。

日吉神社に到着すると屋台蔵は鳥居の前に停められ、獅子舞だけが本殿の方へ向かい、そこで「宮参り」が舞われる(写真4-20)。宮参りの最中には、近所の人々が少しずつ集まってきて、獅子舞を見に来る様子が見られた。お年寄りや幼い子どもを連れた親子、小学生の女子グループなど幅広い世代の地元住民が獅子舞と一緒に見ていた。そして、舞が終わると保存会の人たちは本殿の近くへ集まり、宮司によるお祓いを受ける。



写真4-20 宮参りの様子

それが終わると日吉神社周辺の家から順に町内巡りが始まる。法被を着た保存会の役員が獅子舞の集団に先立って、各班で集まった花代を回収してまわり、花が出されたところで獅子舞を披露する。各家で舞われる演目は、指示役の人が「次は〇〇」と言ったものをやることがあれば、聞こえてくる囃子に合わせて天狗と獅子がその場ですぐ舞う場合があり、1分もないほどの短いものから、少し長めの演目まで舞い方は様々である。獅子舞の見物人は、日吉神社を後にしてから一緒について回る人や近づいてくる囃子の音を聞いて家から出てきた人などが加わり、時間が経つにつれてその数も次第に増えていった。

午前の部を開始してから2時間ほど経つと、庄西町コミュニティセンターにて数十分の休憩が取られた。この日は天気が良く、日陰でブルーシートを敷いて皆で座って休憩し、お茶などの飲み物の他にオードブルなどの食べ物も振舞われていた。

そして、休憩が終わるとまた獅子舞が始まる。それまでは、車が行き来できるような比較的広い道で獅子舞が舞われており、車が通る際には、笛を持った保存会の人々が誘導するなどしていた。しかし、午前の部の後半からは道が細く入り組んだところが多く、場所によっては屋台蔵がようやく通れるくらいのところもあった。そのようなところでも獅子舞は舞わ

れ、見物人も横から覗きながら見る姿が見られた。また、六渡寺には「三昧の石碑」と呼ばれるものが海沿いの道に立っている。この石碑は、文政元（1818）年頃の古い絵図にも記載されているものだそうだ。ここには昔、火葬場があり、そこで引き取り手のない死者を供養するために建立されたと言われており、石碑には「南無阿弥陀仏」の文字が刻まれている。祭では毎回、この石碑の前で「呼出し舞」と「ハッ節キリコ」という特別な舞をしており、獅子舞が他の家で舞っている間に、保存会の人々が先に訪れ、石碑にお酒をかけてあげていた。こうして、午前中に回る家をすべて終えると公民館へ戻り、11時15分頃に午前の部は終了した。

午後の部

午後の部は、13時頃から15時45分頃まで行われた。公民館を出発した後、午前と同じように各家を回り、獅子舞を披露する。朝に比べると、保存会のメンバーの人数が数名増えており、練習では見かけなかった人もちらほら見られた。見物人も、朝に比べるとかなり増え、六渡寺以外の地区から獅子舞を見に来たという人もいた。14時過ぎ頃からは、市営住宅前の広めの駐車場にて20分程度の演舞が行われた（写真4-21）。会場に着くと、すでに獅子舞を見るために集まった多くの人が場所取りをして待っていた。また、射水市内の老健施設からバスで来た数十名のお年寄りの方々もおり、パイプ椅子が用意された観覧席から熱心に見ている姿もあった。演目は全部で5つほどあり、途中には「餅つき舞」で見物人に餅が振舞われ、最後には松明を使用した「夜叟振り舞」も見られた。最後の演目が終わった後の天狗は片膝をついて、ぐったりとした様子であった。ちなみに、この日の午後は最高気温が32℃と、とても暖かい天気であった。炎天下の中で長時間、舞い続けるには体力が必要であり、獅子舞はハードなものであると感じた。

その後、再び町内巡りがされ、すべての家を回り終えると午後の部は終了し、保存会の人々は夜の部に備える。



写真4-21 市営住宅前での獅子舞の様子

夜の部

今回花を打った家は全部で4軒あった。内訳は、来賓者を迎えた家が1軒と新築祝いが2軒、結婚祝いが1軒である。ちなみに、平成30(2018)年5月14日(月)に行われた春季例大祭で花が打たれたのは1軒であった。花を打つ家の数について、今回は秋の祭が土曜日であったこともあり、親戚などを招待しやすいという理由から、この日に行く家が集中したと思われる。

まず1つめは、来賓者のいる六渡寺獅子方保存会会長の家で18時50分頃から行われた。隣町に家があるため、保存会の皆は車で移動して現地へ向かう。家の玄関前には、大きな照明器具が設置され、近所に住む人などの見物人や保存会のメンバーが家の周りを囲むようにして獅子舞が始まるのを待っていた。しばらくして、準備が整うと獅子舞が舞われた。日中の獅子舞も見事なものであったが、夜になるとさらに獅子や天狗の動きにキレが出て、より一層迫力のある演舞となった。30分ほどかけて、複数の演目が披露され、途中には口上が読み上げられた。最後には夜叟振り舞が舞われ、この演目の前には照明が消され、松明の火だけが周囲を照らし、昼間に披露されたものよりも華やかなものとなった。そして全ての演目が終わると、保存会の人々は手早く片付けをして、公民館へと戻る。

公民館に着いた保存会の人々は、次に花を打つ家へ向かうため、そこから屋台蔵を出し、歩いて移動する。その際、屋台蔵の後には数え切れないほどの大勢の見物人がついてきており、パレードのように長い行列ができていた。2つめの家は新築祝いであった。屋台蔵がその家の近くに着くと、話を聞きつけて待っていた見物人でいっぱいであり、保存会の人々は人垣をかきわけて家の前に入ってしまった。また、獅子舞を行うために十分な空間を確保するため、見物人に下がってもらうように声かけもされた。19時半頃から、一軒目と同じように獅子舞が30分ほど行われ、演舞が終了すると次の場所へと移動した。見物人もそれに続いて移動し、中には、屋台蔵よりも先に走って次の場所へ向かう人の姿も見られた。

3つめは結婚祝いで、20時頃から行われた。家の前には結婚をした人とその家族などがおり、旦那さんはスーツ、奥さんは着物を着て獅子舞を見物していた。こちらでも見物人は大勢おり、皆が人混みの中から覗き込むようにして獅子舞を見ていた。また、ここでは口上が読み上げられたあと、獅子や天狗たちがその家へ入っていく様子が見られた。外では残された人々が静かに待機しており、数分経って獅子たちが家から出てくると、1、2軒目と同様、最後に夜叟振り舞が舞われ、3つめの祝花は終了した。

そして、4つめの家に向かう途中、保存会の方からコミュニティセンターで早めに場所を取っておかないとしっかり見られない可能性があるとの情報をいただいたので、4軒目の花を見学するのはあきらめて、庄西コミュニティセンターへ向かうことにした。

庄西コミュニティセンターには、すでに多くの人が建物の前の駐車場をぐるりと囲んで場所取りをして待っていた。その後も続々と人が集まってきて、二重三重の人垣ができていた。そして、3つめの花が打たれてから40分ほど経った21時過ぎ頃、4つめの花を打ち終えた保存会の人々が到着し、準備が整うと、最後の獅子舞が舞われた(写真4-22)。獅子

舞が始まると、人垣もひとときわ厚くなり、皆がその舞に見入っていた。獅子舞は30分ほど行われ、全ての演目を舞い終えると、周りからは大きな拍手が送られた。最後の演舞は終えた保存会の人々はその後、公民館の方へ戻り、22時頃に夜の部は終了した。



写真4-22 庄西コミュニティセンターでの獅子舞の様子

6. 獅子舞に関わる方々からの聞き取り

調査では、六渡寺獅子方保存会に所属している数名の方々から聞き取りを行った。ここでは、話の中で聞くことができた人々の獅子舞に対する考えや思いについて記述する。

六渡寺獅子方保存会会長 窪誠司さん

窪さんは20年ほど前から会長を務めている。3-5で記述した庄西こども獅子は、窪さんが小学生の頃に始まったもので、その一期生だったそうだ。獅子舞では、天狗役はなるべく背が小さく、体格のいい人が適していると言われている。これは、獅子が大きく、天狗が小さく見えるのが良いとされているからであり、窪さんはこども獅子の時は天狗をやっていたが、その後、身長が伸び、保存会では獅子方の胴幕役として参加していたという。

六渡寺の獅子舞は、昔からの伝統の形を変えずに、今もそれを受け継いでいると語る。窪さんには、正しく守って受け継いでいくのが伝統であり、文化ではないかという考えがあり、「時代に合わせて変化していくものもあるが、新しく何かを始めてしまうとそこで歴史が変わってしまう。そこから続くものは2、3年しか歴史のない偽物の伝統文化のように思われる」といったことを話してくださった。そのため、先代から受け継いだ獅子舞の形を守って受け継いでいくことを大切にしている。それは、獅子舞の舞い方はもちろん、祭の日程を変えない、女性は獅子舞に参加しないといった、しきたりのようなものも昔と変わらず守られている。新湊地区では、近年、囃子方に女性が参加したり、獅子舞の日程を休日にくずらして行ったり¹³⁾する団体がある。六渡寺においても、祭日が平日であると、仕事などの都合

によって祭に来られない人もいるため、本当は皆で祭を楽しみたいという思いもあるようだ。しかし、祭は自分たちのためではなく、神様のために行うためのものであるから勝手に日程を変えてよいものではないという理由から、今のところは日程を変えずに獅子舞を行っている。

また、「六渡寺の獅子舞が一番上手い」とか、外部で獅子舞を披露する際に他の町内の団体から「六渡寺の獅子舞の前では（自分たちは）舞えない」などと言われることがあるそうだ。しかし、六渡寺では、「町ごとの雰囲気など、その町に合った獅子舞がその町にとってそれぞれ一番であるため、獅子舞は町ごとに優劣をつけるものではない。それぞれが自分の町の獅子舞に誇りを持って一番だと思うのがいい」と人々は思っているのだという。そのため、六渡寺がどの町よりも一番という意識はないが、自分たちにとっては六渡寺の獅子舞はオンリーワンでナンバーワンだと語る。

保存会に所属している方々からの聞き取り

保存会の人々は自分たちの獅子舞に誇りを持っており、見せ物としての獅子舞ではなく、神楽獅子として、神様や六渡寺の住民のためという意識を持って活動している。そのため、公共のイベントでの獅子舞の演舞の依頼があっても、場合によっては参加を断ることもあるという。

獅子舞をする上で大切にしていることは、昔、年長者から教わった動きを大事にし、それを受け継いでいくことだと語る。これは、会長の窪さんとも共通した考えであると言える。獅子方をしている30代の男性数名からの話では、獅子の姿勢は低く、獅子頭から自分の頭は絶対に出さず見えないようにする、胴幕から見える足は皆で揃って見えるようにするといった六渡寺の獅子舞の伝統的な立ち居振る舞いを心がけているのだと語る。しかし、これらは長年獅子舞を続けているうちに自然と身に付いたものであり、普段から伝統などについて強く意識しているという感じではない。また、50代、70代男性は、昔に比べると囃子のテンポが早くなった、獅子の姿勢が高くなってきたなど多少の変化の話はあったが、昔と今でそれほど大きな違いはないと語っており、皆が昔から受け継がれている獅子舞の形を大切にしていることが分かる。

さらに、獅子舞を通して色々なつながりができているとの話もあった。獅子舞は、小さな子どもから大人まで幅広い世代の人が関わっていて、様々な人と接点を持つことができるだけでなく、地域の人々と交流する機会にもなっており、獅子舞は人々とのつながりをつくる場となっているのである。

7. まとめと考察

今回の調査では、獅子舞に関わる方々からの聞き取りおよび練習から祭当日までの見学を行う中で、六渡寺の人々の獅子舞に対する熱い思いを強く感じることができた。人々の話の

中で共通している点は、六渡寺の獅子舞は代々受け継がれてきた伝統の形を守り続けているものであり、舞い手も住民も獅子舞に誇りを持っているということである。六渡寺の獅子舞は、文献によると江戸末期にはすでに存在していたと言われるほど古い歴史を持っている。明治初期には町の東西にそれぞれ獅子舞が存在していた。しかし、明治末期からの庄川改修工事などによる住居の移転をきっかけにそれらが統合され、以後、脈々と受け継がれてきた。かつては青年団として活動していたが、人手不足などの理由から昭和 50 年代以降に保存会へと運営主体が変わり、それ以降は舞い手の年代も広げられ、囃子も現在のようにテンポの早いものとなった。しかし、運営主体が変わっても舞い方やしきたりなど獅子舞の基本の形が大きく変化することはなく、現在に至るまで大事に受け継がれているのである。現在、保存会に所属している方々も年長者から教わった伝統的な舞い方を大切にしており、自分より若い世代にも自分が教わった舞の形をそのまま受け継いでいこうという意識が見られる。このことから、昔から現在に至るまで人々の獅子舞に対する思いは変わらないのであり、獅子舞は六渡寺の人々にとって宝のような存在であるのだと感じた。

調査中には六渡寺以外にも、平成 30 (2018) 年 5 月 15 日に行われた新湊の獅子舞や、夏の間、東町本町の獅子舞の練習を見学させていただいた。新湊地区には 1 つの町で複数の獅子舞が行われているところもあり、現在舞われていないものも含めると約 40 もの獅子舞がある¹⁴⁾。各町内の担い手からの話によると、現在、新湊地域の獅子舞は過疎化や少子化による人手不足で、日程が重ならない別の町内の団体に協力してもらい獅子舞を行っているところや、すでに獅子舞が舞われなくなった町もあることを聞いた。しかし、このようななかでも六渡寺では一部外部の助っ人も見られたが、ほとんど地元住民で活動し、獅子舞が続けられている。こうして六渡寺の獅子舞が衰退することなく、維持されているのには、まず、六渡寺では、1 つの獅子舞を支える町の人口や世帯数が他の町と比べると比較的多いことが関係していると考えられる。平成 30 (2018) 年 11 月時点での射水市の行政区別人口世帯数統計表を見ると、六渡寺 (庄西町 1 丁目) が他の新湊の町よりも人口などの数が特別大きいという訳ではない。しかし、フィールドワークを通して、新湊では同じ町の中でも 2 つ、3 つの地域に分かれ、それぞれの団体で獅子舞が行われているところがあり、地域によっては数十世帯で獅子舞を支えているところもあることを知った。これに対して、六渡寺は町の規模が比較的大きいだけでなく、1 つの町で 1 つの獅子舞を行っている。かつては六渡寺の町にも 2 つの獅子舞が存在していた。しかし、昭和初期という早い段階で統合がされて、今に至る。この時の統合によって、1 つの獅子舞を町全体で支えることができるようになり、舞い手の人数の維持も可能となっているのではないかと考える。また、青年団として活動していた頃に舞い手の人手不足になった際には、保存会へと運営主体を変えただけでなく、「庄西こども獅子」という形で、地域の子どもたちに小さい頃から獅子舞の伝承を行うようにしたり、演舞において、舞い手がリズムに乗りやすいように囃子のテンポを徐々に早めたりして、その時代の状況のなかでうまく維持ができるように工夫した取り組みが行われてきた。このようにして、時代に合わせて少しずつ変化してきたことで、基本の形を大きく変

えることなく、現在も受け継ぐことができているのではないだろうか。

おわりに

これまで見てきたように、六渡寺の獅子舞は先人から受け継いできた伝統ある獅子舞の形を守り、地元の人々に愛されながら継承を続けている。私は、調査をするなかで保存会の人々の熱心に獅子舞に取り組む様子に感銘を受けた。また、祭当日になると、地元の住民だけでなく、外部からも多くの人が獅子舞を見るために六渡寺を訪れる様子にとっても驚いた。大勢がこの獅子舞に魅力を感じるのには、六渡寺の獅子舞に誇りを持っている保存会の人々が獅子舞に真摯に取り組んでいる姿が演舞を通して伝わってくるからだ考える。私は、今後もこの伝統ある獅子舞が末永く伝承されていくことを願っている。

謝辞

今回の調査をするにあたって、六渡寺獅子方保存会の皆様をはじめとする六渡寺の住民の方々には大変お世話になりました。特に、お忙しいなか時間を割いて何度も調査に協力してくださった六渡寺獅子方保存会会長の窪誠司さん、六渡寺自治会会長の境信誓さん、保存会の宮袋勝次さん、岩坪日佐夫さんには貴重なお話を聞かせていただいたり、資料を見せていただいたりしました。さらに、突然の見学にもかかわらず、練習から祭当日に至るまで温かく接して下さった六渡寺獅子方保存会並びに関係者の方々には本当に感謝しております。今回調査にご協力してくださった皆様に深くお礼申し上げます。

注

- 1) 富山県教育委員会「とやまの獅子舞」2006年

〈<http://www.pref.toyama.jp/sections/3009/3007/digital/03event/shishimai/shishimai100.pdf>〉(2018/12/29 閲覧)

- 2) 檜などで作った長さ六尺の棒。

- 3) 射水市「行政区別人口世帯数統計表」

〈<http://www.city.imizu.toyama.jp/appupload/EDIT/074/074431.pdf>〉
(2018/12/29 閲覧)

- 4) 拡大された区画や入り組んだ町界を合理的なものに整理するという主旨でつくられた法律。昭和36(1961)年に制定。新湊市では、昭和42(1967)年から49(1974)年にかけて旧市の全部と新市の宅地開発による新町の誕生があり、名前が変更された。由緒ある町名が失われるなどの反対意見や懸念から、旧町名、旧区画による自治会の組織をそのままにし、学校区や投票区も変更せず、一般公用面では新しい住居表示によることにし、使い分けしながら運用することで今日に至る。

- 5) 鎌倉時代の軍記物語。作者、成立年代ともに未詳。

- 6) 寛文5(1665)年に中伏木村、六渡寺村、牧野村の三村から移住して創った村。現在の

六渡寺と新庄川の反対側の岸にある長徳寺（射水市本町）の間に位置していた。

- 7) 鳥居の上に乗っている三角形の頂点に飾りがある。この飾りは総本社日吉神社のものではなく、六渡寺の鳥居だけである。
- 8) 獅子舞を舞う際に各家庭が舞い手に払う祝儀を花と呼び、花は祝儀袋に入れられて、祝儀を集金する人に渡される。祝儀を出すことは花を打つと言われる。結婚や新築など御目出度のあった家もまた同じ言葉で呼ばれ、そこでは多額の花が打たれる。
- 9) 昭和 41（1966）年から昭和 49（1974）年まで放送されたNHKのテレビ番組。視聴者参加の公開番組で、日本列島各地を回り郷土芸能や祭り、ご当地の年中行事とゲストの歌手を交えて紹介する番組。
- 10) 『富山県の獅子舞 富山県内獅子緊急調査報告書』富山県教育委員会（1979 年）より
- 11) かつては「ひとあし舞」を含めた 6 演目であったが、現在は舞われていない。
- 12) 射水市庄西町にあった公立小学校で、平成 22（2010）年に新湊小学校に統廃合された。
- 13) 新湊地区では春に、六渡寺より 1 日遅く、5 月 15 日に獅子舞を行うところが多いが、その前後の土曜、日曜に行う町内もある。
- 14) 『新湊の獅子舞』新湊市教育委員会（1995 年）より

参考文献

荒木菊男『新湊の獅子舞』新湊市教育委員会、1995 年。

新湊市史編纂委員会『新湊市史』新湊市、1964 年。

新湊市史編さん委員会『新湊市史 近現代』新湊市、1992 年。

新湊市立庄西公民館郷土史編集委員会『亘理』新湊市立庄西公民館郷土史編集委員会、2000 年。

富山県教育委員会『富山県の獅子舞 富山県内獅子緊急調査報告書』富山県教育委員会、1979 年。

富山大学人文学部文化人類学研究室『新湊市調査記録－漁業と祭りを通して－』富山大学人文学部文化人類学研究室、2004 年。

参考にしたウェブサイト

射水市「射水市の人口・世帯数」

〈<http://www.city.imizu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=2291>〉

（2018/12/29 閲覧）

富山県教育委員会「とやまの獅子舞」

〈<http://www.pref.toyama.jp/sections/3009/3007/digital/03event/shishimai/shishimai100.pdf>〉（2018/12/29 閲覧）

第5章 新湊におけるオンゾハンとそれを守る人々

原 七泉

はじめに

2年次に初めて新湊を訪れたときに、辻々に地蔵（新湊では「オンゾハン」と呼ばれる）を祀ったお堂が沢山ある光景に驚いた。さらに、お堂の扉を開けてみると、綺麗に掃除されており、花や供え物がしてあった。それを見たとき、石仏がただ道端に置いてあるだけでなく人々の生活の中にあることを感じ、新湊の人々にとって石仏がどのようなものなのかを知りたくなった。

調査では、主に町内のオンゾハンに詳しい方々を対象に聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、町内でのオンゾハンの世話の持ちまわり、各々の世話の内容、オンゾハンにまつわるエピソードなどを聞いた。また、8月と9月に地蔵祭に参加し、現在の地蔵祭の様子を観察した。さらに、富山県の民俗に関する文献や新湊市史を用いてオンゾハンの由来や昔の地蔵祭について文献調査を行った。

本章では第1節で富山県の石仏の概要を説明するとともに、新湊のオンゾハンの由来や第2節以降に出てくる仏具について説明する。第2節では、オンゾハンの世話の内容やお堂、筆者の参加した地蔵祭について紹介する。第3節では、時代の流れとともにオンゾハンの世話の形態を変えた地区の紹介をする。

1. オンゾハンとは

1-1. 日本各地の地蔵信仰と新湊のオンゾハン

地蔵とは、石自体を信仰の対象とする石仏信仰の一つであり、地蔵を祀る文化は日本各地にある。富山県以外では、滋賀県、奈良県、大阪府、福井県など京都府周辺の地域や九州地方などでも地蔵が祀られている。また、新湊以外の富山県全域でも石仏信仰は盛んであり、道端には地蔵菩薩や馬頭観音、川や水辺には弁財天や水天、山では磨崖仏など様々な場所で見ることができる。地蔵祭も現在に継承されており、新湊以外の地域でも、地蔵に供え物をし、お経をあげてもらうのが一般的である。現在高岡市福岡町で親しまれている「つくりもんまつり¹⁾」も元は地蔵祭であった。

射水市新湊の内川沿いは特に地蔵が多く安置されており、新湊では地蔵を親しみを込めて「オンゾハン」と呼んでいる。オンゾハンに彫る顔は亡くなった人に似せるのが一般的である。また、オンゾハンのほかにも新湊は神社や寺が密集しており、「私の家はかつて、三方を神社や寺に囲まれていた」と語る女性もいるほどで、宗教色の濃い地域であるといえる。



図5-1 オンゾハンの密集マップ

1-2. オンゾハンの様々な由来

オンゾハンの由来は様々であるが、実際に話を聞いたり文献で調査を進めたりするなかで一番よく聞いたのが、水難事故にまつわるものである。60 年程前までは子供が内川でよく遊んでいて、遊んでいる最中に船の下に入ってしまう出られなくなるなどして溺れた子供が沢山いたという。さらに、新湊は古くから漁業の盛んな街であり、漁師が海で亡くなることも多かった。また、新湊は元禄時代から現在に至るまで 50 戸以上が焼失した火災が 44 回起こっており、火災で亡くなる人も多かった。奈呉町の気比住吉神社には来名戸社^{くなしや}があり、岐（クナト²⁾）の神が 8 体祀られていることから分かるように、新湊は日本海に面しており大陸からコレラ（コロリ）などの疫病が入って来てしばしば蔓延した。その時に亡くなった子供を供養するためにつくられたオンゾハンも多い。

昔は大雨で川が氾濫することが多かったため、川沿いにあるオンゾハンが海や川の下流まで流されることもあった。それが漁師の網にかかり、捨てるわけにもいかず置くところもないので自分の世話しているお堂に入れることもあった。また、網にオンゾハンがかかることもあれば、かかった石が何となくオンゾハンのように見え、捨てることができずに持ち帰ったこともあったという。

古新町中部では 20 年ほど前に、地蔵祭の一週間前にお地蔵さんを洗い清めるために外に出して置き、掃除が終わってもう一度袈裟を着せようとしたら誰が新たにオンゾハンを一体足したのか、袈裟が一つ足りなくなっていたことがあった。このように、自然とオンゾハンが増えることはしばしばあった。本町の宮林宅前のオンゾハンは、大地主であった宮林家の一人息子が幼くして病気で亡くなったため、その供養としてつくられた。しかしそれが亡くなった息子に似ていなかったためその後新たにもう一つ作り、現在では 2 つ並んで宮林家の前に安置されている。

災害の他にも、様々な逸話が残っている。「おさん」は近世の新湊に生き、歌舞音曲の諸

行に通じた女性である。近世の新湊には遊郭があり、200 人程の遊女がいたと言う。おさんの身元は確かではないが都下りの白拍子³⁾とも、高貴な方の落胤⁴⁾とも言われている。ある年の夏、おさんは上方から来航した廻船の若衆と恋に落ちたが、男には妻子があったためやがて破局した。失恋したことで半狂気になったおさんは、満月の夜に心ゆくまで歌曲に思い出をのせて、小川池で投身自殺をした。人々はこれに心を打たれ、小碑を建てた。その小碑は現在、奈呉町のお堂近くにある。



写真5－1 おさんの像（袈裟を着たオンゾハンの後ろ）

1－3. 仏具について

オンゾハンには仏壇で使うものと同じ仏具や仏教用語、が使われていることが多い。以下ではそのようなもののなかから、名称を聞いただけではわかりにくいものや、特に代表的なものについて説明する。

リン（鈴）

リンは梵音具（音を出して使用する仏具の名称）であり、これを鳴らして響かせることにより精神を統一し、空間を清めて邪気から守ってもらうという意味がある。また、リンの音は極楽浄土まで届くと言われ日々のお参りの始めに鳴らす。新湊では仏壇用のリンを使っており、大きさは直径7センチから15センチ程である。このリンを載せるのがリン台である。リン台には布と綿で出来た六角形のものと木製で四角形のものがあるが、新湊のオンゾハンは後者がほとんどである。

御仏飯（仏飯器）と茶湯器

御^ご仏^{ぶつ}飯^{ぼん}は仏さまに供えるご飯を入れる器で、一般的には仏^{ぶつ}飯^{ぼん}器^きと呼ばれる。浄土真宗の仏壇では「盛^{もつ}糟^{そう}」と呼ばれる道具を使って蓮の蕾に模した形に盛るのが正式とされているが、新湊のオンゾハンでは普通に盛られていることが多い。茶湯器は仏壇に供える蓋つきの仏器である。浄土真宗では使わないとされており、実際に花瓶で代用できると聞いて使っていないところもまれにあるが、ほとんどのオンゾハンには茶湯器やそれに代わるコップなどが置いてある。御^ご仏^{ぶつ}飯^{ぼん}やお茶、水などを供える事を飲食^{おんじきくよう}供養^{くよう}と言い、お供えする事で感謝の思いと信仰心を表す。



写真5-2 りん台(奈呉町)



写真5-3 御仏飯と茶湯器(奈呉町)

燭台

ロウソク立て、火立てとも呼ぶ。ほとんどの宗派で使用される基本的な仏具で、燭台、香炉、花立ての3つで三具足と言う。ロウソクの明かりは仏教界では仏の智慧、慈悲の光と考えられてきたという。ロウソクの明かりを灯すのは、先に記した飲食供養と同じ供養の一つで、灯供養と呼ばれる。

常花

常^{とこ}花^{はな}は仏壇に飾ってある作り物の花のことであり、仏教界において最上の花とされる蓮華の花を象っており、茎の数は奇数とされる。仏具が載っている場所に左右一対で飾られていることが多い。生花だけでなく常花も一緒に飾ることで品格が上がるとされている。仏壇店では金属、紙、布、木、プラスチック等の素材に金メッキを施したものがよく売られているが、現在では彩色仕上げのもの、プリザーブドフラワーなど様々な種類がある。

甘茶

アジサイに似たユキノシタ科の植物で、葉を乾燥・発酵させたものを茶にして飲む。甘茶を飲むと体が丈夫になる、目がよくなると信じられて江戸時代の庶民に広く親しまれた。新湊ではオンゾハンを洗う際に用いられるが、これは釈迦の誕生を祝う「花祭り」に由来している。釈迦の聖母である摩耶夫人が無憂華^{むうげ}という花を手折った時に釈迦が誕生し、その時天から龍が飛来して釈迦に香水を降り注いだと言われている。香水は不死の妙薬で、蜜のような甘い味がするという。甘茶もその名の通り甘い味がすることから花祭りにも甘茶が使われるようになり、後に地蔵祭でも甘茶が用いられるようになった。

2. オンゾハンの世話

管理・運営の主体について

本節では、人々による日常的なオンゾハンに対するお世話について記述する。新湊では、世話人のグループのことを「世話方」や「地蔵講」などと呼ぶ。

まずは、各町内でのオンゾハンの世話人の構成について記す。これは、地区によって事情が異なる。例えば、古新町中部のオンゾハンでは、周辺に住んでいる決まった5、6軒で世話をしている。古新町中部のオンゾハン以外のオンゾハンでも5、6軒で世話をしているところが多く、それ以外の人でもたまに世話の手伝いをしたり、祭のときだけ集まる人もいる。また、世話の担当などではなく世話全般を気づいた人が行っている。

大楽寺門前のオンゾハン(紺屋町)は、昔は30から40軒だったが、現在は内川沿いの18軒で世話をしている。1ヶ月交代で世話をしているため、1年半に1回世話の担当になる。世話をする人に子どもはなく、ほとんどお年寄りだけで世話をしている。

乃木町のオンゾハン(本町)では約30軒で世話をしており、2、3ヶ月交代で世話をするのだが、現在は世話を実際に出来る人が減ってきて困っている。他のオンゾハンにもいえることだが、70歳から90歳代以上の女性を中心となって世話をしている。

光明寺前のオンゾハンの世話は自治会と関係なく近所の有志が行っているが、地蔵祭のために自治会費として各家から300円集める(500円の年もある)。地蔵祭のためのお金は、東町西部や天神町など、各地区毎に集めて、地蔵祭の後に1年間に使った備品や地蔵祭の出費などをまとめた収支報告書を作る。また、オンゾハンにも専用の通帳があり、例えば光明寺前のオンゾハンではそのお金を使って昨年お堂の雨もりを直した。

立町は、妙蓮寺裏のオンゾハンでは周辺住民の自治会の5、6班でオンゾハンの世話をしている。毎年各家からオンゾハンの維持費を集金するが、金額は間口の広さによって異なり、広い家で7000円、それ以外の家では2000円から3000円である。各家の集金額に幅があることに對して、住民から苦情が出たことはないという。

日常的な世話の内容

普段の世話は、お堂の扉を開いてお参りをし、ご飯や花を供える、コップの水を替える、線香をつけるなどが主である。自宅の仏壇に供えていたお菓子やおつまみ、果物をおさがりのような形で供えるところもある。夕方になるとお堂の中に明かりをつけ、夜には扉を閉める。線香はお参りの際につけてゆく人もいるが、たとえ常備していてもロウソクを使う人はあまりいないという。ほとんどのお堂には電気が通っており、吊灯籠が飾られているためである。例えば、奈呉町のオンゾハンは夕方6時30分に自動で灯がつき翌朝6時に消えるため、世話の担当者が灯に気を配る必要がない。こう書くと世話がずいぶん簡易化されているようだが、人々の意識は必ずしもそうではない。昔から世話をしている野村さん（西新町）はお地蔵さんの世話に熱心な方で、近所の方と「りん台と御仏飯がくすんでいる」と言って自宅に持ち帰っておられた。そして、「お世話は引退したつもりなのについて世話を焼いてしまう」と言っていた。

お堂について

お堂は、オンゾハンを安置し供養するための建物で屋根の形は神社に似ている。まったく飾りのないものもあるが、木鼻⁵⁾がある場合もある。一般的なものは高さが1.6m程であり、お堂自体が風や雨などで傷むのを防ぐためにガラスの囲いがしてある。屋根はトタン製で、屋根下の壁や内部は木製である。小さいものは0.6m程である。一般的なお堂にはセメント製や石製の台があり、人の目線とオンゾハンの高さが同じくらいでお参りしやすくなっているが、小さいものは石製の台が無くさらにガラスの囲いや扉が無いものがほとんどである。また、八幡町の西福寺のようにオンゾハンが1.6mと大きく、お堂が2mを超えるものもある。

お堂建築に関心を持った人もいる。例えば、中町の土部さん宅向いのオンゾハンは昭和20年代にお堂を新築し、六角堂として近所では有名である。また、立町の放生津橋近くのおんゾハンを世話している方によると、60年程前に当時壁屋を営んでいた綾川さんという人が趣味でお堂を作っていたという。『しんみなとの石仏 第三集』（放生津文化振興会、放生津公民館、新湊市教育委員会 平成15年）によると、その作品の一つに八幡町の光明寺前のオンゾハンがあり、1930年（昭和5年）の東町・荒屋火災に伴う地蔵堂の移転の際に綾川さんが蓮の鰻絵を描いたという。また、秋葉神社横のおんゾハンも秋葉神社の鳥居を新しく建造するのに伴って、小杉の鰻絵で有名な竹内源造さん（1886-1942）がお堂を造った。お堂の屋根の部分には龍、横の壁には象と獅子が描かれており、聞き取り調査のなかでも複数の方が嬉しそうにこのことを話していた。小杉地区に住む横山さんによると、竹内さんが存命だった頃、横山さん宅横にあるオンゾハンのお堂の前を最寄り駅までの通り道としてよく使っていたという。そしてある日、お堂が古くなっている事に気がかけて、後日無償でお堂を提供してくれたという。このように、竹内氏は鰻絵の技術をお堂にも活かしそれが現在でも残っている。以上から、お堂は無個性なものではないことが理解され

るだろう。

袈裟、帽子、その他の備品について

西新町の野村さんのように昔から世話をしている女性のなかには、オンゾハンの袈裟や帽子、りん台、地藏盆の時に使うものなどを手作りしている方もいる。多くの方は80歳以上の高齢の女性で、嫁ぐ際に持ってきた帯や着物を使ってそれらを作り、余りを自宅に保管して現在使っているものが古くなって使えなくなった時に出す。高齢女性で仏具を作った事のある人は各町に数人ほどずついるが、現在ではそのような人が減ったため、近所の仏具屋で買う事も増えた。なかには紺屋町などのように、周辺に寺が多くりん台や祭壇用の布を寄付してもらっているため、特に困っていない地域もある。また、塚原地区では、袈裟や帽子は今でも手作りする人がいる一方で、りん台や地藏祭の時に祭壇に敷く布は使わなくなったという。

袈裟や帽子はケースに入れて一つ一つ保管してあることが多く、例えば西新町内川沿いにあるオンゾハンでは、どのオンゾハンにどの袈裟をつけるのかが小さな紙に書いて入れられている。ケースは袈裟や帽子を作った人の家の車庫や、物置に保管していることが多い。

線香やお香、ロウソクは予備が常備されている。それらはお堂の後ろに常花と置いてあったり、現在使われている仏具と一緒にオンゾハンの前においてあったりする。一緒にお香の入った丸香炉が2つ常備されているお堂もあった。



写真5-4 (左) 野村さんが保管している帽子



写真5-5 (右) 段ボールに入れて保管している袈裟

お供え物について

オンゾハンのいる小堂のほとんどには花、水、オボクサン（オンゾハンに供えるご飯のこと）、お菓子や果物、蝋燭や線香が供えられている。

お供え物の花は、昔は生花がほとんどであったそうだが、現在では常花（とこはな）にするところも多くなっている。夏場は花が腐りやすく、冬場は吹雪などで毎日花を替えるのが難しいことがあるからである。今でも生花を供えているオンゾハンでは、各家から集めたオンゾハンの維持費を使って生花を買って来たり、自宅の庭に咲いている花を供え物として持ってくる人もいる。また、古新町中部のオンゾハンでは造花を常に供えており、それに加えて毎月1日と15日に定期的に生花を供えている。生花・造花にかかわらず、次に供える花を前もって用意しておいて小堂の後ろに置いておく所も3分の1ほどあった。さらに、奈呉町のように常花を置くところもある。

花の他にも、水や御仏飯が供えられているところが多い。御仏飯は虫がつくのでラップをかけて朝小堂にもっていく。水は湯飲みやコップに入れて毎日替えるという。また、お菓子や果物をお供えする場合もあるが、この時はオンゾハン用に買ってくるのではなく自宅にあって仏壇に供えるようなスナック菓子などを供える。

人々がオンゾハンにお供え物を持っていく様子を観察していると、新湊の人々はただ供えているだけではないように思えた。例えば、田町のオンゾハン（本町2丁目）を世話する女性は「夏は暑いから供え物の水に氷を入れるんだよ」、「冬は寒いから、小堂の扉を開けてあげるんだよ」と話しており、オンゾハンを敬いながらも身近な存在として接していることが伺える。

賽銭箱

どれくらい昔から賽銭泥棒がいたという情報には地区で差がある。例えば法土寺町の70歳代の男性によると、賽銭を誰かが盗むようになったのはごく最近になってからだという。また、泥棒は賽銭と一緒に供え物も盗んでゆくが、供え物や賽銭はオンゾハンのものだから、盗むのはけしからんことだと言っていた。他方で、多くの地区ではお年寄りが子どもころから賽銭泥棒がいたという。その対策として、世話の担当者が賽銭箱の中の小銭を定期的に回収して預かったり、賽銭箱を小堂の中に打ち付けて小銭がとられないようにしてきた。その一方で、「賽銭泥棒は昔からあったことであり、特に目くじらを立てないようにしている」と語る人もいて、賽銭泥棒に対する考え方は様々である。



写真5-6 西新町のオンゾハン

3. 地蔵祭について

3-1. 日付の決め方

地蔵祭の日付の決め方には2種類ある。8月24日を中心にして決めるものと過去に起こった出来事の日付をもとに決めるものである。私が調査した範囲では前者が圧倒的に多く、後者は数件聞くだけだった。8月24日が多い理由は、毎月24日が地蔵菩薩の縁日⁶⁾であり、その中でもお盆の近い8月に地蔵祭を行ってきたからである。また、8月24日は旧暦の7月24日に近いことから7月に地蔵祭を行うところも多い。

後者の代表的な例は、後述する光明寺前のオンゾハンである。昭和5(1930)年9月5日に東町・荒屋で火災が起こった事をきっかけに周辺のオンゾハンを一箇所に集め、地蔵祭を毎年9月5日に決めたのである。

基本的にはこのように日付を決めるが、それに付け加えて天候や僧侶の都合も日付の決定に関わっている。多くの地蔵祭りは屋外で行われるため、雨や台風の影響で日にちを前後に変えることもある。また、前述したように7月と8月の24日付近の夕方は僧侶への祈祷の依頼が多く、忙しいので、その日に僧侶が来ることができない場合もある。

3-2. 地蔵祭 山王橋の近くのオンゾハン

私が初めて地蔵祭をみたのは、山王橋近くのオンゾハンである。以前は別の場所にあったが、平成13(2001)年5月に現在の場所に移転した。人の集まる土日に祭をするところ

も増えたなか、このオンゾハンのお祭の日には8月24日に決まっている。

8月24日16時頃に山王町のオンゾハンの所に到着すると、すでに数人の女性が集まっており祭壇の準備をしていた。そのうちの一人に話を聞くと、掃除は涼しい朝のうちに終えたという。オンゾハンに甘茶で洗い、お堂の空気を入れ替えたり、ガラスを磨くなど掃除をしたらしい。そして今は、自宅から祭壇に使う机を持ってきて設置するところだという。祭壇の供え物の並べ方に特に決まりはないようで、過去の写真を参考にして決めている様子ではなかった。また、その場にいる人たちで決められないことがあれば、僧侶に相談して決めていた。私が参加した2か所の地蔵祭ではなかったが、一般的に地蔵祭では、派手な提灯や幟を飾る。幟は赤、水色、白、紫などで、その年に亡くなった人に対して寄贈されたものである。祭に参加した人たちは、60歳代から90歳代の女性10人ほどで、準備を終えると各自で椅子や敷物を持ってきて座る場所を作っていた。予定よりも数分遅れてお経が始まると、参加者は持参した数珠を持って静かに聞いていた。祭の参加者には目を閉じてお経を聞く人が半数くらいいたが、途中で改めて手を合わせるなどの所作のタイミングが一致しているところが面白く感じられた。始まって数分すると、丸盆に載せた焼香セットを、一周目は順番にお焼香をし、二周目はお賽銭を集めていた。

お経は12分ほどで終わり、参加女性が僧侶にお菓子、飲み物、謝礼を渡すと、僧侶は帰っていった。その後はすぐに祭壇が片付けられ、お供え物が平等に配られて解散した。

3-3. 地蔵祭 光明寺前のオンゾハン

光明寺前のオンゾハンとは、八幡町光明寺の前にあるお堂に祀られている約20体のオンゾハンのことを指す。昭和5（1930）年9月5日に東町・荒屋で火災が起こった事をきっかけに周辺のオンゾハンを一箇所に集め、地蔵祭の日を毎年9月5日に定めた。数十年前までは地蔵祭の担い手の中心は小中学生だったが、時代の流れとともに青年団、次に老人クラブ、そして自治会が中心となって地蔵祭を続けてきた。

祭の当日に東町に行ってみると自治会の掲示板に「ご案内」という張り紙があり、地蔵盆の日には、準備、集金のメ切について書いてあった。張り紙によると、男性が前日に会場作りとテント張りをし、女性がオンゾハンの御身洗いと祭用の袈裟への着せ替えを担当し、地蔵祭の次の日に後片付けが予定されていた。18時前になると人が集まってきて甘茶を飲みながら談笑したり、祭用に飾った祭壇やオンゾハン写真を写真に撮る人が多かった。なかには昨年の写真を参考にして、出来るだけ例年通りの祭壇を再現しようとしている人もいた。

18時から地蔵祭が始まる予定だったが10分遅れてお経が始まり、はじめは雑談している人も多かったが次第に静かになった。地蔵祭に参加したのは60歳代から80歳代の方が中心で15人前後だった。なかには50歳代くらいの比較的若い女性も参加していた。また、山王橋近くのオンゾハンと違い、男性が3分の1程いた。お経が始まって5分程してから焼香が始まり、焼香を終えとお盆に小銭を載せて次の人に回していた。途中参加の人も

いたため、2周目もあった。20分程でお経が終わりお供え物の赤飯、飲み物、謝礼金を受け取った後にお坊さんが帰った。

その後、親子の尼さんが来て「御詠歌」を歌った。主に娘さんが歌い手、お母さんがリンを鳴らす役だった。お経を聴くときよりも皆集中して聞いており、なかにはリズムをとっている女性もいた。

尼さんが帰った後、すぐに全員で慌しくテント以外の片付けが始まり、私もお供え物の食べ物やお菓子を頂いた。

私は地蔵祭にどちらかというと厳かで神妙なイメージを抱いていたが、実際に参加してみると決まりごとが少なく、和気あいあいとした雰囲気であったため意外だった。

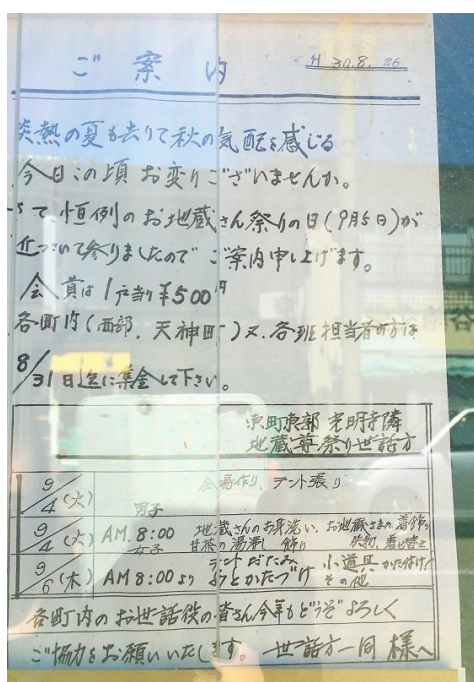


写真5-7(左) 自治会掲示板に貼られていた手書きの「ご案内」



写真5-8(右) 飾りつけ後の祭壇

3-4. 昔の地蔵祭

氷見市や富山市八尾、砺波市など富山県内の様々な場所では、古くから地蔵祭が子供中心の祭として運営されてきた。新湊でも、昔から地蔵祭は主に小中学生の行う祭として親しまれてきたが、少子高齢化に伴って小中学生の頃に祭を行っていたお年寄りの世代が、現在でも祭を行うことになっている。以下では現在のお年寄りが子供だった60年から70年前に、どのように祭を行っていたかについて述べる。

かつて地蔵祭に参加していたのは、小学校3、4年生から中学生だった。オンゾハンのある町内の子供が主に参加していたが、内気でイベントに参加するのが苦手な子や、オンゾハンに先祖代々縁がなく特定のオンゾハンを世話していない家の子供は参加する事がな

かった。

立町の妙蓮寺近くのオンゾハンでは、地蔵祭の当日子供が集まってくると、まず年上の中学生が年下の子供たちに「〇〇は□□寺に行ってこい」などと指示して奉加（お金）を集めさせていた。年下の子供は指示された場所に行き、「△△町のオンゾハンに奉加してください」と言ってお金を集めたと言う。年上の中学生は地蔵祭の会場で待機し、奉加の金額を帳面につけたり、管理をしていた。そして奉加を集めて戻ってきた年下の子供からお金を受け取るとまた指示を出すということを繰り返し、最終的には2、3万円ほど奉加が集まった。また、奉加を集める際に幟^{のぼり}を担いで「オンゾハンの奉加でござんますてー 一文でも二文でも あげて 呉たは一れか 頼んますてー 念仏申しますてー」と言いながら各家庭を廻る町もあった。新湊博物館の学芸員である松山充宏さんによると、奉加を集める子供が「お賽銭をくれないとここを通さないぞ」と言って走行中の車を止めることもあり、そのために事故が起こることもあったという。

奉加を集めると、次にオンゾハンに詳しいおばあさんに教わりながら、お堂の飾り付けをした。お供え物などの買出しは、その頃からすでに大人の女性がやっていた。僧侶によるお経が終わった後に、中学生がお供え物のお菓子や果物や余ったお金を配る。この時、奉加をより多く集めた子供が多くもらう事ができるため、子供たちは毎年奉加集めに精を出した。また、余ったお金でアイスクャンディーなどを買うのも楽しみのひとつだった。子供たちは奉加集めを初めて間もない頃はオンゾハンに対して特に関心があるわけではないが、年を重ねるごとに次第に関心を持つようになり、日々守ってもらっている事への感謝やオンゾハンを敬う気持ちが育ったという。

奈呉町の綿さんや二口さんによると、お二人の祖母の世代には御詠歌^{ごえいか}⁷⁾を歌える人が多かったという。その背景には昔のお年寄りの寺との関わり方が関係している。今の70歳代以上の人の祖父母は、60歳をすぎると日がな一日近所の寺に行き行って過ごしていたという。そこで同世代の人とお喋りをしたり、僧侶の法話を聞いていたため、自然と御詠歌を身に付けることができたという。そして地蔵祭の終盤になると一か所に集まって御詠歌を歌っていた。現在では周辺の寺社で仏教講座や仏教婦人会の例会は開かれているものの、以前のように生活の一部としてお寺と関わることは少なくなった。綿さんは、「個人的にはぜひ御詠歌を歌ってほしいと思っているが、一度御詠歌が始まると3時間は歌わなければならず大変だし、そもそも歌える人もほとんどおらず実現するのは難しい」とおっしゃっていた。

地蔵祭には子どもたちの喜ぶイベントや納涼祭を兼ねていたところもある。坂東地区に住む竹脇良孝さん（70歳）は、幼少期に叔父が主催していたイベントについて語ってくれた。そのイベントというのは、景品名を書いたくじを道端にランダムに置いて子どもたちがそれを引くというものだ。景品はおもちゃ、日用品、駄菓子、畑のきゅうり、なす、トマトなどの野菜で、たった数十円のものでも子どもたちにとっては楽しみな恒例行事だったという。また、子どもたちは当日にくじを引くだけでなく、事前に景品を決めたり、

当日景品を隠すための簡易的な小屋を作る役目も担っていた。

現在ではイベントや納涼祭を地蔵祭と同じ日に行う町は多くはない。そんななか、現在でも地蔵祭の後に住民同士の集まりを行っている紺屋町では、毎年お茶をしながらおしゃべりをするのが恒例だという。紺屋町に住む手林さんは、「今年はぜんざいを作ってみんなで食べるんだよ」と嬉しそうに語っていた。地蔵祭は日ごろ住民を守ってくれているオンゾハンに感謝を示すだけではなく、住民同士のコミュニケーションの場としても大切な役割を果たしているようである。

4. オンゾハンの現在と今後

オンゾハンの世話の仕組みや他のオンゾハンの世話方との関わり方は、環境や時代の変化に伴って柔軟に変えていかなければ後世に継承することが難しくなることがある。以下では、区画整理に伴って町内10ヶ所以上のオンゾハンを一ヶ所に集めた奈呉町と、お堂の再築に伴って一軒だけで世話をすることに決めた今井通さん、恵子さんの世話するオンゾハンを紹介する。

4-1. 奈呉町の集合住宅近くのオンゾハン

時代の流れとともに、オンゾハンの世話の仕組みを根本から変えたのが奈呉町である。奈呉町には古くからオンゾハンがあり、一番古いものは室町時代に作られたという。奈呉町は昭和30年頃まで特に人口の多い地域であり、気比住吉神社から湊橋までの狭い範囲に1,200人ほどが住んでいたという。住民がひしめき合う地域であったことと、昭和30年頃までは土地の所有権に関して口うるさく言う人もいなかったこともあり、昨年大半の地蔵堂を撤去するまで、道路にはみ出していたオンゾハンも多かった。しかし、空き家が増え住民が少なくなることによって奈呉町の区画整理を行い、集合住宅を作ることになった。そのために国から各家に下りた補助金を使って、昨秋に新しくできた集合住宅のそばに奈呉町すべてのオンゾハンを一ヶ所に集めた地蔵堂を作った。集められたオンゾハンのなかには旧奈呉町のオンゾハンも現在の中町と奈呉町の人々で世話していたところもあった。

奈呉町には元々11ヶ所に地蔵堂があったが、国からの補助金をもらう事ができたのはそのうちの9ヶ所だけだった。しかし、補助金がもらえたところだけでオンゾハンを一ヶ所にまとめたとしても、将来的には残りの2ヶ所も世話をする人がいなくなってしまうため、補助金が出ない地域ではオンゾハンのための積立金を使った。

奈呉町ではお堂の移転に伴って地蔵堂の起工式⁸⁾、地蔵堂のマークの作成、地蔵堂の完成式を行った。起工式は平成29(2017)年5月7日に行われた。30人程が出席し、光明寺の住職が安全を願って祈祷を行った。また、一ヶ所に集めるのに伴って「Worldly Design」の明石あおいさんに奈呉町のオンゾハンのマークをデザインしてもらい、地蔵祭などの時に飾る幕を作った。このマークは奈呉町の「奈」の漢字をモチーフにして作られ、色は魔

除けの意味合いのある「神社朱」と呼ばれる赤色にした。地蔵堂の完成式は平成 29（2017）年 9 月 23 日に行われた。この日はあんじさん⁹⁾にお経をあげてもらう他にも、事業所が焼きそばの屋台を出したり町内で曳山を曳くなどして完成を祝った。



写真 5－8 北日本新聞に掲載された記事

地蔵堂を一か所に集めるのに伴って、奈呉町ではオンゾハンの世話を自治会で管理することにした。具体的には、自治会のなかに「地蔵尊の世話人会」という組織を作り、奈呉町の全 78 世帯に世話をしてもらうようにした。「地蔵尊の世話人会」は自治会長の綿さん、副自治会長 2 人、昔からオンゾハンの世話に関わり世話をいとわない 2 人を合わせて男性の 5 人で構成されている。このように、世話は地区住人の全体にした一方で、地蔵祭の際の集金は今のところは有志にしている。それは、世話という形でオンゾハンに関わるうえに集金も全世帯からしてしまうと、元々世話に熱心ではない人がオンゾハンに関わることを義務だと感じてしまい、精神的に負担に感じてしまうからだという。綿さん夫妻は「今度、オンゾハンの袈裟にそれぞれの元のお堂の名前を書いておこう」と話していた。さらに別のオンゾハンで、何十年も前に災害を期に合併したところでも、「このオンゾハンは元々私たちがお世話していたもので、こっちは別のところから来たもの」と話しているのを聞いた。世話方は、合併後の全てのオンゾハンに平等に扱うが、昔から世話しているオンゾハンに愛着を持ったり、自然と区別をしたりするようである。

奈呉町のように地蔵堂を一か所にまとめたい地区は、他にもあるという。しかし、奈呉町は区画整理に伴って補助金が下りたことと、地域住民の意見をまとめることができたという 2 つの要因があったからこそ実現したのだと、自治会長の綿さんはおっしゃっていた。



写真5－9 奈呉町の地蔵堂

4－2. 今井通さん、恵子さんの世話するオンゾハン

奈呉町では住民の意見をひとつにまとめ、現在のような世話の形態にすることが出来たが、世話を1世帯のみですることを決めた世話方もある。

今井さんは、法土寺町の放生津橋橋詰にあるお堂のオンゾハンを一軒だけで世話している。少なくとも今井さんのおばあさんが世話をしていた時代からオンゾハンの金銭の管理は今井家が担当していたと言うから、昔からオンゾハンの世話に熱心だったようである。オンゾハンとは、昭和36(1961)年の道路改良時に現在の場所に移った。今井さんの世話するお堂では、平成21(2009)年にお堂の再築の話が持ち上がったが、それに反対するほかの世話方と今井さんとの間で意見が対立し、最後までまとまる事はなかったという。それまでは15世帯ほどで世話をしていたが、今井さんを除く全ての世話方が世話をやめ、その人たちの大半は隣のオンゾハンを世話するようになった。それ以来、今井家のみで世話をするようになった。

お堂の再築は、はじめ建築会社に依頼したが、見積もりを出してもらった時点で予算をはるかに上回っていたため諦めたという。その後のある日新聞を読んでいたら、富山職芸学院が、歴史的な建物の改築を行っているという記事を読んで電話をし、富山職芸学院の学生にお堂をつくってもらった。

地蔵祭は、近所の東橋近くにある2つのお堂と合同で行っている。毎年、他のお堂を世話をする人とともにオンゾハンを洗ったり、お経をあげてもらっている。今井恵子さんは調査で私が知り合った方々のなかでも、特に世話に熱心な方である。法土寺に嫁いで来て間もない頃とひどい吹雪の日の2回オンゾハンが夢に出てきてからというもの、信仰心をさらに強くし、それ以来世話を大変だと思った事はないという。

合同で地蔵祭を行っている人々と話しているときに、高齢化に伴うお堂の合併の話が出

たことがあったが、自分たちが元気なうちは1軒だけで世話をしたいと言っていた。さらに、合併する事になるとお堂を移転する必要があるが、本来オンゾハンは事故の起こりやすい場所で安置され、人々のことを見守っているのであり、お堂の場所を世話方の理由で簡単に変えてしまうのはよくないと今井さんは語った。その一方で、自分たちが世話ができなくなったときに合併する際の費用を積み立てしているという。

5. まとめと考察

新湊には地蔵祭以外にも、曳山祭や獅子舞などの派手な祭から、気比住吉神社の「清祓^{きよはら}い¹⁰⁾」などのささやかな行事まで数多くの祭がある。昔の人が事故に遭った場所や、町の中の危険な場所にお堂がつくられるため、オンゾハンは身近で人々を守ってくれる存在として心の拠りどころになりやすかったのではないか。新湊は内川や海が近く水害の絶えない地域だったため、オンゾハンも水害に由来するものが特に多かった。水害以外にも火災や動物(キツネ、タヌキ、イタチなど)に化かされるのを畏れた住民がオンゾハンを作ることもあり、オンゾハン¹¹⁾は過去の災害の供養だけではなく、未来に起こる可能性のある災害を封じるためにつくられることも多かった。また、オンゾハン以外にも、疫病を防ぐために良いとされる場所^{くまのとし}に^な来名戸社をつくるなど、当時の事情に合わせて石仏や戦争の供養塔が多く作られた。

調査をしてみると、新湊では高齢化と人口減少が地蔵信仰に大きな影響を与えていることが分かった。先にも述べたように、現在の70歳代以上の高齢者は子どもの頃から自然とオンゾハンや仏教に関わる人が多かった。しかし現在ではそのような習慣もほとんどなくなって高齢者にも関心の薄い人が増え、60歳代以下の人々や若者ともなるとさらにそのような人が多いのが現状である。実際に、地蔵祭を見学した際にも60歳代以下の方は数人であり、大学生である私がオンゾハンに関心があることに喜んでくださる方もしばしばいた。高齢化と人口減少が進み、世話を諦めてしまった町もある。例えば、山王町のあるオンゾハンでは世話をすることができなくなったためオンゾハンの魂を抜き、お堂を取り壊したという。さらに他の町でも世話をしきれなくなり、斎場にオンゾハンを持って行くことがあったそうだ。筆者は複数の方からこの話を聞いたが、どの方も悲しそうであり、どこか悔しそうに語る人もいた。このように、住民の意志とは反対に、やむを得ず衰退してゆくオンゾハンが増えている。以上のような背景があり、やがて地蔵祭の担い手も子供から高齢者へと移り変わった。現在70歳以上の高齢者が子供の時は、奉加集めやお供え物の分配、恒例イベントなど子供たちが自ら楽しんだり、子供たちを楽しませるための催しをしており、子供が主役の祭だった。しかし、現在では若者や子供に関わるものがほとんどないため、子供のころに地蔵祭を楽しみにしていた人々が、自分たちの孫世代の健やかな成長を願って地蔵祭を続けている。

現在でも世話や地蔵祭を継続しているところは、少人数で何とか維持しているところが

多い。しかし、将来的にさらに世話が難しくなったときには合併することになる。合併には新しいお堂の建設費用など高額の出費を要するので、事前に積み立てておくことが必要になる。「世話方がいなくなったとしても、お金を積み立てておけば余裕のある所に託すことができるので安心だ」と話している人がいたが、オンゾハンに関しても「お金があれば心に余裕が生まれる」ようである。オンゾハンを守り続けている人々は、オンゾハンに対する関心が高く、熱心な人が多い。私が聞き取り調査をした、昔からオンゾハンに関わっている人や各町の自治会長のなかには自分の町以外のオンゾハンの情報を知っている人も多い。「〇〇町のオンゾハン最近合併した」「うちの町では地蔵祭のときに△△を使うけど、どうやらこれは珍しいらしい」などという話を色々な方から聞いた。これは、ただ黙々と自分の町のオンゾハンを世話するのではなく、他のオンゾハンにも関心を持っているということだ。このような人達が互いに情報を交換し合いながらオンゾハンを守っているのである。

以上のように、現在は人口に対してオンゾハンに関心ある人は減ったが、世話に熱心な人や地域に関心のある人によって保っている。これからは今までよりもさらに高齢化が進み、世話方が少なくなるだろう。そうなった時にいかに地域住民の意見をまとめ、その町にとって最善の方法をとることが鍵になるだろうと考える。

謝辞

調査を行うにあたりお世話になった「水辺のまち新湊」の二口紀代人さんはじめ、聞き取りにご参加いただいた、奈呉町自治会長の綿正樹さん、法土寺自治会長の桧物広さん、光明寺の肥田啓章住職、射水市新湊博物館の松山充宏さん、地蔵祭に参加させていただいた東町、山王町の方々など沢山の方に感謝申し上げます。ご多忙にも関わらず、親切に受け答えをしてくださったことは励みとなりました。この場を借りて謝意を述べたいと思います。ありがとうございました。

- 1) 9月24日前後に行われる祭。本来は地蔵に供える野菜や果物で大小様々な動物や人物、建物、乗り物などを造るユニークな祭。
- 2) 「クナト」の書き方は様々であるが本来は「岐」と書く。「クナト」とはY字路の分岐点の部分のことを言い、昔は岐から先に疫病が入らないように魔除けとして来名戸社をつくった。射水市内の4か所に来名戸社があるという。道祖神の原型ともいわれる。
- 3) 平安時代から鎌倉時代に流行した歌舞を演じる遊女のこと。
- 4) 身分の高い男が、正妻以外の身分の低い女性に産ませた子。
- 5) キバナと読む。建築用語で、貫や大輪などが柱から突き出している部分をいう。初めは簡素な形のものが多かったが、近世になって象の鼻、竜頭、獅子、草花などの立体的彫刻になった。
- 6) 仏、菩薩などの降誕（誕生）、示現（この世に現れる）など神仏に縁のある日で、この

日を選んで参詣すると普段に勝る御利益があるとされる。代表的なものには毎月8日の薬師如来の縁日、1月10日の「開門神事福男選び」で有名な兵庫県西宮神社の「十日えびす」などがある。縁日の起源は平安時代であり、一般的に庶民に広がったのは江戸時代のこと。

- 7) 詠歌、巡礼歌ともいう。仏教音楽の一つであり、一般教徒が寺院、霊場巡礼の際に唱える歌。短歌や和讃に節をつけたもので、鈴（れい）に合わせて歌うことが多い。
- 8) 高野山真言宗では土公供（どこうく）という。たくさんの人のおかげでようやく建築の運びとなったご縁に感謝し、土地の神様を鎮め、工事が安全に行われ良い建築を完成させることを誓う意味もある儀式。また、従前よりその土地に住む生き物の大切な命を奪ってしまうかもしれないため、その供養も兼ねて儀式が行われる。
- 9) 新湊では尼さんのことを「あんじさん」という。
- 10) 気比住吉神社にある御神木の杉の木に宿る「高神様^{たかがみさま}」という天狗の神様の祭のこと。清祓いは春と秋の年二回行われ、祭のときはお供え物をして、お経をあげてもらう。

参考文献

大田栄太郎『日本の民俗 富山』第一法規株式会社、1974年。

尾田武雄『とやまの石仏たち』桂書房、2008年。

新湊の歴史編さん委員会『しんみなとの歴史』新湊市、1997年。

保坂俊司『図解 仏教入門』ナツメ社、2010年。

参考にしたウェブサイト

いい仏具「お仏具と意味と種類」〈https://www.e-butsudan.com/02_butsugu.html〉

(2018/11/2 閲覧)

第6章 射水市に伝わる盆踊り——のじた踊りを絶やさないために

稲ヶ部 美央

はじめに

私がこの「のじた踊り」に興味を持ったきっかけは、調査地が射水市に決まった最初のフィールドワークで、地域に詳しい人の話を聞いたとき、気になるワードだと思ったことである。その次のフィールドワークでのじた踊りに詳しい人に話を伺ってみると、それはどうやら新湊地域に古くから伝わる盆踊りであるらしいことを知った。私の地元（岐阜県恵那市）には盆踊りの風習はなかったので、盆踊りのあるお祭りとはどんな雰囲気なのか気になった。また、のじた踊りは現在、「新湊のじた保存会」によって保存活動が行われていることも知り、その活動にも興味を持ち、のじた踊りを調査テーマとすることにした。

調査を進めていると、古いのじた踊りの歴史や、新湊のじた保存会がしてきた活動の意味、これからものじた踊りを絶やさないようにするための課題など、多くの事実が見えてきた。本章では、筆者が新湊のじた保存会に行った聞き取り調査や、のじたが踊られている様子の観察で得られたことをまとめ、記述していく。

1. のじた踊りの概要

本節では、のじた踊りの始まりから現在の新湊のじた保存会の発足までの歴史を『新湊市史』（新湊市史編纂委員会）、『新湊のまつり』（社団法人新湊青年会議所）、『新湊の年中行事』（新湊教育委員会編）を参考に記述していく。

1-1. のじた踊りの歴史

のじた踊りは時宗寺院の行う「踊り念仏」に由来している。これは時宗をひらいた一遍が諸国を遊行した時からしばしば行われたものである。時宗の信徒である時衆の日常の勤行は、阿弥陀経の読経と来迎和讃であるが、念仏和讃は1日6回にわたっておこなう「六時礼讃」が修せられた。すなわち、朝は晨朝礼讃、昼には日中礼讃を、ついで初夜・中夜・後夜と2、3時間をおいて、たゆまず勤行された。これが六時念仏であるが、とくに遊行時衆においては、行道歌唱を取り入れた「道行き念仏」がおこなわれた。この行動性が踊り念仏に発展するのである。

和讃念仏が高潮して来迎讃にかわるころから、時衆が感極まって念仏を唱えながら「跳躍の念仏」にかわる。やがて歓喜踊躍の「踊り念仏」となる。鐘を打ち鳴らしつつ、鼓を叩き、あるいは手拍子を交えて、勢の赴くままに乱舞する踊躍念仏が展開された。この猛烈な歓喜踊躍の「踊り念仏」は、当時の信仰心に燃えた娯楽の乏しい民衆にとっては限りない魅力で

あったと思われ、時宗はこれを衆徒を導く方法のひとつとすることによって、一大教勢を伸展させていった。これを世に「踊り念仏宗」という。この屋外での踊り念仏が、「地方の盆踊り」に進展してくるのであって、多分に宗教性を持ちながらも娯楽性を多く現わしたものになって、ひろく浸透していった。

新湊周辺に伝わるのじた踊りは、この時宗の踊り念仏のなごりであると考えられる。放生津潟を中心として、付近の村々に伝わり、おなじようなテンポの念仏踊りに構成されている。

加賀藩では、慶安4（1651）年に「流行歌謡の集会は一村一郷に一箇所に限る」として盆踊りは制限された。明治中期には、政府が野蛮な弊風として警察力で廃止を強制した。しかし、盆踊りをしない年は凶作になると言われ、今日まで広く続けられてきた。昭和43（1968）年の富山新港開港により、もとの夏祭りであった放生津の弁天祭りが富山新港新湊祭りになったことで、のじた踊りが郷土芸能として奨励されるようになった。

放生津の弁天祭りは「かたまつり」と呼ばれていたものである。かたまつりは放生津潟の深淵に竜王が棲むという伝説から来ているお祭りである。放生津潟では夕闇に包まれた夏空に光芒一閃、鳴動して落雷が湖面を走るという現象がよく起こっており、それが竜神が昇天した一瞬だとされていた。また、放生津潟では田造りのために湖底の泥を肥料として掘り上げる方法がとられていたが、しばしば泥を掘り上げにきた船が転覆し、命を失うものが続出した。明和4（1767）年7月、潟の中心に島を築き、海竜大明神を祀ったのが始まりとされている。島は亀に似た形の岩石であることから「がめ島」と呼ばれた。祭神は海竜大明神に弁財天を合祀し、明治以降は浦島太郎も組み込まれ、社号を「少童社」と改称され、少童命（わだつみのみこと）と言われた。毎年7月30日を祭日として「潟祭り」が行われ、各々装飾を施した数百艘の舟が湖上に集結し、花火や笛・太鼓など弦歌を楽しんだ。しかし、この潟祭りは富山新港造成のため、昭和39（1964）年をもって終了した。昭和42（1967）年に潟南の片口地区に遷座され、以後、新港へ出入航する船舶の航海安全や背後地へ進出した企業の労災防止をも祈願し、また、富山新港のPRと発展を祝うため、市民参加の踊りを加えた「富山新港新湊まつり」として実施された。

1-2. のじた踊りの節

のじた踊りは、踊りの振り付けは一つであるが、その踊りを合わせる節（音頭）はいくつかある。現在踊られているのはのじた音頭と口説き節が主である。口説き節は今は録音した音源しか残っていないが、以前は音頭取りによって歌われた。以下にその歌詞を紹介する。

○のじた音頭

恵比寿大黒 宝の船に セーナントセ セッセ

のじた音頭もヤッコラセー 積ませたいネ ナントセー マツカゼ コイコイ

身ぶり手まねで 踊りにはいりゃ のじた楽しや おもしろやネ

ゆかた姿に 編笠つけて おどるあの娘は 浜ちどりヨ

のじた踊りに おもいをはせて 戻るふるさと あゆのかぜヨ
とりねこ並木に 棹さす小舟 あの日あの夢 なつかしやネ
のじた踊り 見そめて添うて 今年しゃ背中の 子とおどるヨ
越の潟から 弁天様も のじた踊ろと 出てござるヨ
老いも若きも のじたを踊りや 月も微笑む 夏の社ヨ
のじた聞き うぶ湯をつかい 今じゃのじたの 音頭とりヨ
みなとまつりに きて見みやしゃんせ のじた音頭で 夜があけるヨ
のじた踊りに 一夜さ明けて 荒屋朝湯で 疲れとるヨ
主と会いたや 専念寺さんの 傘松に 露さけてヨ
あの子かわいや 小川のほたる 月のない夜に 身をこがすヨ
年を忘れて 姉さんかぶり 踊るのじたは 親ゆずりヨ
色は黒ても 踊りは上手 わたしゃ新湊 浜育ちヨ
奈呉の松風 たもとに入れて 踊りや雲間に 月が出るヨ
奈呉の浦わに 満月さえりや 愛しおさんの すすり泣きヨ
姿見えねど 朝靄ついて 声は網あげ 大漁節ヨ
今日は起舟か 大漁旗に 高麗の恵比寿の 声ははずむヨ
のじた音頭に 踊りがはずみ 可愛いあの娘の すそさばきヨ
のじた踊りで ときをもわすれ ゆかたすがたに あゆの風ヨ
奈呉の夕波 漁火揺れる 忍びよるよな 盆の月ヨ
のじた踊りに ついさそわれて 月も出て見る 港町ヨ
奈呉の江堀切 放生津潟は のじた音頭で 灯がゆれるヨ
腰をおろして 日溜まりうけて 今ぞ見どころ 獅子ごろしヨ

○くどき節 お吉清三情話

国は京都でその名も高い。糸屋与右衛門得徳な暮し。店も賑やか暮らしも繁昌。一人娘にお吉と言うて。年は十八今咲く花よ。店の番頭に清三と言うて。年は二十二で男の盛り。器量の好い事卵に目鼻。そこでお吉とふとなれそめて。見そめ相そめ声かけそめて。かくようかくようが度重なれば。親の耳へもそろそろ入り。そこでお吉を一間へと呼んで。お前呼んだは外ではないが、店の清三と訳あるそう。思い切る気か切らぬ気かお吉。言えばお吉は顔振り上げで。私と清三のその仲々は。墨と紙とがしみたが仲よ。何がなんでもはなれやしない。そこで清三を一間へと呼んだ。清三清三と二声三声。清三いつもの御用だと思い。台帳矢立に算盤持って。合いの唐紙すやすや明ける。畳三枚手前と座り。これさ御主人何用でござる。お前呼んだは外ではないが。家のお吉の好い気を晴らし。それを聞いては置かれやしない。しもうて行かんせ今日かぎり。じたい清三は大阪生まれ。ものも言わずにただハイハイと。家に帰りて四、五日たつと。お吉思うてか病となり。医者や薬で介抱もしたが。慈悲もかなわぬ相はてました。お吉とろとろ寝ねむりしところ。夢かうつつか清三が姿。枕元へ

と現れました。そこでお吉はふと目をさまし。見れば清三の姿は見え。さればこれから清三の方へ。親の元へとしのんで行きやる。行けば程なく舟場がござる。舟で行こうか陸路で行こうか。舟で行ったら難所がござる。舟に乗らずに陸路で行きやる。行けば程なく大阪町の。清三館はどこじゃと聞けば、今で言うたら天満橋の。橋の詰から三軒目がござる。清三館の前にならば。笠を片手に腰をばかがめ。ごめんなさいと両手をついて。せいぞうやかたはここかと聞けば、ものもあわれや清三の母は。数珠を片手にただ泣きながら。若い娘さんどこからござる。私じゃ京都の糸屋の娘。清三さんには訳ある故に。とおい所を尋ねて来たよ。どうぞ清三に合わせておくれ。あなた尋ねる清三は果てて。今日は清三の七日でござる。嘘を言わずに合わせておくれ。これが嘘なら法名がござる。これが嘘なら墓所がござる。清三墓なら参らにゃならん。さればこれから墓場へ行って。櫛こうがい線香にたとえ。銀のかんざしお花にたとえ。砂をつまんで焼香といたし。立てた塔婆にすがりて泣けば。人の思いも恐ろしもの。清三墓石二つに割れて。そこへ清三が現れまして。お吉泣くなよ泣いたるとて。どうせこの世で添われはしない。私の思いは香花を立てて。来る命日回向を頼む。言つて清三の姿が消える。これさ待たんせこれ待たしゃんせ。貴方はばかりは一人はやれん。私も一諸に行かなきゃならん。寺の大門四、五丁離れ。小石拾うて袂へ入れ。前の堀へと身を投げました。 アラ ヤッサカセー ヤッサカセー

2. 新湊のじた保存会の活動

のじた踊りは昔からずっと踊られてきたわけではなく、新湊地区では一度途絶えて踊られなくなったことがある。そののじた踊りを復活させるべく、昭和 53（1978）年、市役所の職員を中心に「新湊のじた研究会」（後の「新湊のじた保存会」）が発足した。レコードを作る、簡単な振り付けに直すなどといった保存会の活動により、地域によってばらつきがあった歌詞や踊りが統一され、市民に広められていった。本節では、新湊のじた保存会の創立から現在までの活動の歴史を、創立当時の会員である四柳礼子さんの手記から、そして筆者が実際に観察した活動について記述する。

2-1. 新湊のじた保存会とその活動

新湊のじた保存会は、昭和 53（1978）年、「新湊のじた研究会」として発足した。昭和 56（1981）年に改称し、現在の「新湊のじた保存会」となっている。発足直後に、小矢部市にある願念坊踊りや山中町鉄砲踊り、八尾おわら風の盆など県内の踊りを多く視察し、保存会としてどう活動していくか、どのように踊りを広めていくかの参考にした。それに加えて、県外では岐阜県郡上市に赴き、盆踊りを視察した。郡上の盆踊りでは、保存会などの踊りを残していきたい人々の他にも、一般の人が自発的に踊りを楽しみに来ている。どのように活動していけばそのように踊りの輪が広がるのか、という活動のしかたを視察しに行ったそう。郡上へは何年にもわたって視察に複数回行っていることから、それだ

け郡上の盆踊りから得るものが多かったことが分かる。

それと並行して、研究会結成の翌年の昭和 54 (1979) 年には、地域によってばらつきのあった歌詞を統一するために、市民から歌詞を募集した。2 年後の昭和 56 (1980) 年には集まった歌詞を元にレコードが作られ、のじた踊りの音楽が旧新湊市全体で統一されることとなった。レコードの音頭は海老江の保存会初代会長杉浦吉二さん、堀岡の竹内昭次さんの声で録音されている。

のじた踊りを披露する場としては、昭和 54 (1979) 年から富山新港新湊まつりに参加し、長い間ずっと続けて参加している。その他にも、昭和 56 (1981) 年の国際障害者年記念アトラクションや民謡「秋の祭典」、昭和 57 (1982) 年の新世紀博、昭和 59 (1984) 年の高岡七夕民謡まつりなど、様々なイベントに参加し、ステージで踊りを披露する機会も多くあった。平成に入ってから、徐々に大きなステージで踊りを披露する活動は減っていき、地域の祭りや施設で踊る機会が増えていった。平成 6 (1994) 年からは、新湊天満宮、放生津八幡宮祖霊祭に参加し、平成 8 (1996) 年からは老健施設をはじめとする施設慰問が始まった。そのほかには、保存会結成 10 周年、20 周年に、それを記念したイベントが行われている。

イベントへの出演や祭りでの輪踊りなどの他に、婦人会や企業での指導も継続して行ってきた。平成 8 (1996) 年からは、それに加えて、小学生の指導も始まった。しかし、近年では婦人会という存在自体がなくなってしまい、市民に指導する場が少なくなっているのが現状である。現在では新湊小学校と放生津小学校の児童に指導するほか、コミュニティセンターで希望者に向け指導を行っている。また、かつては保存会内で免許(皆伝)制度があり、踊りが上手な人に与えられた。

2-2. 小学校での指導の様子

新湊のじた保存会では、新湊小学校と放生津小学校の 3 年生に、毎年のじた踊りの指導をしている。踊りを覚えた小学生は、平成 30 (2018) 年 7 月 28 日に行われた「内川輪踊り」に参加した。以下に、平成 30 (2018) 年 7 月 19 日に新湊小学校での指導の様子を記述する。

小学生への指導は平日の授業の時間に行われる。総合学習の時間に地域について学ぶ機会がもうけてあり、子供達はそこでのじた踊りや曳山について学んでいる。今回の指導もその一環として行われた。筆者が保存会とコンタクトを取るためにお世話になった青井みどりさんを始め、5 人の会員で指導をしていた。みな動きやすい格好をしており、小学生は体操服で参加していた。小学生の人数は 30~40 人ほどで、場所は体育館で行われた。

最初に青井さんが「のじた踊りを知っている人？」と聞くと、半数ほどが手を挙げていた。まずは、会員がのじた踊りを CD 音源に合わせて踊ってみせるところから始まった。次に青井さんがステージの上で踊りを見せて、小学生がそれを見ながら真似して踊る。ここで小学生達は、整列した状態から手がぶつからないように間隔を取った形で踊ってい

た。青井さんは初めての子供に対してもわかりやすいように、踊りながら動きにかけ声をつけていた。右に3歩歩くときに「1, 2, 3」、左に3歩歩くときに「1, 2, 3」というように、動きやテンポに合わせて数を数え、いったん動きが落ち着くときには「チョン」という言葉を使っていた。小学生達もそれを復唱する形で踊っていた。最初は実際より少しゆっくりしたテンポで踊っていたが、一通り動作を教えた後は、音源を使って実際のテンポで練習した。しばらく練習したあとに小学生の間に会員が入るようにして円になり、実際の輪踊りの形で練習をした。ここでも先ほどまでと同様にかけ声をつけ、会員が生徒達をリードしていた。

小学生に教えていた時間は30～40分ほどだったが、最後の方になると児童達もだいたい踊れるようになっていた。児童達は積極的に参加し、多くの子が声を出しながら踊っていた。嫌々踊っているような子は見受けられず、みんな楽しそうに踊っていたのが印象的であった。また、筆者は見学できなかったが、内川輪踊りに先立って、後日もう一度指導の時間があり、その後内川輪踊りで一緒に踊る予定となっていた。



写真6－1 体育館での指導の様子（前半）



写真6-2 体育館での指導の様子（後半）

2-3. ^{じゅうらく}十楽の市での内川輪踊り

7月28日の18時ごろ、「十楽の市」で内川輪踊りが行われた。十楽の市とは、内川がかつて交易の町として栄えたことを記憶するために始まったイベントで、平成30（2018）年で第9回を迎えた。内川は港町で封建領主が支配しきれなかったため、内川の商人は海外と交易をして大きな富を蓄えていた。現在の内川地域は過疎化、少子高齢化が進んでいるのに対して、内川がかつて栄えてにぎわっていた頃を取り戻すために、十楽の市が始まった。NPO法人水辺のまち新湊が事務局となり、実行委員会が企画・運営している。始めはその名の通り「市」、すなわちマーケットをテーマにしていたが、出店者が集まらないなど上手くいかないことが多く、現在の「光」をテーマにしたイベントに落ち着いた。水辺のまち新湊の二口さんは、「十楽の市はこれからもっと改良していくお祭りで、今は内川がかつてにぎわっていたという歴史を感じてほしいという思いでやっている」と語っている。

今回の十楽の市は、内川沿いをイルミネーションで彩ることをメインの活動にしている。橋にはペットボトルで作ったライトが飾られていた。その橋を使って、会員が指導した新湊小学校・放生津小学校の3年生が参加する内川輪踊りが行われた。中の橋と中新橋を使って川を挟み、大きな輪を作って盆踊りを踊ることを一つの目標としている。

輪踊りには、保存会と小学生の他に、よさこいを披露していたチームや、^{つくりまち}作道（射水市）の民謡サークルなども参加していた。参加人数は多くはなく、完全な輪になることはなかった。参加者よりも見物人の方が多く見られ、周りの人も巻き込んで大きな輪をつくるというところまでは至っていなかった。輪踊りではのじた踊りと「内川の船頭さん」という新しい民謡の二つを踊ったが、のじた踊りだけで20分ほど踊っていた。保存会のメンバーが踊りを先導していき、小学生やよさこいのチームはその様子を見ながら踊っている。

保存会員の青井さんは、だんだん人が増えてきているので、この状態を維持していきたい

と話していた。同じく保存会員の四柳礼子さんは、去年よりも音響環境などが改善され、広がって踊っても踊りがバラバラになることもなく、だんだん良くなっていると話していた。



写真 6－3 対岸で向かい合う輪踊りの参加者たち



写真 6－4 輪踊りを見物する人々

2－4. のじた踊り納涼祭の様子

十楽の市から 1 ヶ月後の平成 30（2018）年 8 月 26 日には、川の駅新湊で「のじた踊り納涼祭」が行われた。このイベントは、しばらく使われなくなっていて、最近になって修繕した屋台のお披露目会のような形で開催された。

屋台は、平成 19（2007）年に行われた海王丸パークの海フェスタを最後に使われなくなっていた。ずっと旧新湊市役所庁舎に保存してあったが、2018 年にその庁舎を取り壊すことになったのと同時に、屋台も取り壊す話が出ていた。しかし十数年ぶりに屋台を目にすると、こんな立派なものを取り壊してはいけないという思いが出てきて、帯刀さんと梶さん（商工会議所の副会長）が中心となって有志を募り、今年修復した。新湊小学校、放生津小学校の P T A にも協力をしてもらった。屋台は修繕後、紺屋町の曳山の旧蔵に置くつもりだ

ったが、台風によってシャッターが壊れてしまったため、現在は川の駅に置いてある。

納涼祭には食べ物やヨーヨーの出店もあり、家族連れが多く訪れていた。日が暮れ始めた頃にのじた踊りが始まった。修繕された屋台を囲み、輪になるような形で踊った。かつては屋台に音頭とりがいたが、今はCDで音源を流している。輪踊りではのじた音頭、新湊音頭、くどき節が踊られた。くどき節では、80歳以上の人たちがのじた踊りとは違った踊りを踊っていて、周りもそれをまねしたり、できなかったらのじたで踊っていたりしていた。IMZip（射水市のご当地アイドル）や新湊小学校の児童数人も参加して、大人が踊る姿もちろほら見ることが出来た。IMZipのファンとおぼしき人たちがいたおかげで、内川の輪踊りの時よりも積極的に参加する人が多く、踊りを楽しんでいるように見えた。

平成30（2018）年8月4日に行われた海老江納涼祭も、屋台を囲む形で踊られた。踊り手の人数は筆者が見てきたなかでは比較的多く、広いスペースで踊っていたため、輪が一番大きかった。これが、次節で述べる四柳さんや太田さんの子どもの頃の光景に近いものなのではないかと感じた。同日に行われていた堀岡納涼祭は、屋台ではなく人の高さほどの行灯を中心には踊っていた。こちらは踊っている人数は少なく、輪も小さかった。浴衣を着てきて踊るつもりで来ているような人の他にも、飛び入りで参加して、満足したら輪から抜けるという人もおり、自由に踊りたい人が踊っているという印象を受けた。この屋台や行灯を中心に人が囲って踊る形での輪踊りが、のじた踊りのスタンダードである。



写真6-5 復活した屋台を囲んで踊る人々



写真 6－6 堀岡納涼祭の様子

2－5. 新しいのじた踊り（いみず祭り）

8月12日に、「いみず祭り」がグリーンパークだいもんで行われた。いみず祭りは平成30（2018）年で4回目を迎える新しいイベントで、射水青年会議所のメンバーである和田美樹さんを中心につくられたものである。いみず祭りではステージでクイズ大会や「こどもゆかたコンテスト 2018」などの、様々な催しが行われるが、メインの出し物はのじた踊りである。このイベントでは、新湊のじた保存会が伝えるのじた踊りとは別に、新しく考案されたのじた踊りも踊られる。ここでは保存会の伝えるのじた踊りを「新湊のじた」、新しい方を「射水のじた」として区別する。

射水のじたは平成27（2015）年に生まれた。この射水のじたをつくるのを牽引したのも和田さんである。和田さんは「射水市が合併して10年経つが旧市町村の壁がいまだにある。これを子供の代まで残したくない。これまで旧市町村での個々の祭りはあるが市全体の祭りはなかった。市全体を一つにするためのイベントを開催し、そのツールとしてのじたを使うことになった」と語っている。和田さんは、盆踊りの音楽を聞いて自分なら地元の納涼祭の様子など子供のころの光景を思い出すが、自分の子供たちは大人になった時にそういう思いをすることができないのではないか、と考え、いみず祭りが子供たちの思い出に残るイベントになるように企画した。射水のじたの振付は新湊のじたとは大きく違い、現代的なものとなっている。音楽もテンポが速く、YOSAKOI（よさこい）の踊りに近いという印象である。

祭りに来ている人は、家族連れや子どもが多かった。食べ物の屋台も多い。射水のじたの音楽がずっと流れていたが、新湊のじたと違って、曳山を曳くときのかけ声のような合いの手が入っていた。ステージでは様々な催しが開催され、IMZipのライブやクイズ大会などがあった。暗くなった頃にのじた踊りが始まった。最初は射水のじたのダンサーによるステージのあと、青年部の女性によるレクチャーが行われた。今年から盆踊りバージョンも出来たらしく、2種類の踊りをレクチャーした。小さな子どもたちを中心に見よう見まねで踊っていた。そうして射水のじたを一通り踊った後、新湊のじた保存会による新湊のじたが披露された。こちらにも簡単にレクチャーしていたが、こちらは子どもよりも主に年配の方がまねし

ていた。最後に総踊りがあり、ステージ上で保存会による新湊のじた、ステージの下で射水のじたが踊られていた。

筆者は射水のじたをこのとき初めて見たのだが、和田さんが「誰でも踊ることが出来る」と言っていたのとは裏腹に、その場で真似して踊るには少し難しく、ある程度練習が必要でありそうと感じた。テンポも速いので、市民全員というより若者向けのように感じられた。



写真6-7 射水のじたを披露するダンスグループ



写真6-8 射水のじたのレクチャーの様子



写真6-9 新湊のじた保存会による新湊のじた



写真 6－10 最後の総踊りの様子

3. 新湊のじた保存会員の語りから

平成 30 年 8 月 3 日、10 月 30 日に、川の駅にて新湊のじた保存会の会員である太田こめゑさん(89)、四柳^{よつやなぎ}礼子さん(83)にインタビューさせていただいた。お二人とも新湊地区から東に約 3 k m に位置する堀岡出身である。また、新湊地区出身・在住の青井みどりさん(68)にも複数回にわたってお話を聞くことができた。

3－1. のじた踊りに関する記憶について

太田さんと四柳さんのおふたりが小学生の頃は、小学校の校庭でのじたがたち、朝 5 時のサイレンで家に帰っていた(のじた踊りが始まることを「のじたがたつ」と表現していた)。四柳さんは姉二人に連れられて踊りにいていたそうだった。しかし、太田さんは親が厳しく、夜遅くまで踊っているとよく怒られた。帰るのが遅すぎて家の鍵をかけられてしまったこともある。そんなときは、姉と協力して椅子を積み上げて、なんとか家に入ったそうだった。昔はレコードなどの音源はなく、音頭とりが音頭をとって踊っていた。堀岡には音頭とりが二人いた。音頭とりはみな年をとって声が出なくなり、亡くなってしまったという。

太田さんたちがよくのじたを踊っていた頃は、男性と手をつなぐだけで周りからとやかく言われる時代だった。盆踊りの場は出会いの場でもあり、そのときだけは男の子と仲良くすることができた。踊った後に男の子たちと一緒に帰ることも楽しみの一つであった。結婚後でも、踊った後に女友達で四柳さんの家に行き日付が変わるまでおしゃべりしたこともあった。それほど、盆踊りの日は年に一回の羽目を外せる日であった。

太田さんやその他の多くの会員は、四柳さんの人柄に惹かれて保存会に入った。太田さんは婦人会で踊っている所を同郷のよしみで誘われたそうだった。四柳さんが保存会に入ったきっかけは、もともとのじたが好きであること、当時の産業部長であった高木さんに誘われたことである。

太田さんたちよりも一回り以上年下の青井さんは、もともとのじた踊りを知らなかった。小さい頃の盆踊りはのじた踊りではなく、おわらやたんこう節を踊っていた。市役所に入っ

た頃、もともと踊りが好きだったため、のじた踊りを教わり、保存会にも入った。今新しく入ってくる人も誘われて入るという形で、自分から飛び込んでくる人はいない。若い世代は特に入ってこないで、会員は高齢の方がほとんどである。

太田さんと四柳さんは、今は踊る機会がだいぶ少なくなってしまったと語る。2, 3年前までは老人ホームなどを多く回っていたが、以前と比べてそれも少なくなった。今と昔とを比べると、昔の方が良かった。市役所からの街流しや、あゆの風センター～川の駅、神楽橋～立町の街流しなど、とてもきれいだった。屋台を先頭に市役所から立町交差点までの街流しでは、総勢 1200 人ものがのじたを踊り、とてもきれいだったそう。おふたりとも、そのときの様子を嬉しそうに話していた。

3-2. 現在の活動及び今後について

では、昔と比べて、筆者が実際に見ることの出来た今年の活動のことをどう考えているのだろうか。そのことを尋ねると、全体としてまあまあ良かったという。今年の活動のうち、特に内川輪踊り、のじた納涼祭の話題が出てきた。

内川の輪踊りについてまず思うことは人が少ないことであるが、去年より踊る人が少し増えた。小学3年生にこだわらず、今までのじたを習ったことのある人を呼べばもっと多くの人に来てくれることになり、改善するのでは、と話していた。まだ橋を囲んで輪を作るとは出来ていないが、年々参加人数は増えてきているため、このままの調子で現状維持をしていきたいと話していた。

しかし、正直なところ、内川の輪踊りになってからあまり面白くなくなったという。かつては役所が主体となっていたため小学校なども協力的であったが、水辺のまち新湊が主体となっている今はそうではない。民間団体が地域に呼びかけをするのはなかなか難しいそうで、新湊小学校と放生津小学校以外の小学校に指導を呼びかけても良い返事は得られなかった。また、内川に駐車場がないので、少し遠い所に住んでいる人は来る足がない。昔は市で小学生のためにバスを出していたのに、それもなくなってしまった。奈呉町の納涼祭と日程が重なっているから、さらに駐車場が足りなくなる。このように、内川の輪踊りはまだまだ改善点が多く、理想の形になるためにはもっと工夫が必要であると話していた。ずっと続けてきた活動はこのままの調子でやっていけばいいと話していたが、新しく始めた活動に関しては、思うような活動ができていないのが現状である。

また、今年は屋台が修復されたことで納涼祭が一つ増えて、余分に活動することが出来た。四柳さんや太田さんは、昔のように屋台の周りで踊ることがとても楽しみだった、目の前が明るくなったような感じがする、と話していた。最後に屋台を使って踊ることが出来て良かったと語る。いろんな人が踊ってくれたが、もう少し場所が広ければ、もっと大きな輪を作ることが出来たのでは、という改善点もみられた。屋台を使った納涼祭は、のじた踊りが全盛期だった昔を思わせるもので、保存会以外の人も懐かしんで積極的に踊ってくれたため、この納涼祭は来年からもずっと続けていきたいという。

最後に、新湊のじた保存会の今後について知るために、来年からどうしていききたいかと尋ねた。まず初めに出てきたのは、来年からもこの状態をなるべく維持していきたい、という言葉であった。新しいことはなかなかできない。始めるのも難しいし、始めた後に継続していくのも大変である。特に踊る人をどう増やすかが難しいところで、自治会や婦人会がなくなっている今、どう人を集めるかが課題である。また、昔は役所が中心となっていたのじたをPRしてくれていたのに対して、現在その役割を担っている水辺のまち新湊などの民間組織は、役所ほどの影響力を持たないため、人がなかなか集まらない。会員の高齢化もやはり問題であるようだ。人数が少ないため、いろんなところに手分けして教えに行けないので、踊る人を増やすことができない。

太田さんと四柳さんは、ずいぶん歳をとってしまったがのじたの音楽が流れるとじっとしていられなくなると語った。保存会の活動がない日はじっとしていることが多いが、活動の日ともなると張り切って出かけていくそうだ。隣人に「普段は歩くのもやっとなのに、のじたになると元気だな」と言われることもあるが、「のじたと歩くことは別物だ」と冗談を言うそうだ。今回のインタビューでも、「のじたを命がけでやっている」と冗談のように話しておられた。太田さんは高木さん（現在の会長）と「死ぬまで踊ろう」と約束していたそうだ。若いときはどこにでも飛んでいって踊ったが、今はそうはいかない。今年の輪踊りでは介護士である孫がつきっきりで側にいてくれて、最後はお孫さんに連れて行ってもらって休憩していたと話す。とにかくのじたが好きで、だからこそ続けられている。最後に、のじた踊りは保存会で盛り上げているようなものであり、私たちが行かないと始まらない、と力強く語っていた。

今回インタビューした人たちは、保存会の活動としてまだまだ課題はあるという認識ではあるものの、そのことをそれほど深刻に考えている様子ではなかった。どんな形であれ活動が続けて、のじた踊りを踊ることができるのがとにかく楽しい、といった様子で、何ともしものじたを広めていきたいというよりは、自分がずっと踊り続けられることを重視しているという印象を受けた。

4. まとめと考察

今回の調査でのじた踊りや新湊のじた保存会について調べた結果、以下のことが分かった。

のじた踊りとは、新湊地域やその周辺で踊られている盆踊りの一つである。その歴史は古く、鎌倉時代までさかのぼる。鎌倉末期、時宗の他阿上人が報土寺（放生津道場）を中心に布教活動をし、庶民に広めた念仏踊りがのちの虫送りや精霊送りの行進形式、また、風流踊りなどを取り入れ、今のような形になった。これが庶民生活のなかに素朴な娯楽として伝承され、今日の「のじた踊り」となった。その後のじた踊りは盆踊りとして納涼祭などで踊られるようになり、戦後まもなくまでは年に一度の一大イベントとして、当たり前のように市

民に踊られていた。しかし、産業が発展して人々の娯楽が増えると、のじたを踊る人は次第に少なくなっていく。そんな時、当時の新湊市役所の職員を中心に立ち上げられたのが新湊のじた保存会である。保存会は各団体への指導、様々なイベントの出演など、多くの活動をしてきている。そのなかでも転機となったのは、新湊のじた音頭の歌詞を募集して、レコードを製作したことであろう。これによって地域によってばらつきのあった歌詞が統一された。踊りに関してもお手本となるものが新しく整えられ、市全体で統一されることとなった。こうしてのじた踊りを踊り続けるだけでなく、新湊のじた保存会は市民への指導も行い、のじた踊りを後世に残そうと活動している。

今回、のじた踊りや新湊のじた保存会の活動について、インタビューをしたり、活動の場を見学したりして最も強く感じたことは、保存会のみなさんのはのじた踊りが本当に大好きで、保存会の活動をするのが楽しみで仕方ないということである。特にインタビューをさせていただいた四柳さんと太田さんのお二人の、昔の思い出を懐かしんで話してくれる様子や、どんなふうに活動したら良いかを話し合うときの熱意などからは、のじたに対する愛がとても伝わってきた。若い頃の青春はのじたによってつくられていて、今もその思い出を大事にしているようであった。かつてみんなと一緒にのじたを踊った光景を彷彿とさせる屋台の復活は、何よりも大きな意味を持った出来事であったようだ。その屋台を囲んでまた踊れると語る四柳さんの、とても楽しみにしている様子が印象深かった。実際に屋台を囲んで踊っている会員の方々は生き生きとしていて、とても楽しそうであったし、それを取り囲んでみている人々もみんなで踊ろうと声をかけ、踊りの輪が広がっていった。実際にかつてのように多くの人が参加したわけではないかもしれないが、屋台が復活したことで、保存会の人々の気持ちはその時代に戻ったかのようなだった。そのイベントが終わった後のインタビューでは、実際にとても楽しかったと語ってくれた。

保存会の目的はのじた踊りを守り、伝えていくということだが、会員のモチベーションとして第一にあるのは、のじた踊りが好きで、踊っているときが一番楽しいというところなのではないかと、インタビューを通して思った。堀岡納涼祭では、保存会以外でのじたを踊っている人に話を伺ったが、のじた踊りが楽しいから踊ると語っていた。のじた踊りは、やはり盆踊りとして踊ってみんなで楽しくなるのが一番の魅力なのではないかと感じた。一年に一度、最大の楽しみであった盆踊りの記憶、その魅力を大勢の人に伝えるのが保存会の役割ではあるが、保存会の方が踊っているのを見ればそれは一目で分かる。どうしたらもっと多くの人が踊ってくれるのか、と悩んでいたが、私は保存会の方が踊っている姿を多くの人に見てもらえばきっと一緒に踊りたくなるのではないかなと思う。それも、発表の場だから踊る、という場面ではなくて、かつての納涼祭のように踊りたいときに踊りたい人が踊る、という場面の方がその魅力は伝わりやすいのではないかな。

例えば、実際のところ私には、内川輪踊りの時よりものじた踊り納涼祭の時の方が楽しさが伝わってきた。内川輪踊りでは、参加者を集めるために、踊りが始まる前にマイクで参加者を呼びかけていて、その行為自体はいいことではあると思うが、あまり積極的に踊ろうと

していない人たちまで巻き込んでしまい、踊っている途中にだれてしまっているという印象を受けた。また、その様子を見ている観客もどこかつまらなさそうで、踊りに参加しようという気持ちにはなっていないように見受けられた。

では、住民の多くが楽しんで踊っていた頃と、現在の違いは何に起因するのか。かつては、のじた踊りの楽しさが物心ついたときから市民の心に刻まれているものだったのだとすると、今の若者は小さい頃からのじた踊りに触れる機会が少なくなっているのだろうか。しかし、地域の納涼祭でのじた踊りは依然として踊られているところもいくつかある。その納涼祭でも、踊りに参加している人はもともとのもじた踊りの楽しさを知っている年配の方が多く、子供達は踊りにはあまり興味のないような印象を受けた。つまり、のじた踊りには触れているが、そこに魅力を感じない人が増えているということである。ゲーム機やスマートフォンなど、のじた踊り以外に楽しさを見出し、納涼祭でもそっちの方に興味がそれてしまっているようだ。そのため、射水のじたのような若者向けの新しい踊りがつくられることにもなかったのだろう。しかし、その射水のじたもまだ市民に広まるには時間がかかりそうだ。

射水のじたも含め、のじた踊りが広まっていくには、のじた踊りそのものだけを広めようとするのではなく、納涼祭の雰囲気や、市民が一体となって踊るあの楽しさを伝えていかなければならないのではないかと感じた。そのためにはまず、納涼祭に来た人たちに、保存会の人々の、楽しくてたまらないといった様子ののじた踊りを見てもらう必要がある。納涼祭に来てもらうことも重要だが、それ以上に納涼祭に来ている人がのじた踊りをあまり見ていないという事実をなんとかしなければならぬ。現在の若者に対して、昔ながらの盆踊りが魅力的であるというのは難しい。しかし、保存会の人々が楽しそうに踊る姿を見たことで、私は、その生き生きとした表情をもってすれば、世代間の垣根を越えられるのではないかと感じた。そうして人々の目がのじた踊りに向かうようになれば、のじた踊りは再び市民の生活の中に入っていくのではないかと感じた。

おわりに

今回の調査を通して、私は多くのことを新しく知ることが出来た。まずはのじた踊りという古くから地域に根差している踊りがあるということ、そののじた踊りを残していくために保存会として活動している人々がいること、そして、のじた踊りが踊られているお祭りの楽しさである。私の地元では盆踊りは踊られていなかったため、調査を始めた当初は、保存会の方の話をお聞きしても、のじた踊りとはいったいどんなものなのか、あまり具体的にイメージできていなかった。しかし、夏になって各地で納涼祭や夏祭りのイベントが開かれるようになり、そこに保存会の活動を見学させてもらいに行くと、保存会の方が楽しそうに語っていたのはこのことだったのか、とすぐに納得した。楽しそうに踊る人々の姿が、とにかく印象的だったのである。踊っている人も見ている人も楽しい気持ちになるこの踊りを、ぜひ後の時代まで残してほしいと願う。

謝辞

今回の調査にあたって、新湊のじた保存会の皆さんを始めとする、新湊地区の住民の皆さんには大変お世話になりました。突然のインタビューや見学の約束であったにもかかわらず、皆さんには快く応じていただきました。インタビューはどの方とお話してもとても楽しく、のじた踊りに対する熱い気持ちが伝わってきました。また、見ず知らずの私にのじた踊りの楽しさや魅力を教えてくださり、ありがとうございました。皆さんに協力していただいたおかげで、とても充実した調査活動になりました。今、私が執筆を終えることが出来たのも皆さんのおかげです。ありがとうございました。

参考文献

新湊市史編纂委員会『新湊市史』新湊市、1964年。

新湊青年会議所『新湊のまつり』新湊青年会議所、1986年。

新湊教育委員会『新湊の年中行事』新湊教育委員会、1983年。

富山県新湊市観光協会『北陸の港町 しんみなとのうた』富山県新湊市観光協会、1984年。

第7章 新湊における地域おこし協力隊の活動 —うちかわホリデイマーケットを中心に—

重吉 桜

はじめに

2年次にはじめて新湊を訪れたとき、内川沿いに連なる町家や漁船が佇む風景がとても印象的だった。時の流れがゆったりとしてまち全体に陽が落ちていく様子は、今生きている現代から遠く離れているように感じた。3年次になり、射水市内で調査地を決める時期が来たとき、私には調査したいと思うテーマも地域もなかった。しかしなんとなく惹かれるものがあり、調査にかかわらずもう一度内川を訪れたいという気持ちはあった。漠然とした興味だが、目的がなくとも行きたい場所だと感じた。調査を進めるうちに、地域の方が言っていた「内川は、桃源郷やちゃ」という言葉の意味も分かるようになっていった。内川にはそう思わせる魅力がたくさんある。その後、何度か足を運び内川を知るたびに、ますますこの内川という場所やそこで暮らす人のことが好きになった。そしてそんな内川の存在があまり知られていないことがもったいないと、また、どんどん人が減り空き家が増えている現状にも苦い思いを抱いていた。

そんなとき、ちょうどその年の春から「うちかわホリデイマーケット」が始まったことを知った。早速代表の沼尻さんにアポを取り、詳細を聞いてますます興味がわいた。代表者の沼尻さんが地域おこし協力隊であること、そこから生まれる企画や宣伝のアイディア、人を呼ぶだけでなく移住・定住・新規出店まで見据えたマーケットであること、内川で行う理由や意義。なによりごく最近始まったものと聞いて、実績もそれほどない手探りな状態かもしれないが、そこには運営団体や地域の方の熱い思いやわくわく感のようなものがありそうと思った。そこで、このうちかわホリデイマーケットが内川にもたらすものや、代表の沼尻さんを通して地域おこし協力隊がもつ役割について調査することにした。

調査は主に、沼尻さんや地域の方への聞き取りによって行った。また6月24日のマーケットに参加し、出店者や来場客の様子を観察、聞き取りを行った。本章では、第1節で射水市にて地域おこし協力隊を務める沼尻さんのこれまでの経歴や、協力隊としての活動について紹介する。第2節では、うちかわホリデイマーケットの概要や、企画立案までの流れ、SNSの活用といった特徴についてまとめる。第3節では、マーケットの実際の様子や、出店者・地域の方がそれぞれどんな思いを抱いているか調査したことをまとめる。第4節では、マーケットの副産物として生まれた新たな企画や試みについて取り上げる。第5節では、代表者不在の2年目を迎えるマーケットの今後と、協力隊としての任期を終える沼尻さんが得たものについて考える。

1. 射水市における地域おこし協力隊¹⁾

「地域おこし協力隊」とは、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定着・定住を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度である。具体的には約1年から3年の間、地方自治体より委嘱を受け、地方で生活し各種の地域協力活動を行う。その活動内容は地域によって異なり、地域ブランド化や地場製品の開発・販売・プロモーションや、都市住民の移住・定住の促進などがある。総務省の自治行政局・地域自立応援課が管轄しており、地方自治体が募集を行っている。平成21年から制度化され、平成29(2017)年の時点で全国の隊員数は累計4,830人になった。

地域おこし協力隊になるにはまず、地方自治体で募集している地域や活動内容の確認をして、申し込みをする。その後、書類選考・面接等の選考を経て、地方自治体からの委嘱状の交付を受け採用が決まる。現住所から採用された自治体へ住民票を移動してから、活動が始まる。募集地域や活動内容は絶えず更新されており、富山県では平成30(2018)年12月の時点で立山町、朝日町、入善町が募集を行っている。同じく平成30(2018)年12月の時点で富山県では、11の市町で52名の人が地域おこし協力隊として活動中であり、射水市では2名が地域おこし協力隊に登録されている。

現在射水市で地域おこし協力隊を務めている沼尻美帆さんは千葉県出身、現在30歳で平成28(2016)年4月より地域おこし協力隊として活動しており、平成31(2019)年3月で3年間の任期を終える。法政大学デザイン工学部出身で、卒業制作では、都市でも植物や野菜の栽培を気軽に楽しめる水耕栽培の機能を備えたプランターを発案し製作した。首都圏やマンションなどの農業が難しい都市部でも各家庭で簡単に植物の栽培を行うことを目的に、デザイン性も兼ね備えた水耕栽培プランターを発案し、根に水を噴射したり必要以上の熱を逃がす構造などを設計したりした。そうして大学時代に、都市部における課題を、システム工学を利用して解決へと導くというプロセスを学んだ。

日本のものづくりや工芸が好きだった沼尻さんは、大学を卒業したのち、東京都の青梅に本社がある日本の老舗タオル会社に勤めることになった。その会社ではタオルの生産から販売までを一貫して自社で行っており、同じ社内で様々な業種を知ることができた。沼尻さんは3年間千葉県の店舗で販売を務め、3年目は店長として様々な店頭での販促計画を考えたり、お客さんの目を引くポップの製作に奮闘したりした。3年間販売をして、法人営業の担当に移りたいと考えていたが、会社の部門の縮小により、法人営業の部が無くなってしまったことを機に転職をする。次の仕事は、輸入品の生活雑貨などを取り扱う雑貨メーカーの営業担当であった。それまでの日本の繊細なものづくりとは打って変わって、海外の工場での大量生産・大量輸入が基本のその会社では驚くことも多く、新しく経験することばかりだった。営業担当でありながら企画担当者と一緒に仕事をすることも多く、これまでの2社での経験で、ニーズを捉えて商品企画・生産することから販売すること、

それを売り込むことなどを学び学んだ。また、もとより文章を書くことが好きだった沼尻さんは、友人が発行するフリーペーパーに寄稿したり、興味があった写真を勉強したりして、知人のガラス作家がホームページに載せる作品の撮影をした経験もある。

その間も日本のものづくりを好きな気持ちは変わらず持っていたが、ものづくりに直接かかわるというよりは、ものづくりをする人や地域を応援したいと思うようになり、今もなお残る伝統工芸やそれを守り続ける人たちを知ってもらうことが応援につながるのではないかと考えた。そこで、仕事を続けながら、休日などを使って地方の生産者に取材し、その記事を「セコリ百景」というサイトのホームページに投稿するボランティアライター活動を始めた。セコリ百景は、消費者と生産者をつなぎ日本のものづくりを伝えることを目的とした、メディアを中心としたプロジェクトである。

以上の経歴を経て、再度転職を考え、平成 27 (2015) 年 12 月に富山県射水市の地域おこし協力隊に応募した。沼尻さんが移住する 1 年前に旦那さんが仕事の関係で富山へ引っ越したため、以前から富山県を訪れる機会が度々あり、住みやすそうだという印象を抱いていた。徐々に移住を考え始め情報収集をするうちに、射水市の地域おこし協力隊の募集を知った。移住定住を促進するという目的や情報の収集・発信といった活動内容において、自分も移住希望者であり、そのための情報収集などの行ってきた自身のこれまでの経験を生かせると思い射水市に応募することを決めた。

平成 28 (2016) 年から始まった地域おこし協力隊としての活動は、市役所内で移住関連の仕事と新湊地域でのまちの活性化に関する仕事の 2 つである。地域活性化を主な目的とし、NPO 法人「水辺のまち新湊」に出向して行うことも多かった。NPO が事務局を担う「内川を愛する会」の企画でフリーペーパー「ぶりっじ」の製作・発行をした。町家の特徴やリノベーション事例、内川に住む人たちによる内川の魅力などが綴られている。他にも、地元の人の見せたい・伝えたいを集めた内川かわら版「うちかわ枡メディア」は最も内川に密着したかわら版で、年 4 回発行している。一枡 500 円で誰でも文章や写真を掲載可能であり、製作・発行にかかる費用が自立している。また平成 31 (2019) 年には開催 10 周年を迎える「十楽の市」や、お寺で落語を楽しむ「内川寄席」の運営も手伝った。

沼尻さん単独でも、射水市への移住推進を目的に、射水市の暮らしの情報を伝えるポータルサイト「いみず、暮らしゴト」の運営や、移住ガイドブックの製作を行うなどしている。そのひとつに、射水市の概要や災害情報、子育て支援制度や暮らしに役立つ情報マップなどがある。ここには、移住を支援することに特化した情報が集められている。移住ガイドマップは地方自治体ごとに作られることが多いが、射水市にはそれまで前例がなく、今後は沼尻さんが製作したものが移住フェアや相談会に配布されたり、市役所の担当課に設置されたりする。

沼尻さんが地域おこし協力隊として活動を始めてから 1 年半後の平成 29 (2017) 年 10 月、より一層内川に人を呼び移住者・新規出店者を増やすため、内川でマーケットをやろうという計画が始まった。市と相談して、翌、平成 30 (2018) 年 1 月末にはマーケットをやる

ことやその予算が確定し、準備を始めた。それが「うちかわホリデイマーケット」である。

2. うちかわホリデイマーケットができるまで

2-1. うちかわホリデイマーケットの概要

うちかわホリデイマーケットは、射水市中央町で月2回（4日間）行われる、地域おこしを目的としたマーケットで、沼尻さんの現在の最も大きな仕事だ。「小さなまちなか百貨店」をコンセプトに、現段階では2週間に1度の頻度で開催され、毎回約20店の手作り雑貨やお菓子のブースが並ぶ。

うちかわホリデイマーケットを主催するのは、「うちかわ共創らぼ」という団体である。ホリデイマーケット実現のために、地域おこし協力隊、商店街組合、ケーブルテレビ、NPO法人水辺のまち新湊、商店会らが集まって生まれた団体で、そのなかで沼尻さんは総指揮を務める。半年間の準備期間を経て、平成30（2018）年4月28、29日を初回に始まったうちかわホリデイマーケットは、毎月第2週・第4週の土日に行われる。現在は2週間に1度だが、マーケットの運営や集客が定着したら毎週開催することも検討された。

会場となる場所は射水市中央町の新湊信用金庫跡地であり、79.45㎡の広さがある。内装をリノベーションして使用している。同年2月ごろよりうちかわ共創らぼのスタッフや有志を募り、90人ほどが参加してDIYによる改装を行った。



写真7-1 DIYの様子（沼尻さん撮影）

うちかわホリデイマーケットの目的は主に3つある。まず、内川に人を呼ぶこと。次いで、内川の魅力を知ってもらうこと。そして最大の目的は、内川で実店舗としての新規出店や、移住者を増やし長期的に住んでもらうことである。内川は町家が並ぶ独特の街並みや景観からなる雰囲気が魅力だが、そもそも内川を知っている人が少なく、新湊地区に住んでいても来たことがないという人も多い。まずは内川に来るきっかけとなるスポットをつくり、そこから長期定住者・新規出店者増加を目指す。

うちかわホリデイマーケットを企画した経緯は、沼尻さんが地域活性化担当をしているNPO法人水辺のまち新湊に、店舗となる物件や空き家を求める問い合わせがあったことに始まる。そこからまずは、様々な人が気軽にチャレンジできる機会としてレンタルキッチンを作ってはどうかという案が生まれた。レンタルキッチンとは、内川で飲食店を経営したいという人たちが内川でのニーズを知るため、あるいは実店舗を持つ前にあらかじめ固定のファンをつけるため、普段料理を販売する許可のあるキッチンを持たない方々たちが一時的に販売のための調理をする認可を受けた調理室だ。そしてその構想を練る過程で、キッチンよりもさらに気軽にお店を出せる機会として、マーケットを開く提案がなされた。

それまで、蜻蛉玉作家やマーケット出店経験者と公私のつながりを通じて知り合っていた沼尻さんにとって、「内川でマーケットをやれたら楽しそうだ」というのは、普段の会話のなかで出てくるくらい自然な発想だった。それまで射水市で開かれたマーケットといえば、バレンタインデーの時期に海王丸パークで開かれる年間2回ほどのものしかなかった。しかしそれでは、地元に住む人が気軽に出店できる場がない。だから、定期マーケットを射水市で主催すれば需要がありそうだという目星はあった。マーケットであれば他店を目的に来た人にも地元の店を知ってもらうことができるし、店舗のように大きく考えなくともブースさえあればなんとかなる。素人がプロと並んでも、見栄えにあまり差がつかない気軽さも良いと思われた。こうして、レンタルキッチンを見据えつつ、初期費用が低く効率的で一度にたくさんの人が参加できるマーケットを、第一段階として行うことになった。開催に先立って、各地で行われているマーケットやマルシェを見に行ったり、マーケットに出店経験のある知人から場所や規模、集客、スタッフの対応などの良かった点や悪かった点をそれぞれ聞いて参考にしたりすることで、出店者が気持ちよく出店できるマーケットづくりを目指した。

出店の流れは次の通りである。まず、出店希望者は出店日の約2か月前までに申請を出し、沼尻さんと連絡をとって詳細を決めていく。出店料はレンタルブースの大きさによって異なり、600mm×900mmのブースAは土曜日と日曜日、2日間の通し料金で2,500円、600mm×1400mmのブースBは4,000円となっている。土日どちらかのみの出店も可能で、その場合の料金はブースAが1,500円、ブースBが2,500円だが、その場合は土日とも出店可能な出店者の方が優先とされる。休憩スペースでのドリンク提供はブースBと同料金になっている。

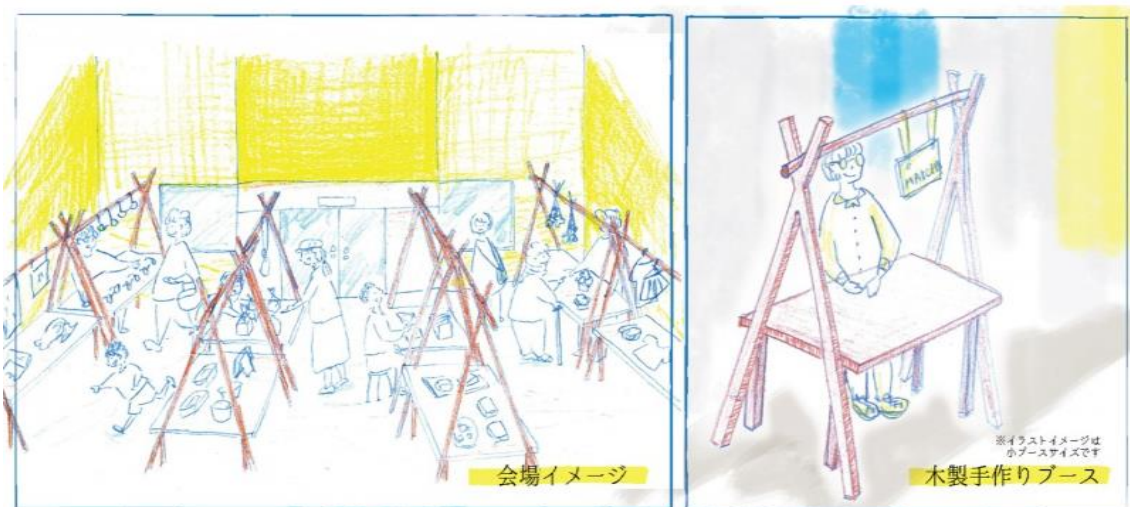


図 7-1 会場イメージ図（うちかわホリデイマーケットHPより）

改装などの運営準備にかかる費用はクラウドファンディングによって賄った。1,000,000円を目標として平成30（2018）年3月6日から4月20日の約1ヶ月半の期間で、122人の支援により目標金額を上回る1,220,500円が集まった。サイト使用料を除いた約100万円の内訳は、出店・ドリンクブース製作20台分が30万円、壁・床・天井などの改装費用が40万円、フライヤーデザイン等の販促物やサイト製作費が10万円、照明器具が20万円となっている。クラウドファンディングの支援者に贈られるリターン（寄付に対する返礼品）は様々である。一般の人にはうちかわホリデイマーケットのオリジナル手ぬぐいやマーケットでのお買物券、出店者には出店料の免除や割引、法人には会場内に設置するメモリアルプレートなどがある。支援者のなかには、現在京都府に在住しているが祖母が内川に住んでいるという理由で支援したという人もいる。「こうしていろんな人がつながっていくのが面白いと思った」と沼尻さんは言う。



写真 7-2 メモリアルプレート

マーケットでは、内川に店を構える出店者同士のコラボ商品も販売されている。餅屋の野村屋と中六醸造元のコラボによる甘酒を使ったカステラや、パン屋のみなとや製パンを用いた神戸屋精肉店の総菜パンなどは、毎回完売するほどの人気商品となっている。現在の店主同士に交友関係があり、連携に協力的であり、まちおこしに関わる新たな取り組みに積極的な姿勢があると感じた。

8月までの出店者の統計を見ると、普段富山市内に住んでいる人が最も多く、全体の27.8%を占めた。次いで射水市と高岡市に住む人が同率で25%ずつであった。他にも黒部市、魚津市、氷見市、砺波市、下新川郡から少数ではあるが出店されており、石川県から出店したお店もあった。出店者の年齢層で最も多いのは30代で40%だ。40代が32%、60代が10%となっている。男女比は86%で圧倒的に女性が多く、職種などを含め総合的に見ても若い女性客をターゲットとしている印象を受ける。沼尻さんとしては、内川で普段から経営しているお店と内川の外からの出店者が、毎回同じバランスになってほしいと考えている。内川の外からの出店者を目当てに来たお客さんが、内川の景観や地元の店を知るきっかけになってほしいからだ。同じように雑貨を販売する店と食料品を販売する店も同じバランスで出店してほしいと考えているが、開催日によっては出店希望に偏りがあり必ずしもそうはならないこともある。また出店希望が多すぎる時には、出店商品のバランスを考えて、やむを得ずお断りする場合もある。

2-2. SNSの活用

準備段階から沼尻さんが力を入れていることの一つとして、SNS（ソーシャルネットワークサービス）の活用がある。具体的にはFacebookとInstagramにうちかわホリデイマーケットのアカウントを作り、日々投稿を更新している。Facebookは実名での登録が特徴であり、投稿に対して「いいね!」や「シェア」などでリアクションできるサービスだ。Instagramも同じだが、こちらは写真がメインであり、写真か動画のアップロードが必要なのが特徴だ。沼尻さんによると、Instagramの方が反応が多いということだった。一般の方からの反応だけでなく、出店希望者からの連絡もInstagramのメッセージ機能を介して行われることもある。Instagramで2018年1月31日に1枚目の投稿をして以来、DIYの様子やクラウドファンディングのお願い、第1回の出店者募集など様々な発信が行われた。毎回マーケットの数日前から、直近の出店者を紹介する文章とともにその品物やサービスの写真を投稿し、当日もマーケットの様子を投稿したり、当日のボランティアスタッフがマーケットで購入したものの写真を投稿したりしている。最近は他のマーケットでもSNSアカウントを作って当日の様子や出店者紹介をするところが多いが、スタッフ自身が購入したものの投稿というのはあまりないため、こういったところでもうちかわホリデイマーケットらしさを出したいと考えている。写真の総投稿数は現在では500枚を超える。最近では少し趣向を凝らして、マーケットや各ブースの品物だけでなく、出店者にまつわる投稿も増えている。ただの買い物や散歩のついででなく、「会いたい人がいる」場所になれ

ればいいなと沼尻さんは語る。



写真 7-3 (左) Instagram のアカウントページ



写真 7-4 (右) Facebook のアカウントページ

Instagram には一般向けとビジネス向けアカウントがある。うちかわホリデイマーケットはビジネス向けアカウントで作成してあるため、インサイト情報を見ることができる。インサイト情報とはアカウントをフォローしている人の性別や年齢層、地域や投稿ごとの閲覧数だ。それを見てどんな投稿がよく見られているか、どんな客層をターゲットにするべきかを検討する材料として活用している。

3. うちかわホリデイマーケット当日の様子

3-1. 出店者とお客さんの関係

以下では、平成 30 (2018) 年 6 月 24 日 10 時～15 時に調査した、第 5 回うちかわホリデイマーケットの実際の様子について紹介する。この日は食料品店が 7 店、雑貨品店が 12 店、サービスを行う店が 1 店で、合計 20 店が出店した。ブースの配置を決めたのは沼尻さんである。基準としては、似たテイストのブースを近くに並べること、同じ種類の商品売っている店同士は離す、ワークショップを行うブースは端に配置することなどがある。出店項目やテイストから判断して、いいコラボが生まれそうと思う出店者を並べたり、県外出店者をまとめて並べたりすることもある。

表7-1 出店者一覧

店名	品物・サービス
KUKURI	焼き菓子、タルト、コーヒー豆
小さなキッチン&雑貨 Lupe	オーガニックパン、内川グッズ
小さな焼き菓子屋 Petit*Ange	マフィン、コンフィチュール、焼き菓子
神戸屋精肉店	クロックパン、惣菜、サンドイッチ
Smile labo	マフィン、クッキー、タルト
紅茶ロン	甘茶入り福麦茶と中川餅店きな粉団子のコラボセット販売
純喫茶ツタヤ	ブレンドコーヒー、コーヒー豆、オリジナルグラノーラ
rozafi-em	ハンドメイドアクセサリー、小物
irorito	ニット帽、バッグ、アクセサリー
miko handmade and	ピアス、イヤリング、ヘアバレッタ
やまもとさんちのてづくり	プラバンアクセサリー、イラスト
つくりビト	刺繍アクセサリー
glass K2	ガラス工芸品、蜻蛉玉アクセサリー
FUCHA	キーケースなど革小物
Leche mama's	布小物、ヘアゴム、コースター
su&me	衣料品、ネックレス
toitoitoi	ドライフラワー、リース
nanaco の部屋	アニマルデコ、小物
内川びより	着物、羽織、紳士服布地
カイロプラクティック しゅん	ハンドケア、姿勢チェック

表7-1 からわかるように、この日は焼き菓子や手作りのアクセサリーなど、若い女性をターゲットとした出店者が多かった。実際の客層は家族連れや主婦が多かった。1日を通した客数は約300人で、昼前の11時頃にはツアー観光客の来店とも重なり最も店が混雑したが、14時頃には客足がほとんどなかった。

各地で行われるほかのマーケットと比べると、狭い店内に多くのブースが並ぶうちかわホリデイマーケットは、出店者同士の距離や、スタッフである沼尻さんと出店者の距離が近いという特徴がある。混雑するからこそ、すれ違って挨拶を交わしたり、視界の先に様々なブースが目に入り、次はどこを見ようかと目移りしたりする楽しさがある。その狭い会場内を沼尻さんは終始動き回っていた。各ブースに挨拶や声掛けをするなど出店者に細かい配慮をすることで、お互いに話しやすい関係が築け、会話の中でコラボ商品や新たな提

案がどんどん生まれる。実際に私が訪れた際も、出店者の一人が沼尻さんに「神戸屋（精肉店）さんとコラボしたいってさっき言ってきたわ〜」や、「沼尻さん、ここの照明ももっとこうしたらどう？」といったような会話が合った。出店者アンケートにおいて、ほかのマーケットよりもスタッフの気遣いが良いという意見を多くもらうことの裏付けだと感じた。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
1	フロア図	6/23-24															
2																	
3																	
4			B	nanacoの部屋		小さな焼き菓子屋 Petit*Ange		rozafi-em		leche mama's		紅茶サロン					
5																	
6																	
7	入		A	マジかる☆ストロベリー		pure rose / Smile labo		glass K2		su&me		KUKURI					
8																	
9	口		A	カイロプラティック レベル		pure drop / やまもとさんのてづくり		エッセンスサイトー / 神戸屋精肉店		Yacchi/toitoitoi		案内ブース					
10																	
11																	
12			B	FUCHA		miko handmade and		irorito		小さなキッチン&雑貨 lupe		wieder NEU		<ドリンクスタンド>		純喫茶ツタヤ	
13																	
14																	
15																	
16																	
17																	
18																	
19																	
20																	
21																	
22																	
23																	
24																	
25																	
26																	
27																	
28																	
29																	
30																	
31																	
32																	
33																	
34																	
35																	
36																	
37																	
38																	
39																	
40																	
41																	
42																	
43																	
44																	
45																	
46																	
47																	
48																	
49																	
50																	
51																	
52																	
53																	
54																	
55																	
56																	
57																	
58																	
59																	
60																	
61																	
62																	
63																	
64																	
65																	
66																	
67																	
68																	
69																	
70																	
71																	
72																	
73																	
74																	
75																	
76																	
77																	
78																	
79																	
80																	
81																	
82																	
83																	
84																	
85																	
86																	
87																	
88																	
89																	
90																	
91																	
92																	
93																	
94																	
95																	
96																	
97																	
98																	
99																	
100																	

図 7-2 フロアマップ（沼尻さんより）



写真 7-5 マーケットの様子

3-2. 出店者たちの語り

「紅茶ロン」で甘茶入り福麦茶と中川餅店のきな粉団子のコラボ商品を販売する田村友美さんは、まちづくりや内川の活性化に協力したいと出店を決めた。田村さんは、甘茶入り福麦茶を取り扱う紅コーポレーションの企画会社に勤めている。今のところ実質的な利益はほぼないが、こうして出店し、いろいろな人に来てもらうことで少しずつ知名度を上げて、今後の収益につながることを期待している。このマーケットがなかったら内川を知ることもしなかったであろう人が内川に足を運んでくれていることを考えると、少しずつ活性化していると思うと田村さんは語った。しかし、運営の負担が大きいことや、まだまだマーケットの知名度が低いこと、他のイベントが同じ日に重なると一気に集客が減ることが不安だと語っていた。

焼き菓子などを販売している Smile labo の松島春佳さんは、普段は黒部市で実店舗を持ち、週1回の営業とうちかわホリデイマーケットのようなイベントへの出店を行っている。うちかわホリデイマーケットによる Instagram の投稿を見て、準備段階時にDIYイベントをやっていることを知り、興味を持った。実際にDIYイベントへの参加を経て出店を決めた。他のマーケットは屋外で行うことが多いので、狭い店内ではお客さん1人当たりの滞在時間が短いことと、飲食スペースが十分でないことが課題だと考えている。内川はとても良いところなので、このマーケットが内川を知るきっかけになればいいと語った。

「内川びより」は今回のみの出店だ。代表の荒木さんは普段は内川にある住宅会社に勤務しているが、今回は20年前まで内川でテイラー・仕立て店を営業していたお宅から紳士服の古い布地や着物、羽織などを譲り受けて販売していた。もともと会社の方針で内川のまちづくり事業やお祭りを支援しており、一軒一軒まわって空き家の買取りを提案したりするなかで今回の縁があった。譲り主の方は90歳。現在は神奈川県横浜市で娘夫婦と共に暮らしている。内川に実家を残して横浜に移ったため、その空き家を有効利用できないかと荒木さんが譲り主の方に連絡をとったところ、家だけでなくテイラー時代の良質な服や布地や、譲り主の方が昔着ていた着物がたくさん残っていることが分かった。譲り主の方にはそれらへの思い出もあり、ただ捨てるのは悲しいしもったいない。これまでは本人が横浜から通い、手渡しなど納得のできる形で少しずつそれらの布地や着物を処分してきた。しかしなかなか数も多いため、今回うちかわホリデイマーケットにおいて荒木さんが代わりに販売を行い、その収益を毎年内川で行われる十楽の市というイベントのワークショップ費用に充てることとなった。こうした地域に根ざした出店があるのも、このうちかわホリデイマーケットの特徴の一つだ。

ニット帽や毛糸を使ったアクセサリーなどを販売していた irorito の越智伊希子さんは、普段は射水市内でアトリエをもっているが実店舗での販売はなく、こういったイベントや他のマーケットに参加して販売している。今はまだ子供も手が離れないので、空いた時間に趣味の範囲で作品を作っている。越智さんがうちかわホリデイマーケットに出店することになったのは、沼尻さんから越智さんに出店のオファーがあったからだ。約2年前、沼

尻さんが地域おこし協力隊の仕事で「いみず、暮らしゴト」の記事を書くために越智さん取材したことがあり、その縁でうちかわホリデイマーケットにも出店をお願いした。越智さんはうちかわホリデイマーケットについて、他のマーケットと異なるのは一店一店のブースが小さいところとお客さんの年齢層が高いところだと語った。ブースに2種類のサイズがあり、各店舗が限られたスペースの中で自ら陳列棚などを持ち込んでレイアウトしているのが面白いと言う。ただ机に商品を並べられるだけでなく、ブースの上部から吊るせる構造なもの他にはないので良い。越智さんは新湊在住だが自身も内川に来る機会は少ないため、このマーケットを機に外部からもっと人が来てほしいと語った。



写真7-6 iroritoさんのブース

この日、休憩スペースでドリンクの提供をしていた純喫茶ツタヤの宇瀬崇さんは、普段は富山市内で歴史ある喫茶店を営んでいる。宇瀬さんはマスターとして4代目になるが、そこにあぐらをかいてはいけないという危機感を持っており、様々なイベントで出店できる機会を探していた。そんな折に、ちょうど沼尻さんに純喫茶ツタヤのInstagramのアカウントを通じて、うちかわホリデイマーケットのことを知った。宇瀬さんは氷見市や魚津市で開かれる他のマーケットに出店した経験がある。うちかわホリデイマーケットは一巡してしまえばもう十分だという印象があるため、もっと会場内を回遊したり長くいる工夫ができたりすればなお良いと語った。ぜひまた出店したいが、神戸屋精肉店が人気なので神戸屋精肉店の出店日に合わせて出店したいと考えている。

この日は出店していなかったが、初回の4月28日、29日に出店されたペーパーナプキンデコBicoの白石美子さんにも、後日お話を伺った。主婦の白石さんは、5～6年前にペーパーナプキンデコパージュというハンドメイドの手法を習って以来、趣味で作品を作って

いる。たまにバザーなどに出していたところ「もったいない!」「売られ」と言われ、うちかわホリデイマーケットが始まる時出店者が足りなかったため、地域活性化のマルシェなのにお店が少なかったらかわいそうだと思い出店した。しかし出店希望が多くあふれた回は日程の変更を頼まれたりもした。うちかわホリデイマーケットだけでなく、知人が実行委員をやっている高岡市の「うるうるなべまつり」というマルシェや地域のワークショップなどに何度か出店しているが、こういうイベントの良さは人とのつながりやコミュニケーションを楽しめるところだと語った。他のマルシェと比べてうちかわホリデイマーケットはブースがすでにあるのが良いという。地元住民らでDIYして作った白いブースは何を置いても映えるし、他のマルシェが机や棚を自ら持ち込む必要があるのに対して、とても手軽である。この意見は、素人でもプロでもあまり差が出ずみんな同じように映えるようにしたい、という沼尻さんの目的と一致していた。しかし他と比べるとやはり駐車場がないのが難点である²⁾。また今は沼尻さんが一人で奮闘している印象なので、沼尻さんの任期終了後が心配だと語った。今後も出店者が少ない回は出店してあげたいなという気持ちがある。富山大学芸術文化学部出身者などが出店・移住したら面白いと期待を寄せている。

4 マーケットの副産物

ここではうちかわホリデイマーケットの副産物として総合パンフレットとパンマルシェについてとりあげる。

ひとつめは準備段階から提案されていた、うちかわホリデイマーケットの総合パンフレットで、来た人にまち歩きを楽しんでもらいたいというのが目的だ。クラウドファンディングの法人向けリターンで総合パンフレットに法人名を登載するプランを用意していたため、マーケットの運営と同時進行で製作されて、平成30(2018)年10月より1万部を配布することになった。初めはクラウドファンディングで集まった資金内で製作する予定だったが、商店会会長の提案により、総合パンフレット用に協賛を募った。3,000円協賛の方のみ、店舗情報に加えてパンフレットを持参して使えるクーポンを掲載している。総合パンフレットは20代の若い女性をターゲットとしているため、飲食店や着物をレンタルできるおきがえ処KIPPOなどが載っている。

総合パンフレットを製作するうえで苦労した点は、各地元店に協力を仰ぎに行った際、「あの店が出さないならうちも出さない」と言われることがあったことだ。沼尻さんは、「よそ者」の新しい取り組みに対するある種の冷淡さを感じたという。一つの店が反対すると多数の店がそれに乗じることもあった。地元同士のつながりが強いからこそその難しさを感じた。

総合パンフレットは現在各協賛店や他のマーケット、沼尻さんの知人の店など様々な場所に設置している。反響はまだ多くはないが、ときおりパンフレットを片手にまち歩きを

している人を見たり、協賛店にパンフレットを見て来たりしたというお客さんが増えたとの声がある。放生津町の番屋カフェでは、配布から2ヶ月で7名のお客さんがパンフレットのクーポンを利用した。

もうひとつは、マーケットに続く新たな試みとして平成30(2018)年11月11日に行われた、パンと食のマルシェである。パンマルシェとは、パンはもちろん、パンにつけて楽しむジャムやディップソース、コーヒード豆、パンをモチーフとした雑貨、食に関する古本など、パンにまつわるものを集めたマーケットだ。神戸屋精肉店を営む松瀬真由美さん、「小さなキッチン&雑貨 Lupe」を営む北原更紗さん、それに沼尻さんの3人で「いつもと違うことをしてみよう」と企画されたもので、開催日の1週間前には家族連れを対象としたワークショップを行い、そこで製作した作品を当日会場の壁に飾る取り組みもした。実際とても好評を博し、お客さんも普段のうちかわホリデーマーケットを超えるほどのにぎわいになったことに加え、沼尻さん自身とても充実し楽しいイベントになったと感じていた。

当日は富山テレビ放送の取材も入ったが、今までと違って、地域おこしという切り口ではなく、巷のパンブームに乗って開催されたパンマルシェというテーマの取材であり、運営側の沼尻さんだけでなく出店者の松瀬さんらにもインタビューが行われた。こうしてうちかわホリデーマーケットを通して地元店にスポットがあてられ、内川を知ってもらうきっかけになることが理想的だと沼尻さんは語った。

パンマルシェのもうひとつの特徴に、発案から開催までわずか2ヶ月というスピード感のある企画だった点が挙げられる。この企画は新湊にパン屋と総菜パンを作るお店があったという理由で同年9月に発案・話し合いが始まった。役所の企画なら開催年度の前から計画をするが、市に籍を置きながらこのスピード感・柔軟性をもって活動ができるのは協力隊の一つのメリットだ。だからこそ巷のパンブームにのることができたし、伴って取材をしてもらうこともできたのではないかと、沼尻さんはいう。

5 マーケットと沼尻さんのこれから

沼尻さんは平成28(2016)年4月から、射水市の地域おこし協力隊として移住・定住・新規出店を目的とする様々な活動を行ってきた。市内の暮らしを伝えるポータルサイトの立ち上げ・運営、地元に着したフリーペーパーの発行、そして射水市に定期的に人を呼び、新規出店の足掛かりを作るうちかわホリデーマーケットの運営。出店者とのメールのやりとりや地域の方との情報交換などで、内川の老舗精肉店の松瀬真由美さんの協力もあった。新湊出身で地域に知り合いの多い松瀬さんからは、地域のお店への出店伺いやマーケットの反応など、地域の方とのコンタクトをとるにあたり大変力を借りたという。しかし特にうちかわホリデーマーケットでは、毎回の企画・運営、サイトやSNSでの情報発信などをほぼ一人で行っている。開催を始めてもうすぐ1年になるが、総合パンフレットやテーマを決めて行うマーケットなど、現在も新しい試みで射水市の内と外とをつなげて

いる。本節ではこれまでの活動を振り返ったうえで、沼尻さんの今後と課題について考察する。

5-1. 赴任後からこれまで

千葉から単身で射水市に赴任した沼尻さんは、最初は地元住民に受け入れられるのかという不安もあった。しかし、市役所とNPO法人の事務所の両方に籍があることで2つの居場所を持つことができ、安心して仕事に専念できた。また、NPO法人の事務所には普段から地元住民がよく来訪して、まちのちょっとした情報や噂話を運んでくれる。赴任してすぐの頃も、若い人が越してきて活動していると聞いて、地元の人が事務所を訪れて、挨拶したり歓迎してくれる人が多かった。事務所の職員も友好的に受け入れてくれ、地元住民がまた別の住民に紹介してくれた。仕事を進めるうえでも、ボランティアライターなどで培った経験を生かして移住者にインタビューした記事をフリーペーパーに掲載するなど、自身の持つ力を生かすことができたので苦労することは少なかった。

運営するなかで最も苦労したことは資金の運営である。地域おこし協力隊には、隊員1人あたり400万円を上限として運営のための経費が与えられるが、そこには協力隊の給与や福利厚生費などもそれに含まれるので、実際に活動費として使えるのは射水市の場合最大で約60万円にすぎない。うちかわホリデイマーケットは会場を借りて行っているため、賃料や光熱費代、人件費などの経費がかかる。平成30(2018)年4月に開催を始めて以降、経費の使いどころや毎月の収支の管理には絶えず緊張感があり、経営に苦心した。

5-2. 今後の課題

約3年間射水市の地域おこし協力隊として移住・定住推進活動に従事してきた沼尻さんだが、平成31(2019)年3月に3年間の任期を終える。元より地域おこし協力隊は隊員自身がその地域に定住することも促進しているが、沼尻さんは数年後、家庭の事情により別の地域に引っ越す可能性がある。沼尻さんとしても、地域おこし活動を続けたい気持ちはあるものの、現在のような活動を協力隊員という立場以外で仕事にするのは難しい。他方で、現在のメインの仕事であるマーケットの運営は、ボランティアでやるには費用や時間がかかりすぎる。これまでの国からの活動経費が無くなることを考えると、運営を強化するどころか維持でさえできないと考えられる。うちかわホリデイマーケットは、運営や事務のほとんどを沼尻さんが先頭に立って行ってきたが、他と比べても1人で運営するには限界がある規模のマーケットだ。他地域で開かれるマーケットのほとんどは商店街や市が主催している。商店街や地域に人を呼びたいという目的が一致しているため地域の参加協力も得られやすいうえに、その運営資金や経費を募ることもできる。協力依頼や資金繰り、当日までの準備や連絡、当日の運営、反省、次の企画などそれらをほぼ1人で行うのは相当の仕事量だった。

そこで2年目以降は地元の商店を中心に、マーケットを開催することでメリットがある

人たちを集めて運営メンバーを再構成し、開催頻度をぐっと抑えて年2～3回の開催を提案する予定だ。その際は内川沿いの屋外にお店を配置したり、あえて会場を2カ所に分けてまち歩きを誘導したりするなどして、会場を現在の新湊信用金庫跡地から変更することも検討している。話し合いでは、本来の目的である「移住者の促進、新規出店の促進」に、マーケットの開催が沿うかどうかも含めて検討する。

うちかわホリデイマーケットが少なからず内川を盛り上げていることは事実であり、今後も地元住民と話し合いながら形を変えて継続していくことが予想される。

5-3. 地域おこし協力隊の経験

地域おこし協力隊の仕事において、沼尻さんがやりたいと思っていた仕事のイメージがつかめたことは大きな学びになったという。新湊のように、人や地域のつながりを大事にしている地域では、実力や手腕よりも、仲の良さや顔見知りのところに仕事が集まる。地域で生きていくうえでは人のつながりがとても重要であることを実感した。またうちかわホリデイマーケットを始めたことで、NPOや市役所では無かったような出会いや、新たな視野を得ることができた。

新湊での3年間は、沼尻さん個人のキャリア形成の中でとても有意義な経験だった。以前からやりたいと考えていた編集の仕事や、自分の特技を活かせる販促物の製作など、比較的自由に仕事ができただからだ。うちかわホリデイマーケットを通して、事業を0から作っていくことの貴重さ・大変さも知った。事業計画、資金調達・やりくり、広報、仕事の依頼、当日の運営、地域連携など、全てが新たな挑戦で、自身の富山における人脈をほとんど使って挑んだという。市のバックアップや地域の協力がなければ実現できなかったことであり、団体の代表として責任を持つことも含め、今後の全ての経験に役立っだろうと振り返った。今後はこれまでやってきたことを突き詰められるような仕事をしたいと考えている。

おわりに

かつて栄え、古く美しい街並みを残す地域として映画の撮影地にもなった新湊。現在は人口が減少し、空き家問題や祭りの後継者不足など様々な問題を抱える。調査を始めた当初は、そんな新湊に県外から若い地域おこし協力隊が訪れ、それまでなかったマーケットを企画・開催することに対して私は大きな期待感を抱いた。それまで新湊になかった新たな風を吹き込み、つよい地域のつながりによって漁師町ならではの勢いや活気がすぐに復活するのではないかな。若者にとってもより親しみやすい地域となり、市町村の協力で交通アクセスの便が増えたりして移住・定住にもつながるのではないかな、と考えた。

しかし実際はすぐに結果が出るはずもなく、たしかにマーケットの開催日には人が訪れ普段より賑わいをみせたが、本来の目的である移住・定住者はなかなか増えなかった。マ

マーケットは単発のイベントではなくあくまで安定した開催が計画されたものだが、運営の後継者・費用の問題により今後の継続は難しい。一つの案として年2回ほどの開催が検討されることは嬉しいが、当初の目的や目標が視野から外れてしまう点には、悔しさも感じた。とくにマーケットはものではなく人々の行為により支えられる企画であるため、運営者がいなくなれば終わってしまうだけでなく、支える人がいなければその成果もほとんど残らない。長い時間をかけ地元住民に根強く親しまれなければ、歴史のない事業は形に残ることなく薄れていくのだろうかと思った。新湊のような地元のつながりが強い地域では、地元での顔の広さや信頼の高さがものをいい、様々なことの決定に影響力がある。だからこそ、外から来た人がゼロから短期間でなにか成果を出すことの難しさがあると感じた。

マーケットの成果という面では歯痒さをおぼえることがあったが、今回の調査では人々との出会いから得るものも多かった。今日の調査を通して、うちかわホリデイマーケットは手作りの雑貨や作品が集まるだけでなく、様々な人の思惑が錯綜する場所だと感じた。移住を推進したい人もいれば、作品を売りたいだけの人もいる。地元の店でマーケットを盛り上げようと考えている人もいれば、固定客がいるからとあまり関心がない人もいる。そんな人たちが出会うことができるのがうちかわホリデイマーケットなのかもしれないと思った。私自身実際にマーケットに行ってみて、新たな人との出会いや考え方を知ることがたくさんあった。

代表の沼尻さんのキャリアを知ったり出店者の方と話したりするなかで、自分の今後のキャリアや就職活動、自分がやりたいことは何なのか、今できることは何か、考えるきっかけとなった。どこに就職しようとそこが最終地点ではないこと、人それぞれの生き方があること、失敗から学びそれを糧に挑戦すること。私はマーケットと沼尻さんへの調査を通じてそういった新たな見地を得た。一つの事業であるからには経営や実績は必要不可欠かもしれないが、それ以上にうちかわホリデイマーケットがもたらすものや、そこでの地域おこし協力隊の役割は大きいのではないかと思う。

注

- 1) 移住・交流推進機構 (JOIN)「地域おこし協力隊特設サイト」

〈<https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/>〉 及び、総務省「地域おこし協力隊」〈www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html#pTop〉より。

- 2) 現在駐車場は奈呉町、山王町の観光駐車場と新湊庁舎跡地の3か所が利用可能。

第8章 三ヶ・戸破地区における旧北陸道沿いの商店街とまちづくり活動

平島 小夢

はじめに

私が調査を行った三ヶ・戸破地区は、射水市の小杉駅の周辺に位置する。初めて三ヶ・戸破地区の商店街を訪れたとき、「^{こてえ}鰻絵のまち小杉」と書かれたのぼり旗を見かけた。「鰻絵」とは、左官が壁を塗る鰻と漆喰を使って作る絵の一種で、かつては「小杉左官」という名称が存在するくらい盛んであった。近年、鰻絵を使った地域の活性化を狙い、取り組みが行われており、商店街のいくつかの店先には商工会女性部の方や鰻絵の職人、商店主らが作成したユニークなデザインの鰻絵看板が飾られていた。その鰻絵看板がきっかけで、当初は鰻絵に関する活動について調査していたのだが、そのうち鰻絵以外にもこの地区を盛り上げようとするアートイベントなどの様々な試みがあることを知り、そのことを包括的に調査したいと思うようになった。調べるうちに、それらの活動は、同地区で生活する人々を中心に平成 28（2016）年に発足した「まちづくり協議会」が主体となって運営されていることがわかってきた。かつては旧北陸道沿いに商店が並び、宿場町として栄えた三ヶ・戸破地区の商店街も、現在では閉業した店のほうが多く見られる。そのような地域の賑わいを維持する、まちづくりの活動を調べることにした。

調査では、三ヶ・戸破地区の旧北陸道沿いの商店街やその周辺地域の住民、まちづくり協議会の活動に関わる人たちに聞き取りを行った。また、まちづくり協議会や射水市商工会が主催する夏祭りにボランティアとして参加したほか、9月に行われたイベントを訪れるなどして、その様子を記録した。

本章では、三ヶ・戸破地区の旧北陸道沿いの商店街について、また商店街が衰退していくなかで、地域の賑わい創出に誰がどのように取り組んでいるかについて、聞き取りや観察をもとに記述する。第1節では、旧北陸道や三ヶ・戸破地区に商人町がつくられた過程について説明する。第2節では、昭和から平成にかけての店舗数の変化と商店街の住民の語りを掲載する。第3節では、三ヶ・戸破地区を拠点に活動する「まちづくり協議会」について概要を述べる。第4節、第5節では、まちづくり協議会が主催する二つのイベントについて、筆者の体験や関係者に行ったインタビューの内容を交えながら紹介する。第6節では、これまでの記述をもとに三ヶ・戸破地区のまちづくりについて考察する。

1. 旧北陸道と商店街の歴史

1-1. 旧北陸道¹⁾

旧北陸道は古くから京と、のちには江戸と北陸を結ぶ重要な路として整備されてきた。その道筋は、近江国（現在の滋賀県）彦根に発して金沢、高岡、糸魚川を経て出羽国（現在の秋田県、山形県に相当）鼠ヶ関に至る。道筋は繰り返し修正され、寛文年間（1661年～1672年）に石動から高岡、下村、東岩瀬を通り魚津へと向かう道筋となった。その過程で、旧北陸道には一里塚²⁾や、宿駅が設けられ、公用その他旅行者等への便宜が図られた。旧北陸道は「北国街道」や「北国往還」、「下街道」とも呼ばれた。

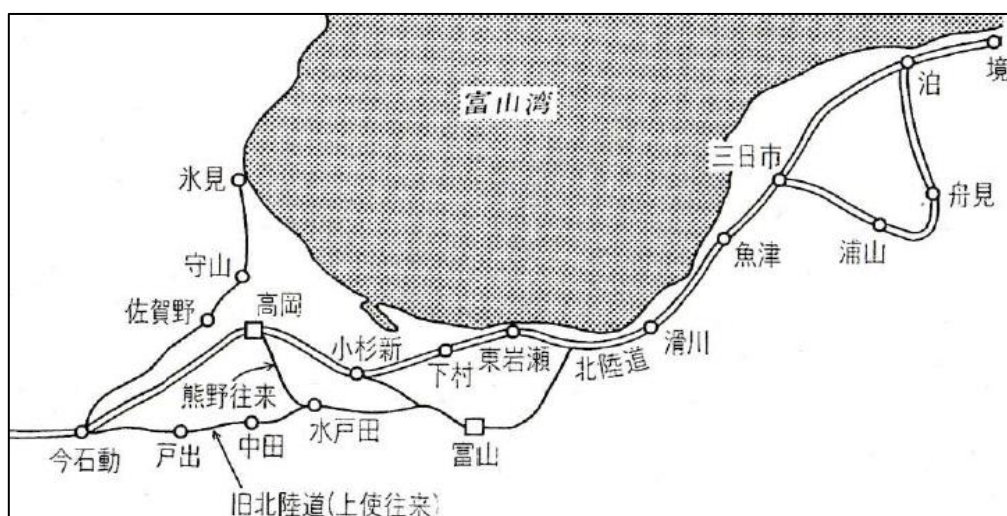


図8-1 寛文期の宿駅制施行街道

三ヶ・戸破の振興会が作成した、地元の歴史や文化財についてまとめた冊子『ふるさと再発見 旧北陸道小杉宿に行く』に記されている三ヶ・戸破地区の旧北陸道の道筋は、現在の地図に落とし込むと図8-2の中央を走る太線のようになる。その道筋は一直線ではなく所々曲折しているが、これは加賀藩が、敵が攻めてきたときに備えて「遠見遮断」にしたものだと言われている。

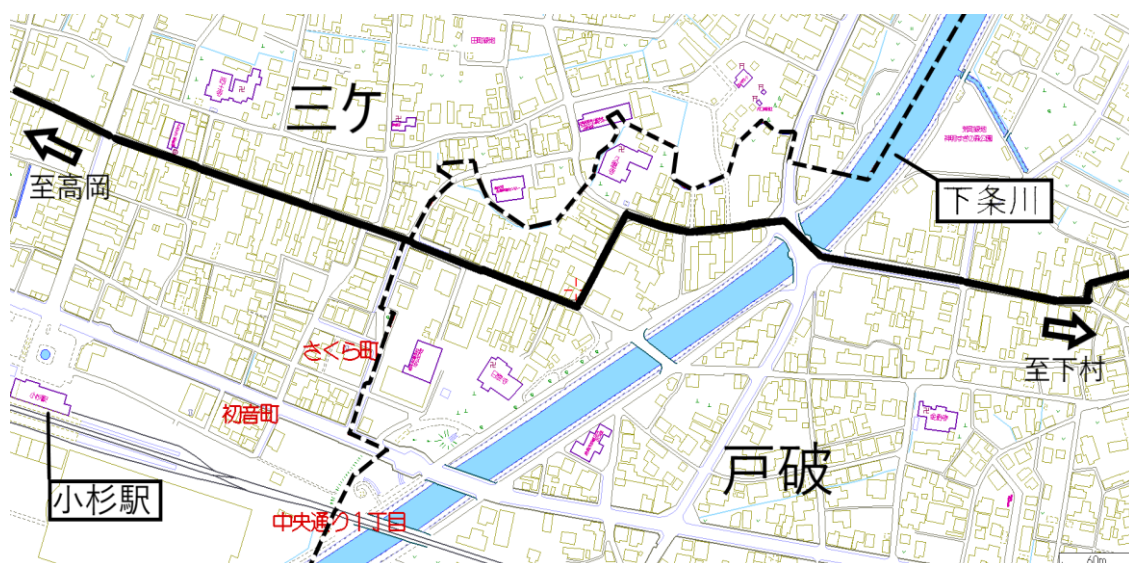


図8-2 三ヶ・戸破地区の旧北陸道の道筋
(ゼンリン電子住宅地図デジタウンより筆者作成)

1-2. 小杉宿³⁾

明暦4(1658)年5月、戸破村と小杉三ヶ村の間の畠地に近在の村から百姓の二男、三男が出て、小杉新町の建設が始まった。同年12月には、現在の本中町から茶屋町までの間に100軒の家並ができた。寛文12(1672)年には高持百姓⁴⁾が移住し、図8-3の斜線部に示されるように、町並みは諏訪町、白銀町、荒町へと拡充された。その間には作食蔵⁵⁾、砺波射水郡奉行所、高札場⁶⁾、小杉相談所(十村寄合所)、牢屋敷が設置された。また、延宝2(1674)年には市立てが認められ、下条川水運を利用した商品流通によって商業の発展が図られた。その結果、家数はしだいに増加し、享保5(1720)年には320軒、1780年代には401軒、幕末には450軒を数えた。街道筋には、大名や勅使の宿泊施設である本陣や一般庶民の宿泊施設である旅籠、それに茶屋などが置かれた。このように人々が多く行きかうなかで、小杉新町は宿場町として商業を発達させていった。筆者が調査した地域は、ほぼこの小杉新町があったところに相当し、図8-3に示す江戸期の街並みと照らし合わせると、東は荒町まで、西は横町と書いてある通りくらいまでを主に調査した。

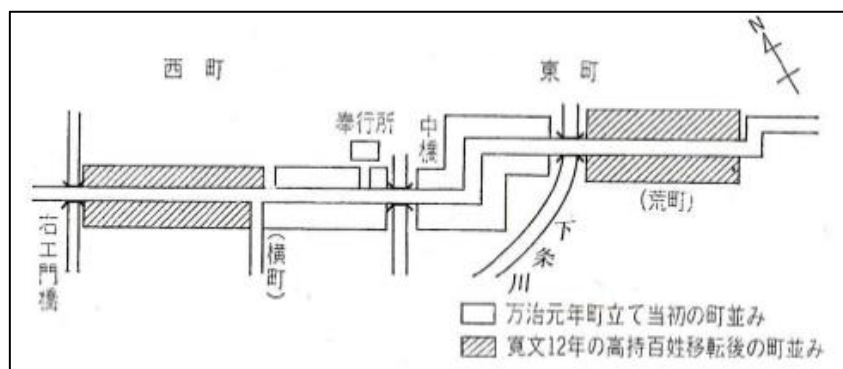


図 8-3 江戸期の小杉新町の町並み（小杉町史より）

1-3. 下条川⁷⁾

下条川は戸破・三ヶ地区を流れ新湊まで伸びる約 16km の 2 級河川である。古来より水田用水や排水の川として、また平地を緩やかに流れる川であったため物資輸送の場としても利用されており、穀物や肥料などを積んだ長舟が往来していた。この長船は山方の物資を小杉新町やさらに放生津まで運搬することができた。また、反対に伏木から入ってきた他領の物資を放生津から小杉新町、さらに山方へ輸送することもできた。さらに、八尾・飛騨高山への街道を利用すれば、放生津からの商品を八尾・飛騨高山へ運送することもできたのである。また、地域内の物資輸送も盛んに行われていたようである。

商業の発展に寄与した一方で、下条川は蛇行しながら低地、湿地帯の水田や市街地を流れていたため、少なくとも年に 1, 2 回は氾濫し、家屋や水田に被害を与えていた。大正 14 (1925) 年から 10 年かけて行われた改修工事により、堤防が強化されコンクリートの河岸壁が作られた。しかしながら依然として屈折、湾曲する箇所が多く、また川幅も十分でなかったためしばしば氾濫していた。昭和 42 (1967) 年に始まった工事では、約 30 年かけて現在のようなまっすぐな流れになり、川幅も 2 倍弱に拡張されたため、50 年に 1 度の豪雨にも耐えられるようになったという。下条川は両岸にソメイヨシノが咲き乱れる桜の名所とされていたが、この改修工事により伐採せざるを得なかった。以前のような桜の名勝地となることを願い、市街地を中心にソメイヨシノが植樹されてきた。現在は春に「下条川千本桜祭」が開催されるなど、人々の目を楽しませるものとして一役買っている。

1-4. 商店街の発達（江戸から昭和まで）⁸⁾

江戸初期の明暦 4 (1658) 年に建設が始まった小杉新町は、旧北陸道に沿って商業的側面で発展し、また、宿駅としても栄えた。明治に入ってもなお商工業は盛んであった。明治 26 (1893) 年の記録によると、商業者 214 名、飲食店者 22 名、湯屋 8 名、理髪人 6 名、料理屋 6 名、職業者（勤め人）20 名、職工者（職人）50 名と非常に多くの人々が商工業に携わっていたことが分かる。新聞には頻繁に小杉町の商店が広告を出していたようだ。また、季節の節目には「大安売り」などを催して、近隣の農村からの買い出しに来る人でにぎわった。

商店の中には、片口、結城、赤壁、藻谷、青江といった有力な家も出てきた。彼らは有力商人であると同時に醸造業や製菓業の工場主であり、多くの水田を所有する大地主でもあった。そして県下に名だたる文人であり、地域を代表する政治家であり、論客でもあった。このような知識人を多く輩出していたことも小杉のひとつの特徴として挙げられる。

戦後には小杉町の商店街以外にも日用品を購入できる場所ができてきた。小杉町の南側にある太閤山には、昭和40年代に商店街や共同購入のコープ方式のスーパーマーケットが作られた。それ以前は、太閤山の住民は2kmほど離れた戸破・三ヶの商店街に買い物に行かねばならず不便であった。筆者も実際に小杉駅前から太閤山の商店街まで歩いてみたが、距離に加え太閤山にかけて上り坂になっているため、買い物帰りの荷物を持って歩くのは非常に気が重かったのではと予想される。また、少し遅れて昭和52(1977)年には小杉駅をはさんで南側に太閤山ショッピングセンター「パスコ」がオープンした。昭和40(1965)年ごろからマイカーによる買い物が習慣化され、広い駐車場を持つ店の需要が高まっていた。それに加え、太閤山やその周辺の地域の住民を対象とするだけでは成り立たないため、パスコは富山・高岡からの集客も狙って600台収容できる当時としては広い駐車場を作った。オープンから3日間で富山・高岡・福光・泊・金沢などから約11万人が訪れ、かなりの盛況ぶりだったようだ。このような時代の流れを受け、三ヶ・戸破地区の商店街では経営の見直しが迫られた店舗も多かったと考えられる。

2. 現在の商店街

筆者が調査を行った地域は、旧北陸道沿いの荒町、茶屋町、中町、諏訪町の4本の商店街とその周辺地域である。その範囲は以下の地図に示す。

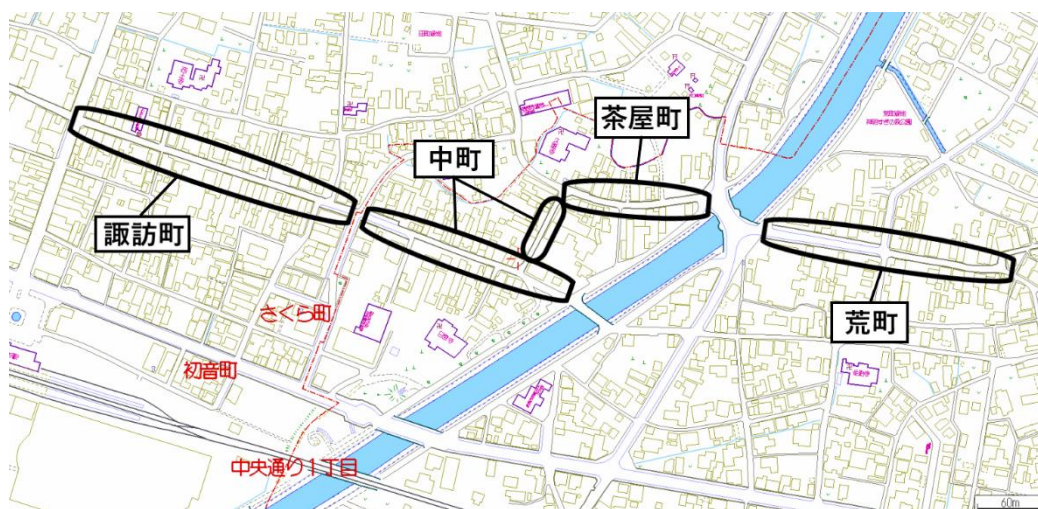


図8-4 調査範囲（ゼンリン電子住宅地図デジタウンより筆者作成）

2-1. 現在の商店街の様子

昼間の商店街はどの通りも人が歩いていることは少なくあまり活気がない印象を受けた。筆者が商店街で聞き取りを行った際、店舗に入るとインターホンが鳴って、店舗の奥から人が出てくることが多かった。インターホンがないところでは「ごめんください」と何度か言って、ようやく中から人が出てこられるといった具合であった。それほど頻繁に来客があるというわけではないのか、店先におられる人は少ないようである。商店街で店を営む方からは、「お店がどんどんしまっていくのは、後継ぎがいないからだと思う」という声や「パスコやアルプラザができてお客さんがそっちに買い物に行くようになり、人の流れが変わった」というお話を聞いた。

2-2. 店舗数の変化

現在は人通りも少なく活気もあまり感じられないが、以前は小杉村内外から人が集まる商業地であった。次第に衰退していった様子は商店街の店舗数の増減からも見ることができる。住宅地図を使用し、商店街の方が「繁盛していた」と感じている40年前頃から、20年ごとに店舗数の変化をまとめた。

以下の表では、店が扱う商品によりカテゴリ別に分類した。カテゴリは筆者が作成し、商店も筆者の判断で割り振った。生活雑貨やその他サービス業に含まれる店は、扱う商品あるいはサービスの種類が幅広いため、各年の表の下に記述する。

表8-1 昭和46（1971）年の商店街の店舗数

	常盤町	中町	茶屋町	荒町	計
食品	7	4	7	8	26
衣料品	8	6	5	5	24
理容	1	2	3	3	9
建築	3	3	2	0	8
生活雑貨	5	6	3	6	20
飲食店	2	1	0	1	4
その他サービス業	7	5	6	3	21
計	35	27	27	26	115

*生活雑貨・・・金物、薬局、化粧品、ローソク、燃料、文具

*その他サービス業・・・自動車、電化製品、郵便局、生命保険、製薬、商店（何を扱っていたか不明）、銭湯、医者、銀行、信用金庫など

表8-2 平成7(1995)年の商店街の店舗数

	常盤町	中町	茶屋町	荒町	計
食品	3	2	4	6	15
衣料品	6	3	2	5	16
理容	1	3	0	0	4
建築	3	3	0	0	6
生活雑貨	5	3	2	3	13
飲食店	3	4	0	1	8
その他サービス業	9	9	0	2	20
計	30	27	8	17	82

*生活雑貨・・・金物、薬局、文具、燃料、苗、たばこ、時計、陶器など

*その他サービス業・・・クリーニング、医者、郵便局、営業所、設計事務所、会計事務所手芸・編み物教室、信用金庫など

表8-3 平成30(2018)年の商店街の店舗数の変化

	常盤町	中町	茶屋町	荒町	計
食品	2	1	2	2	7
衣料品	1	1	1	2	5
理容	0	1	0	0	1
建築	1	1	0	0	2
生活雑貨	0	3	1	4	8
飲食店	2	3	0	2	7
その他サービス業	2	3	2	0	7
計	7	9	5	8	29

*生活雑貨・・・時計、生花、薬局、雑貨、金物、陶器

*その他サービス業・・・医者、郵便局、設計事務所

以上からは、まず昭和46(1971)年から平成7(1995)年にかけての茶屋町の店舗数の減少が著しいことが分かる。インタビューからは、荒町と茶屋町の間を流れる下条川の改修工事が行われたことによる影響がそのことに関係しているとわかった。下条川は大雨になるとしばしば氾濫し、この改修工事の契機となった昭和39(1964)年の豪雨災害では、旧小杉町の約53%の家屋が被害を受けたという⁹⁾。曲がりくねった川の流れを是正し、かつ川幅を広げるための改修工事は、昭和42(1967)年に下流から始まり30年以上の歳月をかけ

て平成 10（1998）年に完成した。この工事により茶屋町の約 4 分の 1 の土地が川底になるということで、店舗や住宅が立ち退きを求められたのである。これにより商店街の街並みが様変わりしたという声も聞いた。

また、平成 7（1995）年から平成 30（2018）年にかけて荒町の店舗数がほぼ半減したのに対して、一方で中町や常盤町はさらに大幅な減少傾向にあることがわかる。その理由としては、荒町には造り酒屋や醤油蔵を持ち古くから続く店がある一方、中町や常盤町にはそのような店がないことが考えられる。実際に商店街では、「荒町の商店街は（他の通りに比べ）古い歴史がある。醤油屋、造り酒屋、呉服屋が多く儲かっていたため、今お客さんが減っても大丈夫なのだろう」という声も聞いた。逆に中町や常盤町はそれほど長い歴史がなく、時代の流れで閉業した店が多いと考えられる。

2-3. 30 から 40 年前の商店街の様子

かつての、とりわけ 30 年から 40 年前の商店街の様子について、現在もお店を経営しておられる方々に伺った。

中町にある島種苗店の奥さんは、「35 年くらい前は繁盛していた。そのころは商店街の中を通るバスもあった。10 年ほど前からしもた屋（商売を辞めてサラリーマンに転職する家庭）が増えた。きつと後継ぎがいないからだと思う」と話した。

諏訪町と隣接する駅前商店街に創業 100 年を越える大江時計店がある。その 4 代目にあたるご主人が 30～40 年前の商店街の様子を教えてくれた。ご主人は昭和 52（1977）年に発足した小杉駅前通り商盛会の発足にも携わった。その頃は、通りに 45、6 軒ほどの商店が並び、とても繁盛していたという。「今は商店街の夏祭りはやっていないが、その頃（30～40 年前）は小杉以外にも、大門の方からもたくさん人が集まってきた。通りの真ん中に夜店を並べると、その両側をぶつかりながら人が歩いていた。大物の歌手を呼んだ歌謡ショーも、商工会からの補助金をもらわずに開催できるくらい儲かっていた」と繁盛していたころを思いだし、うれしそうに語った。

中町でスナック GO を営む大郷さんは、以前は家具屋を営んでいた。商店街が繁盛していた時の様子について、「小杉の商業圏は、南北は八尾から新湊まで、東西は呉羽から庄川と本当に広域から人が集まっていた。商盛会に加え薬業会もありバブルの頃はどこも儲かっていたと思う。年末の大売出しや初売りの時期は特に忙しかったので、紅白歌合戦は見えていなかった」と語る。また、大江さんと同じように商店が主体となっては盛大にイベントが行われていたエピソードを話してくれた。「各町内で商盛会があり、商盛会ごとに祭りをやる時もあったがいくつかの商盛会がまとまってやることもあった。歌謡ショーが目玉で、北島三郎など有名な歌手を呼び、小学校の体育館なんかにござを敷いて集まった。美空ひばりだけは、専用の控室やトイレを用意することなど条件が難しく呼べなかった」と当時の様子を楽しそうに語った。祭りは市など行政が主催することはまず無く、商店が協力して費用を集めていたようだ。その一例として歌謡ショーにかかる費用の調達の仕方を教えていた

だいた。まず、大きな商店の場合は1枚 3000 円ほどのチケットを何十枚か購入しておく。それを 3000 円より高い金額、例えば 5000 円以上の買い物をしたお客さんに1枚あげる。八百屋など商品単価の小さな商店の場合には、一定金額の買い物ごとに補助券を渡し、それが何枚かたまったらチケット1枚と交換するというようにしていたそう。このように、店の単価規模関係なく商店街全体で協力しあって祭りを運営していた。しかし、商店街を構成する商店が減っていけば運営組織である商盛会も成り立たなくなる。すると必然的に、人が大勢集まるような祭りやイベントが開催できなくなっていくと考えられる。

3. 地域活性化の取り組み

3-1. まちづくり協議会について

三ヶ・戸破地区には住民が主体となって地域活性化に取り組む「まちづくり協議会」という団体が存在する。この会は「小杉地区にある有形無形の歴史的・文化的地域資源を活用し、地域のにぎわい創出に関する事業を行い、活気ある地域づくりと、愛着を感じられるまちづくりに寄与すること」を目的に、平成 28 (2016) 年 4 月に結成された。現在は季節ごとに開催されるイベントの運営と、竹内源造記念館（詳しくは第 9 章第 2 節を参照）や小杉展示館¹⁰⁾の管理を主に行っている。主なイベントは4つあり、春には「鰻絵と下条川千本桜祭り」、夏には「下条川みこし祭り」、秋には「旧北陸道アート in 小杉」、冬には「ツウインクルナイト in 射水」がそれぞれ開催される。詳しくは第 4 節で記述する。

まちづくり協議会結成の背景には、様々な要因があった。第一に、まちづくり協議会が結成された平成 28 (2016) 年には、富山県が小杉で遂行していた「歴史と文化薫る街づくり事業」（詳しくは第 9 章第 5 節を参照）が行政の支援を受けられる最終年度の3年目にあたっていた。この事業の一環として、三ヶ・戸破地区の歴史的建造物群が残されている商店街の町並みを会場としたアートイベント「旧北陸道アート in 小杉」も行われており、その運営を引き継ぐ団体が必要であった。第二に、毎年8月に小杉庁舎前で開催されていた小杉神輿祭りが開催されなくなったことで町の活気がなくなっているのではないかと気に掛ける人々がいた。第三に、リニューアルを終えた竹内源造記念館の所有権が、平成 28 (2016) 年に市から民間に移行する予定であった。移行した後の活用法を検討する中で、竹内源造記念館を民間団体の拠点にしてはどうかとの意見が出てきた。以上のことが同時期に起こり、竹内源造記念館を拠点として活動するまちづくり協議会が結成された。

3-2. 協議会に参加する人々

会員の区分には、1) 正会員、2) 地域サポーター会員、3) 賛助会員の3種類がある。正会員はこの会の目的に賛同して入会した個人及び団体であり、イベント等の活動を行なう際の中心的役割を担う。平成 30 (2018) 年 10 月現在で 36 名が加入している。地域サポーター会員は戸破・三ヶを構成する世帯全体を指し、1世帯あたり 300 円／年を納めている。

る。賛助会員はこの会の事業を賛助するために入会した個人及び団体であり、資金援助を行う。また、各町内の町内会長は代議員としてまちづくり協議会の総会やイベントの運営に参加する。町内会長は持ち回りのため、住民が交代でまちづくり協議会の活動に携わり、どのような活動を行っているのか知ることができるシステムになっている。

調査では、積極的に活動されている5名の正会員に、協議会に参加しているきっかけなどを聞いた。現在、竹内源造記念館の館長を務めておられる前田二三夫さん（64歳）は、平成25年に市の職員として竹内源造記念館に派遣され館長となった。平成28（2016）年に記念館の管理権が市から民間へ移される際、まちづくり協議会の事務局（拠点）として活用できないかという案が出た。その相談を受け、市の職員を引退した現在も館長を務めながら正会員にもなっている。

前田さん以外の4名の正会員は、全員が平成14（2002）年から始まったイベントの「旧北陸道アート in 小杉」（以後「アート in 小杉」と記す）に参加したことがきっかけで、まちづくり協議会に参加しているということであった。

射水市の大島地区で広告代理店兼イベント会社を経営されている島崎洋一さんは、協議会では主に広報を担当されている。アート in 小杉には第4回ごろから取材する側として顔を出しており、長年関わる間に協議会に参加するようになったと話す。

商店街でスナックを営む大郷さんも島崎さんと同じ時期にアート in 小杉に参加するようになった。「イベントには、商店街で働く人だけでなく、サラリーマンとして外部に働きに出ているが積極的に参加している人もいたので、地元の者（商店街の人）がもっと頑張らないと！と思った」と話した。

戸破にある金胎寺の住職をされている志村慧雲さんは、もともと荒廃していた寺の再建を通して地域と関わるようになったお坊さんである。アート in 小杉には実行委員の方に誘われて参加するようになり、期間中はアーティストを寺に呼んでコンサートなどを行っている。協議会の活動については「アート in 小杉は多くの人に寺のことを知ってもらう良い機会になっていると思う。その他にもいろんな行事に参加しているうちに、馴染みすぎていつの間にか（協議会に）参加させられていた」と笑って話した。

戸破でクリーニング屋を営む室江則光さんは、第3回頃からアート in 小杉に参加している。「元々小杉連合青年団に入っており、そこで企画して実行することの楽しさを実感した。アート in 小杉には幼馴染に誘われて参加するようになった」と話した。現在は特技のパソコンスキルを活かしてポスターやチラシの制作を担当している。

活動の背景にある思いは各々異なるが、多くの人がアート in 小杉を通してまちづくりに携わるようになり、その人たちが中心となってまちづくり協議会で活動しているようである。

4. 下条川みこし祭り——まちづくり協議会のイベントその①

現在まちづくり協議会が主催するイベントは1年を通して4つある。春には「鰻絵と下条川千本桜祭り」、夏には「下条川みこし祭り」、秋には「旧北陸道アート in 小杉」、冬には「ツウインクルナイト in 射水」がそれぞれ開催される。本節と次節では、筆者が実際に足を運んで体験した下条川みこし祭りと旧北陸道アート in 小杉の2つに焦点を絞り紹介する。

4-1. 小杉みこし祭りについて

この祭りはもともとふるさと創生事業により交付された1億円を資金に開催された祭りで、「小杉みこし祭り」として平成元（1989）年から継続して行われていた。背景には、新しくできた太閤山ニュータウンの住民たちが交流できるように、住民参加型の祭りがあつたらよいとの思いで開催されたという。祭りは市など行政が主催し、祭りの前後に神社でのお祓いなどといった神事は含まれず、宗教色は排除されている。みこしの数は、町内会の神輿13基に加えて、企業や住民が手作りした創作みこしが多数あり、多い時で合わせて200基ほどが参加していた年もあったそうだ。戸破で民生委員を務める森田ひとみさんは当時を振り返り、「昔はもっと盛大にやっていた。町内ごとに出す本みこし10基と創作みこしが多数あった。私の町内会で作成したコカコーラの缶の創作みこしが賞を取ったこともある」と語る。

小杉は新湊や富山、高岡のベッドタウンという側面が多く観光資源があまりないため、祭りが開催されてから6年ほど経つと、神輿祭りを外部へアピールするための観光資源として活用しようという声もあがった。射水市が広報活動に力を入れていたが、本来の「住民の交流のため」という趣旨からそれていっているのではないかという懸念もあったようである。

この小杉みこし祭りがまだ開催されていた当時の様子は、本研究室を平成28（2016）年に卒業した学生の卒業論文からうかがえる¹¹⁾。

小杉みこし祭りも下条川みこし祭りと同様に夏に開催されており、著者が調査した平成27（2015）年は8月の最終日曜日に行われたようだ。小杉駅の南側に位置する射水市役所小杉庁舎をメイン会場とし、本神輿パレードコンテストや創作神輿パレードコンテストの他、ステージイベントや出店、歌の森運動公園（射水市役所小杉庁舎の通りを挟んで向かい側）で行われる納涼花火大会を楽しむイベントだった。

創作神輿は担ぐための台座と上に載せる部分を企業や住民がテーマに沿って作るというものであった。テーマは毎年変わるようで、平成27（2015）年は射水市合併10周年を記念し「心つなげて、輝く未来へ」というテーマを掲げ、射水市全体の一体感を表現した。

各町の振興会がチームを組んで出場する本神輿パレードには、三ヶ、黒川、大江、戸破、金山、池多、太閤山、南太閤山、中太閤山まちづくり地域振興会など9つの振興会が参加していた。下条川みこし祭りへの振興会の参加チームが3団体だったことを考えると、ずいぶ

ん参加チームが多かったようだ。本神輿パレードは、観客や来賓の前で神輿を担ぎ、先導役が続いて歩きながら掛け声とともに神輿を上下させる。審査員に優秀だと判断された振興会には、本神輿練りまわし賞が授与される。

創作神輿パレードコンテストには企業や学生、地域住民で構成された 11 チームが参加していた。創造性、デザイン、楽しさなどを競い合うらしい。神輿の周りで踊ったり、歌ったりするなどアピール方法は本神輿に比べ自由度が高い。

4-2. 下条川みこし祭りの様子

小杉みこし祭りは平成 28（2016）年に終了となった。20 年以上続いた祭りが途絶えてしまった背景には、高齢化による人手不足が大きいようだ。神輿を担いでいた方々が 50 代や 60 代になり神輿を担ぐのが厳しくなった。また、負担が大きいことから創作みこしも作る人が少なくなり、祭りが中止になる数年前には多い年の約半分にまで少なくなっていったそうだ。しかし、実際に中止になると夏のイベントが無くなってしまうため、何か賑わいをもたらすイベントをやろうと、協議会が平成 29（2017）年から下条川みこし祭りを開催した。



写真 8-1 竹内源造記念館前でパフォーマンスを行う三ヶの本御輿

下条川新伝馬橋周辺を会場に行われる「下条川みこし祭」は、平成 30（2018）年で 2 年目を迎える。8 月 12 日に行われた祭りには子供からお年寄りまで多くの地元の方が集まった。名前の通り、みこしが町内を練りまわるのが 1 つの目玉で、三ヶ、戸破、伊勢領の各町内会のみこし 3 基と子どもみこしが 1 基、そして福祉施設の方が制作した創作みこし 3 基が町

を練り歩いた。町内会のみこしは 15 時から約 40 分かけて各々の町内を回り、その後西楠木町の子どもみこしと創作みこしも加わり藤井右門公園に集合した。その後新伝馬橋を通過して、竹内源造記念館前にて 16 時半ごろからみこしのパフォーマンスが行われた。

16 時から、中町商店街から竹内源造記念館前にかけて食べ物やおもちゃの屋台が並ぶと少しずつ人が集まりはじめ、薄暗くなる頃には道を並んで歩けないほど多くの人々が来ていた。大型トラックの荷台を活用したステージでは、大道芸人やシンガーソングライターが登場し、時折歓声が上がっていた。地元出身の歌手、庄司みずほがステージに登場すると、ステージ前のブルーシートがいっぱいになるくらい人だかりができていた。



写真 8-2 練り歩く創作みこし

また、まちづくり協議会のメンバーと富山福祉短期大学の学生らが手作りしたお化け屋敷が藤井右門記念公園に作られた。筆者も制作現場で準備を手伝わせていただき 2 回ほど体験したが、使われている人形がリアルで終始驚かされた。まちづくり協議会会員によると、お化け屋敷は 2 日間かけて作成され、使用される人形は有名なお化人形職人の方の作品で、子供だけでなく大人も怖がるほどのリアルさが特徴だそうだ。昨年と同様に好評で、肝試しが開催されている 3 時間ずっと客足が絶えなかったらしい。祭りの最後には、新伝馬橋の下流で花火が打ち上げられた。打ち上げの時間は 5 分から 10 分間で短いものの、川幅を目一杯活用して観客を楽しませていた。

4-3. 地元住民の声

小杉神輿祭りと下条川みこし祭りのイベント内容を見比べてみると、創作神輿を加えた神輿パフォーマンスや打ち上げ花火など引き継がれたものがある一方で、お化け屋敷が新たに加わったり会場の場所を竹内源造記念館周辺に移動させたりと、変更点も見られる。主催者側の意向としては、元あった祭りを復活させるというよりは、可能な範囲で地域住民の夏の楽しみを創り出し、賑わいを保ちたいという思いが強いように感じた。

祭りのポスター制作を担当された島崎さんは、「地域の人は子供も含めて当日までに神輿を担ぐ練習をしたりして、祭りを楽しみにしている。また、創作みこしを出した障がい者福

祉施設の人たちは、祭りが打ち切りになったときは『楽しみがなくなった!』と残念がっていたが、復活したので楽しそうにしているようだ」と話した。まちづくり協議会会員の室江則光さんは、「協議会も人のネットワークが少しずつ広がり、ステージイベントにいろんなアーティストを呼べるようになってきた」と話す。同じく協議会会員の前田さんは「30～40代は子供のころからみこし祭がある環境で育った人が多いかも。その人たちが小杉に戻ってきたときに『まだあったんだ!』と懐かしんでくれることもある。射水市は山側に来ると特徴が無いことが多いので、『小杉ってどんな町?』といわれたときに『夏にはみこし祭って言う祭りがあってね・・・』と言えるようにずっと続けていきたい」と思いを語った。

5. 旧北陸道アート in 小杉——まちづくり協議会のイベントその②

秋には、三ヶ、戸破地区の旧北陸道沿いの町並みを舞台にアート作品を展示するイベント「旧北陸道アート in 小杉」（以後「アート in 小杉」とする）が、毎年9月の最終土日に開催される。この2日間、旧北陸道沿いの商店や施設、民家の一部を解放してアート作品を展示、販売する。訪れた人は街並みを歩きながらアート作品を鑑賞できるほか、竹内源造記念館や複数のお寺や中庭のある商店で、楽器の演奏や合唱、落語を聴くことができる。また、小杉駅や荒町通りでは小杉高校吹奏楽部の演奏や小杉小学校の児童によるソーラン節を披露するイベントも開かれる。会場では、手書きで旧北陸道沿いの展示や催しものが紹介されている地図が配られるほか、手作りの看板も立てられる。

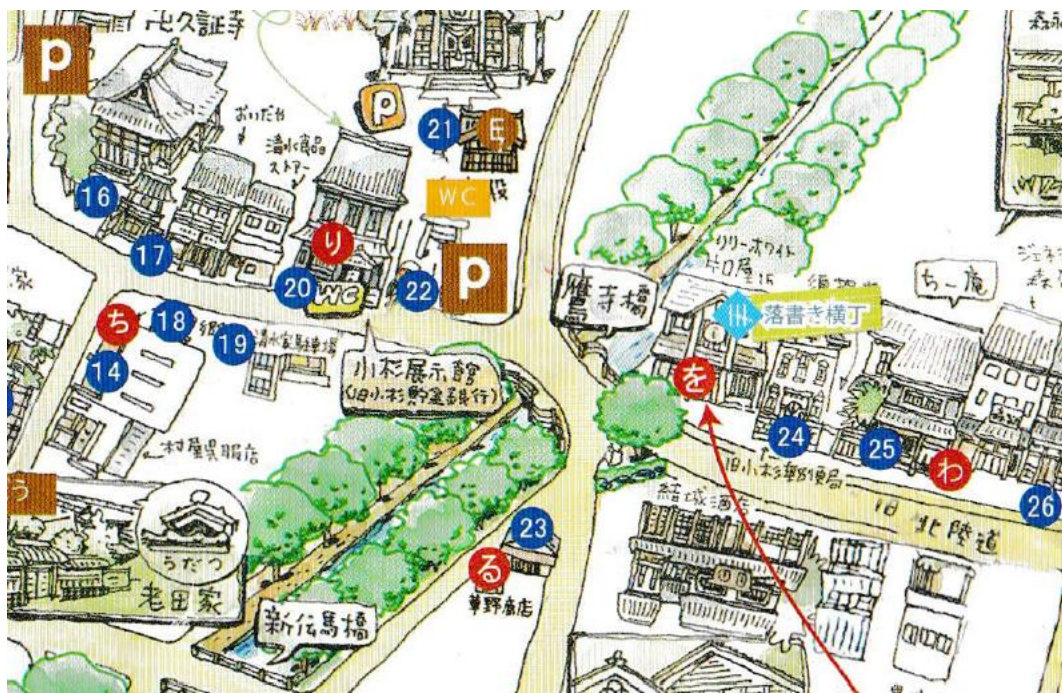


図8-5 アート in 小杉のパフレットの一部分

5-1. 発足から現在までの過程

「旧北陸道アート in 小杉」は平成 30 (2018) 年で 17 回目を迎えた。もともと富山県による「まちなみアトリレー」の第 2 回目の参加地域として始まった。「まちなみアトリレー」とは、富山県内の歴史的な街並みを持つ市町村で、アートイベントをリレー式に開催するという取り組みである。平成 8 (1996) 年から八尾の町を会場に開催されてきた「坂のまちアート in 八尾」を契機に、第 1 回目の平成 13 (2001) 年は八尾、井波、婦中、福野の 4 か所で、翌年の第 2 回目は、新たに小杉を含む 5 か所を加えた 9 か所で順に開催された。

アート in 小杉の発足人の一人で、戸破荒町に店を構える森永酒店（現イタリア料理店ユニコネルモンド）・店主の森永譲二さん（60 歳）は、まちなみアトリレーに参加する前から様々な形で三ヶ、戸破の商店街の活性化に取り組んできた。酒蔵を活かして何かできないだろうかとの思いから、酒蔵でコンサートを開催したり、店の隣にある旧小杉郵便局を掃除して 30 年ぶりにギャラリーとして開放したりと、建物とアート作品を融合させてその魅力を発信してきた。その活動が富山県立近代美術館の当時の館長の目に留まり、「富山県全体でやっているアトリレーに参加しないか」と誘われたことが、アート in 小杉が開催される契機となった。

アート in 小杉は、次第に規模を拡大してきた。開催当初は、森永さんを中心とした数人の実行委員で運営を行っていた。会場となる場所も荒町通りだけであった。その後、戸破に本部を構える射水市商工会も加わり、実行委員の方々が一軒一軒回って声かけをした結果、荒町から中町、本中町、白銀町と、順に西に向かって会場が広がった。平成 28 (2016) 年にまちづくり協議会が主体となって運営を行うようになってからは、参加する一般住民の数も増えたという。まちづくり協議会会員の島崎さんによると、第 11 回（平成 24 (2012) 年）が転機で、三ヶの振興会が協力してくれるようになったため駅前まで出店が出るようになったそうだ。また、「三ヶの旧北陸道沿いの旧家である赤壁邸が庭を開放した際には、近所の人も見せて見せて！と集まってきた」と当時のエピソードを話してくれた。

5-2. 平成 30 (2018) 年の様子

平成 30 (2018) 年は、9 月 29 日と 30 日の 2 日間開催されたが、台風の影響が懸念されたため屋外のイベントが 30 日の午後から中止となった。崩れがちな天候の中、訪れた人々は傘をさして商店街を歩き作品を鑑賞していた。

小杉の特徴の一つともいえる小杉焼¹²⁾や三ヶ出身の日本画家である郷蔵千靱^{ごうくらせんじん}の作品も展示された。また、住民が作成した鰻絵が商店街の軒先に飾られるなど、地域に根



写真 8-3 民家の塀に飾られた鰻絵

付いてきた文化を広く周知してもらおうという工夫が見られた。

また、地元の方が作った折り紙や絵葉書、油絵やパッチワークに加え、チョークアートや絵画、アロマオイルやハンドクリームを使うハンドトリートメントの体験といった、地元以外の作家の方の実演、展示もあった。常盤町の青井呉服店にて絵画を展示、販売した西本佳菜未さん（30 歳）は、アート in 小杉への参加申し込みのために今年の 7 月に竹内源造記念



写真 8－4 西本さんの鰻絵看板
（途中段階のもの）

館を訪れた。もともと射水市出身ではあるが、小杉に鰻絵の文化があることは記念館を訪れて初めて知ったという。「その土地にしかない文化があるならやってみよう！」と思い、7 月の鰻絵体験教室では西本さんの母親が営むハンドトリートメントサロンの鰻絵看板を作った。その様子を筆者も見学させていただいた。今回のイベントでは、自身が作成した猫の絵画やポストカード、バッグなどを展示、販売した。また、西本さんの母親もハンドトリートメントの体験を同ブースで行っており、完成した鰻絵看板を飾っていた。

竹内源造記念館や金胎寺、小杉駅前などでは数々のコンサートが行われた。金胎寺ではアフリカンパーカッションのコンサートが開かれ、本堂には入りきらないくらいの人々が聞きに来ていた。5 人のパフォーマーの演奏を聴くほか、観客も実際に独特なリズムに合わせて太鼓をたたいて楽しんでいた。子供連れからお年寄りまで幅広い年齢層の人が集まり、演奏の合間には住職の面白い話で笑い声が上がった。竹内源造記念館で開催されたコーラスのコンサートには、20 脚ほどあった椅子がほとんど埋まるくらい人が集まっており、観客もコーラス隊と一緒に歌ったりしながら楽しんでいた。途中、館長から会場に飾られた鰻絵作品の解説がされると、会場に居る人たちはうなずきながら聞き入っていた。

常盤町の永森家具店では、箆笥などの家具と外部の折り紙作家の方の作品をあわせて展示した。店主の女性が家具を一つ一つ丁寧に紹介してくれ、小学生のお孫さんも一緒に来客をもてなしていた。他の店舗や通りでも小学生や中学生が店先に立ってもてなす様子が見られ、商店街で店舗を構える人が孫世代と交流する良い機会になっているのではないかと感じた。

5-3. アート in 小杉に集まる人々

アート in 小杉の出展者は自ら応募する人のほかに、会員が来てほしい作家を呼ぶということもある。しかし、会員の室江さんは「若者にもっと来てほしいので、(若者に) 人気がありそうな作家を呼ぼうとしたが、なかなか難しい」と話した。開催当初は、井波彫刻の作家など地元以外から参加するプロの作家が多く参加していたようだ。しかし、一般の人が趣味で作成した作品を展示するようになりイベントの趣旨が変化するにつれ、そのような人たちの割合は減っていったという。作家を本業とする人たちにとって、この種のイベントは作品を觀てもらおうと同時にそれらを販売する重要な機会でもある。そのため、売り上げの期待できないアート in 小杉のようなイベントには参加しづらいということのようだ。

アート in 小杉の集客には、口コミが有力なようだ。觀客の多くはアート in 小杉に参加する出展者の知り合いや家族や親戚だという。一方、まちづくり協議会でも宣伝活動には力を入れている。会員が作成した見開きのチラシは、射水市内に全戸配布している。事前に出展する作家の活動を新聞に取り上げてもらうほか、ラジオのFMいみずの番組にまちづくり協議会のメンバー数人が出演して宣伝を行うなど、メディアも活用している。その効果もあってか、近隣以外からも人が集まる。竹内源造記念館の前田館長は「お客さんの多くは地元ではなく少し離れた地域からくることが多いようだ。実際、イベントに自家用車で来て、駐車場があるか聞かれる人が多くいる。そのような方々のためにまちづくり協議会でも駐車スペースを設けるようにしている」と話した。

5-4. 新たな課題

現地に足を運び、会場を見て回ったり関係者にインタビューをしたりするなかで、いくつかの課題があることが分かってきた。

まず挙げられるのが、会場の規模が拡大していることである。規模の拡大は一見イベントが成功した結果のように思えるが、実は課題も含まれている。町を歩いてアート作品を見て回る觀客の年齢層は高齢者が多く、町のあちこちを歩き回るとは体力的に辛い。まちづくり協議会会員の室江さんは「かつて会場内で電気自動車を走らせて移動を楽にしようというアイデアが出たこともあるが、不具合で実現しなかった。人力車を走らせてはどうかという案も出たが、継続的に人手を確保することは難しい」と話した。移動の不便さへの対策については、これから考えていく必要があると感じた。また、会場の規模を歴史的建造物群がある下条川周辺に絞ってはどうかという意見も聞いた。アート in 小杉に開催当初から携わっていた森永さんは、「旧郵便や旧銀行(現小杉展示館)、旧役場(現竹内源造記念館)、蓮王寺、土蔵群など歴史的建造物は下条川の周辺に集まっている。そこでアート in 小杉を開催することで物語性を持たせることができるのではないかな。アート in 小杉の会場を小杉駅前まで広げることで駅前の再開発にはつながるかもしれないが…」と話した。このように思い切って会場の規模を縮小・限定することで、よりイベントの密度を高めて独自性を出すことができるという意見もある。

そして、イベント内容に関してもマンネリ化しているという意見がある。現在、アート作品は商店街の店舗を借りて展示しているが、それでは客足は遠のくと森永さんは指摘する。町並みとアートをコラボさせたイベントを最初に行った八尾を見学した時には、その展示のクオリティの高さに感心したと話し、「(八尾のように) アーティストには空間もデザインしてほしい。作品を展示するだけでは人は見にこないと思う」と語った。

アート in 小杉は、小杉に残された歴史文化の魅力を発信する機会であり、地域に賑わいをもたらす重要な機会でもある。住民が暮らす旧北陸道沿いの街並みを会場とするなら、地域住民の声もくみ取る必要がある。加えて作家や観客など多方面からの要望を取りまとめることは難しいと思われるが、誰のためにやるのか、開催することでどんな効果を期待するのかなど、改めてイベントの方向性を決める必要があると感じた。

6. まとめと考察

かつて北國街道沿いに形成された三ヶ・戸破の商店街は、江戸から昭和まで長い間周辺地域から人が集まる商業地であった。醸造業や製菓業に携わる有力な商家は、県下でも名だたる知識人、政治家を多く輩出した。商店街の住民たちが繁盛していたと話す 1970～80 年代には商店街全体で 115 店舗あった。しかし、しだいに商店数が減少し、平成 30 (2018) 年現在では商店街全体の店舗数は約 4 分の 1 にまで減少している。その要因としては、商店街の中を流れる下条川の改修工事に伴い移転・閉業した店があったこと、周辺に大型ショッピングセンターができるなど三ヶ・戸破地区の商店街以外の選択肢が増えたこと、自家用車で買い物に行くことが多くなり客足が遠のいたこと等が考えられる。

地域の中核を担っていた商店街が衰退していき活気がなくなったことに加え、以前からのまちづくり活動を引き継ぐ組織が必要となったことを契機に、平成 28 (2016) 年に三ヶ・戸破の住民による「まちづくり協議会」が発足した。同協議会は 8 月には小杉みこし祭り、9 月には旧北陸道アート in 小杉など季節ごとのイベントを開催し、地域内外から人が集まり交流できる機会を提供してきた。地域の有志がポスター制作や D I Y、経理といった各自の得意分野を生かして運営を行う。発足して平成 30 (2018) 年で 2 年目ということもあり、イベント内容や運営方法においては問題点や課題も見られる。9 月に開催される「旧北陸道アート in 小杉」では、会場の範囲やイベントのコンセプトなどを見直すことが課題として挙げられる。

さらに根本的な問題としては、商店街の住民や関係者たちの間で、まちづくりに対する意識の違いが見られるということである。地域住民の中にはまちづくり活動に否定的な意見を持つ人もいて、そのためにイベントや町の整備において思うように住民からの協力が得られないこともあるという。また、地域の外から移住してきた人からは、「よそ者に厳しい風潮がある」という印象をもたれることも、今回の調査から見てきた。地域に外部の人を受け入れる風潮がないことは、もっと多くの人に足を運んでもらおうとする際に難点とな

りそうだ。なかには、地域の外からまちづくり協議会に参加して積極的に活動に取り組む人もいて、それを見た商店街の人が刺激を受けるという例もある。しかし、閉業した店や今後営業する展望の少ない店が多い商店街から活気を作り出すのは難しいのが現実だ。商店街の人の話や現在の店主の年齢から推測すると、現在は営業している店でも世代交代して続けていくことは考えにくい状況である。商店街から少し離れたところの住民でまちづくりに携わる人からは、あまりにも商店街の活気がないため「商店街から町おこしをすることはきわめて難しいのではないか」という声も聞いた。何を中心に据えてまちづくり活動を行うのか、またその活動によりどのような町にしたいのかなどがまだ明確でない、あるいは個人によって意見が異なることもありそうだ。今後のビジョンを協議会のメンバー、そして住民の間で共有、統一していくこともまちづくり活動を進めていく上で重要な課題となってくると思われる。

現在の状況を客観的にみると、まちづくり活動を進めていくには困難なことが多く、どれだけ実現させられるか不透明なように思われる。しかしながら、まちづくりに携わる人たちの多くは非常に熱意をもって取り組んでいる。実際、調査をするなかで、まちづくりに携わる人たちがとてもエネルギーに驚かされた。まちづくり協議会の会員の方に、まちづくりに携わっている背景についてお話を聞いた。すると、「計画して実行することが好き」「よそから来て、地域になじんでいきたい」「特技を生かしたい」「今ある地域の賑わいを保ちたい」「もっとこの地域の魅力を発信することで、町の人に誇りを持ってもらいたい」など様々な思いを持っておられた。まちづくり協議会が発足したことによりこのような様々な思いを、イベントを開催し賑わいを作り出すという形で地域に還元することができるようではないだろうか。結果として、一度はなくなってしまった小杉みこし祭りを新たに下条川みこし祭りとして開催し、周辺地域の住民の夏の楽しみを作り出すという成果につなげることもできた。アート in 小杉の開催に当たっては、まちづくり協議会が主催するようになったこともあり、より多くの地域住民の協力を得ることができるようになったという声を聞いた。その地域で生活する人が積極的に活動に参加し協力を呼びかけることで、より多くの地元住民が興味を持ち、活動に参加しやすくなるという相乗効果を生み出している。こうしたまちづくり活動がイベント等を通して形になっていくことこそが、携わる人たちにとって大きな励みになっているのではないだろうかと感じた。そのため、「もっとこうしたい」「こんなこともやってみたいと思っている」と熱心に活動に取り組まれている方が多いのではないだろうか。

まちづくり協議会は、まだ発足して2年と日が浅く、手探りな点も多々あると思われる。しかし、住民が主体となって地域を見直す主要な団体として今後も活動を深め、三ヶ・戸破の町にさらなる賑わいが生まれることを期待したい。

おわりに

いろんな方にお話を聞く中で、昔のお祭りの様子や商店街での買い物のことなど生活の一部から抜き取ったようなエピソードを聞けることがあった。「自分の店に来てくれるお客さんと一緒にご飯を食べに行ったり、お客さんの家にも行ったりすることがあり、距離が近いものだった」「子供の学生服は商店街の〇〇さんのお店でそろえていた。店によって少しずつデザインが違ったの」といったお話は、商店街という場所になじみがなかった私にとって、とても興味深いものだった。そのため、本題を逸れて聴き入ってしまうことが度々あった。また、商店街のお店の方に、昔どんなお店が近所にあったか尋ねてみた。どの方も、自分の店がある通りにあった店をほとんど覚えていて、すらすらと説明してくださるので驚いた。商店街での買い物が日常的に行われていた時には、住民同士の交流も現在よりずっと盛んであったと想像される。

調査を通して、住民の話からかつての商店街を中心とした人々の暮らしを垣間見ることができた。スーパーやインターネット上での買い物が主流となる現在の生活との変化は、時代の流れの中では必然であり、小杉に限らずどこの地域でも見受けられることだと思う。それを受け止めながらも新規性を取り入れ業態変化し、存続していく店も増えているようだ。小杉にも酒蔵を改装したイタリアンレストラン・ユニコネルモンドを筆頭に新しい切り口で存続の道を探っている店もある。そのような商店自体の取り組みに加え、商店街とその周辺でのイベントといったまちづくり活動がきっかけとなって、一人でも多くの人に商店街の記憶が受け継がれていくことを願う。

謝辞

今回調査を行うにあたり、三ヶ・戸破地区の方々には大変お世話になりました。竹内源造記念館の前田館長とスタッフの皆さまには、調査の初期から長い間お世話になりました。インタビューを行うときにはいつもスペースを貸してくださり、時には尋ねた事柄について詳しい人を紹介してくださいました。何より、訪ねるたびに笑顔で迎えてくださったので、インタビュー前でもいづらか緊張をほぐすことができました。ユニコネルモンドの森永様、まちづくり協議会会員の大郷様、島崎様、志村様、室江様には、何度もインタビューをお願いしてしまいましたが、いつも快く協力していただきました。また、射水市商工会小杉本所の竹部様、山本様には様々な場面でお世話になりました。MINCHI の西本様からは資料を頂きました。お世話になった全ての方のお名前を列挙することはできませんが、皆様のおかげで無事に報告書を書き終えることができました。本当にありがとうございました。

注

- 1) 『小杉町史』 p. 489. 「小杉まちづくり協議会ホームページ」

〈<https://kotee.net/page-440/>〉 (2019/01/28 閲覧)。ふるさと再発見事業編さん委員

- 会『ふるさと再発見 旧北陸道小杉宿に行く』（戸破地域振興会・三ヶ地域振興会発行、2011年）p.12より。『週刊日本の街道 第51号 北国街道越中道』（講談社、2003年）p.4より。
- 2) 街道に沿って一里（約4km）ごとに設けられた里程標。高さ1.5mほどの塚を築き、その上に榎や杉などの丈夫な木が植えられ、木陰で旅人が休息をとれるように配慮されていた。
- 3) 『ふるさと再発見 旧北陸道小杉宿に行く』p.21より
- 4) 高請地（^{たかうけち}年貢賦課の対象となる耕地あるいは屋敷地）を所有し検地帳に登録された農民のこと。
- 5) 加賀藩は、窮乏する農民に対して「作食米」と呼ばれる米を貸し付け、安定した農作業を推奨した。この作食米を納めたのが作食蔵である。
- 6) 法令を板面に記して掲示し民衆に周知させる場。
- 7) 『小杉町史』pp.505-509より
- 8) 『小杉町史』pp.131-135、pp.896-900より
- 9) 『ふるさと再発見 旧北陸道小杉宿に行く』p.33より
- 10) 「小杉貯金銀行」の社屋として明治44(1911)年に建てられ、その後、昭和18(1943)年に北陸銀行小杉支店となり昭和54(1979)年まで営業が行われていた。同社の新社屋への移転を期に町が譲り受け、昭和61(1986)年に一部を改修し小杉町民展示館として開館した。国登録有形文化財に指定され、現在は郷倉千靱画伯遺品や小杉焼の常設展示がされている。
- 11) 上野慎司「ニュータウンにおける祭りの意義―射水市小杉地区を事例として―」富山大学人文学部文化人類学研究室、平成27年度卒業論文
- 12) 小杉焼…文化年間(1804～1818)から明治30(1897)年頃までの約90年間、4代にわたって作られた焼き物である。緑釉の物は「小杉青磁」とも呼ばれ地方窯の中でも全国屈指と高く評価されている。形が特徴的な鴨德利や瓢德利が有名である。

参考文献

- 上野慎司「ニュータウンにおける祭りの意義―射水市小杉地区を事例として―」富山大学人文学部文化人類学研究室、平成27年度卒業論文。
- 楠瀬勝編『小杉町史 通史編』小杉町、1997年。
- 小杉小学校社会科研究部『私たちの下条川』小杉小学校社会科研究部、1982年。
- 小杉町民図書館編『下条川の歴史資料集 小杉町民読本シリーズ5』小杉町民図書館、2004年。
- 小杉町『人、響き合う旬のまち 小杉町閉町記念誌』小杉町、2005年。
- 小杉町教育委員会『私たちの小杉町 100年のあゆみ』小杉町立中央公民館、1989年。
- ふるさと再発見事業編さん委員会『ふるさと再発見 旧北陸道小杉宿に行く』戸破地域振興

会・三ヶ地域振興会、2011 年。

『週刊日本の街道第 51 号 北国街道越中道』講談社、2003 年。

参考にしたウェブサイト

「小杉まちづくり協議会ホームページ」〈<https://kotee.net/page-440/>〉（2019/01/19 閲覧）

「旧北陸道アート in 小杉ホームページ」

〈<http://hokurikudouart.web.fc2.com/top/streets/streets.html>〉（2019/01/19 閲覧）

第9章 「鰻絵のまち小杉」ができるまで

山口 昂良

はじめに

私が初めて小杉を訪れたのは2年次の2017年10月だった。そこで「鰻絵」という言葉を初めて聞いたが、その時は「そういうものがあるのか」くらいにしか思っていなかった。翌年の春休みには、初めて竹内源造記念館を訪れた。正面入り口から入ってすぐ、目の前に見えた竹内源造の作品「双龍」に圧倒されたのを覚えている。それまで、私は芸術に全くと言って良いほど無関心で、鰻絵というものの存在すら知らなかった。また、漆喰はもちろん左官の仕事についても知っていることの方が少なかつただろう。しかし、竹内源造記念館で、数々の鰻絵作品とそれらを制作した竹内源造を始めとする左官職人についての話、鰻絵によるまちづくりの話などを聞き、鰻絵に興味を持つようになった。そして、小杉に住む人にとって鰻絵とはどういう存在なのか、鰻絵を使ってどのようにまちづくりが行われているのかについて調査を行うことに決めた。

調査では、小杉の鰻絵に関するいくつかのパンフレットや文献を参考にした。また、竹内源造記念館のボランティアさんや富山県内でも3名しかいない鰻絵に精通している左官職人の方々に、鰻絵や左官の仕事について聞き取りを行った。同様にまちづくりについて、以前小杉を担当していた射水市の職員の方、古くから小杉のまちづくりに携わってきた方にも聞き取り調査を行った。また、竹内源造記念館で実際に鰻絵の制作を体験して理解を深めた。

本章では、第1節で鰻絵の概要と歴史を述べる。第2節では、江戸時代に宿場町として発展した小杉の建物を支え、数々の優れた鰻絵作品を生み出した小杉左官の歴史とその代表的な人物である竹内源造について述べる。また、それら小杉左官の作った鰻絵を保管するという重要な役割を果たし、「鰻絵のまち小杉」の拠点にもなっている竹内源造記念館について紹介する。第3節では、実際に鰻絵を作ることができる富山県内の左官職人について、それぞれの方の来歴や鰻絵との関係などを紹介する。第4節、第5節では、行政主導の事業が行われる前後に小杉で行われた鰻絵に関する取り組みを紹介する。その中で、古くから鰻絵によるまちづくりを行ってきた田村京子さんの語りも記述した。

1. 鰻絵の概要¹⁾

鰻絵とは、城郭・寺院・土蔵などの土壁の表面を塗る材料に使われた漆喰を盛り上げて、レリーフのように立体的に描いたものである。絵画と彫刻の両方の表現技法が融合しており、左官職人が鰻を使って作ったことから「鰻絵」と呼ばれている。材料としては牡蠣殻を

焼いて作ったカキ灰と石灰、砂、ふのりを混ぜ合わせ、つなぎとして麻やわらを臼でついた「すさ」を練りこみ、粘土状に練り上げて使う。漆喰の白色を活かした作品や、絵の具などで彩色を施した作品がある。大正・昭和時代には、建材として一般的となった、コンクリートやモルタル（セメント）などを用いた鰻絵も作られている。富の象徴である土蔵の飾りとして作られたものが多く、龍・虎・鶴・亀・恵比寿・大黒など、火除けや招福の祈りを込めた縁起の良い絵柄が好まれた。施主が左官に希望を伝えて鰻絵制作を依頼する場合と、左官が長い間お世話になったお礼に鰻絵を作る場合とがあった。



写真 9-1 鰻絵（竹内源造作「唐獅子牡丹」・竹内源造記念館所蔵）

鰻絵を作る技術の根本は、日本家屋の壁・床・土塀などを、鰻を使って塗り仕上げる「左官」の技術である。鰻絵は、伊豆松崎に生まれ、江戸時代末から明治時代に活躍した「伊豆の長八」こと入江長八（^{いり え ちやうはち}1815-1889）が創始者とされている。優れた左官職人だった長八は、狩野派の絵画を学び、漆喰で絵を描く技法「鰻絵」を生み出した。明治 10（1877）年に開催された内国勸業博覧会への作品出展を契機に長八の名と鰻絵は全国に知れ渡り、やがて、長野のてんこう小川天香、新潟のい きち川上伊吉、富山のえいきち竹内源造、島根のてつぞう松浦栄吉、大分の長野鉄蔵など、名工と呼ばれた左官職人たちが次々と誕生し、各地で鰻絵が作られるようになる。富山県内では、明治時代以降、寺社・土蔵・公共建築などの壁面装飾として作られたほか、神社への奉納絵馬なども作られた。

鰻絵や土蔵は、近年の建築様式の変化や建て替えなどによって、年々その数が減少している。伝統的な左官技術を持つ職人も高齢化で減少が進み、鰻絵・左官技術の保存継承は全国的な課題となっている。その一方で、現在でも新たな鰻絵・土蔵が誕生している地域もある。また、切取移設による鰻絵の保存や、休憩所・駅舎などの施設へ新たな鰻絵を設置するなど、地域資源としての鰻絵の評価・活用の動きが各地で進み、全国鰻絵コンクールや鰻絵の制作体験、左官訓練校での講習など、技術継承の取り組みも活発になってきている。

2. 小杉左官について²⁾

2-1. 歴史

小杉町三ヶの上新町一帯には左官業、いわゆる「壁屋」が多く存在し、小杉は江戸時代から左官の町として有名であった。小杉新町では、寛政2（1790）年にすでに左官職人の技術検定や格付けが行われており、天保4（1830）年には職人組合的組織である「左官講」が結成されるなど、古くから「小杉左官」としての組織が形成されていた。明治後期には小杉左官の技量の高さが新聞でも取り上げられている。例えば明治35（1902）年2月には「小杉の左官竹内勘吉の壁細工、数十人の見習いを集める」とあり、また同40（1907）年2月には「小杉の左官山本新兵衛は桃色壁合わせ方、竹内甚太郎は寒中壁塗り方、竹内勘吉は磨き砂艶出し塗り方をそれぞれ発明」と報じられている（富山日報）。

富山地域では江戸時代中頃に土蔵造りの建物ができ始め、明治時代後半に土蔵造りの町並みがみられるようになった。土蔵には、鰻絵などの漆喰工作物が盛んにつくられ、左官職人の技術がいかに発揮された。富山の地で鰻絵のような芸術が根付いたのは、寒くて湿度の高い冬の富山では左官の仕事がなく、その時期に神社の絵馬や土蔵の飾りを漆喰で作ることが流行したからだと言われている。

2-2. 竹内源造について

竹内源造の父親である竹内勘吉は天保元（1830）年に小杉で生まれた。本名は竹内平右衛門であり、勘吉は通称である。竹内家は文政年間から続く左官の家系であり、勘吉はその5代目、子の源造は6代目だった。「竹内組」として、多くの職人を抱え、誠実でしっかりした仕事をしていたという。明治32（1899）年3月2日の『北陸政論』という当時の新聞には、勘吉を含めた小杉左官たちが、翌年の博覧会に作品を出展する予定という旨の記事が載せられている。



写真9-2 竹内勘吉作「鶴」と「亀」（竹内源造記念館所蔵）

その息子の竹内源造は明治19（1886）年富山県射水郡小杉町三ヶ（現射水市三ヶ）の上

新町に生まれた。小学校を卒業すると同時に左官職人となり、小杉左官の親方であった父、勘吉のもとで研鑽に励んだ。そして、左官としての腕を磨きながら鰻絵を習得し、芸術の域にまで高めたと言われている。明治 34（1901）年に 15 歳の若さで、東京の帝国ホテルの貴賓室の漆喰彫刻を仕上げ、明治 44 年（1911）には 25 歳で射水郡役所から「一級漆喰彫刻士」の資格を受けている。活動場所は県内、国内にとどまらず、大正 8（1919）年には中国大連の旧朝鮮銀行大連支店（現中国工商銀行中山広場支行）の大型建設工事にも携わっている。その際には弟子や仲間を 20 人余り連れて行くなど、弟子たちの面倒見も良く、多くの職人を育てた。壁塗りの基本的な技能についても群を抜いており、同じ時間で普通の職人の 4 倍の広さを塗り上げたそうである。

竹内源造の作品の魅力はその迫力にあり、「絵」というよりも「彫刻」に近い立体的な造形となっている。また、作品の目にガラス片や電球などを仕込んで玉眼としたり、ビー玉やニッケル鋼を埋め込むなど、斬新な発想に富んだ作品を多く残している。代表的な作品として砺波市名越家の土蔵の「双龍」が挙げられる（写真 9－3）。荒れ狂う波間を泳ぐ、2 匹の龍が力強く表現されており、日本最大級の漆喰彫刻であるともいわれている。その他に「恵比寿・大黒」、「鶴と亀」（いずれも射水市指定文化財）など、優れた作品を残している。ここで挙げた作品はいずれも後述する竹内源造記念館に展示されている。



写真 9－3 竹内源造作「双龍」（竹内源造記念館所蔵）

源造は昔風の職人氣質で、鰻絵の肝心なところの技術についてはなかなか弟子に教えなかったそうである。そして、作品については自分の思うように仕上がるまで何度も何度も打ち壊してはやり直していたという。また、娘の道一久子によれば、暮らしも豊かではないのに貧しい旅人を泊めて腹一杯食べさせる人情味のある人で、子供たちには優しい父であったそうである。昭和 10 年代に入ると、戦時体制の強化とともに大きな仕事はなくなったが、源造は損得を離れていくつかの作品を仕上げた。昭和 17（1942）年に 56 歳でその生涯を閉

じている。

2-3. 竹内源造記念館

竹内源造記念館はもともと、昭和9(1934)年に小杉町役場として竣工した建物である(写真9-4、写真9-5)。昭和51(1976)年に新庁舎移設に伴い、小杉町立図書館・中央公民館となる。そして、平成14(2002)年、小杉町中央図書館建設に伴い、竹内源造記念館としてオープンした。その後、平成26(2014)年の国登録有形文化財指定に伴い、リニューアルオープンを果たしている。木造2階建て、寄棟造³⁾、平入⁴⁾、よせむねづくり、ひらいり、さんがわらぶき、せんがわらぶきの建物で、正面に先頭アーチを配した車寄せがあり、それを中心軸として左右対称に構成されている。玄関上部のアカサス模様や2階旧町会議場の鳳凰漆喰彫刻は、竹内源造の作である。左官技術を駆使した建物各部の意匠は、左官業の発展した小杉ならではの造りと言える。館内には、竹内源造と父勘吉の鰻絵作品や、源造が使用していた鰻などの資料が展示されている。1階には砺波市の名越家土蔵から移設した竹内源造の代表作である「双龍」が展示してある。オープン当初から射水市の管理下にあったが、平成15(2003)年に指定管理者制度⁶⁾が創設されたことで、平成29年度より小杉展示館とともに小杉まちづくり協議会の指定管理を受けている。この背景には「竹内源造記念館は(建物のある)戸破だけのものではなく小杉全体の所有物だ」という地元住民の声があった。



写真9-4 竹内源造記念館の外観



写真9-5 竹内源造記念館2階展示室

3. 鰻絵を作る現在の左官職人

本節では、鰻絵を作る技術を持つ3人の左官職人について、それぞれの来歴や鰻絵との関係などを紹介していく。

石崎勝紀さん

石崎勝紀さん（南砺市岩武新在住、75歳）は、壁屋（左官）の家系の3代目である。石崎さんは21歳の時に2代目であった父親が亡くなり、未熟ながらも壁屋の仕事を引き継ぐことになった。そこで、父親と親交の深かった竹内源造の弟子（以後「親方」）に面倒を見てもらったそうだ。平日に父から継いだ壁屋の仕事をしながら、休日には親方の仕事場で蔵につける鰻絵の制作や修復、竹内源造作品の修復など、様々なことを教わったという。「そうして竹内源造の技術や作品を見るうちに、源造や鰻絵のすばらしさに魅了されていった」と石崎さんは話しておられた。竹内源造記念館にある竹内源造作の「なまこ壁⁷⁾」（写真9－6）や「双龍」はよそから移設されたものだが、ぼろぼろの状態で運ばれてきたそれらを修復して現在のきれいな状態に仕上げたのが、石崎さんである。

「なまこ壁」は砺波市出町の商家にあった土蔵の側面を飾っていたもので、処分されかけていたものを記念館が買い取った。切り取る際に半分に分けられ、片方は竹内源造記念館に、もう半分は出町小学校に移設された。「高いお金をかけてぼろぼろのものを飾っておいてもあれだから」と、石崎さんが何年もかけて磨き上げて今のきれいな状態に仕上げた。「双龍」はもともと、砺波市にある旧家土蔵東側の外壁に施されていたが、損傷・劣化が進み現地での保存が危惧されたことから、所有者からの寄付を受けて、竹内源造記念館に切取移設されることとなった。竹内源造が制作した当時の状態に近づけるように修復が施されており、石崎さんも「竹内源造の技術を学んでいるからこそできることで、普通の左官職人にはできない」と話している。



写真9－6 石崎さんが修復を手掛けたなまこ壁

現在は神社や寺の文化財や蔵などの修復、寺社や一般家庭向けの鰻絵制作、左官業に関する講演など様々な仕事をしている。石崎さんは左官の仕事に関して、「壁の修理は今ではセメントを外側に塗って終わりだが、内側はそのままなのでどんどんぼろぼろになり、意味がない」と話す。石崎さんの活動は富山県の新聞記事でもたびたび紹介されており、三ケの十

社大神にある竹内勘吉、源造らの残した鰻絵の絵馬の修復（北陸中日新聞 2011/7/15、富山新聞 2011/7/13(写真9-7)）や、竹内源造記念館での鰻絵の体験教室（富山新聞 2017/1/19）などが取り上げられている。また、全国文化財壁技術保存会（愛知県江南市）の研修会で鰻絵の指導も行っており、「今の時代、左官の技術しか知らないようでは食べていけない。鰻絵の制作で使う泥を盛る技術は、文化財の修復などに役立つ」と話している。明治神宮や高野山など、全国各地から依頼を受けて指導に行くこともあるという。竹内源造記念館でも毎年秋に教室が開かれ、7、8人の左官が学びに来る。石崎さんは鰻絵について「鰻絵は鰻で立体感を出してこそ。源造の鰻絵はその立体感を利用した人を圧倒する作品が大きな特徴」と語っておられた。石崎さんの話を聞いて、竹内源造の孫弟子だけあって、源造の技術や作品、鰻絵そのものへの思い入れが人一倍強いと感じた。



写真9-7 富山新聞 2011/7/13



写真9-8 石崎さんが制作した鰻絵

佐伯昌徳さん

佐伯昌徳さん（滑川市田中町在住、78歳）は、平成16（2004）年度に「とやまの名匠⁸⁾」の認定を受けたほどに優れた左官職人である。佐伯さんは中学を卒業後、父の売薬を手伝うも性分に合わず、富山市内の左官工業所に住み込みで就職した。5年間修業した後、2年ほど通いで仕事をし、昭和38（1963）年頃に独立した。社会はちょうど戦後復興が軌道に乗り、産業も生活も一気に変わり始めたころだった。土蔵から石膏壁、セメント壁の需要に応え、一生懸命に仕事をしていくうちに、滑川でも認められ、得意先が増えていった。子供のころから親や親方に厳しく育てられてきたこともあり、「他の人には負けたくない」という強い気持ちで仕事に取り組んできたそうである。富山県左官事業協同組合⁹⁾に所属しており、県東部の組合員のまとめ役を担っている。

佐伯さんが鰻絵を始めたきっかけは、伊豆の長八美術館¹⁰⁾へ見学に行ったことだった。22年ほど前から佐伯さんは富山県左官高等職業訓練校での指導を行っていたが、「毎年同じような課題を教えていても面白くない」と思っていたそうだ。そんなときに生徒を連れて見に行った伊豆の長八美術館で鰻絵に出合った。そこで毎年、鰻絵のコンクールが開催されていることを知り、入賞を目指して鰻絵作品を作るようになった。佐伯さんは、「芸術関係の人や壁屋関係の人が多く出品する中で勝つためには、人より面白いアイデアの作品を作るしかない」という考えのもと制作に取り組んでいるそうだ。また、「面白い作品を作れば、次も作りたいという気になれるし、家族や周りの人にも喜んでもらえる」と語っており、とにかく「面白いもの」を作ることに信念を置いている方だと感じた。佐伯さんは鰻絵について、「みんな鰻絵が難しそうだと感じてやる前にあきらめてしまう。まずはやってみることが大事だし、やる気と根性があれば誰でもできる」と話された。



写真 9－9 佐伯さんが制作した鰻絵

現在は訓練校での指導をメインに行っており、頼まれた時にだけ町屋の修復の仕事を行っている。佐伯さんは「今の左官をしている若者は、すぐにスマホをいじったり、タバコを吸ったりしている。そのうえ反抗的で注意したらすぐに仕事をやめてしまう。それもあってか、今の親方は若者に対して厳しく怒れていないように思う。それでも、今教えている若者がいずれは指導する立場になることを考えたら、厳しくしていけないといけない」と語っている。また、空いている時間でコンクールへの出品を目指して鰻絵の制作も行っている。小杉駅ホームの鰻絵（写真 9－10）は、「歴史と文化が薫るまちづくり事業」（後述）の際に佐伯さんが中心となって制作し、電車利用者へのインパクトを考えたカラフルなデザインの作品となっている。



写真 9-10 小杉駅一番線ホーム鰻絵

西境正昭さん

西境正昭さん（富山市婦中出身、射水市殿村在住、77 歳）は、中学校を卒業後、約 60 年もの間左官の仕事をしてきた職人である。元々器用なほうではなかったが、経験を積んでここまでやってこられたそう。前述した富山県左官事業協同組合に所属しており、県西部の組合員のまとめ役を担っている。

西境さんは小杉で竹内源造という左官職人が鰻絵で有名であったことを知り、自分もやってみたく興味を持ち、ほぼ独学で鰻絵を学んでいる。そのため、鰻絵教室で行われる型抜き鰻絵や家紋などの簡単なものなら教えられるが、竹内源造のような鰻絵職人の、漆喰を盛り上げて立体感を出す本物の鰻絵は作れないそうだ。

普段は県内外の寺や神社の壁塗りを中心に、ダムやトンネル、線路なども手掛けており、鰻絵は空いている時間に趣味の範囲で行っている。「今でも仕事は多いが、ほかにできる人や後任がいないということなので、良いことなのか悪いことなのか」と語っているように、後継者の不足を問題視しているようだった。西境さんいわく、「左官になろうとして入ってくる若者はいるが、仕事がきつくて続かない」らしく、西境さん自身も自分の子どもには左官の仕事を教えなかった。左官の仕事についての考え方も伺ったところ、「家や寺社は所有者だけでなくいろいろな人が来て目にするし、特に漆喰は何年ももつため、誰が手掛けたものかという話になりやすく、いいかげんな仕事はできない」と話しておられた。ここには西境さんの職人としてのプライドを感じ取ることができる。また、「職人はみな仕事のどこで手を抜くかを考えている。いいかげんにするということではなく、どうすれば手間を減らして良い作品を作ることができるか工夫を凝らす」とも話しておられた。実際、鰻絵教室の時には、自前の作業道具や作業方法を用いており、職人の発想の豊かさが感じられた。小杉駅北口駅舎の鰻絵（写真 9-11）は後述する「歴史と文化が薫るまちづくり事業」の際に、西境さんを中心とした職人の方々が手掛けたものである。駅利用者に漆喰の技術そのものに触れてもらうため、色付けせず白色のまま飾っている。現在、同じ作品で色付けしたものを制作し終え、南口駅舎の待合室に飾ることを検討中である。



写真 9-11 小杉駅北口駅舎の鰻絵

4. 「地元文化としての鰻絵」を基礎づけた活動

本節では、後述する「歴史と文化が薫るまちづくり事業」が行われる以前から小杉で取り組まれていた鰻絵に関する活動について述べていく。まずは、「鰻絵のまち小杉」の基礎をつくった田村京子さんの活動を紹介する。

4-1. 田村京子さんによる竹内源造の再発見

田村京子さん（福井県福井市生まれ、射水市戸破宝町）は、鰻絵による小杉のまちづくりの第一人者である。田村さんは子供のころ福井空襲から逃れて、母親の出身地である小杉に来て、そのまま暮らしてきた。元々歴史が好きで大学でも歴史学を専攻しようと思っていたが、教員数の不足により仕方なく国語を専攻した。卒業後は数年間国語教師として富山県内の学校に勤めていた。子供が生まれたことを機に教師を辞め、そこからは子育てをしながら去年まで「つつじの会¹¹⁾」でガイドボランティアを行っていた。

田村さんが鰻絵や竹内源造を知ったきっかけは、『小杉町史』（平成9年3月31日発行）を作ることになったことである。当時小杉町の図書館だった竹内源造記念館の2階が町史編纂室として使われ、編纂の代表の方に、町史に載せるため竹内源造という人物について調べるよう頼まれたそうだ。当時は竹内源造に関する資料はほとんどまとまっていなかったため、源造の息子のお嫁さん（田村さんは「おばあさん」と呼んでいた）や源造の弟子に話を聞くことで情報を集めた。特に「おばあさん」からは源造が使っていた道具（現在は記念館2階に展示）や作品を譲ってもらった。そうして竹内源造について調べていくうちに、その人柄や鰻絵を中心とした数々の作品に惹かれていったそうだ。竹内源造記念館ができてからは、竹内源造記念館友の会¹²⁾の会長として竹内源造と鰻絵を広める活動を行った。役場のバスで源造作品を見にいろいろな地域を回ったり、鰻絵に関する講座を開いたりしていた。

田村さんは、県内の鰻絵 60 か所 130 点を記録した竹内源造の作品集¹³⁾を約2年かけて

編集した。作品集を出すことは田村さんの長年の夢だったそうで、平成 15（2003）年に小杉町教育委員会から、友の会への委託事業として提案されて実現した。この作品集では、平成 16（2004）年 11 月 30 日時点で、竹内源造の作品（記録や確かな口伝のあるもの）と判明している作品を収録している。作品ごとに写真とそれに伴うデータ（制作年代、所在地、材質、大きさ、田村さんの所見）を記載している。作品の場所は竹内源造の弟子に聞いたり、作品を保管していた家の人にほかにどこで作品を作っていたかを聞いたりしたそうである。また、竹内源造の家にあった、これまでの作品の領収書からも多くの作品の場所を知ることができた。そのようにして 100 以上の作品を見ていくうちに、田村さんは本物の源造の作品を見分けることができるようになったそうで、「源造さんの作品は鰻使いがほかの職人のものとは一味違う」と話している。長年、竹内源造と鰻絵を研究してきた田村さんだからこそ言える言葉であろう。

4-2. 鰻絵看板設置事業¹⁴⁾

鰻絵看板設置事業は、鰻絵看板で小杉の商店街を彩ろうと、地域と射水市商工会が取り組んできた地域活性化事業である。左官職人の石崎勝紀さんや富山県左官事業協同組合のメンバーが希望した店の鰻絵看板の制作にあたる一方で、商工会女性部も石崎さんの指導の下、鰻絵看板づくりに取り組んだ。平成 17（2005）年から始まり、平成 23（2011）年度までに 47 基が作られた。八百屋には野菜、歯科医院には歯とハブラシといった、趣向を凝らしたデザインの鰻絵看板を商店・事業所等に設置し、商店街に鰻絵のある新しい風景を生み出した。石崎さんは「鰻絵看板のある商店街の店を見て回る人が以前より増えた。それだけでも鰻絵看板を作った意味はあったと思う」と語っている。

実際に鰻絵看板を置いている荒町商店街の店の方に話を伺った。黒川金物店には家紋と店名の入った、のこぎりの鰻絵が飾ってある（写真 9-12）。店のご主人の話によると、この鰻絵は石崎さんに提案されて作ってもらったものらしく、今では店の良いシンボルになっているという。以前NHKで店の鰻絵看板が紹介されたこともあり、向かいのレストランで食事をした人がよく写真を撮りに見に来るそうだ。ご主人は鰻絵看板設置後の影響について、「鰻絵看板があることと店の商売はあまり関係はないが、やっぱり、看板を見た人の心が温まったり、店の雰囲気がいいと感じてくれたりして、（店に）入ってみようという気にはなるのではないかと」語っていた。そのほかに話を伺ったお店では「市や商工会の人が取り組んでいるまちづくりに協力したいと思って作った」、「商店街の鰻絵を一目見ようと小杉に人が集まってくるのはいいことだ」という声を聞くことができた。



写真 9-12 黒川金物店の鰻絵看板



写真 9-13 梶谷履物店 (ペンタゴン) の鰻絵看板

5. 「鰻絵のまち小杉」に向けて

本節では、富山県が実施した「歴史と文化が薫るまちづくり事業」によって、小杉で鰻絵を活かしたまちづくりがどのように行われてきたのかについて述べる。また、事業に連動して行われてきた取り組みについても併せて紹介する。

5-1. 歴史と文化が薫るまちづくり事業¹⁵⁾

事業の概要

「歴史と文化が薫るまちづくり事業」は、歴史的・文化的な地域資源を活用した地域づくり推進を目的に、富山県が行っていた事業である。モデル地域を選定し、有識者等で構成する検討委員会において、歴史と文化が薫るまちづくりのあり方等について意見を聞くとともに、モデル地域で実施する事業に対して県が助成し、地域の活性化を図るものである。平成 21 年度から平成 25 年度まで、1 年ごとにモデル地域を選定し、それぞれの地域で 3、4 年ほどの期間の事業を展開していた。検討委員会は観光、景観、まちづくりに関する 12 名の有識者で構成され、委員長を朝日重剛（朝日印刷(株)会長）が務めていた。事業費補助金の対象は、市町村、商工会議所、観光協会、NPO 法人等で 4 年を対象期間としていた。平成 25 年度に射水市小杉を含めた 4 つの地域がモデル地域に指定された（表 9-1）。

小杉がモデル地域に選定されたのは、宿場町として栄えた江戸時代以来、昭和 50（1975）年ごろまで旧小杉町の中心地であり、過去から現在に至るまで連綿と受け継がれてきた町が有する、地域的特性が評価されたためである。平成 25（2013）年に「射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会」が結成された。地元の人を中心に事業を進めてほしい、い

ろいゝな方面からアイデアを出してほしいという市の考ゑから、観光協会、左官組合、地域振興会、商工会、大学教授、地元住民など、多様なメンバーで構成された。目指すべきまちづくりの方向性として、

- ①伝統技術「鰻絵」を活かしたまちづくりの推進
- ②潜在的価値を秘めた地域資源の周知・活用の推進
- ③地域活性化のための継続的・長期的な取り組みの推進

の3点が据えられた。

表9-1 平成25(2013)年度モデル地域

市町村	テーマ	エリア
入善町	湧水の恵みが溢れる交流の里づくり	黒部川扇状地湧水地域
射水市	鰻絵と街道がつなぐ過去・現在・未来	小杉地域
高岡市	万葉の風土に寺内町の風情があふれ、 みなと町の香り漂う歴史と文化のまち	伏木地域
南砺市	棟方志功が暮らした「福光」、 巴御前終焉の地「福満」まちづくり	福光地域

本章のテーマである「鰻絵のまち小杉」に従い、ここでは①に沿った事業を中心に紹介していく。

「伝統技術「鰻絵」を活かしたまちづくり」では、具体的に以下の4つの目標を定めた。

- (1) 竹内源造記念館を核とした左官職人の伝統技術「鰻絵」の要素とイメージを盛り込んだソフト・ハード事業の展開
- (2) 全国の鰻絵を活かした取り組みを進めている地域と連携することで、情報の共有と相互発信を行い、鰻絵文化そのものの認知度の向上を図る
- (3) 新たな鰻絵の制作や一般参加の体験活動を取り入れたワークショップの展開
- (4) 伝統文化・技術に基づいた新たな鰻絵・左官技術の価値を創造することで、「鰻絵のまち小杉」の情報発信を一層進める

また、「全国鰻絵サミット in 射水」(後述)の開催が事業の集大成に掲げられた。

次に具体的に行われた施策を、ソフト事業・ハード事業に分けて紹介していく。

ソフト事業では、鰻絵制作体験事業、地域資源の情報整備と発信、「全国鰻絵サミット in 射水」の開催などが行われた。鰻絵制作体験事業では、本格鰻絵や型抜き鰻絵など、竹内源造記念館における新しい鰻絵体験メニューが開発された。体験内容の詳細は後述する。事前準備として、平成22(2010)年～24(2012)年の「旧北陸道アート in 小杉」で鰻絵フェスティバル¹⁶⁾を開催し、鰻絵体験を実施した。その後、竹内源造記念館で平成26(2014)年～28(2016)年の3年間、試験的に体験メニューとして導入し、体験者の好感触を受け、29(2017)年より正式な体験メニューとなった。地域資源の情報整備では、竹内源造記念館の

展示パネル、映像解説の製作、館のホームページの開設を行った。また、全国の鰻絵の町との相互提供などによる情報発信も行われた。「全国鰻絵サミット in 射水」については、後述する。

ハード事業では、竹内源造記念館改修工事、鰻絵によるあいの風とやま鉄道小杉駅の修景（鰻絵看板の設置）などが行われた。改修工事は平成 24（2012）、25（2013）年度に実施され、記念館の建築当初の姿を取り戻すとともに新たな鰻絵体験棟を増築した。平成 26（2014）年 4 月のリニューアルオープン後は観光・交流の拠点として活用された。小杉駅の修景では、平成 28（2016）年 3 月 13 日北口駅舎と 1 番線ホーム壁面に、高さ 1.4m、幅 3.1m の鰻絵看板が設置された。鰻絵のデザインは一般公募で応募のあった 382 点から 2 点が選ばれ、富山県左官事業協同組合が制作に取り組んだ。技術継承の意味も込めて若い左官が積極的に起用されたそうだ。前述したように、北口駅舎の看板は西境正昭さんが、1 番線ホームの看板は佐伯昌徳さんが中心となって制作された。

当時、事業を担当していた射水市職員の金三津英則さん（現在は射水市教育委員会生涯学習・スポーツ課文化財係に所属）は、「現在、鰻絵はまだマイナーで、国からの美術品としての評価は低く、建物の飾りとしてしか評価されていない。平成 26（2014）年から平成 28（2016）年の 3 年間は基盤づくりと実験のための期間で、これからはそれらを活かせるような施策をやっていく」と語っていた。

全国鰻絵サミット in 射水

全国鰻絵サミットは、平成 13（2001）年に静岡県松崎町で始まった。平成 17（2005）年の島根県、平成 22（2010）年の鳥取県に続き、富山県の射水市が 4 回目の開催地となった。平成 28（2016）年 9 月 24 日の 13：00～17：30 に行われ、小杉社会福祉会館が会場とされた。開催にあたって全国各地で鰻絵・左官技術の保存・活用に活躍している人たちとともに、鰻絵と左官文化を活かしたこれからのまちづくりを考えることが目指された。プログラムとしては、1. 愛媛の鰻絵に関する基調講演「愛媛の鰻絵から見たもの…小杉でもケンシカンカン…」（講師：岡崎直司 えひめ鰻絵の会世話人）、2. 鰻絵を活かしたまちづくりの事例発表（富山県・静岡県・長野県・新潟県・島根県・大分県）、3. 「鰻絵・左官文化を活かしまちづくり」についての公開討論（コーディネーター：藤田洋三 写真家、パネリスト：夏見久志 富山県左官事業協同組合理事長、事例発表を行った 6 名の方）の順に行われた。富山県からは前述した田村京子さん（当時、竹内源造記念館友の会会長、射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会副委員長）が参加し、代表として事例発表、公開討論を行った。翌日の 9 月 25 日には鰻絵見学ツアーが開催された。砺波市の光照寺、木村産業、千光寺の 3 カ所を訪れ、現存する竹内源造作品を見学して回った。

鰻絵体験教室

現在、竹内源造記念館では型抜き鰻絵（写真 9-14）、ミニ鰻絵（写真 9-15）、本格鰻絵

(写真9-16)、光るシッケイボール(写真9-17)の4つの漆喰・鰻絵制作体験をすることができる。型抜き鰻絵は予約なしで体験可能だが、それ以外は事前の予約が必要となっている。型抜き鰻絵では、2 L判(12.7×17.4 cm)サイズまたはA 4判(21.0×29.7 cm)サイズの木枠に、あらかじめ模様を切り抜いた壁紙を当て、様々な色の聚楽¹⁷⁾と呼ばれる土を鰻で塗り込んでカラフルな模様の作品を作る。漆喰を使っていないため厳密には鰻絵とは言えないが、30～60分ほどの時間で手軽に制作でき、鰻絵を知らない人に親しみを持ってもらう役割を果たしている。壁紙の型は何百種類もあり、動植物や季節の物、マンガ・アニメのキャラクターなどさまざまである。普段は中高年の方が、予約してまたは見学のついでで体験していくことが多いが、夏休みの宿題(図工)などで地元の生徒が作りに来る。また、簡単にできることからツアーの一部として型抜き鰻絵体験が組み込まれやすく、6月ごろから団体の客が増えるそうだ。

ミニ鰻絵では、2 L判サイズの木枠に漆喰を盛り上げて作品を作る。鰻絵初心者入門編として最適なプログラムである。制作時間は90～120分ほどである。型抜き鰻絵と違い元となる絵を一から自分で描く必要があり、記念館にある見本絵を写すか自分で下描きを描いて写す。漆喰を盛る際に重要なことは、鰻で強く押し固めていくことである。漆喰にはすきなどの固形物が含まれている。そのため、普通に盛った場合、隙間ができて乾いたときにそこから崩れてきてしまう恐れがある。また、漆喰には乾いて固まる際に縮む、その乾く速さは気温や湿度によって変化するという特徴がある。それらの特徴を踏まえた上で、漆喰を押し固めつつ盛っていくというのは至難の技である。筆者も何度かミニ鰻絵を制作したが、なかなか自分の思っているように盛り上げることはできなかった。毎年11月ごろには、職人の佐伯さんを招いて来年度の干支をモチーフとしたミニ鰻絵教室が開かれている。2018年は高岡市在住の女性1名が参加した。以前から記念館の存在は知っており、「坂のまちアート¹⁸⁾」で作品を見て興味を持ち、参加したそうである。「見るのとやるのではまた違う、思っていたより難しい」と話していた。

本格鰻絵では、A 3判(29.7×42.0 cm)またはA 2判(42.0×59.4 cm)サイズの木枠に漆喰を盛り上げて作品を作る。下地制作、漆喰の盛り上げ、乾燥、仕上げ、色付けなどの工程があるため、週1回2時間を3回、つまり3週間をかけて作る。竹内源造記念館では年2回ほど、左官職人の方を招いて本格鰻絵教室を開催している。2018年の第1回は1/28～2/11の3週間、石崎さんの指導で行われた。第2回は6/24～7/8の3週間、西境さんの指導で行われた。筆者は第2回を見学させていただいた。射水市出身で愛知県在住の女性と、高岡市在住の女性の2名が個人個人で参加していた。西境さんの教室では家紋か自由なイラストの2通りから選ぶことができ、その回は一人は家紋、もう一人は自分で描いたイラストで鰻絵を作っていた。2人とも鰻絵を作るのは初めてで、また、「その土地でしかできないものを作りたいかった」、「絵の具と違って、自分の思ったように塗れない」などと話していた。

光るシッケイボールは泥で作った球に漆喰を塗り込み、磨き上げて作る。漆喰に絵の具を混ぜ込むことで様々な色のシッケイボールとなる。制作時間の目安は40～60分程度だが磨

けば磨くほどつやが出てきれいに仕上がる。



写真 9-14 型抜き鰻絵



写真 9-15 ミニ鰻絵



写真 9-16 本格鰻絵



写真 9-17 光るシクイボール

5-2. 「歴史と文化が薫るまちづくり事業」に連動した民間の活動

小杉中学校生徒による鰻絵制作

射水市小杉地域では、平成 26 (2014) 年から左官組合の指導の下、小杉中学校生徒の鰻絵制作の授業が行われている。始めたきっかけは、「全国鰻絵サミット in 射水」の開催に合わせて、地元中学生の作った鰻絵の展示会をしたいという話が射水市からきたことである。

授業では、4種類の鰻を使いA4の大きさの作品を作るが、材料、道具は職人の方を経由して専門の店から仕入れる。平成26年(2014)は3年生250人の体験だったが、同27(2015)年は1～3年生約700人が制作した。完成した作品は富山県立近代美術館(現富山県美術館)に展示された。その後も地域の特色を活かした教材として毎年行われており、ここで鰻絵を習った生徒たちが次の世代へ鰻絵を伝えていくことが期待されている。

「旧北陸道アート in 小杉」と鰻絵

第8章で述べた「旧北陸道アート in 小杉」では、「鰻絵と歴史・文化スタンプラリー」や光るシッキイボールづくりなど、漆喰・鰻絵に関係したイベントが行われている。「鰻絵と歴史・文化スタンプラリー」では、旧北陸道沿いの鰻絵を見ることができるポイント(小杉駅、民家の土蔵など)や歴史的建造物(小杉展示館、旧小杉郵便局、寺社など)計16カ所をスタンプを集めに回る。光るシッキイボールづくりは、富山県左官事業協同組合が毎年実施しており、一般の人に左官や漆喰について知ってもらうことを目的としている。親子連れの体験者が多く、毎年人気のイベントだそう。竹内源造記念館では様々なコンサートが開催され、その開始前後に館内に展示されている鰻絵作品を見学していく人も多い。また、希望者は型抜き鰻絵の体験をすることができる。小杉に住んでいても鰻絵に触れたことのある人は少なく、こういったイベントを機会に興味を持つことも多いそう。その他、十社大神¹⁹⁾宝物殿内に展示されている鰻絵作品の限定公開や商店街の軒先に鰻絵を飾るなど、「旧北陸道アート in 小杉」は鰻絵の小杉内外への普及に役立っていると言える。

6. まとめと考察

以上で述べてきたように、「鰻絵のまち小杉」は様々な人に支えられ、多くの事業を経て現在まで進められてきた。竹内源造に始まった小杉の鰻絵は、時を経て、孫弟子である石崎勝紀さんへと伝えられてきた。「双龍」や「なまこ壁」、その他源造作品の修復や鰻絵の技術伝承など、石崎さんの活動によって、竹内源造の技術や鰻絵はこの先も受け継がれていくだろう。また、「鰻絵のまち小杉」を現在まで引き継いで来ることが出来たのは、田村京子さんと竹内源造記念館の存在があったからである。田村さんは小杉町史編纂を機に竹内源造とその作品について学び、以後、小杉で竹内源造と鰻絵を広めるための活動を行ってきた。所属していた竹内源造記念館友の会と共に、『竹内源造作品集』の制作や鰻絵に関する講座などを行い、最終的には「全国鰻絵サミット in 射水」にも参加した。「鰻絵のまち小杉」の発展は田村さんの活動と共にあったと言っても過言ではない。竹内源造記念館は、平成14(2002)年のオープンから、平成26(2014)年のリニューアルオープンを経て、現在まで鰻絵によるまちづくりの拠点であり続けた。「歴史と文化が薫るまちづくり事業」における記念館の鰻絵体験メニューの開発は、小杉内外の人々に鰻絵を身近に感じさせ、認知度を向上させる役割を果たしたと考えられる。実際、竹内源造記念館で鰻絵を体験した人たちから聞

き取りをしていくなかで、「鰻絵を見るのも作るのも初めてで難しかったが、楽しかったしまたやりたい」という類の声が多く聞かれた。また、小杉に住む人たちにも記念館の活動は広く認知されていると感じた。小杉で調査を始めた初期のころ、住民の方に鰻絵について伺ったところ、多くの方が「竹内源造記念館に行くと詳しい話が聞ける」と言っていた。子供の夏休みの宿題やお年寄りの趣味など、竹内源造記念館の鰻絵体験は小杉の幅広い世代の人に認知され、支持を受けていると感じた。

また、左官職人の活躍が果たした役割も大きかった。職人の西境さんと佐伯さんは、小杉駅の鰻絵看板を制作し、竹内源造の孫弟子の石崎さんは商店街の鰻絵看板を制作した。これらの作品によって、小杉のまちで実際に鰻絵が見られるようになり、鰻絵をより身近に感じられるようになっただけでなく、「鰻絵のまち小杉」と呼ぶにふさわしい景観が出来上がったと考える。

小杉は江戸時代から左官の町として知られており、そこに竹内源造という偉大な左官職人が生まれた。源造は左官業で培った技術を駆使し、鰻絵と呼ばれる漆喰彫刻を数多く生み出した。しかし、田村さんが活動する以前は、そうした歴史を知る人はごくわずかだった。調査を通して、田村京子さんをはじめ、竹内源造記念館、射水市、商工会など、様々な人や団体の努力によって「鰻絵のまち小杉」は支えられてきたのだと感じた。そして、その結果として今日、鰻絵は小杉の町や人々にとって一つのシンボルになっていると考える。自分の住む地域の歴史や文化を知るとは、地元に着や誇りを持って住み続けていくために大切である。また、地元への愛着や誇りは観光地化やまちづくりを進めていくうえで欠かすことのできないものである。地元が好きだからこそ良くしたいと思うし、他の地域の人にも良さを知ってほしいと考えることが出来るだろう。小杉において、鰻絵はそうした役割を担っているのである。

おわりに

「鰻絵のまち小杉」はまだ発展途上の段階である。第4節で金三津さんが述べていたように「歴史と文化が薫るまちづくり事業」の3年間は基盤作りだった。それを生かすも殺すもこれからの取り組み次第だと考える。これまでの鰻絵といえば、美術関係者の中ではそれなりに認知されていたが、一般レベルの知名度はそれほど高いものではなかった。最近では、新聞やテレビで竹内源造記念館や鰻絵が取り上げられており、それによって小杉を訪れる人が増えると考えられる。その人たちにいかに鰻絵の魅力を伝え、興味を持ってもらえるかがカギとなる。同時に小杉中学校での鰻絵指導のように、鰻絵を次世代へ残していくような取り組みも、継続して行っていくことが重要であると考えます。

私は、今回の調査で小杉駅の壮大な鰻絵看板、旧北陸道沿いの商店街に立ち並ぶ遊び心あふれる鰻絵看板を目にし、子供のように心が躍った。小杉に観光で訪れる人々もおそらくは同じような思いを抱くことだろう。鰻絵がこれからも小杉のまちとともにあり続け、その魅

力がより多くの人に伝わることを心から願っている。

謝辞

今回の調査にあたって、小杉の皆様には大変お世話になりました。聞き取りにご協力いただいた竹内源造記念館の皆様、職人の石崎勝紀様、佐伯昌徳様、西境正昭様、射水市職員の高三津英則様、商店街の皆様はこの場を借りて厚くお礼申し上げます。お忙しい中、私の質問や話に対して快く答えてくださり本当にありがとうございました。とりわけ、竹内源造記念館館長の前田二三夫様には聞き取りや鰻絵体験をさせていただいただけでなく、様々な方をご紹介してくださったり、記念館を聞き取りの場所としてお貸しいただいたりと多方面で大変お世話になりました。

また、2018年10月にお亡くなりになられた田村京子様にも調査中の聞き取りにご協力いただきました。この場を借りて感謝の意を申し上げます。報告書をお見せすることは叶いませんでしたが、無事完成させることができました。ご冥福をお祈り申し上げます。

皆様のおかげで無事に調査を終えることができました。本当にありがとうございました。

注

- 1) 『全国鰻絵サミット in 射水』(射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会、2016)、『小杉まちなみ鰻絵看板MAP』(旧北陸道アート in 小杉実行委員会)、『鰻絵を巡る旅』(射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会)、「観光協会安心院支部サイト」より。
- 2) 『小杉まちなみ鰻絵看板MAP』、『鰻絵を巡る旅』、『全国鰻絵サミット in 射水』、『射水市竹内源造記念館』(射水市教育委員会)、『小杉左官の鰻絵と竹内源造』(小杉町教育委員会、1999年)、『小杉町史 通史編』(小杉町役場、1997年)より。
- 3) 大棟の両端から四方に隅棟が下りる型式の屋根で、2つずつの台形と三角形からなる(デジタル大辞泉)より。
- 4) 切妻造りや入母屋造りの建物で、入り口が大棟に平行な面を正面とするもの(精選版日本国語大辞典)より。
- 5) 平瓦と丸瓦を一体化させた波型の瓦(棧瓦)を使用した屋根の葺き方(住宅建築専門用語辞典)より。
- 6) 自治体が住民の福祉増進を目的として設置した施設(「公の施設」)を、民間事業者・団体等を指定して管理運営させる制度(日本大百科全書(ニッポニカ))より。
- 7) 土蔵を装飾する鰻絵である。背景となる黒漆喰の上に、白漆喰で盛り上げた部分が「七宝つなぎ」と呼ばれる配置方法で並んでいる。白漆喰部分がなまこに似ていることが名前の由来とされている。
- 8) 富山県内において高度に熟練した技能を持ち、技能伝承や後継者育成などの事業に積極的に活動している指導者、技能者として富山県が認定した人。平成14(2002)年度から

認定を行っており、平成 29（2017）年度までに 24 職種 84 名の人を認定している。

- 9) 昭和 32（1957）年に設立された組織である。平成 28（2016）年の時点で富山県内の左官業経営者約 260 人が組合員として所属している。新たな左官技術や高度な技術・知識を備えた人材の育成とともに、伝統工法による文化財建造物の修復など、左官業の普及・継承を図り、左官業発展のために取り組んでいる。
- 10) 左官職人として東京で活躍し、「漆喰鰻絵」を確立した入江長八の作品を展示する美術館である。長八の出身地である静岡県松崎町にある。平成 13（2001）年には第 1 回「鰻絵サミット」を開催した。
- 11) 射水市小杉地区をガイドエリアとして活動する団体。道の駅カモンパーク新湊を拠点としている。小杉の旧北陸道に沿って点在する神社や寺、鰻絵をまち歩きガイドが案内する。竹内源造の作品を案内するために他の地域に行くこともある。
- 12) 記念館がオープンした当初から訪れていた人たちで結成された。現在は活動していない。
- 13) 竹内源造記念館友の会『鰻絵の名工 竹内源造作品集』小杉町教育委員会、2005 年。
- 14) 『小杉まちなみ鰻絵看板MAP』、『全国鰻絵サミット in 射水』より
- 15) 『全国鰻絵サミット in 射水』、「坂のまちアート in やつお」、「射水ムズムズアワー」、「歴史と文化が薫るまちづくり事業検討委員会 | 富山県」より。
- 16) 「旧北陸道アート in 小杉」に合わせて、旧北陸道沿いの各町内を会場に 2 日間にかけて行われていた。鰻絵の作品展示、スタンプラリー、鰻絵の制作体験コーナーなど、鰻絵にちなんだいろいろな催しを行っていた。現在は行われていない。
- 17) 土壁の材料に用いる黄褐色の土。京都の聚楽第跡付近で見つかったことからこの名がついた。聚楽を用いた壁を聚楽壁と言い、近畿地方を中心に歴史的建造物や茶室等に多く使われている。
- 18) 富山県富山市八尾町で、平成 8（1996）年から 20 年以上にわたって開催されているアートイベントである。期間中は多くの民家などが会場として開放され、全国各地からアート作品が出展される。2018 年は 10/6～8 の 3 日間行われた。竹内源造記念館は鰻絵作品を出展している。
- 19) 三ヶ地区に鎮座されていた伊勢領神明社、十社大明神等 14 社が昭和 2（1927）年に合祀され、十社大神となった。木造神馬などの多数の市指定文化財や、竹内源造ら小杉左官の作った漆喰絵馬額（鰻絵）が奉納されている。

参考文献

楠瀬勝『小杉町史 通史編』小杉町役場、1997 年。

竹内源造記念館友の会『鰻絵の名工 竹内源造作品集』小杉町教育委員会、2005 年。

文：土井由三・田村京子・本田恭子、写真撮影：風間耕司『富山写真語 万華鏡・207 号（竹内源造記念館）』ふるさと開発研究所、2009 年。

丹羽洋介・中川達・田村京子『小杉左官の鰻絵と竹内源造』小杉町立小杉図書館編・小杉町

教育委員会刊、1999 年。

参考にした新聞記事

『北陸中日新聞』2018 年 9 月 19 日朝刊「蓮の鰻絵欄間 輪廻描く」

参考にしたパンフレット

射水市教育委員会『射水市竹内源造記念館』

射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会『鰻絵を巡る旅』

射水市歴史と文化が薫るまちづくり事業実行委員会『全国鰻絵サミット in 射水』

旧北陸道アート in 小杉実行委員会『小杉まちなみ鰻絵看板MAP』

参考にしたウェブサイト

射水ムズムズアワー 〈<http://www.fmtoyama.co.jp/blog/imizu/?m=20120921>〉 (2019/01/24 閲覧)

宇佐市観光協会安心院支部「鰻絵って何」〈<http://www.ajimukk.com/kote3-.html>〉
(2019/01/24 閲覧)

坂のまちアート in やつお 〈<http://www.bunanomori.com/art/>〉 (2019/01/24 閲覧)

松崎町「全国漆喰鰻絵コンクール受賞作品図録」

〈<http://www.town.matsuzaki.shizuoka.jp/docs/2016012700164/>〉 (2019/01/24 閲覧)

とやま観光ナビ「つつじの会」〈<https://www.info-toyama.com/guide/70034/>〉
(2019/01/24 閲覧)

富山県左官高等職業訓練校「職人の仕事」

〈<http://www.gisen-toyama.ac.jp/toyama-craftsman/school/toyama-sakan/>〉
(2019/01/24 閲覧)

富山県「とやまの名匠」〈http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1305/kj00000210.html〉
(2019/01/24 閲覧)

富山県「歴史と文化が薫るまちづくり事業検討委員会」

〈http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1400/kj00008258.html〉 (2019/01/24 閲覧)

第 10 章 大島絵本館で読み聞かせをする人々

鹿住 笑那

はじめに

調査地が射水市に決まったときに、まずは射水市について知るために、ホームページなどを見ていた。そのなかで、「射水市大島絵本館」の存在を知った。絵本を扱う博物館は全国でも珍しく、もともと絵本が好きだったこともあり、絵本館に興味をもった。また、ホームページを見ているときにボランティア活動を行う人がいることを知った。その人たちが、どのような動機があり活動を行っているのか、やりがいとは何か、ということにも興味をもっていたので、大島絵本館で読み聞かせをする人々について調査することにした。

調査では、5月12日から8月4日のあいだ5回ほど、毎週土曜日に行われている日本語の読み聞かせを見学し、ボランティアの方がどのように読み聞かせを行っているのかを観察した。また、読み聞かせが始まる前の練習や終わった後の反省会などを見学したり、同時にボランティア活動や絵本についてなどの聞き取り調査を行ったりした。そして、夏に行った合宿では絵本館のスタッフの方にもボランティア活動について聞いたり、利用者の方に利用の目的などを聞いたりした。

以上の調査をふまえて、本章ではボランティアによる読み聞かせ活動について詳しく記述する。第1節では、大島絵本館やボランティアがどのようなものを記述し、第2節では、絵本館の利用者がどのような目的でどこから来ているのかを記述する。第3節では、読み聞かせ活動の様子を記述する。第4節ではボランティアの方々がどのような思いで読み聞かせを行っているのか、その語りを記述する。第5節では、それまでの記述を踏まえて考察をする。

1. 射水市大島絵本館について

1-1. 絵本館の概要¹⁾

昭和63(1988)年、開町100周年を前に、旧・大島町の文化高揚の核として「絵本」がとりあげられた。この頃行われた「ふるさと創生事業」のなかで、町では公に町民の意向を問うたところ、寄せられた100余りの意見の中で町民の関心の高かった絵本事業が、平成3(1991)年の第3次大島町総合計画に盛り込まれることとなった。総合計画の基本目標として「住みよい、明るい、豊かなまちづくり」が提唱され、平成3(1991)年度を初年度とした絵本館創設事業が開始され平成6年8月開館の運びとなった。さらに平成17(2005)年11月、市町村合併により射水市大島絵本館となる。平成23(2011)年4月より、公益財団法人となる。

大島絵本館には様々な施設がある。まず入ると、右手に受付とその奥にライブラリーがあり、ここには国内外の約1万冊の絵本が開架されている。書庫にも約1万冊ある。閲覧スペースがゆったりとしているだけでなく、廊下と部屋を分ける扉がないので開放的である。左手にはカフェギャラリーがあり、ここでドリンクを飲みながらボランティアの方からお話を聞いた。また、貸しスペースもあり、工芸作品などの作品も発表できるようになっていた。ライブラリーの向かいにあるギャラリーでは、2ヶ月ごとに展示が入れ替えられており、絵本の原面を見ることができる。ライブラリーの奥の階段はガラス張りになっており、外の様子が見られる。そこを上るとワークショップができる場所があり、大島絵本館の特徴の一つである。手軽にとびだす絵本などの絵本づくりが楽しめる。毎月新しいキットも登場し、いつでも新鮮な気持ちで絵本づくりが楽しめる。また、月1回の創作教室や、夏休み製本教室などを開催している。隣のCGワークショップでは、楽しい音が出るお絵かきソフトで、キーホルダーやバッジ、下じきなどのオリジナルグッズが作れる。一階にはパフォーマンスホールがあり、吹き抜けの開放的な空間では、作品展示をはじめ、様々な表現活動が楽しめる。パフォーマンスホールの奥には、約200席のシアターがあり、絵本DVDの上映をはじめ、絵本を題材とした発表、表現の場として楽しめる。演劇、ミュージカル、合唱、演奏、人形劇、講演、セミナーなど各種発表などの貸館にも応じている。

1-2. エンジェルスについて

「エンジェルス」とは大島絵本館のボランティアの名称である。18歳以上（高校生は除く）の健康な人は、エンジェルスの会員登録をすることができる。現在は59人が在籍しており（男性1人、女性58人）、そのうち、日本語の読み聞かせをしている人は25人である。絵本館のスタッフの方によると、年齢は50～60代くらいの方が多いという。ボランティア活動は絵本館ができた当初から行われている。活動内容は、絵本の読み聞かせ、絵本の整理・修理・紹介、ブックコート、イベントの受付等である。エンジェルスには、絵本館ボランティア・エンジェルス登録カードに記入し、会員証を発行、館内の案内をしてもらうことで登録できる。エンジェルスの活動は、事前に活動日と活動内容を連絡し、受付で会員証を見せて入館する。2階のスタッフルームでスタッフに活動内容を伝え、名札とドリンク券を受け取る。活動終了後、カフェで休憩をしたり、活動記録を記入したりする。最後に、スタッフルームでスタッフに活動終了を伝え、名札を返却するといったものである。

2. 利用者の声

8月1日（水）、8月2日（木）、8月5日（日）に利用者から話を聞くことができた。子ども連れの方が多かったため、あまり聞き取りに時間を取ることができなかった。そこで、「絵本館に来た目的」「絵本館を知ったきっかけ」「絵本館の印象や来て良かったこと」について主に質問した。利用者には主に「マグちゃんクラブに参加している母親と子ども」「暇

つぶしや遊び場を探してきた人」「普段から利用している、または明確な目的があって来た人」の3パターンがあるようだった。また、絵本館には好印象を持っている人が多いようだった。読み聞かせを聞くことで、子どもの教育、例えば言葉を覚えるといったことに良い影響があると思うから利用しているという意見も聞いた。

2-1. マグちゃんクラブに参加した人

絵本館のスタッフによる読み聞かせ活動であるマグちゃんクラブ（次節に記述）には、母親と子どもという組み合わせで来ている人が多かった。また、母親の代わりに祖母が連れてきたという組み合わせもあった。マグちゃんクラブには、1回きり来る人もいるが、定期的に来ている人もいる。よく来ている人たちの多くは、読み聞かせが目当てで来ているということであった。絵本館で読み聞かせをしてもらうことによって、母親の育児の負担軽減にも繋がっているのではないかと思った。

○ 母と娘2人の3人の組

マグちゃんクラブのことは3歳児検診で知った。いつも水曜日のマグちゃんクラブに来ていて、今後も水曜日に来ようと思っている。自分で読み聞かせをするときは、子どもの気が散ったらやめてしまうので、マグちゃんクラブに来ている。

○ 母と子（9ヶ月）の2人の組

読み聞かせが良いと聞いたことがあるが、自分ではあまりやらないので、マグちゃんクラブという場で聞かせてもらっている。マグちゃんクラブは来られるときは来ていて、昨日も来た。絵本館のことは行政の広報かなにかで知った。絵本館の良いところは人数があまり多くないので、一人一人に目配りしてもらえるところ。

○ 祖母とおば、孫（8ヶ月）の3人の組

（孫の）母親が検診だったため孫を預かることになった。8ヶ月では他に遊べるところもないので、時間をつぶしに絵本館に来た。また、小さい頃から本を読み聞かせておけば、本に慣れるかなと思って訪れた。絵本館のことは4,5年前のギャラリーを見に来て知った。ギャラリーの情報はホームページで見たと思うが、あまり覚えていない。

2-2. 「初めてきた」「久しぶりにきた」という人

夏休みということもあって、帰省してきている人が多かった。その人たちは、「家族から絵本館のことを聞いて来た」ということだった。「どこか遊べるところや暇をつぶせるところを探して来た」という意見が多かった。また、祖母と孫という組み合わせも多かったが、これは夏休みで帰省しているということと、孫と一緒に入館すると祖父母も入館料が無料になる「孫とおでかけ支援事業」によるものだと考えられる。「孫とおでかけ支援事業」とは、富山県内の連携市町村のおじいちゃん、おばあちゃんが孫と対象施設を訪れると、入館料などが無料になる事業である。

○ 祖母と孫（3歳）の2人の組

小矢部から来た。免許センター（高岡市）に用事があったため、その帰りに何か孫が遊べるところを探し、絵本館に来た。絵本館のことは娘から聞いて知っていた。娘は絵本館のことをネットで調べたのではないかと思う。

○ 両親と子の3人の組（父親から話を聞いた）

名古屋から射水市に帰省しており、実家で家族から絵本館の話を聞いてきた。絵本館の印象は素敵なところという感じ。新しい近代的な感じに見えたが、トイレなどを見ると昔からあるような感じなので、もっと早く来れば良かった。扉がなく、どこでも出入り自由で、オープンな感じで（どこにいても）人の気配があるため安心できる。とにかくオープンで、外国の図書館みたい。2階からも下の様子が見られるので、子どもの様子が確認できるのが良い。図書館ほど静かにしろと言われないのが良い。また、絵本の原画があったり、自分たちも見たことない絵本があったりするのが良い。自習スペースもある。

○ 母と祖母、子3人の5人の組

時間つぶしに初めて来た。外は暑いし、室内なのでいいと思った。自分（母）は昔県内に住んでいたの、それで絵本館の存在を知っていた。ワークショップもしたが、それを子どもが楽しんでいたのが良かった。

○ 祖母と孫の2人の組

夏休みの孫を預かってくれと（母親から）言われ、孫と来ると無料なので絵本館に来た。絵本館へは久しぶりに来た。絵本館ができたばかりのときに、近くに住んでいたこともあり、見に行った。絵本に書いてあることは日常なので、改めて考えさせられるものがあるし、絵本は落ち着くものである。

○ 21歳女性

仕事が休みだったので時間をつぶしに絵本館に来た。友達が近くで試験を受けていて、それが終わるのを待っている。いつもは家の近くの小杉図書館に行っている（が今日は試験会場からこちらの方が近かったため来た）。絵本館には、記憶にはないが小さい頃来ていたと、親が言っていた。たぶん、母親に連れられて来ていた。だから、絵本館のことは知っていた。静かで絵本も好きだから、絵本館は良いところだと思う。

2-3. その他の人

その他にも、普段から来ている、何回か来たことがあるという人たちもいた。また、絵本館で行われている製本教室に来たという人もいた。「絵本が好き」という人が多いようだった。

○ 祖母と孫の2人の組

絵本館には自分（祖母）でも来るが、孫が夏休みで来ており、孫と一緒にだと入館料が無

料なので連れてきた。今日は暑いから涼しい絵本館に来て正解だった。自分が小さい頃は絵本がなかったので、絵本館にはこんなにあって楽しい。また、パッチワークをするので、絵本はパッチワークの参考にもしている。仕事をしているときは長編の本を読んでいたが、今は読まなくなったので、文字の少ない絵本を読んだりする。絵本は教訓を得るものというよりはメルヘンのものであるという感じがして、想像を膨らませて物語の中に入っていけるものである。絵本をプレゼントすることもあるが、絵本は題名だけでは選べない。手に取って中を見てみないと、どれが良いものかわからない。絵本は心の余裕など、いろんな余裕がないと読めないと思う。自分は射水市民なので、絵本館ができるときに知らされたことがきっかけで絵本館のことを知った。

作家のいわさきちひろさんが好きなので、スマホで調べたり、イベントがないか見たりする。

○ 父と子の2人の組

家が近いので子どもが小さい頃から来ていた。親子フリーパスをもらったので絵本館に来ようと思った。読み聞かせを利用して言葉を覚える手助けになれば良いと思った。絵本館の印象は、全国のどこにでもあるものではないので近くにあって良かった、というものである。

○ 両親と子の3人の組（母親から話を聞いた）

（子どもが）絵本が好きなので来た。幼稚園にマグちゃん通信があったから、絵本館のことを知ったのだと思う。外（館外の庭）などで遊べるし、絵本も読めるし、家にはない本も読めるところが良い。

○ 34歳女性

イベント（製本教室）があったので絵本館に来た。他の製本教室にも行ったことがあるが、それぞれの場所で製本教室（指導・内容）に特徴がある。絵本館の特徴は「上製本」²⁾を作ることができること。今日は人数が多かったので、2時間くらいかかったが、普通は1時間くらいでできる。絵本館のことは、新聞に載っていたので知った。絵本館の印象は絵本を借りることができないので、借りることができたらもっといいのにと思う。

3. 読み聞かせ活動の様子

大島絵本館では、読み聞かせを行うボランティアの方たちもいる。日本語の読み聞かせは、毎週土曜日の14:00~14:30に行われ、第四土曜日には歌も一緒に行われる。読み聞かせでは、読む本はボランティアの方たち自身が決める。また、週ごとに担当の人やグループが決まっている場合がある。そのため、その週ごとに読み聞かせの様子は変わってくる。私が見た読み聞かせは全部で5つあったが、それらは大きく分けて3つのパターンに分けられる。以下では、それら3つを紹介する。

3-1. 第二土曜日のグループ

毎月第二土曜日に読み聞かせを行っている、開光博子さん、窪田陽子さん、森晴美さんのグループは、日本と外国の紙芝居を交互に読むことを目標にしている。13:30 頃から行われた打ち合わせでは、紙芝居の配役を決めていた。声質によって向き不向きがあるので、「私、ナレーション」「じゃあ、私、おばあさん」というように、話し合っ決めていた。昔話は絵本にすると長いが、紙芝居だと子どもたちも聞いてくれるそうだ。役によって声色を変えているから、飽きずに楽しんで聞けるのではないかということだった。子どもの集中力は数分なので、絵本ばかりでは集中が途切れ飽きてしまう。そのため、間に手遊びをいれる工夫をしていた。また、読む本の順番もこの時に決める。

この日の演目は、次の通りであった。

あいさつ

1. 『だるまちゃんとかみなりくん』(大型絵本) 窪田さん、森さん (写真 10-1)
2. 『あかずきんちゃん』(紙芝居) 全員 (写真 10-2)
3. 『グーチョキパーでなにつくろう』(手遊び) 全員
4. 『ともだちほしいなおおかみくん』(絵本) 森さん
5. 『たす』(小さい絵本) 開光さん

あいさつ

打ち合わせの時に、「怖いおおかみの後に優しいおおかみがいい」という話が出たので、『あかずきんちゃん』の紙芝居の後に、『ともだちほしいなおおかみくん』の絵本を読むことになった。『たす』(りんご+りんごは2個のりんご、りんご+ママはうさぎなど、りんごと何かを足していくという話)は読んでみて面白かったと言った森さんの提案だったが、「私やりたい」と言った開光さんが読むことになった。「私に大きいの一回やらせて」と言った窪田さんは大型絵本を読むことになった。しかし、練習で読んでいるときに、絵本に「びゅう」や「どんどん」などの擬音語が出てきて、読み分ける必要が出てきたので、その部分とその後に出てきたセリフの部分は森さんが担当することになった。



写真 10－1 読み聞かせの様子



写真 10－2 あかずきんちゃん（紙芝居）

また、このグループには別の日にも話を聞くことができた。この日は森さんがお休みだった。演目は、次の通りであった。紙芝居の役が多く、人手不足だったため、私も参加させていただいた。

あいさつ

1. 『ちいさなあめふりぐも』（絵本） 開光さん
2. 『いっすんぼうし』（紙芝居） 開光さん、窪田さん、鹿住
3. 『こねてのぼして』（読み聞かせ、手遊び） 開光さん、窪田さん

4. 『ぞうくんのあめふりさんぽ』（絵本） 窪田さん

あいさつ

読み聞かせでは、2人とも合間に「ぞうさん、大きいねえ」と子どもに語りかけるなど、本に書いていないことも付け加えていた。また、読みながら、たまに子どもたちの顔を見るようにしていた。紙芝居では、2人とも紙芝居の台の横に立って、文字と聞き手の方を交互に見ていた。紙芝居では、声を通るように、台の横に立って行うのがスタンダードな方法だそうだ。また、しゃべり方や声のトーンなどを、例えば鬼なら低く荒っぽくするなどして、役によって声色や読み方を変えていた。『こねてのぼして』では開光さんが手を動かし手遊びの手本をして、窪田さんが読んでいた。手遊びの途中で、ボランティアを担当している絵本館スタッフの西小百合さんが開光さんに「こうした方がいい」とやってみせ、アドバイスをしていた。また、子どもたちと一緒に大人も手を動かしていた。途中で手遊びをやめてしまった子もいた。くすぐるところでは、大人が子どもをくすぐり触れ合っていた。手遊びは大人が子どもと触れ合える機会にもなっていた。今回は、前回よりは子どもたちの人数が少なかったが、手遊びでは前回より親子で楽しくできるものになっていたの、盛り上がっていたように感じた。

読み聞かせが終わった後の反省会では、まず、次に読み聞かせる紙芝居の作品を決めていた。絵本はそのあとで、紙芝居に関連したものから選ぶ。絵本館の本棚を見回して直感で決めたり（テーマごとに本が並んでいるので、そこから選ぶ）、自分たちで読みたい本を持ってきて絵本館で読んだりするそうだ。今回の場合は、『あかずきんちゃん』の紙芝居をしたので、おおかみに関連した本を選んでいった。森さんによると、大人が好きな絵本と子どもが好きな絵本は違うことがあるので、そのことも考慮して絵本を選ぶ必要がある。また、大型絵本は開いた両脇に別れて立って読むことになるので、自分が立っているのと反対側は読みにくい。反対側から覗き込むと、本が頭で隠れてしまい、絵が聞き手に見えなくなってしまう。その解決策を考えたいと言っていた。

3-2. 第四土曜日のグループ

このグループは、毎月第四土曜日に歌と読み聞かせを14:00から14:30頃まで行っている。あるときの絵本の読み聞かせで、絵本に掲載されていた歌も合わせて発表してみたところ、ボランティアのひとりが、「この活動を続けていこう」と提案したことで、歌と読み聞かせをセットにした活動が始まった。その後、日本語や英語の読み聞かせも行われるようになったという。メンバーはだいたい5、6名で、私が見学した5月26日（土）は、一杉葉子さん、伊藤清美さん、林弥生さん、増田羊子さん、吉村千賀子さんの5名が参加していた。

開始1時間前くらいにボランティアの方たちが集まり、絵本館の中の倉庫で歌やハンドベルの練習を行っていた。私も、人手が足りないということで参加させていただいた。練習では、最初に来た吉村さんが絵本の下読みをしていた。吉村さんの場合は、まずは絵本の絵

を見て、次に一回黙読をし、最後に声に出して読むという練習をしていた。参加頻度の高い3人は事前に歌や本の練習をし、その他の人は13:00から練習に参加し、本番に臨む。この日は、吉村さんの次に伊藤さんがハンドベルを持って来た。私も手伝い、キーボードや譜面台を運び、練習を始める準備をした。キーボードが鳴らないというトラブルがあったが、後から来た増田さんがそれを直した。その頃には一杉さんも合流しており、林さんが来たところで、歌とハンドベルの練習が始まった。それと同時に、発表で使うあじさいを折り紙で作った。うたを歌いながら、一杉さんと私であじさいをどんどん作っていった。あじさいやかえるの折り紙は、その日の朝に一杉さんが作ってきたもので、朝に終わらなかった残りの作業を歌いながら行った。うたは2曲でそれぞれ2回ずつほど歌った。歌いながら、歌詞の順番や音程の調整をしていた。調整が終わると、開始の時間が迫っていたので、すぐに移動し発表の準備をした。開演すると、一杉さんが最初の挨拶をしてから発表が行われた。一杉さんのあいさつは、子どもたちに話しかけるようなあいさつだった。

この日の演目は次の通りであった。

あいさつ

1. 『春の小川、うみのメドレー』(ハンドベル) 全員 (写真10-3)
2. 『いいからいいから』(絵本) 吉村さん
3. 『だから雨ふり』(歌) 全員 (増田さんは伴奏担当) (写真10-4)
4. 『やさいさん』(絵本) 吉村さん、伊藤さん
5. 『ドライブにいこう』(絵本) 林さん、吉村さん
6. 『三ツ矢サイダー』(手遊び) 全員
7. 『にじ』(歌) (手話を含む) 全員

あいさつ

手遊びでは、子どもたちにやり方を説明してから、テンポはゆっくりで、子どもたちも一緒に歌って行った。うたでは、伴奏の長さを子どもたちの様子を見ながら調節していた。手話では一杉さんと伊藤さんが一列前で手話をしながら、子どもたちと一緒に歌った。演奏終了後、ベルや譜面台などを片付けた後に反省会を行った。



写真 10－3 ハンドベルの発表



写真 10－4 歌の発表

(うたを歌いながら、間奏で子どもたちにあじさいを貼ってもらっている)

3－3. 第一、第三、第五土曜日のグループ

私が見学した残り3つのグループは、いずれも同じような形で読み聞かせを行っていた。第五土曜日は、担当の方が少ないので、都合がつく人たちが、ボランティア担当のスタッフ

である西小百合さんの呼びかけにより、集まって読み聞かせを行っていた。本章では、私が一番初めに見た吉田清子さん、石浦公子さん、安藤光枝さんの活動をここでは取り上げる。このグループは特に練習や反省会を行わず、個人で好きな本を選んで読み聞かせを行った。場所は「キッズガーデン」というところで行われた。

この日の演目は次の通りであった。

あいさつ

1. 『ひみつのたね』(絵本) 安藤さん
2. 『いまんさい?』(絵本) 石浦さん
3. 『おばあちゃんちのすきまおばけ』(絵本) 吉田さん
4. 『びっくりおおかみ』(絵本) 安藤さん
5. 『パパカレー』(絵本) 吉田さん
6. 『こんなかいじゅうみたことない』(絵本) 石浦さん

あいさつ

この時の子どもたちは絵本にかなり近づいて聞いていた(写真10-5)。3人とも子どもたちの顔を時々見ながら、「いま、何歳?」「おばけどこにいる?」などと読み聞かせをしながら、子どもたちに話しかけたりもしていた。また、抑揚をつけたたり、声色を変えたりしていた。『パパカレー』では絵を指さしながら、子どもたちに材料など、その絵が何かを聞いていた。読み聞かせを聞いていた父親も時々くすりと笑っていた。



写真10-5 絵本に近づく子どもたち(キッズガーデンにて)



写真 10－6 6／30 の読み聞かせの様子
 (このボランティアの方は読み聞かせの前に歌を歌っていた)

3－4. にこにこマグちゃんクラブについて

この活動は毎週水曜日と木曜日の午前 10：00 からキッズコーナーで行われている。この活動は絵本館の職員が行っている。内容はボランティアによる読み聞かせとほとんど同じである。しかし、「赤ちゃんからの読み聞かせ」ということで、普段の読み聞かせよりも低年齢の子どもが母親と一緒に参加するケースが多いため、赤ちゃん向けの絵本や手遊びが多く行われる。また、「おやつタイム」があり、子ども用のせんべいなどが子ども一人一人に配られる。



写真 10-7 にこにこマグちゃんクラブの様子

4. 読み聞かせをする人々の語り

調査からボランティアほとんどが、子育てを終えた主婦の方たちであることがわかった。また、保育士として働いていたという方や現在も働いている方もいる。なかには、ボランティアをかけもちしている方もいた。読み聞かせを終えた後、反省会や談笑をするなかで、ボランティアの方たちからお話を聞くことができた。

4-1. 第二土曜日グループの人々

第二土曜日グループの反省会の合間に、それぞれの読み聞かせボランティアを始めた理由を聞くことができた。開光さんは、子どもの小学校の図書館ボランティアをしていたが、今は子どもも成人したので、子どもの歳に関係なく活動できるから絵本館のボランティアを始めた。子どもの小学校でボランティアをしていたときは、子どもがいる学年で読み聞かせをすることになっていたそう。その時に、絵本館では様々な年齢の子どもに読み聞かせをすることができる。窪田さんは、元々朗読教室に通っていたが、都合が合わず、通えなくなってしまい、やめることになった。その時に学んだことを活かしたいということと、絵本館の近くに住んでいたことや絵本が好きなことも、読み聞かせを始めようと思った理由だった。森さんは、絵本が好きだからという理由を話してくださった。

また、3人に大島絵本館の魅力について聞いたところ、「他の図書館でも読み聞かせはあるけど、ここはあんまりルールがないのがいい。本も自分たちで選べる。やり方（演目やどのような進行をするかなど）も自分たちで決められる。自由にできるのいい。読み聞かせ

を行うライブラリーの入り口は開いているのでお客さんが入って来やすい。時間がない人は途中で出ていくこともできる」とおっしゃっていた。絵本館の存在はまだあまり知られていないので、「もっと多くの人に絵本館について知ってほしい」と3人は語っていた。

調査の後、開光さんと一緒に帰ることになったので、お話をゆっくり聞くことができた。反省会では詳しく聞けなかった開光さん自身のことについて、お話を聞く貴重な機会であった。まず驚いたのは、開光さんははるばる魚津市から通っているということである。遠くから通うのは大変ではないかと思ったが、開光さんは、月一回なので「ちょっとした旅行感覚」で絵本館に来ているということだった。時間がある時は、高岡で寄り道をしてから帰るそうだ。絵本館の魅力は昔からの本だけでなく、新しい本もそろっているというところだという。友達から薦められたのが絵本を好きになったきっかけだった。高校生の時、美術部だったという開光さんは、「絵がきれいな、オシャレな絵本から入った」のだという。読み聞かせでは、子どもたちの笑顔が見られるのが楽しみで、そのためにやりがいになっているそうだ。

4-2. 第四土曜日グループの人々

第四土曜日グループの反省会では数人にボランティアを始めた理由を聞くことができた。また、みなさんからボランティア活動をする事への思いも聞くことができた。

そのひとりである吉村さんは保育園で園長をされていたことがあり、退職後、絵本館でボランティアを5年ほどしている。絵本館だけでなく、他のところでも読み聞かせやその他のボランティアを行っているそうだ。絵本館を訪れた際に、歌と読み聞かせが行われているのを見て、楽しそうだと思い、すでにメンバーだった一杉さんに入ってもいいか相談をして参加することになった。ボランティア活動については、「子どもたちにこの本の楽しさを伝えたい」と思って読むように心がけている。保育園に勤めていたので、顔を見ながら読み聞かせをすることで、子どもたちが喜んだり、楽しんだりしてくれる様子が分かる。これがやりがいにつながっているそうだ。だから、「今回は上手くいかなかったけど、次はもっと上手になりたい」と思える。また、「自分で読み聞かせをやりたい」という気持ちが大切だと語っていた。

大島絵本館については、『町の図書館』という感じで、子どもとお母さんが一緒に入ることができるのでいい。家族で来られて、外で遊べるところもいい」と語っていた。また、(読み聞かせから)子どもたちがたくさん絵本に触れ合う機会になるといいと思う。絵本館で人と人や絵本と人といったつながりが広がっていけばいい。その中に入ってつながりが広がっていくお手伝いができたらいいと思う。また、「読み聞かせる」という言葉は好きじゃないと語った。「読み聞かせる」と言うと、上から言っている感じがするからだ。

もうひとり、詳しくお話を聞くことができた増田さんは、音楽の先生をしていた。ピアノのホールを借りて事務所を訪れたところ、ボランティアのチラシを見て、「月一回ならできる」と思い参加することにしたそうだ。ボランティア活動については、「子育て時代は自分

も忙しかった。だから、子育てが終わった今はお母さんも楽しめるように応援したい」と語った。また、「歌と読み聞かせの会には、お母さんたちにも参加してもらいたい」と話す。それは、母親が参加する姿を見た子どもは積極的になるからである。この会では手話も行っているが、これは手話なら恥ずかしがらずに子どもたちと一緒にしてくれるからである。

増田さんが孫の誕生日に選んだプレゼントも絵本だった。その絵本の中には「歯が抜けた部分にトウモロコシをはめる」というくだりがあり、その後、歯の抜けた孫がそれと同じようにした写真が送られてきた。「人を笑わせる喜びを知った子どもは、大きくなったら人を笑わせるようになる。子育てなどもそうだが、人にしてもらったことはできるが、そうでないことはできない」と増田さんは語る。絵本も大人になってから読むと見え方が異なるため、いくつになってもいいものだと、増田さんは言う。最近ではお年寄りも絵本を読むそうで、目や耳が悪くなっても楽しそうに読むのだという。絵本に使われているいろいろな色で刺激をもらうのが良いのではないか、ということだった。絵本館については、「絵本作家さんのトークショーも面白い」と語っていた。トークショーでは、絵本を見ただけでは伝わらない作家の思いや、年配の作家と若い作家で創作に対する考え方や伝えたい思いが異なるということを知ることができる。

この第四土曜日のグループの人たちはそれぞれいくつもボランティアを掛け持ちしている。そのため、このエンジェルスへはみんな（他のボランティアで知り合うなどした）つながりで参加しているようだ。「絵本には子どもたちに伝えたいことがぎっしり詰まっている。それをまんべんなく、偏りなく伝えたい。子どもたちが絵本につながっていくきっかけを作りたい」とみなさんは言っていた。また、「喜びを伴った経験などは記憶される」という話や「人に読んでもらうことも大事」という話も聞いた。子どもたちに参加してもらいたいという思いや、引っ込んでいる子も、周りの子がやっていれば一緒に出てきてくれるということも知ることができた。

4-3. 第一、第三、第五土曜日グループの人々

第一土曜日のグループの高田さんは、知り合いから頼まれてボランティアをやっていた。最初は嫌々やっていたが、ボランティアをして絵本への印象が変わったようだ。「絵本は大人になったら卒業だと思っていたが、子どもの頃読んでいたことを思い出したり、芸術だと思い直したりした。絵本館で原画を見て、芸術的だと思ったのが、一番印象に残っている。絵本を読んでいたことは、自分の時代にしては恵まれていたのだと今は思っている」と高田さんは語った。

高田さんには、読み聞かせの絵本選びのポイントも聞いた。高田さんによると、不特定多数の人に向けて、ボランティアも何人かで読むので、選ぶ絵本も読み手の好み（得意分野）によってばらばらである。そのため、自分で好きな本、読みたい本を選んできて、全体の様子を見て、絵本の種類のまとまりだけを合わせる。また、その時の季節や原画で展示してあるものを選ぶようにしている。来る人の年齢も興味の持ち方も違うので、臨機応変に対応し

ている。あんまり、「これ（この本）じゃなきゃだめ」というのは決めていないという。

絵本館では、読み聞かせの前にボランティア自身で絵本館の中をベルを持って回り、「読み聞かせが始まるよ」と呼びかけをしている。そのことについてボランティアの方は「最初と最後のあいさつはスタッフにやってもらいたい、呼びかけは自分たちでやってもいい。スタッフが忙しいときはボランティアがあいさつしてもいいが、スタッフにやってもらいたい」と語った。また、「自分たちも利用者の声を聞いたり、気づいたりしたらスタッフに伝える」とも語っていた。また別の方は、「自分は話しかけるのが好きなので、呼びかけをやってもいい。みんなでやりましょう。一緒に（読み聞かせの場を）作りましょう」ということで声をかける。読み聞かせをやっていることを知らずにいる人もいるだろうから」と語った。

また、ボランティアの方にお話を聞いていくなかで、「ボランティアに入りたいが、既にそれぞれの週で担当が決まっているので、なかなか入っていけない（入りづらい）」という話を聞いた。少ない頻度で来る人や後からボランティアに入った人には、既にできている輪に入っていく必要があるのかもしれないと感じた。

4-4. 絵本館の職員の方の話

調査では、絵本館で働く職員の方からも話を聞くことができた。ボランティアさんへの思いや読み聞かせに対する考えを聞いた。

スタッフのひとりである田中さんは工作の担当職員で、マグちゃんクラブの担当もしている。西さんの前にボランティア担当をしていた。ボランティアの方たちについては、「人生経験が豊富なので、困ったことがあったら聞ける存在。みなさん、いきいきしている。絵本館で新たな仲間と出会って輝いている。この人たちが出会えただけでも絵本館があって、自分も関わることで良かったと思う。あんな風に年を取りたい。みなさん、（自分のやりたいことをやって）人生を豊かにしていると思う」と語った。

マグちゃんクラブについては、「保育園に上がる前に、お母さんたちが他の子の成長具合などを見られたり、交流できたりする場になっている。また、お母さんが赤ちゃんを両手や体を使って触れ合えることができる機会になっている。赤ちゃんだから途中で聞かなくなる子もいるけど、お母さん方は聞かせたいので、絵本の方を向かせるなど協力的なので、助かっている」と語った。読み聞かせをする時に気をつけていることは、赤ちゃん向けの絵本はその通り（書いてある文字をそのまま）に読まなくてもいい本が多いので、付け加えて読んでいることだ。

もうひとりのスタッフの西さんは、現在のボランティア担当のスタッフで、ボランティアに関する事務仕事なども行っている。読み聞かせをするときは、準備をしたり、ボランティアの読み聞かせを見守ったりしている。マグちゃんクラブでの読み聞かせも行っている。

ボランティアの活動については、「すごく簡単になってしまうけど、すごいと思う」「自分が読みたいものを読みに来ているという感覚では困る。ボランティアさんは頼んで来て

もらっているわけではない。だから、自分たちでもっと沢山の人来てもらうにはどうすればいいかなどを考えてもらいたい」と語っていた。絵本館に来ているボランティアの方々は、そういう向上心のある方々が多かった。また、他のところでは読み聞かせのボランティアをする前に、研修などがあるところもあるようだが、大島絵本館ではない。来るもの拒まずという感じだ。「ボランティアさんたちは、自分たちで（向上心や自主性）をもってやっているから、この活動も長く続くのではないかと思う」と語った。

西さんがボランティアの担当になってからは、以前はボランティア担当のスタッフが行っていた読み聞かせの前の呼び込みも、ボランティアの方にやってもらっている。その方がボランティアの方が今日何を読んで、何をやりたいのか、「本日の目玉」が伝わると思うからだという。

5. まとめと考察

調査をしてみて、ボランティアの方も利用者の方も射水市に住んでいたり、射水市に家族がいたりする方が多いことがわかった。また、絵本館に入らなくても、外で遊ぶ子どもたちも見かけたことから、大島絵本館は地域の方の遊び場、交流の場になっているとわかった。本章では、絵本館で読み聞かせをするボランティアの方々の様子やその思いを多く記述してきたが、ボランティアの方々は、読み聞かせをしているとき、とても楽しそうだった。いきいきしている、輝いていると調査を通して感じた。また、「子どもたちに喜んでもらうと自分も嬉しい」「子どもたちを楽しませたい」という意見も多く聞いた。子どもたちに喜んでもらえることで、自分の心も豊かに満たされ、そのことがやりがいになっているとわかる。本章では最後に、読み聞かせボランティアの方々の「やりがい」が何に由来するのかを考えてみたい。

まず、子どもたちに喜んでもらうためには、どの本を読むか、どのように読むかなどを工夫して、楽しい、面白いと感じてもらわなくてはならない。そしてそれが、「次はこうしたい」「あれをやってみたい」という向上心につながる。私も、紙芝居や歌に参加させていただいたが、読み聞かせは見ているときより、難しいということが分かった。声に抑揚をつけて役になりきって読むことが、少し演じなければならなかったので、恥ずかしさもあり難しかった。そのため、慣れが必要だと感じた。また、見学していて感じたのは、相手の反応を見て言葉を足したり、年齢層を見て絵本を替えたりしていたので、経験が必要だということだ。それから、読み聞かせをする前には一読したり、練習したりすることが大切だとわかった。そうすることで、本の内容も理解した上で、読み聞かせでき、どのような絵があるかも分かるので、読み方の工夫もできるからだ。もっと上手く読みたい、もっと楽しんでもらいたいという思いが向上心、やりがいにつながるのだと思う。

また、月に一度で、自分たちでやり方も決められるということが、絵本館を選んだ理由だという意見も聞いた。月一回なので、気軽にボランティアを続けられるのも魅力の一つなの

だとわかった。自分たちでやり方を決められるので、うたを歌ってみたり、紙芝居に挑戦してみたりといろいろ絵本の見せ方を工夫できることも魅力になっている。より子どもたちに喜んでもらえるように、自分が楽しめるように、絵本の読み方を工夫できることが、絵本館でボランティアを続ける理由になっているのだとわかった。

また、ボランティアの方々は子育てを終え、母親を応援する立場にいる方たちが多かった。絵本館のスタッフやボランティアの方も言っていたが、「少しでもお母さんの助けになれば」ということもやりがいに関係しているのだと思う。読み聞かせという子どもたちが楽しめる場があることで、母親たちは自分が何かをしなくても子どもを楽しませられるので、楽になる。ボランティアの方々も子育ての大変さを知っている方々なので、少しでも母親の手助けになったら良いなという思いがあるのかもしれないと思った。

調査中、「若い人はいいいねえ。これから何でもできて」というようなことを言われることが度々あった。しかし、その言葉を聞いて、「若者」である自分なんかよりもボランティアの方たちのほうが何でもやっていて、やる気に満ちあふれていると感じていた。自分よりも若々しいと思った。年を取って体力的にもきつくなり外に出たくなくなるという人は多いだろうし、若い人でもできれば家にいたいという人も多いと思う。もちろん、外に出ることは体力を消耗し、疲れることである。しかし、ずっと引きこもっていると、社会との関わりが薄れ、気分が落ち込みやすくなるかもしれない。

私の祖母はあまり外に出たがらない人であった。畑には出るが、それ以外の用事で出かけることは少なかった。しかし、友人に誘われ「ボケ防止」や健康のために、体操教室に行くようになった。以前は、一日中テレビを見てボーッとしており、社会の流れにもついて行けていない感じがしたが、今は少しは分かるようになったのではないかと感じる。一方で祖父は、以前は草刈りをしたり畑に行ったりと、日常の中でよく働くひとであったが、耳が遠くなってからは家で一日中テレビを見るようになり、畑にもあまり行かなくなった。昼からお酒を飲み、あまり動かなくなり、耳がよく聞こえないからと、会話もあまりしなくなった。母も「あんなに働き者だったのに」と言っている。私や母が外へ出るように促し続けたので、今では少し外へ出るようになった。二人とも外にいるときの方が、家でも楽しそうだった。

私もあまり外に出る方ではない。外に出ると、体力的にも精神的にも疲れるからだ。しかし、趣味の茶道の稽古で外に出るときは、いつも楽しみにして行っていた。疲れることもなく、自分より年上の人ともおしゃべりをしたり、一緒に学んだりすることが、よい刺激であり、リフレッシュになっていた。そこで出会った人たちも、いつも楽しそうにしており、ボランティアの方たち同様、若々しく見える。ボランティアの方たちにとって、ボランティア活動はそういった人生を豊かにする場になっているのかなと感じた。「やりがい」を見つげることができる、私が出会った人たちのように若々しく、元気になるのだと感じた。

もう自分にはすることがないからと引きこもると、どんどん考え方も行動も消極的になっていく。しかし、ボランティアの方たちのように、「やりがい」があると、笑顔が輝いて見える。なによりも、楽しそうに活動していた。将来に対して不安になることもあるが、あ

んなふうに輝いていられるようになりたいと思った。

おわりに

ボランティアの方々は、子どもたちに喜んでもらいたいという考えを持っていた。また、絵本を読むことで、子どもたちに絵本や本に興味を持ってもらうきっかけになればいい、という考えも聞いた。私は小学校でボランティアの方に読み聞かせをしてもらっていた時のことを覚えている。いつも読んでもらうのを楽しみにしていた。なんの本を読んでもらったかは覚えていないが、絵本を読んでもらったという記憶は残っている。自分では読むのが面倒でも、読み聞かせをしてもらうと文字を読まなくていいし、読む人の声や読み方によって、全然違うものになったり、抑揚をつけて読む場合では、どういう場面なのかを理解するための助けになったりしていた。そのことが、自分で読むのとは違って楽しかった。絵本館に通ううちに、「そういえば、小さい頃この本読んでたな。どんな話だったっけ?」と昔読んでいた絵本があるかを探してみたり、「家にある絵本をもう一度見てみようかな」と思うようになったり、楽しくなった。絵本館で読み聞かせを聞いていた子どもたちも、大きくなって絵本を見たときに、「そういえば、絵本館で読み聞かせを聞いたことがあったな」と思い出すことがあればいいなと思った。そして、「また絵本を読んでみようかな」「どんな絵本をプレゼントしようかな」など絵本に興味を持ってもらえればなと感じた。

謝辞

本調査を行うにあたり、聞き取りにご協力いただいた絵本館のボランティアの皆様、スタッフの皆様には、本当にお世話になりました。ボランティアの皆様には、読み聞かせを見学させていただき、また、その後の反省会等の貴重な時間で聞き取り調査にご協力いただきました。初めて会ったにも関わらず、とても気さくに接していただき、活動に参加させていただくこともありました。スタッフの皆様にも、お忙しい中、聞き取り調査にご協力いただきました。調査中に声をかけてくださることもあり、嬉しく感じておりました。特に、西小百合様には、ボランティアの方との連絡や確認を取っていただき、本当にお世話になりました。皆様のおかげで無事に調査を終えることができました。本当にありがとうございました。

注

- 1) 「射水市大島絵本館」〈www.ehonkan.or.jp/〉(2019/01/29 閲覧) より
- 2) 本格的な製本のしかたによって製本した本。表紙が堅く、多く背が丸い。並製本と対比される。ハードカバー。

参考にしたウェブサイト

「射水市大島絵本館」〈www.ehonkan.or.jp/〉(2019/01/29 閲覧)

地域社会の文化人類学的調査 28
地域につながる
－富山県射水市の調査記録－

発行日：2019 年 2 月 21 日

編集：野澤豊一・藤本 武

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555 富山市五福 3190

電話：076-445-6186

E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：株式会社グラフ

〒931-8453 富山市中田 45-63

富大生から見た射水市

—富山大文化人類学実習成果報告会—

(第154回北陸人類学研究会例会)

日時: 2019年2月22日(金) 13時15分～15時45分

会場: あゆの風センター(射水市立町10番20号)

《プログラム》

- 13:15 あいさつおよび趣旨説明(富山大学 野澤豊一)
- 13:20 「新湊・内川の空き家問題と景観保存」(中井理恵子)
- 13:40 「放生津曳山祭りにおける人手確保対策と女性参加」(佐藤杏未)
- 14:00 「新湊におけるオンゾハンとそれを守る人々」(原七泉)
(10分休憩)
- 14:30 「新湊における地域おこし協力隊の活動:うちかわホリデイマーケットを中心に」
(重吉桜)
- 14:50 「大島絵本館で読み聞かせをする人々」(鹿住笑那)
(10分休憩)
- 15:20 質疑応答
- 15:45 終了

《問い合わせ》

富山大学人文学部文化人類学研究室
(野澤豊一)

Tel: 076-445-6186

e-mail: toyoichi.hmt.u-toyama.ac.jp



《会場アクセス》

万葉線中新湊駅から徒歩6分

新町口駅から徒歩8分

どなたでもご観覧いただけます。お気軽にお越しください！
報告書「地域につながる—富山県射水市の調査記録」を無料配布いたします。